

第166図 96・97号竪穴住居跡・竪穴測図

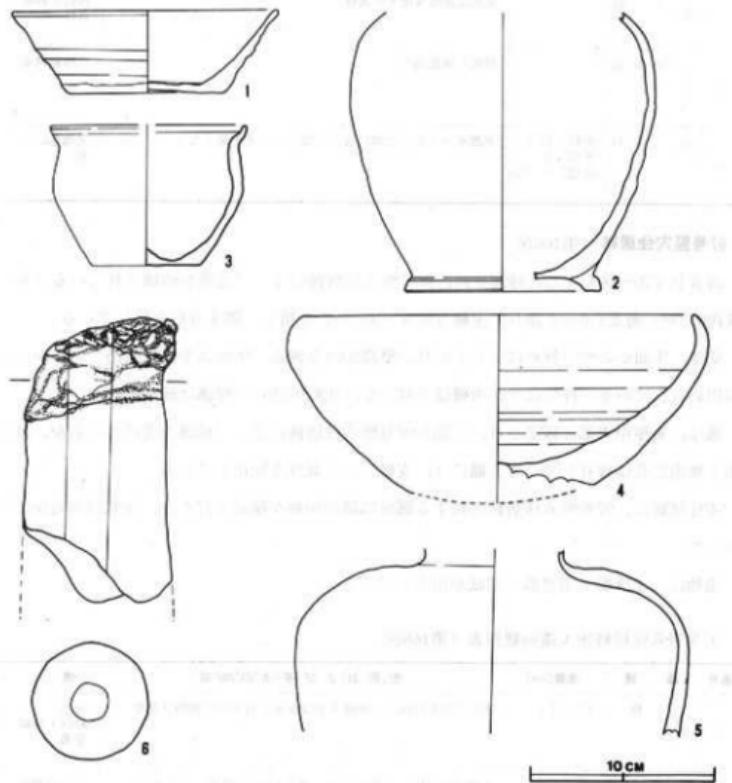
96号竪穴住居跡（第166図）

調査区C3b₃区を中心に確認され、97号竪穴住居跡と重複している。規模は東西5.0m・南北3.6mを測り、主軸方向N-23°-Eを指し、隅丸方形を呈している。

壁は、床面からやや斜めに立ち上がり、壁高35cmを測る。床面は平坦で、良く踏み固められている。ピットは5か所確認され、深さは15~25cmを測る。壁溝は確認されない。

竈は、北壁中央部に位置し、粘土・砂で構築され、焚口・火床からなだらかに立ち上がり、煙道・煙出し孔を作っている。

遺物は、土師器・須恵器・漆付着土器・羽口・漆紙が出土している。



第167図 96号竪穴住居跡出土遺物実測図

96号竪穴住居跡出土遺物観察表（第167図）

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	环	A 14.1 B 4.5 C 8.2	底部は上げ底で、口縁部は外反する。 体部に水掻き痕が頗る。底部は切り崩し後ナナ調整。	灰黄色 砂粒・砂礫 不良
2 S	古付器	D (10.0)	胴部と底部片。底部はナナ調整。	黄灰色 細砂・砂礫 良好 自然地付着
3 H	甕	A 10.6	肩部はわずかにふくらむ。頭部は「く」の字に外反し、口縁部上面が直立する。 口縁部内・外面模ナナ調整。 頭部外面は、挽削り後ナナ調整。	褐色 砂粒・砂礫・雲母 普通
4 S	鉢形土器	A (21.0)	丸底気味の底部より、内側して立ち上がる。口縁部模ナナ調整。 底部は挽削り後ナナ調整。	灰白色 砂粒・砂礫 良好
5 S	短颈甕		肩部と頭部破片。	自然地付着
6	羽	H 金長 (16.0) 外径 7.0 孔径 2.0-2.5	基部を欠くが、先端に行くにつれて、若干細くなる。	先端部には鉄分が付着

97号竪穴住居跡（第166図）

調査区 C3c3区を中心に確認され、96号竪穴住居跡によって北側が破壊されている。規模は、東西5.3m・南北5.0mを測り、主軸方向N-96°-Eを指し、隅丸方形を呈している。

壁は、床面からやや斜めに立ち上がり、壁高20cmを測る。床面は全体に凹凸であるが、良く踏み固められている。柱穴は3か所確認されたが、比較的浅い。壁溝は確認されない。

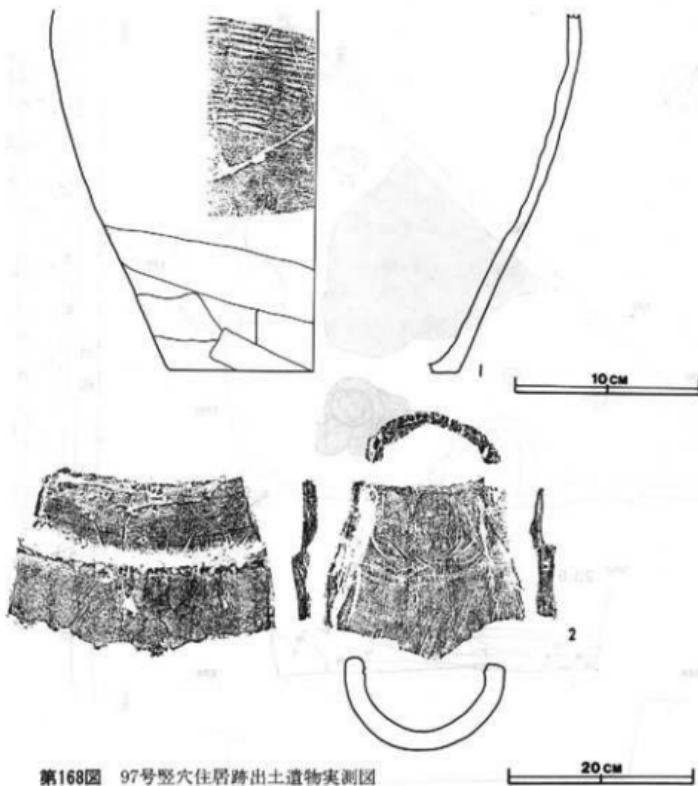
竈は、東壁中央部に確認され、一部が96号竪穴住居跡によって破壊を受けているが、袖部・煙道・煙出し孔は残存している。竈には、支脚として瓦片を使用している。

本住居跡は、97号竪穴住居跡と接する部分に鍛冶炉跡が確認されたが、全貌は明らかにできなかった。

遺物は、土師器・須恵器・漆紙が出土している。

97号竪穴住居跡出土遺物観察表（第168図）

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	甕	C (35.4)	横位の叩きの後に、体部下半は左から右方向の挽削り調査。	灰色 砂粒・砂礫・雲母 普通
2	丸瓦		工縁径11.8cm、玉縁長7cm、厚さ1.8cm、基深7cmを測る。	にほい褐色 砂礫 やや硬質



第168図 97号竪穴住居跡出土遺物実測図

98号竪穴住居跡（第169図）

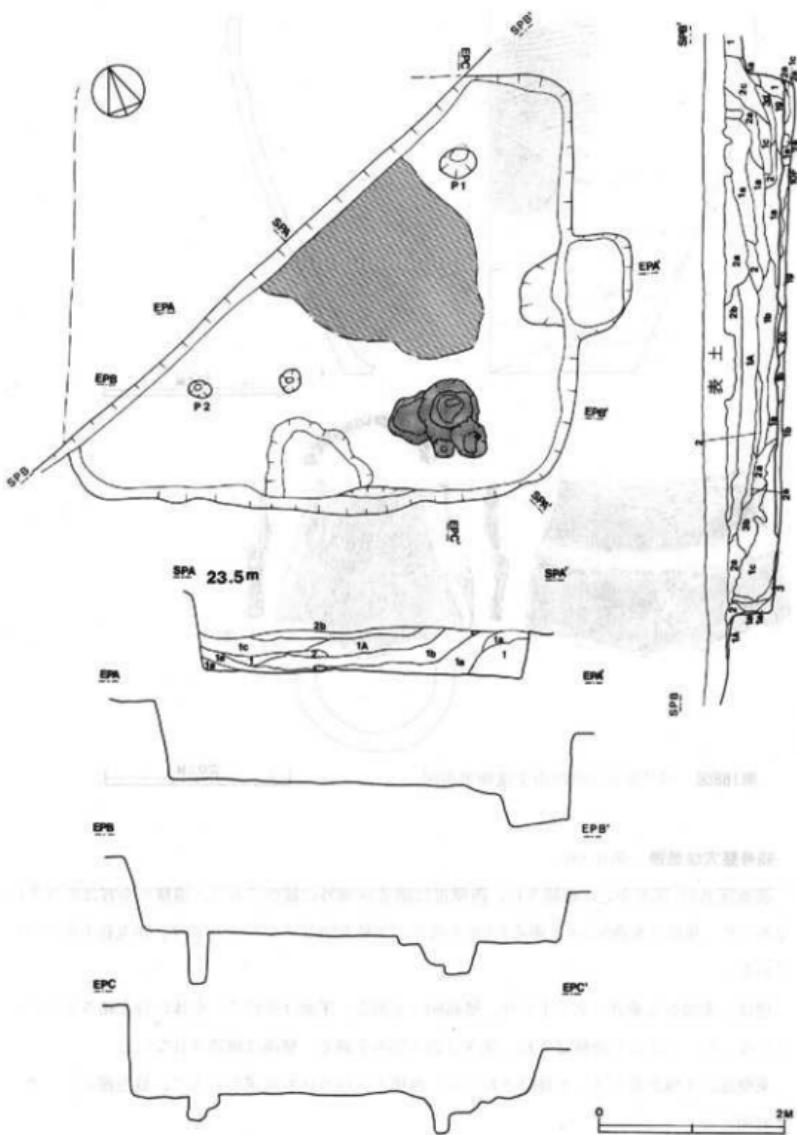
調査区B3i2区を中心に確認され、西壁部は調査区域外に延びており、遺構の全容は把握されなかった。規模は東西5.5m・南北4.5mを測り、主軸方向N-4°-Eを指す、隅丸長方形を呈している。

壁は、床面から垂直に立ち上がり、壁高80cmを測る。床面は平坦で、全体に良く踏み固められている。ピットは5か所確認され、深さは25~55cmを測る。壁溝は確認されない。

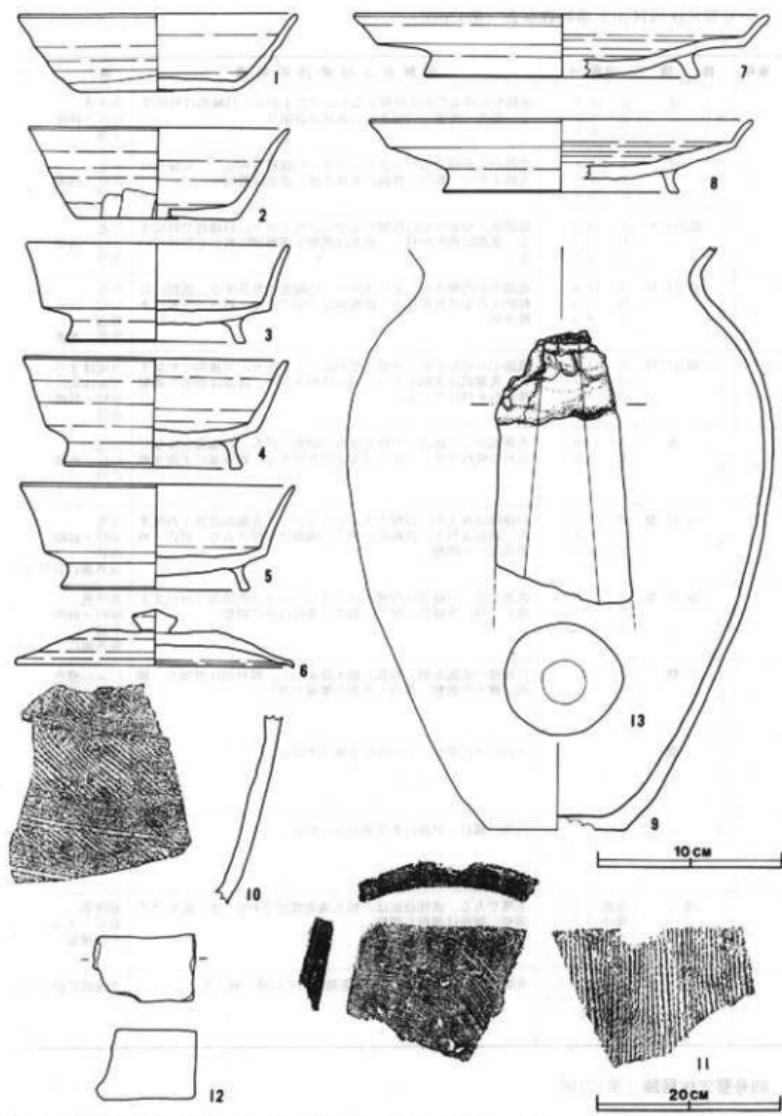
東壁部に土壤状掘り込みが確認されたが、堆積土・掘り込み状況からみて、最近掘られたものと判明した。

窓は、調査区域外に存在するものとみられる。

遺物は、土師器・須恵器・瓦・羽口・漆紙・漆しづり料が出土している。



第169図 98号堅穴住跡実測図



第170図 98号竪穴住居跡出土遺物実測図

98号堅穴住居跡出土遺物観察表（第170回）

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	环	A 14.7 B 4.2 C 8.3	底部からゆるやかに外傾しながら立ち上がり、口縁部は外反する。器内・外面に水焼き痕。底部は荒削り。	黄灰色 砂粒・砂礫 不良
2	环	A 13.8 B 4.9 C 8.4	底部から外傾しながら立ち上がり、口縁部で外反し、先端部は丸味をもつ。器内・外面に水焼き痕。底部は荒削り。	灰色 砂粒・砂礫 良好
3	高台付环	A 13.9 B 5.3 D 9.5	底部からゆるやかに外傾しながら立ち上がり、口縁部で外反する。底部に高台が付く。底部は荒削り調整後に高台を付けている。	灰色 砂粒・砂礫 良好
4	高台付环	A 14.0 B 5.9 D 9.5	底部から内彎きみに立ち上がり、口縁部で外反する。底部に比較的大きな高台が付く。底面は平坦である。器内・外面に水焼き痕。	灰色 砂粒・砂礫 普通 底面に墨書き
5	高台付环	A 14.6 B 5.7 D 9.9	底部からゆるやかに外傾しながら立ち上がり、口縁部で外反する。先端部は丸味をもつ。高台は開ききみ。底部は荒削り調整後高台を付けている。	外側はオリーブ灰色 内面は灰白色 砂粒・砂礫 良好
6	釜	A 14.9 B 3.0	天井部から口縁部への移行は強い屈曲を持ち、口縁部にはなんだらかに移行する。つまみは宝珠状を呈する。器外面に水焼き痕。	灰色 砂粒・砂礫 良好
7	台付釜	A 22.3 B 3.4 D (14.7)	口縁部は外上方に内彎きみに立ち上がり、先端部は厚く外反する。高台は外方に直線的に聞く。底部は肥厚である。器内・外面共にナデ調整。	灰色 砂粒・砂礫 良好 器外面上に自然釉付着
8	台付釜	A 20.5 B 3.9 D (12.7)	底部欠損。口縁部は内彎きみに立ち上がり、先端部は外反する。高台は外方に直線的に聞く。器内・外面はナデ痕跡。	黄灰色 砂粒・砂礫 普通 器外面上に二次焼成
9	甕		口縁部・底部欠損。胴部に最大径をもち、器外面は荒削り。底部は横ナデ調整。器内・外面の摩耗が激しい。	にじむ褐色 砂粒・砂礫 普通 底部外面に本業痕
10	甕		平行印き日溝跡。その間を沈縫で区切る。	灰色
11	平瓦		凸面に窓目。凹面に布目痕がみられる。	褐色 砂礫・長石 やや硬質
12	場	全長(9.1) 厚さ7.5	方塊である。成作技法は、粘土塊充填法である。表・裏は、ナデ調整、側面は荒削り調整。	褐色 長石・スコリア やや硬質
13	羽口	全長(14.7) 外径3.0~7.5 孔径2.0	先端で3cm、末梢で7.5cmと先端に行くに従い細くなる。	先端部に鉄が付着

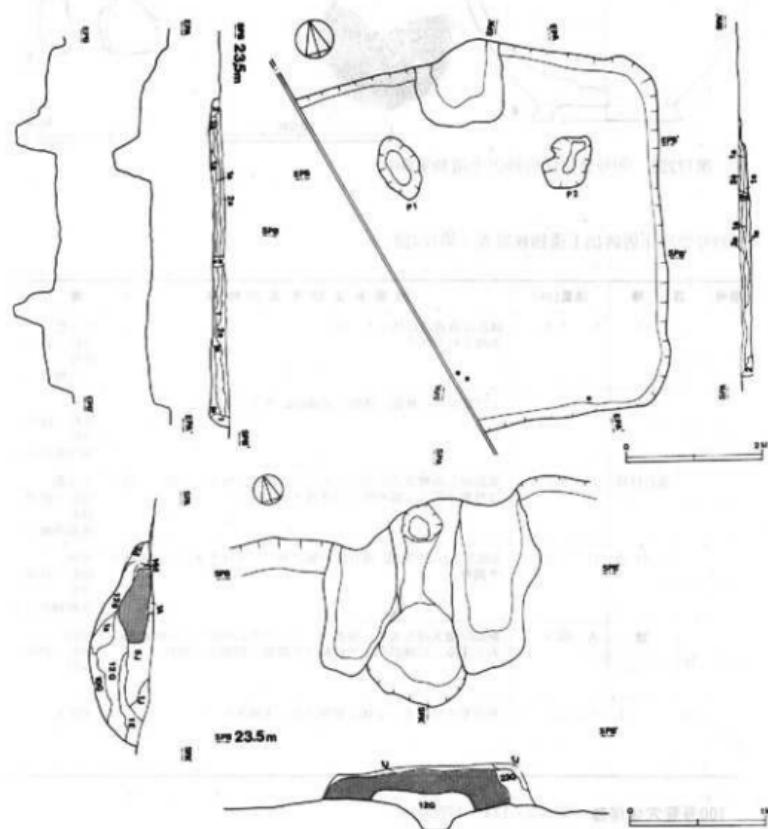
99号堅穴住居跡（第171回）

調査区C3e3区を中心に確認され、西側は調査区域外に延びており、遺構の全容は把握できない。規模は東西約5.0m・南北5.4mを測り、主軸方向N-7°-Eを指す、隅丸長方形を呈しているとみられる。

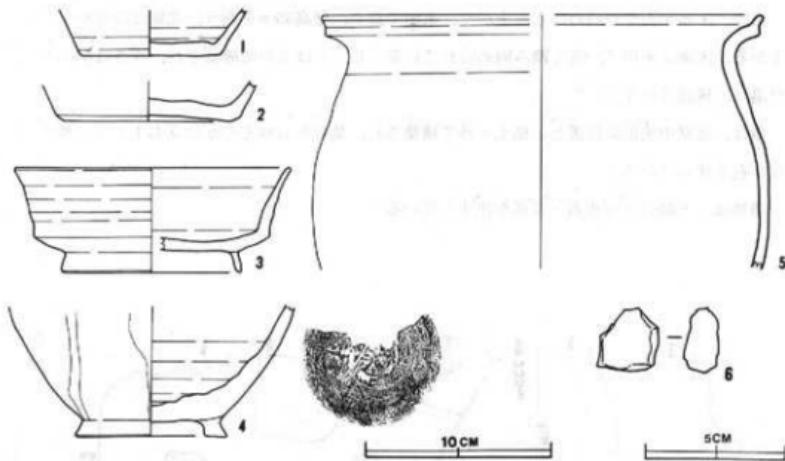
壁は、床面からやや斜めに立ち上がり、東側で高く、壁高35cmを測り、北側はゆるやかに立ち上がる。床面は平坦で、良く踏み固められている。ピットは2か所確認され、深さは60cmを測る。壁溝は、確認されない。

竈は、北壁中央部に位置し、粘土・砂で構築され、焚口からゆるやかに立ち上がり、煙道・煙出し孔を作っている。

遺物は、土師器・須恵器・漆紙が出土している。



第171図 99号竪穴住居跡・竈実測図



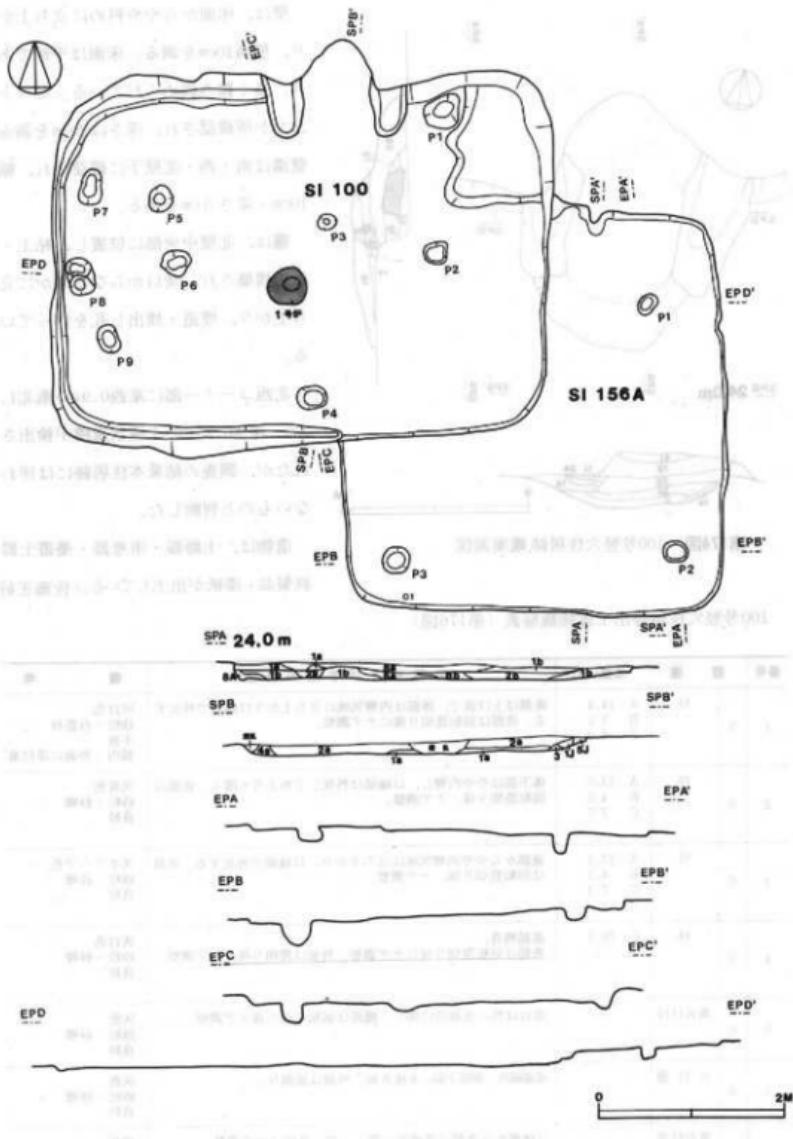
第172図 99号竪穴住居跡出土遺物実測図

99号竪穴住居跡出土遺物観察表（第172図）

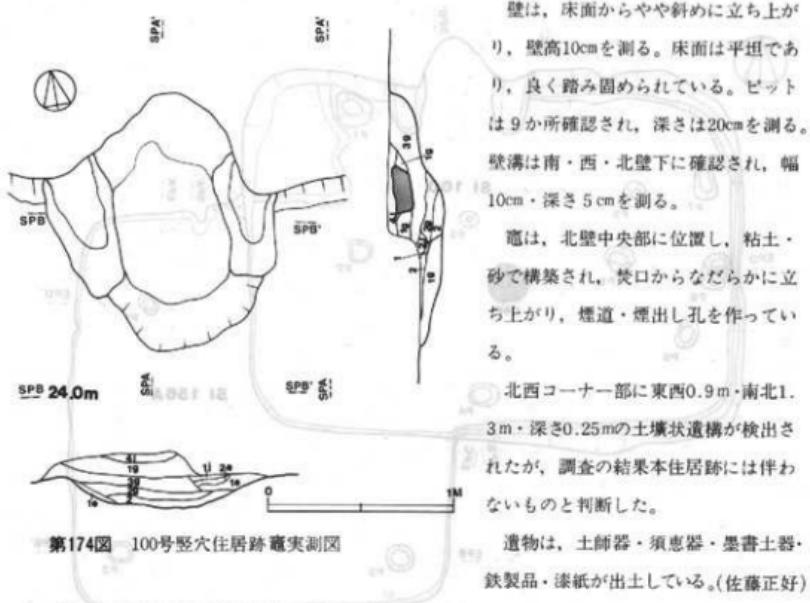
番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	環	C 7.4	体部は直線的に外上方へ開く。 水洗き痕を残す。	灰白色 砂粒・砂礫 良好 二次焼成
2 S	環	C 8.8	上げ底ぎみの底部で体部は直線的に外上方へ開く。	灰白色 砂粒・砂礫 良好 器内面に漆付着
3 S	高台付环	B 5.7	底部から内壁ぎみに立ち上がり。口縁部は外反して開く。高台は外側に開く。器外面には水洗き痕を残す。	灰白色 砂粒・砂礫 良好 底部外面に施記号
4 S	台付壺	D 8.1	胴部下半および底部。高台は外側に開く。水洗き成形。底部はナジ調整。	灰白色 砂粒・砂礫 良好 自然軸が付着
5 H	壺	A 23.6	胴部に最大径をもち、頸部で「く」の字に外反し。口縁部先端で直立する。口縁部内・外表面横ナジ調整。胴部ナジ調整。	褐色 砂粒・砂礫 良好
6	砥	石 2.2×2.1	長方形を呈する。全体に使用され、丸味をもつ。	凝灰岩

100号竪穴住居跡（第173・174・175図）

調査区C3ii区を中心に確認され、東西5.6m・南北4.0mを測り、主軸方向N-9°-Eを指し、隅丸長方形を呈している。



第173図 100・156-A号竪穴住居跡実測図



第174図 100号竪穴住居跡竪実測図

100号竪穴住居跡出土遺物観察表（第176図）

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	环	A 14.4 B 5.0 C 8.0	底部は上げ底で。体部は内脣気味に立ち上がり口縁部で外反する。底部は回転窓切り後にナテ調整。	灰白色 砂粒・白雲母 不良 器内・外面に漆付着
2 S	环	A 13.0 B 4.0 C 7.7	体下部はやや内脣し、口縁部は外反して外上方へ開く。底部は回転窓切り後。ナテ調整。	灰黄色 砂粒・砂糖 良好
3 S	环	A 13.3 B 4.2 C 7.3	底部からやや内脣気味に立ち上がり、口縁部で外反する。底部は回転窓切り後、ナテ調整。	灰オーラブ色 砂粒・砂糖 良好
4 S	环	C 16.4	底部残存。 底部は回転窓切り後にナテ調整。外面は窓削り後。ナテ調整。	灰白色 砂粒・砂糖 良好
5 S	高台付环		高台は外に直線的に開く。底部は回転窓切り後ナテ調整。	灰色 砂粒・砂糖 良好
6 S	台付壺		底部破片。胴部下部に水焼き痕。外周は窓削り。	灰色 砂粒・砂糖 良好
7 S	高台付皿		口縁部から体部は直線的に開く。内・外面はナテ調整。	褐色 砂粒・砂糖 良好

壁は、床面からやや斜めに立ち上がり、壁高10cmを測る。床面は平坦であり、良く踏み固められている。ピットは9か所確認され、深さは20cmを測る。

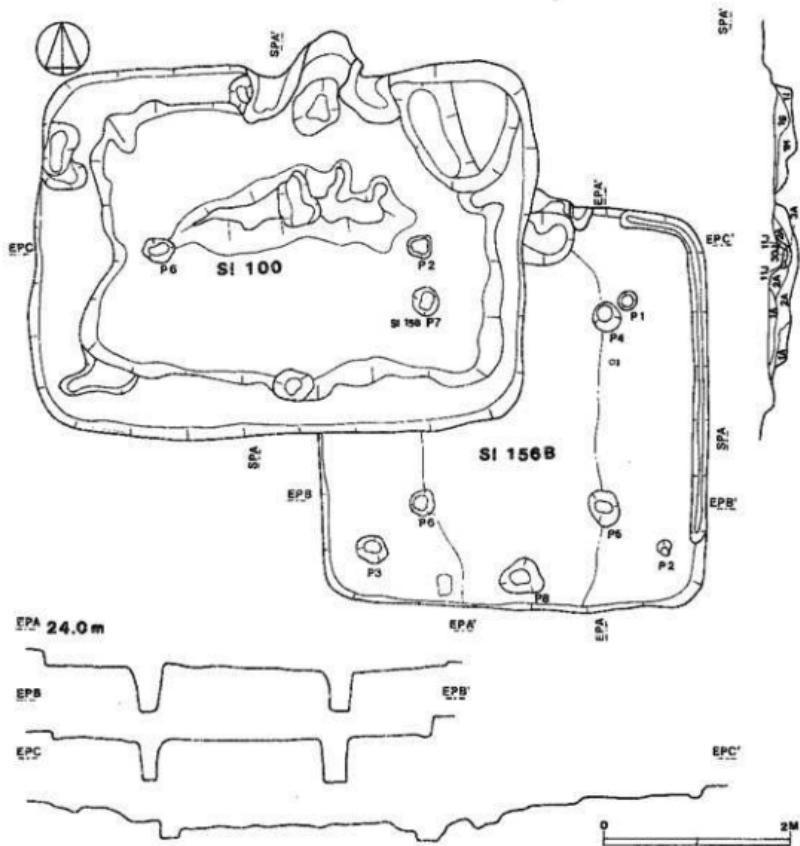
號溝は南・西・北壁下に確認され、幅10cm・深さ5cmを測る。

竈は、北壁中央部に位置し、粘土・砂で構築され、焚口からならかに立ち上がり、煙道・煙出し孔を作っている。

北西コーナー部に東西0.9m・南北1.

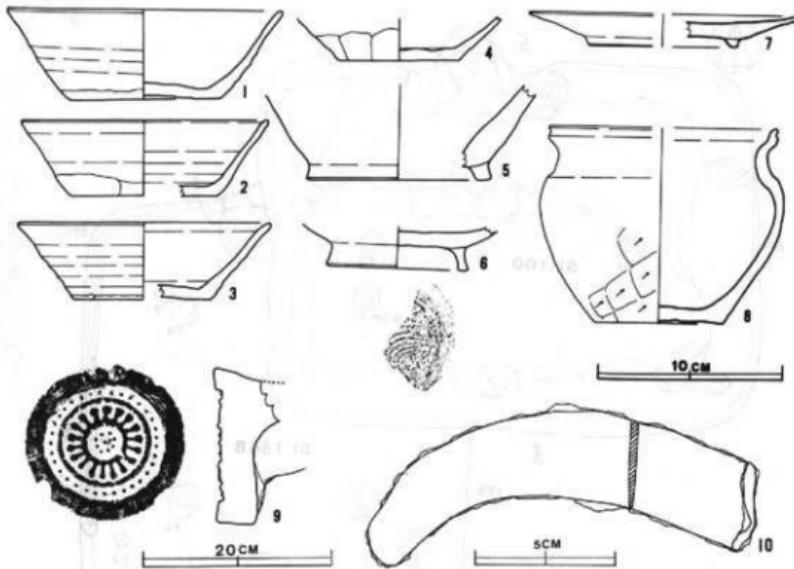
3m・深さ0.25mの土壤状遺構が検出されたが、調査の結果本住居跡には伴わないと判断した。

遺物は、土師器・須恵器・墨書き土器・鉄製品・漆紙が出土している。(佐藤正好)



第175図 100号竪穴住居掘方・156-B号竪穴住居跡実測図

番号	器種	法面(㎝)	形態および手法の特徴	備考
8	甕	A 12.1 B 10.6 C 7.0	肩部上端に最大径をもち、頸部から口縫部にかけて、「く」の字に外反する。口縫部に一条の沈幕状の段がつく。口縫部横ナギ調査。副部ナギ調査。底部は荒削り調査。	赤褐色 砂粒・長石・雪母 良好 一火成により煤 付着
9	軽丸瓦		中層に1×8の窓子を配し、外区に串井18集落文。外区には33個の株文をめぐらしている。	灰色 細砂・長石粒 良好
10	鍬	長さ13.7 身幅3.0	先端は丸味を呈する。鍬は平様で断面三角形で鍬と刃かほば同様なカーブで背曲する。茎部を折り曲げている。	



第176図 100号竪穴住居跡出土遺物実測図

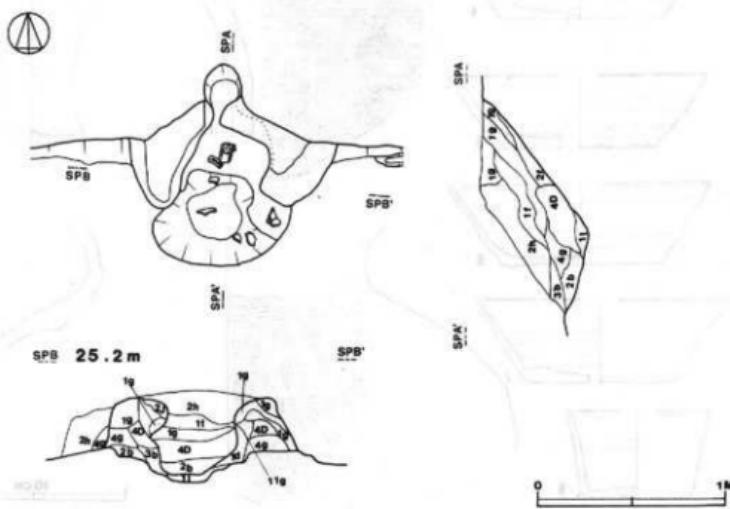
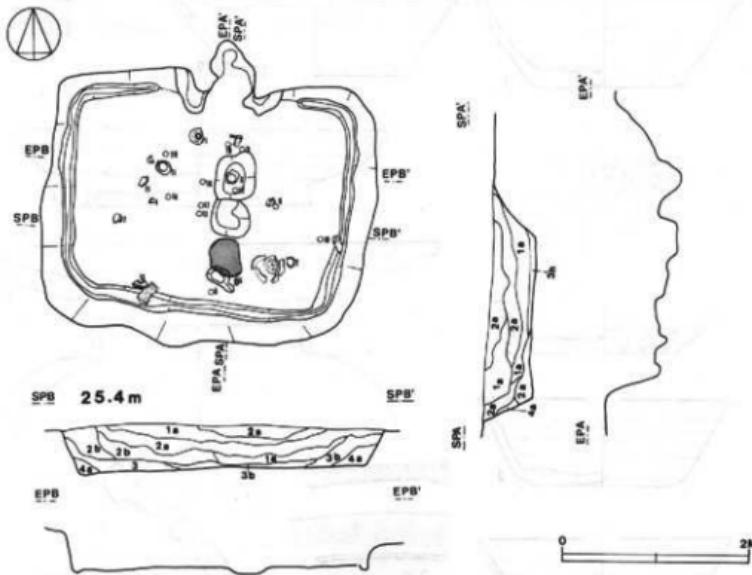
102号竪穴住居跡（第177図）

調査区E2c区を中心に確認され、南北2.9m・東西3.53mを測り、主軸方向N-5°-Eを指す隅丸長方形を呈している。

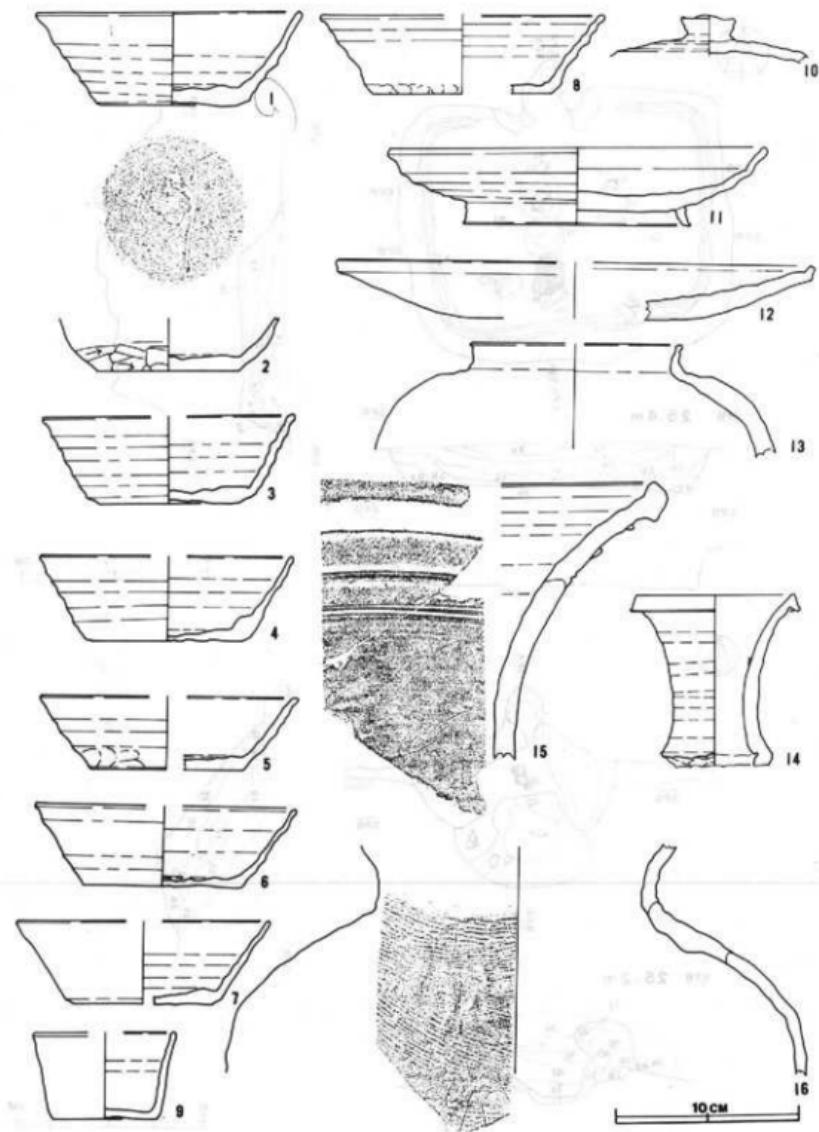
覆土は、暗褐色土を主体とする自然堆積を示している。壁は75度内外で立ち上がり、壁高は40~54cmで、壁下には窓部を除いて幅10cm・深さ5cmの壁溝が回っている。床面は東側がやや低くなるほかは平坦で、全体的に良く踏み固められている。ピットは浅く、北東隅に1か所認められるだけである。ほぼ中央部に炉跡が確認されている。

窓は、北壁中央部にあり、壁外へ41cmほど掘り込まれている。窓口は床面より10cmほど低く、火床からなだらかに立ち上がる。袖部は砂と粘土によって構築され、窓口部幅45cmを測る。焼成部中央に、支脚として利用されたものと考えられる輪羽口が立った状態で出土したほか、若干の土器片を出土している。炉跡はほぼ中央にあり、砂を主体として皿状に構築されている。なお、南側にピットを有している。

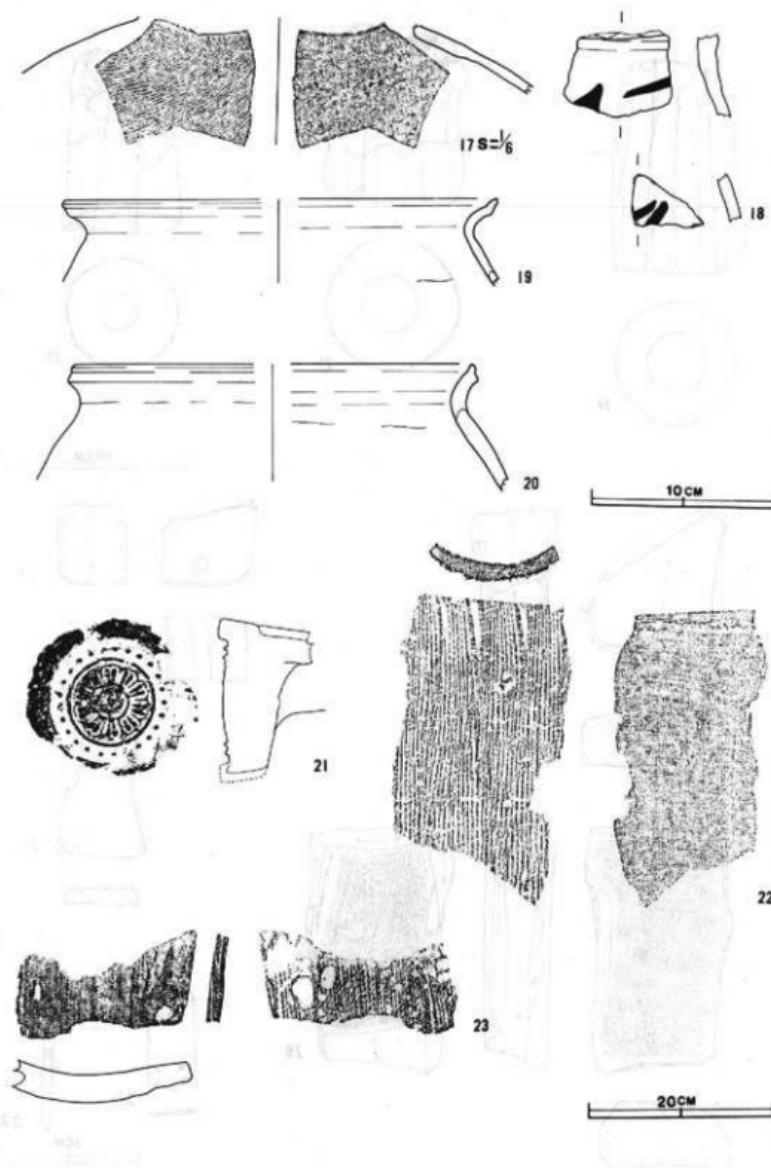
遺物は、土師器・須恵器・人面墨書き器・漆付着土器・瓦・羽口・砥石・鉄製品・鐵滓が出土しているが、床面出土のものは少なく、覆土中・下層から多く出土している。



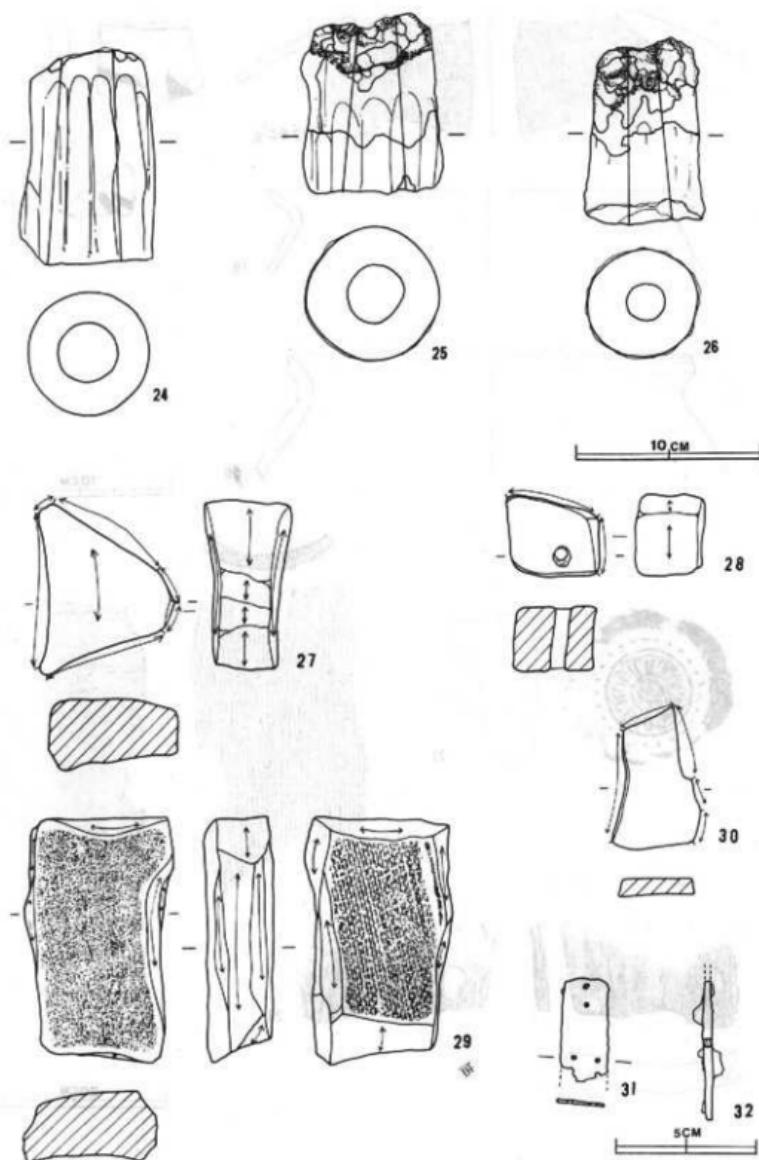
第177図 102号竪穴住居跡・竪実測図



第178図 102号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)



第179圖 102號豎穴住居跡出土遺物實測圖（2）

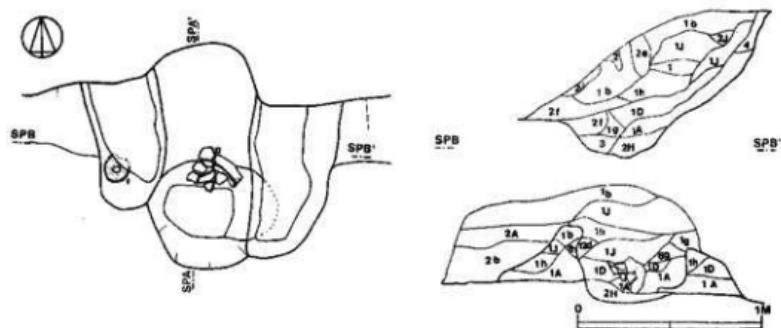
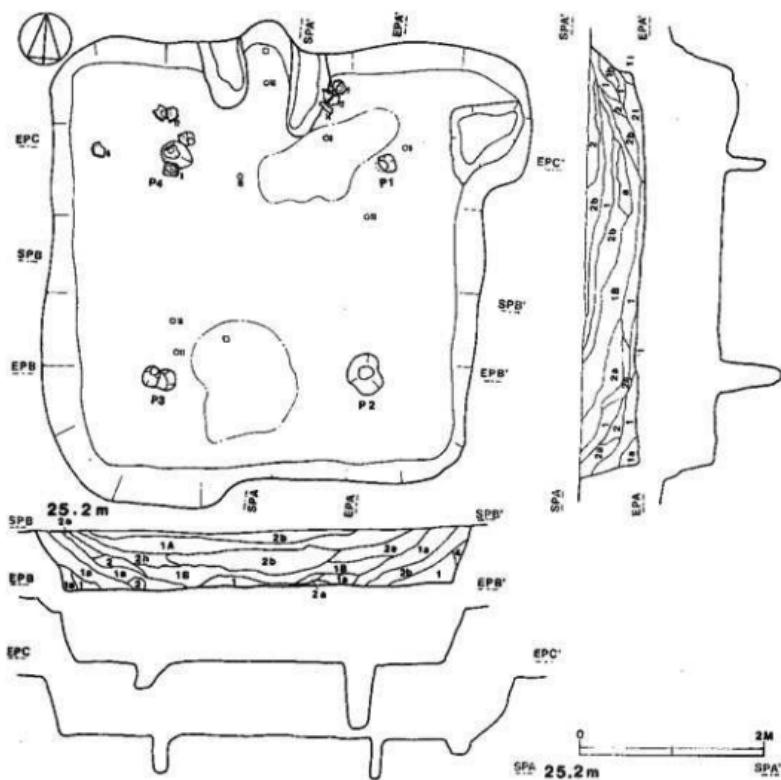


第180図 102号竪穴住居跡出土遺物実測図 (3)

102号竪穴住居跡出土遺物観察表（第178・179・180図）

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	环	A 14.3 B 5.2 C 8.2	底部は平底で、体部と底部はややましい角度で分かれ。体部はやや内側気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。右ロクロ水挽き成形で、底部は回転窓切り。一部ナナ調整。	淡青褐色 砂妙・長石粒・スコリア 不良 内面全体に擦付着 底部に斑記号
2 S	环	C 7.6	底部は平底で、体部と底部は明瞭な角度で分かれ。体部は内側気味に外上方にのびる。右ロクロ水挽き成形で、底部は回転窓切り。体部下端部手持窓削り調整。	灰白色 砂妙・長石粒 不良
3 S	环	A (13.6) B 4.7 C 7.5	底部は平底で、体部と底部はやや明瞭な角度で分かれ。体部はやや外反気味に外上方にのび、口縁端部は外反し端部はやや尖る。右ロクロ水挽き成形で、底部は回転窓切りで無調整。	明オリーブ灰色 細妙・砂妙・長石粒 普通
4 S	环	A (13.6) B 4.6 C (8.9)	底部は平底で、体部と底部は明瞭な角度で分かれ。体部はやや内側気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。水挽き成形で底部は回転窓切り後、多方向の擦ナナ及びナナ調整。体部下端部手持窓削り。底部中に穴が深入し底部に凹みをもつ。	灰砂・長石粒多 良好 内面全体に黄白色の自然釉 鉄分吹出 黒ぬき無
5 S	环	A (13.9) B 3.9 C (8.5)	底部は平底で、体部と底部はややましい角度で分かれ。ほぼ直線的に外上方にのび、口縁端部は外反し、端部はやや尖る。水挽き成形で、底部は多方向の静止窓削り。体部下端部手持窓削り。体部内面は横ナナ調整。	灰色 細妙・長石粒・雲母 普通 口縁部内面から外面向にかけ捺付着
6 S	环	A (14.0) B 4.4 C 8.6	底部は平底で、体部と底部はややましい角度で分かれ。内側気味に外上方にのび、口縁端部付近で強く内側し、端部を丸くおさめている。全体に横手作り。右ロクロ水挽き成形で、底部は回転窓切り後、静止窓ナナ調整。底部下端部手持窓削り調整。	灰白色 細妙・長石粒 良好 底面 口縁部内面から外面向にかけ捺付着
7 S	环	A (13.6) B 4.5 C 7.5	底部は平底で、体部と底部はましい角度で分かれ。体部は直線的に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。口縁部付近は薄手作り。水挽き成形で底部は回転窓削り。底部内面から体部内・外面は横ナナ調整。	青灰色 細妙・長石粒 良好 堅致
8 S	环	A (15.2) B 4.3 C 9.6	底部は平底で、体部と底部はややましい角度で分かれ。体部は一目外傾し、途中から外反気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。水挽き成形で、底部は尾突窓削り。底部内面から体部下端部手持窓削り調整。	灰色 砂粒・長石粒 良好
9 S	环 (小形コップ形)	A (7.6) B 4.7 C 5.6	底部は平底で、体部は直線的に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。水挽き成形で、底部は静止窓削り調整。全体に端正を作り。	灰白色 砂粒・長石粒・鉄分 良好 底面 内面全体に黒無地。 体部外周全体にビードロ状の自然釉
10 S	蓋		天井部中央に扁平なボタン状のつまみがつく。天井部はやや丸みを帯びる。水挽き成形で、天井部は回転窓削り。方向は不明。つまみと天井部内面は横ナナ調整。	灰白色 砂粒・長石微粒・鉄分 良好
11 S	台付盤	A 20.1 B 4.3 D 12.2	底面と体部の境界は、丸みを帯びる。体部は内側気味に外上方にのび、口縁部で大きく外反し、口縁端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで「」の字印に外下方にのび、外端部に棱をなす。右ロクロ水挽き成形で底部は回転窓削り。口縁部内外面と高台内外面は横ナナ調整。	明オリーブ灰色 砂粒・長石微粒・石英・ 雲母 普通
12 S	高盤	A (25.0)	受け部分のみ。口縁部と体部の境界に棱を持ち、口縁部はほぼ垂直面に立つ。端部をやや尖り気味におさめている。水挽き成形で全体に横ナナ調整。	灰白色 細妙・長石粒・鉄分 良好 底面 体部外周全体に黄白色の自然釉
13 S	短脚蓋	A (11.3)	ほぼ球形をなす体部から、やや外反気味に包く立ち上がる口縁部を持ち、端部を尖り気味におさめる。胴部は厚手、頸部から口部にかけて、薄手作り。内・外面とも横ナナ調整。	灰白色 砂粒・長石粒・鉄分 良好 体部内面全体に青白色の自然釉
14 S	長脚蓋	A (8.6)	頭部は上部ほど外反度が大きくなり、口縁部にいたり、さらに下方へ開き、平坦面に形成。端部をやや尖り気味におさめている。胴部との接合部を明瞭に残す。	灰黄色 砂粒・鉄分 良好 内・外面全体に青白色の自然釉

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
15	S	塵	口縁部は外上方に大きく開き、端部を尖り気味におさめている。口縁部外面につまみ出しによる棱をもたせ二条の貼り付けによる凸筋をつけ、その間に撫状工具による刺突文を二段に施している。内・外面は横ナデ調整。	灰白色 細直・砂粒・長石微粒 普通
16	S	塵	大きく張った頭部に頭部は丸く屈曲し、外上方にのびる口縁部がつく。粘土練み上げ成形で体部内面は指強押圧調整。頭部内・外面は横ナデ調整。体部外面は平行叩き目調整。	灰色 細少・長石粒 良好 堅穀
17	S	塵	体部は強く張る。体部外面は平行叩き目調整。体部内面には同心円文が残る。	灰色 細少・長石粒 良好
18	H	小形塵	頭部から体部の一部。内・外面は横ナデ調整。	にハ・橙色 細少・長石粒・雲母 普通 体部外面に毫苔
19	H	塵 A(23.5)	やや弱い張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部がつき、端部を外上方につまみ出している。内・外面は横ナデ調整。	にハ・赤褐色 細少・長石粒・雲母 良好 内面煤付着
20	H	塵 A(21.5)	やや丸味を帯びた体部から頭部は丸く屈曲し、口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、端部をつまみ出す。体部内・外面は混ナデ調整。頭部から口縁部内・外面は横ナデ調整。頭部外面に毫苔による粘土のおさえ痕が見られる。	明赤褐色 砂粒・長石粒・雲母 良好
21	軒 丸 瓦	全長(10.0) 面径(15.6)	瓦当面は内区に複弁十葉連草文、外区に珠文を配する。中房の裏面は欠損。丸瓦部と瓦当裏面は毫削り調査で、丸瓦部裏面に像かな布目を残す。	淡黄色 砂粒・長石粒・礫 やや軟質
22	平 瓦	全長(31.4) 底幅(12.8) 厚さ 1.8	尚削面と片側端面は欠損。凸面は櫛位の繩目叩きを施し、凹面は布目を残す。端面は毫ナデ調整。	褐色 砂粒・長石粒・雲母・ 礫 堅穀
23	平 瓦	厚さ 3.0	凸面は櫛位の繩目叩きを施し、荒いナデ調整と指強押圧痕を残す。凹面は布目を残すが端部に荒い毫削りを施し、一部ナデ調整と指強押圧痕を残す。側面は分割裁切面のままと思われる。下端部は面削りを施す。	灰黄色 砂粒・長石粒・雲母 やや軟質
番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
24	羽 口	全长(11.6) 外径2.1 孔径2.7	先端部は欠損、外面は一方向の毫削り調査。 基部に毫傷を残す。	少量の 鉄付着
25	羽 口	全长(8.1) 外径6.6 孔径2.1	大形羽口。先端部は冷沢損。 外面は一方向の毫削り調査。	先端は 溶解し 鉄付着
26	羽 口	全长(9.4) 外径5.5 孔径1.5	先端は粗く外面に細かな一方向の毫削り調査。	
27	砥 石	6.2×4.4 2.5	三角形を呈し、全面に使用痕が認められる。	流紋岩 75g
28	砥 石	3.3×2.8 2.3	方形を呈し、一端に4mmの孔があけられている。 全体に使用痕がみられ様も使用されている。	磨灰岩 2.2g



第181図 103号竖穴住居跡・窓実測図

103号竪穴住居跡（第181図）

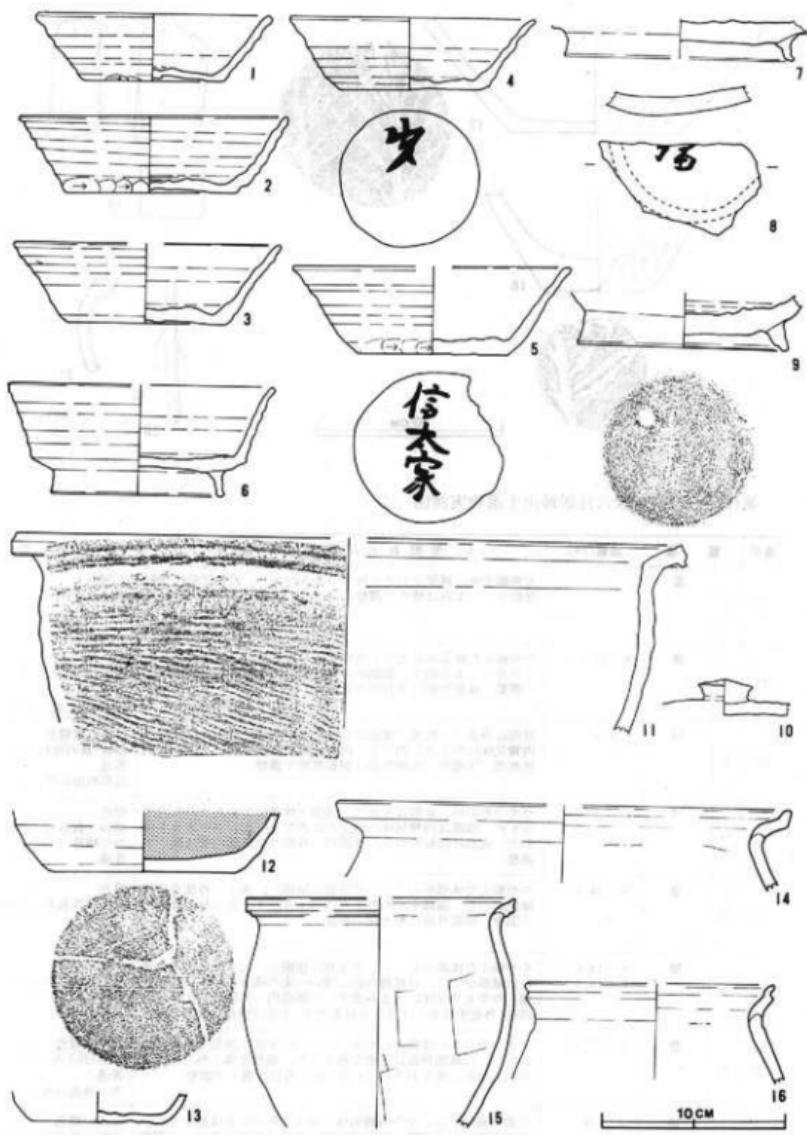
調査区 E3c2 区を中心に確認され、102号竪穴住居跡の東側に位置する。東西・南北とも4.67mを測り、主軸方向N-5°-Eを指す隅丸方形をしている。東壁北側にコの字形の張り出しを有する。覆土は、褐色・暗褐色土を主体とする自然堆積層である。壁は外傾して直線的に立ち上がり、壁高は65cm内外である。床面は、南壁中央付近と窓前面が特に踏み固められているほかはやや軟弱で、ほぼ平坦である。主柱穴は4本確認され、深さは28~70cmを測る。

窓は、北壁中央部にあり、長さ1.23m・幅1.3m・焚口部幅45cmで、壁外へ29cm程掘り込まれている。袖部は、ロームブロック・粘土・砂で構築されている。焚口は、床面より20cm程掘り下げられ、中央部に割石を立て支脚としている。

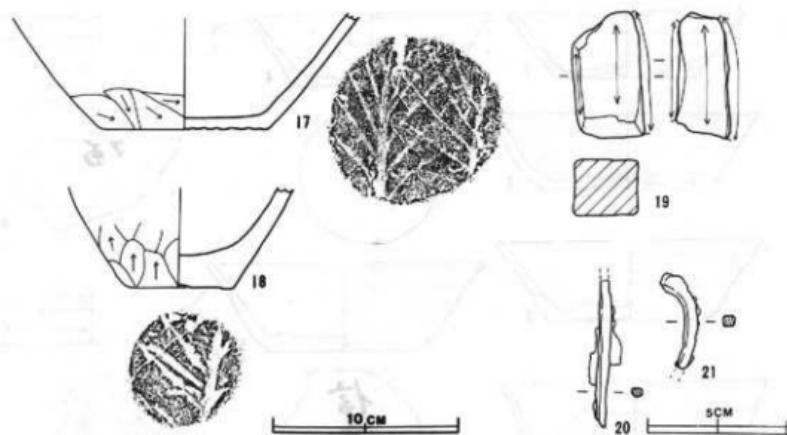
遺物は、土師器・須恵器・墨書き器・漆付着土器・瓦・砥石・鉄製品・鉄滓が、主に北半部床面付近から出土している。

103号竪穴住居跡出土遺物観察表（第182・183図）

番号	器種	法蓋(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	环	A 12.4	やや盛り上った底部から、体部はあまい角度で分かれ、やや内側気味に外方にのび、口縁端部を丸くおさめている。水洗き成形で底部は回転端切り、体部下端部に一部手持ち刃削りが見られる。内面は横ナナド調整。全体にやや厚底。	底白色 砂粒、長石粒、雲母、 石英粒 不良
		B 3.6		
		C 7.2		
2 S	环	A 14.6	やや盛り上った底部から、体部はあまい角度で分かれ、内側気味に外方にのび、口縁端部を丸くおさめている。右ロクロ水流き成形で底部は回転端切り。外周部は直ナナド調整。体部中腹から下端部にかけ回転端削り。体部下端部は手持ち刃削り調整。	底白色 砂粒、長石粒、石英粒、雲母 普通 内・外に墨付有
		B 5.0		
		C 9.1		
3 S	环	A (14.3)	底部は平底で体部と底部はあまい角度で分かれ。体部は直線的に外方にのび、口縁端部を丸くおさめている。右ロクロ水流き成形で、底部は回転端切り後、部分的なナナド調整。内面全体は横ナナド調整と思われる。全体に厚底が進行。	灰白色 砂粒、長石粒、雲母 不良 体部内面から底部外周に墨付有
		B 4.3		
		C 8.5		
4 S	环	A 18.1	底部は平底で体部と底部は明瞭な角度で分かれ。やや内側気味にのび、口縁部はわずかに外反し、端部を丸くおさめている。	青灰色 砂粒、長石粒、雲母、 石英粒 良好 体部内面から底部に 厚底が進行 底部外周に墨付
		B 4.0		
		C 7.5		
5 S	环	A (14.9)	底部は平底で体部と底部は明瞭な角度で分かれ(ほぼ直線的に外上方にのび)、口縁部はやや外反し、端部を丸くおさめている。右ロクロ水流き成形で、底部は回転端切り。体部下端部手持ち刃削り調整。口縁部内面から体部外周は横ナナド調整。	灰白色 砂粒、礫、長石粒、 雲母 普通 底部外周に墨付
		B 4.8		
		C 8.0		
6 S	高台付环	A (14.5)	底部と体部の境界は明瞭な棱をもつ。体部は外傾気味にのび、口縁部でやや外反し、端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで、下方にのび、端部を丸くおさめている。右ロクロ水流き成形で、底部は回転端削り。高台は貼り付けで、内外面は横ナナド調整。内面全体に厚底が見られる。	青灰色 砂粒、礫、長石粒、 鈍粒 良好
		B 6.0		
		D 9.4		
7 S	高台付环	D (12.5)	高台は貼り付けで、ややふんばり気味に外下方にのび、端部は尖り気味におさめている。底部の器壁は厚い。右ロクロ水流き成形で底部は回転端削り。高台内・外周は横ナナド調整。	灰色 細砂、長石粒多 良好 底部内面に黄白色的 自然釉
8 S	高台付环		水洗き成形で底部は回転端削り。高台は欠損するが貼り付け高台。底部内面は横ナナド調整。	青灰色 砂粒、長石粒、長石 微粒 普通 底部外周に墨付
9 S	高台付环	D (11.3)	高台は貼り付けで「ハ」の字状に外方に下降し、内端面にあまい溝が回る。底部の器壁は厚い。右ロクロ水流き成形で、底部は回転端削り。一部に指輪押痕を見る。高台内・外周は横ナナド調整。	オリーブ灰色 砂粒、長石粒(砂目が 見え)、 良好 底部外周に施記有



第182図 103号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)



第183図 103号竪穴住居跡出土遺物実測図 (2)

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
10	S		天井部中央に肩平なボタン状のつまみがつく。天井頂部は回転範削り。つまみは横ナナゲ調整。	灰色 細砂・長石粒 良好
11	S	A (35.8)	やや膨んだ体部から大きく外反する口縁部がつき。縁部をかるく下方へつまみ出す。頂部から口縁部外面及び内面全体は横ナナゲ調整。体部外面は平行叩き目調整。	青灰色 細砂・長石粒・長石 微粒 良好 体部内面に若干堆積着
12	H	C 10.0	底部は平底で、底部と体部はややあまい角度で分かれ。体部は内側気味に外上方にのびる。内面は荒削り調整後、不完全な黒色處理。体部及び底部外面は回転範削り調整。	にぶい黄褐色 細砂・長石後粒・雲母 普通 底部外面に荒記号
13	H	C 7.4	やや小形の环。底部は平底で、底部と体部はややあまい角度で分かれ。体部は内側気味に外上方にのびる。右ロクロ水洗き成形で、底部は回転範削り。体部内・外面及び底部内面は横ナナゲ調整。	橙色 細砂・長石粒 やや精良 普通
14	H	A (24.4)	やや膨んだ体部から「く」の字状に屈曲し、大きく外反する口縁部がつく。縁部をやや外上方につまみ出す。内・外面は横ナナゲ調整。頂部外面に粘土膜の跡跡。	橙色 砂粒・長石粒・雲母 ・埋 良好
15	H	A (14.6) F 14.6	やや膨んだ体部から「く」の字状に屈曲し、大きく外反する低い口縁部がつく。口縁部外面に浅い一条の溝をもつ。口縁部先端をやや尖り氣味につまみ出す。口縁部内・外面は横ナナゲ。体部内・外面中位から下位にかけ黒ナナゲ。下位は横位の範削り調整。	赤色 砂粒・礫・長石粒・ 雲母 良好
16	H	A (13.3)	あまり張らない体部からかるく「く」の字状に屈曲する口縁部をもつ。口縁部外面に明顯な棱をもち、縁部を強く外方へつまみ出しながら丸くおさめている。内・外面は横ナナゲ調整。	にぶい橙色 砂粒・長石粒・雲母 普通 内・外面に煤付着
17	H	C 9.0	平底の底部から、やや内側気味に外上方にのびる体部をもつ。内面全体にナナゲ調整。体部外面は粗・横位の範削り及びナナゲ調整。	にぶい橙色 砂粒・長石粒・雲母 普通 底部外面に木葉灰 底部内面に鉄分付着

番号	種類	法量(cm)	形態および手法の特徴			備考			
18	甕	C 5.8 H	小さな平底の底部からやや内側気味に外上方にのびる体部をもつ。底部は厚みをもつ。内面ナナ子調整。体部外側は範削り調整。			褐色 細砂・長石・雲母 普通 底部外側に木葉模			
番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
19	砥石	4.1×2.9 2.0	長方形を呈し、全面に使用が認められる。欠損部分あり。	流紋岩 26.5 g	21	不明 鉄製品	全長 (3.4) 幅0.4 厚さ0.4	全体に彎曲する。 一方の端部欠損。	
20	不明 鉄製品	全長 (5.2) 幅0.4 厚さ0.3	断面が楕円形の棒状を呈している。 上部欠損。						

104号竪穴住居跡（第184図）

調査区E3e2区を中心に確認され、103号竪穴住居跡の南側に位置している。南北3.38m・東西3.6mを測り、土軸方向N=5°-Eを指す隅丸方形を呈している。

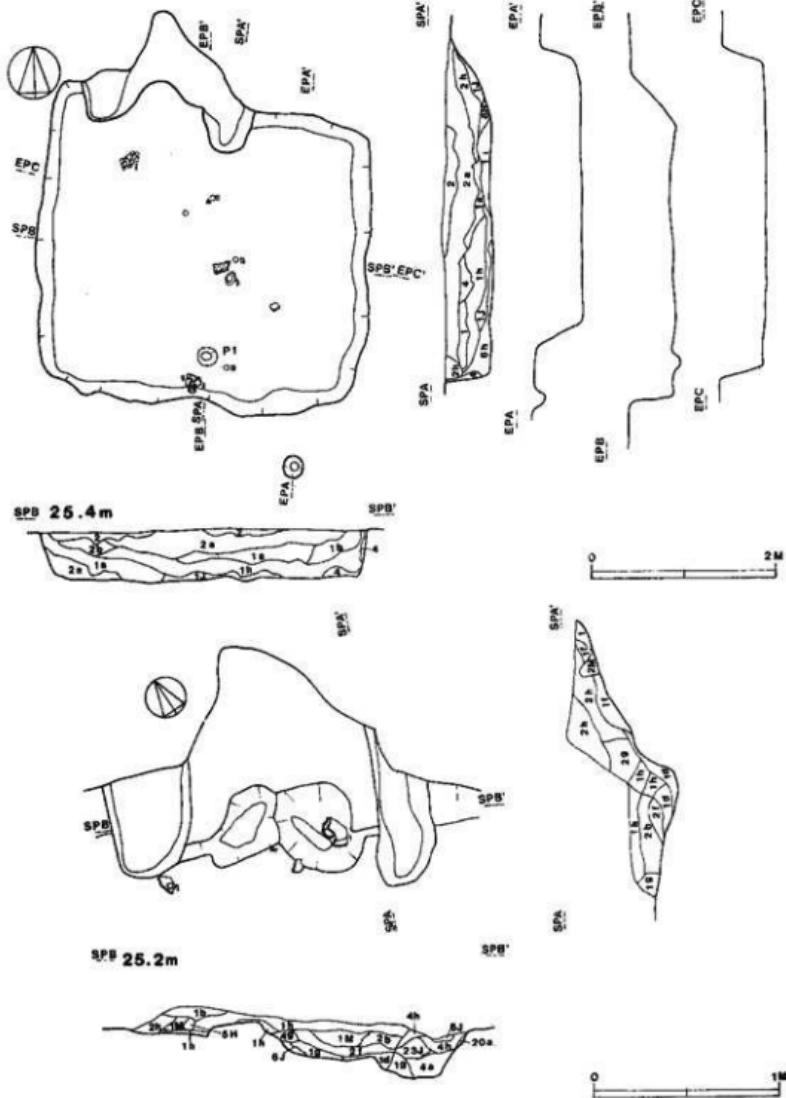
覆土は、上・中層が褐色・暗褐色土を主体とする自然堆積層を示すが、下層はロームブロックや砂などを含む褐色土で、人为的な堆積と考えられる。壁は、80度内外の傾斜をもってほぼ直線的に立ち上がり、高さ約50cmである。床面は全体的に堅く締まっているが、南壁下から竪前面にかけては特に踏み固められている。ピットは、南壁下のはば中央部に深さ10cmの小ピットが1か所認められるだけである。

竪は、北壁や西側寄りにあり、長さ1.65m・幅1.8m・焚口部幅0.9mで、壁外へ0.98m掘り込んで構築されている。袖部は砂を主体として構築されているが、保存状態は悪い。焚口部は床から10cmほど低く、煙道部へゆるやかな傾斜をもって立ち上がっている。

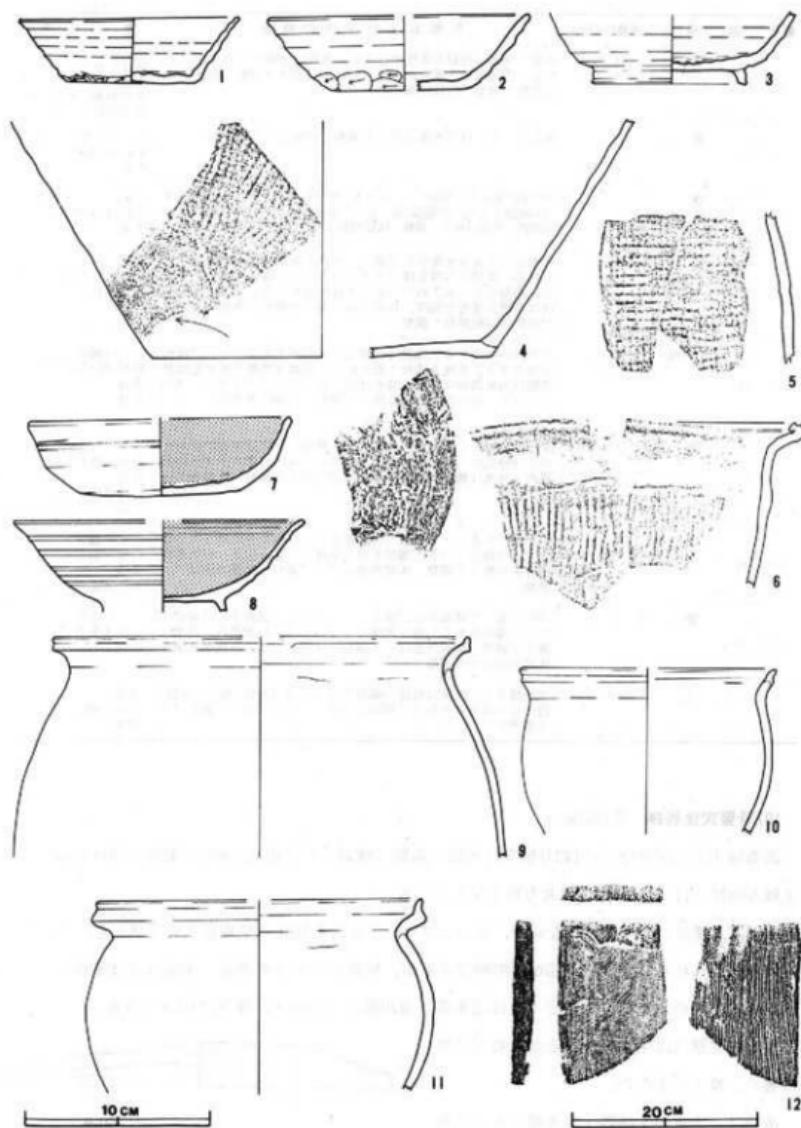
遺物は、土師器・須恵器・漆付着土器・瓦・鐵滓が、ほぼ中央部の床面付近と竪から出土している。

104号竪穴住居跡出土遺物観察表（第185図）

番号	種類	法量(cm)	形態および手法の特徴			備考
1 S	环	A 11.8 B 3.8 C 7.0	底部は平底で、体部と底部はややあまい角度で分かれれる。体部は直線的に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。水抜き成形で、底部は範削り調整。体部下端部は手持ち範削り調整。全体にやや薄手作り。			灰白色 細砂・長石粒・雲母 普通 には全体に漆付着
2 S	环	A (14.0) B 4.1 C (7.0)	底部は平底で、体部はやや内側気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。水抜き成形で底部はナナ子調整。体部下端部は手持ち範削り調整。体部内面は横ナナ子調整。			灰白色 砂粒・長石粒・雲母多 不均 体部外側に一部磨削有
3 S	高台付环	D 8.3	底部と体部の境界は、回転範削りによる明顯な棱をもち、体部は外側気味に外上方にのびる。右ロクロ水抜き成形で、底部は回転範削り。高台は貼り付けで、ややふんぱり気味で内側部に棱をもつ。体部内・外側及び高台内・外側は横ナナ子調整。			口元・褐色 砂粒・長石粒・雲母多 不均 底部及び体部内面に 漆付着



第184図 104号竪穴住居跡・竪穴測図



第185図 104号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
4 S	甕	C (18.5)	底部と体部は明瞭な角度で分かれ、体部は直線的に外上方にのびる。内面はナデ調整。体部外面は平行叩き目調査。体部下位は笠削り調整。全体に舟手作り。	暗灰色 砂粒・長石粒・雲母 背部外面に多数の粗粒状斑点
5 S	甕		体部の一部。体部外面は叩き目調査。内面はナデ調整。	オリーブ色 砂粒・長石粒・雲母多 不均
6 S	甕		殆ど底の張らない体部から一回大きく外反し。次に強く内面に屈曲する口縁部をもつ。内面部に段をもつ。体部外面は平行叩き目調査。口縁部内・外面は横ナデ調整。体部内面はナデ及び笠ナデ調整。	灰色 砂粒・長石微粒 普通
7 H	环	A (14.0) B 4.2 C 8.5	底部はやや丸みを帯びた平底で、体部と底部はある角度で分かれれる。体部は内壁気味に外上方にのび、口縁部で僅かに外反し、端部を丸くおさめている。水洗き成形と思われる。内面全体は荒削り後黑色處理。体部外面は横ナデ調整。体部下端部及び底部は四輪捺り調整。	褐色 砂粒・長石微粒 やや粘性 普通
8 H	高台付甕	A (15.6) B 5.0	やや浅い壺である。体部は内壁しながら外上方にのび、口縁部は外反する。水洗き成形と思われる。内面は荒削り後黑色處理。底部は回転捺削り調整。高台は貼り付けで「ハ」の字状に下方に向にのびる。高台内・外面は横ナデ調整。全体に舟手作り。	にぶい褐色 砂粒・長石粒・石英 雲母 普通
9 H	甕	A (22.4)	やや頑の張った体部から頭部は丸く屈曲し、ほぼ垂直に立ち上がるに縁部がつき、端部をかるく外反気味につまみ出す。口縁部内・外面は横ナデ調整。体部内面は笠ナデ調整。体部外面はナデ調整。	赤色 砂粒・長石粒・雲母 良好 口縁部内面に一部塗付有
10 H	甕	A (13.8)	小形甕である。かるく張った体部から、ゆるやかに外上方に屈曲する口縁部がつき、端部をかるく外反気味につまみ出す。口縁部内・外面は横ナデ調整。体部内面は笠ナデ調整。体部外面はナデ調整。	にぶい褐色 砂粒・長石粒 普通 内・外間に塗付有
11 H	甕	A (17.4)	球形に張った体部から、強く「く」の字状に屈曲する口縁部がつき、端部をかるく外反気味につまみ出す。口縁部内・外面は横ナデ調整。体部外周はナデ調整。中位から下方は笠削り調整。体部内面はナデ調整。	にぶい赤褐色 砂粒・長石粒・雲母 普通
12	平瓦	全长 (17.8)	やや扁平で、両面は対位の織目叩きで凹面は布目を残し、端部は瓦による面取りを施す。背面は斜めに分割し、笠ナデ調整。やや舟手作り。	灰色 砂粒・鐵 硬質

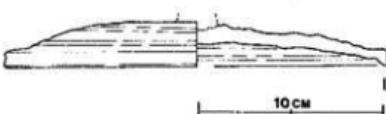
107号竪穴住居跡（第187図）

調査区 E3c7区を中心に142号竪穴住居跡の南側に確認され、南北3.6m・東西3.75mを測り、主軸方向N-11°-Eを指す隅丸方形を呈している。

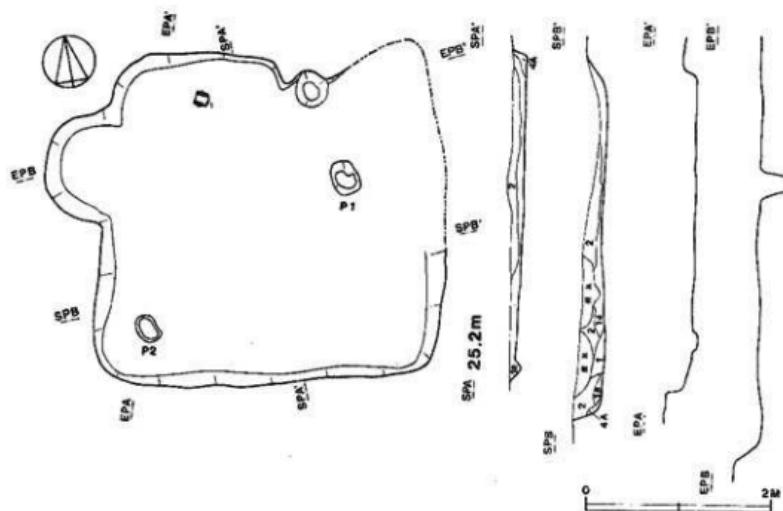
覆土は、攪乱があり良好でないが、ロームブロックを含む褐色・暗褐色土を主体とし、人為的堆積と考えられる。壁は北東部が不明瞭であるが、壁高15~30cmを測る。床面はほぼ平坦で、竪前面は踏み固められている。ピットは北東部と南西部の3か所で、深さは10cmを測る。

窓は、北壁には中央部にあるが、残存状態は悪く、焼土も少ない。

遺物は、少量の土師器、須恵器、瓦、鉄製品、鐵滓で、ほとんど床面からの出土である。



第186図 107号竪穴住居跡出土遺物実測図



第187図 107号竪穴住居跡実測図

107号竪穴住居跡出土遺物観察表（第186図）

番号	種類	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	蓋	A (20.6)	天井頂部はやや扁平で、口縁端部は下方に弧曲り。縫をなす。内端面は内傾する面をなす。水洗き成形で、天井部外面は、回転削り後横ナナ調整。内面全体はナナ及び横ナナ調整。	灰色 細砂・長石粒 良好 内面に漆付着

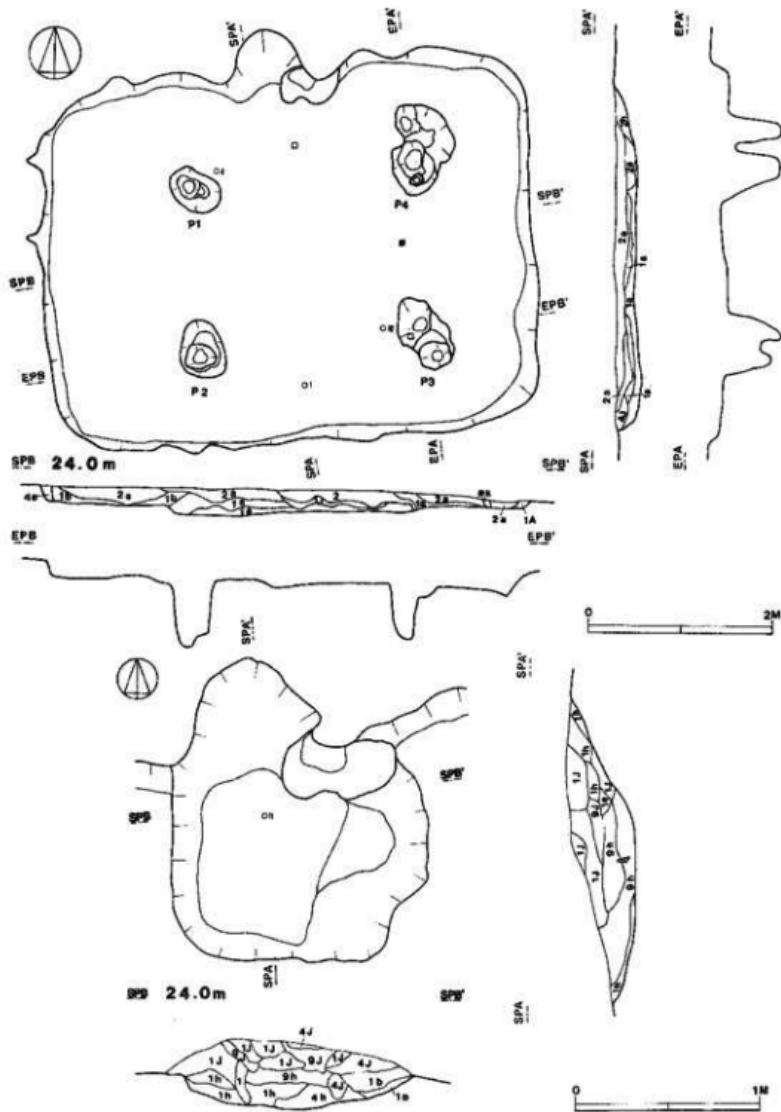
108号竪穴住居跡（第188図）

調査区 C2h9区を中心に109号竪穴住居跡の東側に確認され、南北4.2m・東西5.34mを測り、主軸方向N-4°-Wを指す隅丸長方形を呈している。

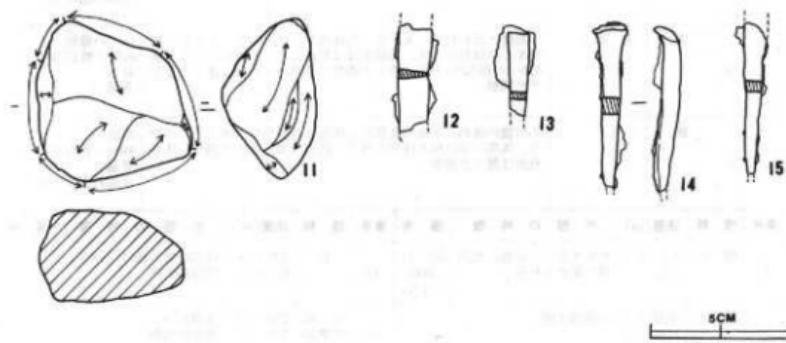
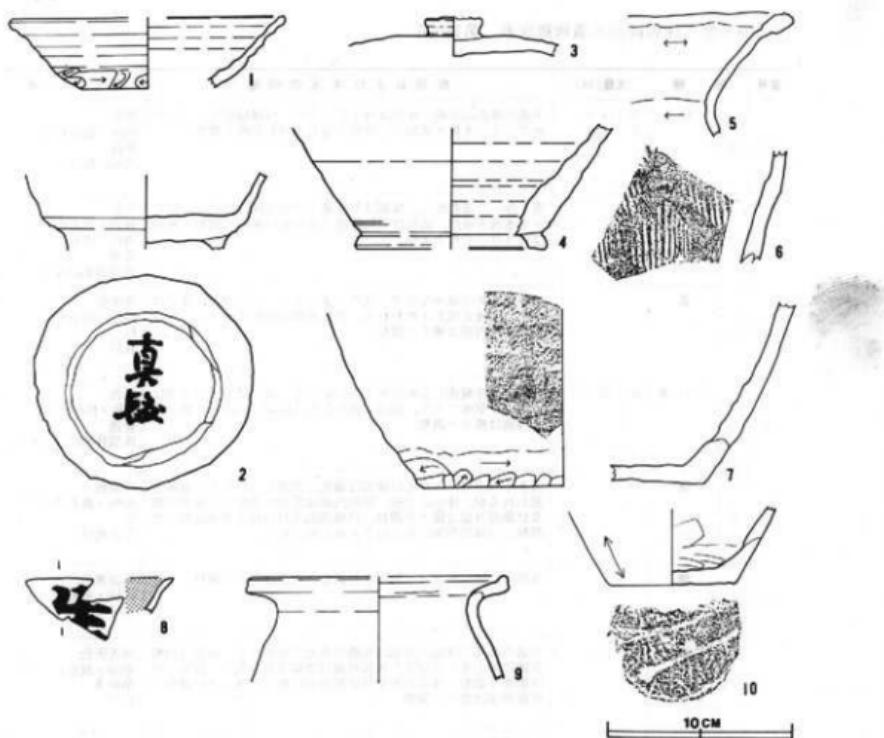
覆土は、褐色・暗褐色土が主体で、部分的にロームブロックを若干含み、人為的な堆積が認められる。壁は60度内外でゆるやかに立ち上がり、高さ8-25cmである。床面は、東側中央部が若干高くなるほかはほぼ平坦で、比較的硬い。ピットは4か所で、整然と配されているが、いずれも2本ずつ重複し、建て替えが考えられる。

窓は、北壁中央部にあり、長さ1.64mで、壁外へ55cm程掘り込んで構築されているが、残存状態は不良。袖部は山砂で構築され、窓口部は床面より12cm程低く、ゆるやかに煙道に至っている。

遺物は、土師器・須恵器・墨書き土器・漆付着土器・羽口・砥石・鉄製品・鐵津が少量出土しているが、大部分覆土中からのもので投棄されたものと考えられる。



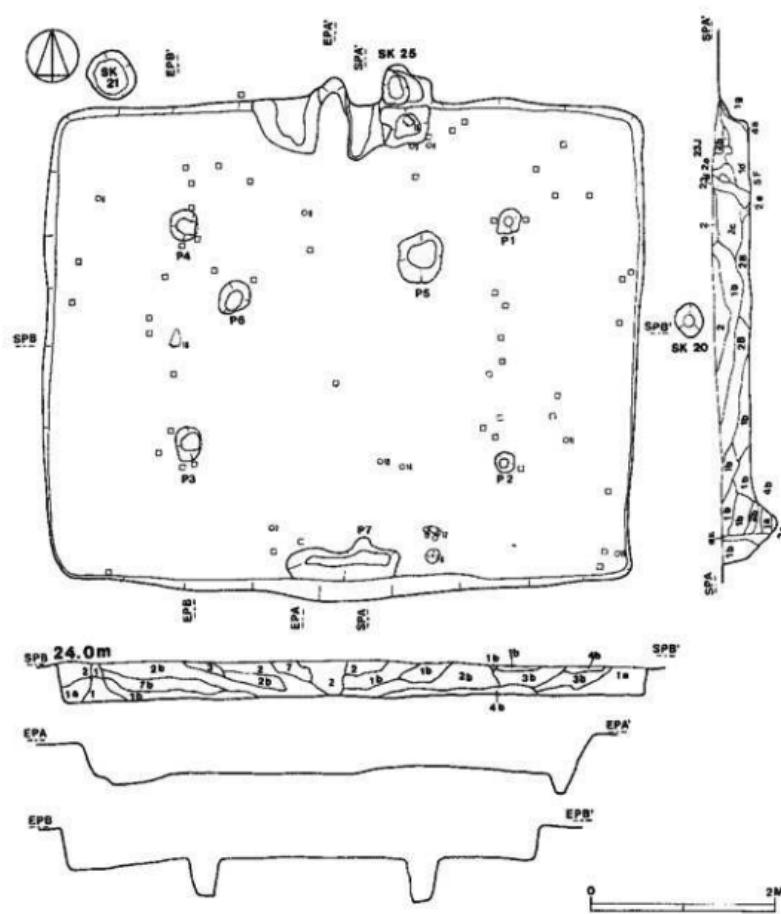
第188図 108号堅穴住居跡・窯実測図



第108図 108号竪穴住居跡出土遺物実測図

108号堅穴住居跡出土遺物観察表（第189図）

番号	種類	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	环	A (14.5) B 3.8	平底の底部は欠損。体部は外上方にのび、口縫部を丸くおさめている。水焼き成形で、体部下端部手持ち抜削り調整。	灰色 細砂・長石粒・雲母 普通 内面に焦げか
2 S	高台付环		厚く作った底部から、体部はやや薄く外輪気味にのびる。右側クロス焼き成形。底部は回転抜削り後かるい横ナナ調整。高台は貼り付けで殆ど欠損。	灰色 細砂・長石粒・長石 微粒・玄母 普通 底部外面に墨書き
3 S	環		天井部中央に扁平なボタン状のつまみがついている。頂部は僅かに欠損。水焼き成形と思われる。天井頂部は回転窓型。つまみと天井部内面は横ナナ調整。	青灰色 細砂・長石粒・石英 粉 良好
4 S	古付盃	D (10.1)	体部はやや齊刷しながら外上方にのびる。高台は厚く外下方にふんわり気味にのび、縁部に面をなす。体部内・外表面及び高台内・外表面は横ナナ調整。	灰色 細砂・長石粒・礫・鉄分 普通 体部外面に一部煤付 有
5 S	甕		大きめ外上方にのびる口縫部は溝部で肥厚し、やや尖り氣味と思われるが、僅かに欠損。強部内面は鋸削り調整。口縫部内面及び底部外表面は窓ナナ調整。口縫部及び縁部外表面は横ナナ調整。口縫部内面に粘土おさえ痕が見られる。	灰黄色 細砂・長石微粒・玄母 なまけ
6 S	甕		体部の一部。外表面は平行叩き目調整。内面は窓ナナ調整。	外面黒色、内面灰色 細砂・長石粒多 良好
7 S	甕	C (15.2)	予底の底部で体部と底部は明瞭な角度で分かれれる。体部は内輪気味に外上方にのびる。体部外表面には叩き目を残す。体部下位は窓削り溝型。体部内面及び底部内面は窓ナナ後、ナナ調整。底部外表面は窓ナナ調整。	暗青灰色 細砂・長石粒・長石 微粒多 良好
8 H	环		口縫部は外反しやや尖り氣味におさめている。水焼き成形で内面は黑色処理。	にじむ褐色 細砂・雲母 普通 体部外面に墨書き
9 H	甕	A (13.6)	小形甕と思われる。丸く盛った体部から強く「く」の字状に屈曲する口縫部がつつき、縁部をほぼ垂直に丸くおさめている。頭部から口縫部内・外表面は横ナナ調整。体部内・外表面は窓ナナ及びナナ調整。	にじむ褐色 砂粒・長石微粒・雲 母多 普通
10 H	甕	C 6.8	小形甕の底部。平底の底部から体部は外輪気味に外上方にのびる。体部内面に粘土接続を残す。体部内面は窓ナナ調整。体部外表面は窓ナナ調整。	褐色 砂粒・長石粒・雲母 普通 底部外面に木葉痕
番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
11	砥石	5.5×5.4 3.2	舟形を呈し、全面に使用痕が認められる。	砂岩 (細粒) 123.5g
12	刀子か 刃留	全長(3.8) 刃留 1.1	両端部欠損。	釘 全长(5.8) 太さ0.6 先端部欠損。
13	刀子	全長(2.9)	基部片か。	不明 金長(5.3) 太さ0.6 鉄製品 基部片か。 両端部欠損。



第190図 109号竖穴住居跡実測図

109号竖穴住居跡（第190・191図）

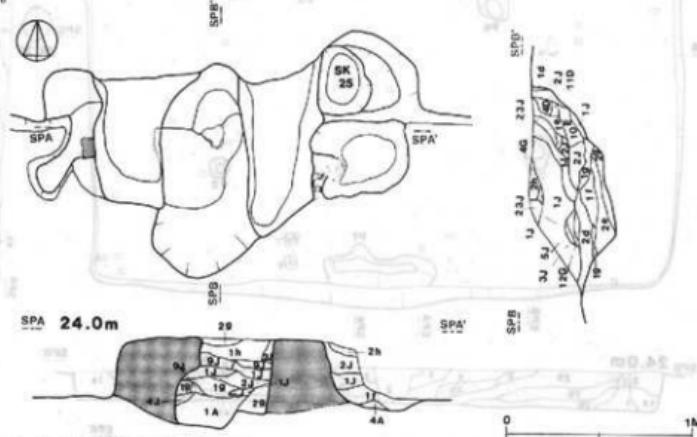
調査区C2h7区を中心に、108号竖穴住居跡の西に確認され、南北5.3m・東西6.45mを測り、主軸方向N-0°を指す長方形を呈している。

覆土は、褐色・暗褐色土を主体とし、ロームブロック・炭化粒子を含有する層が多く人为的堆積と考えられる層が認められる。壁は75度内外の傾斜で立ち上がり、高さ30~40cmである。床面は平坦で、全体的に硬いが、特に竈前面から南壁下にかけては良く踏み固められている。ピット

は7か所確認されたが、主柱穴は各コーナー部の4本で、南壁下のP₇は、入口に伴う施設と考えられ、P₅・P₆は、本跡に伴わないものである。柱穴の深さは40~60cmを測る。

竈は、北壁中央部にあり、長さ1.15m・幅1.3m、焚口部幅0.5mで、壁外へ25cm掘り込まれている。袖部は砂によって構築され、焼成部は床面より18cm低く、50度内外の傾斜をもって煙道に至っている。

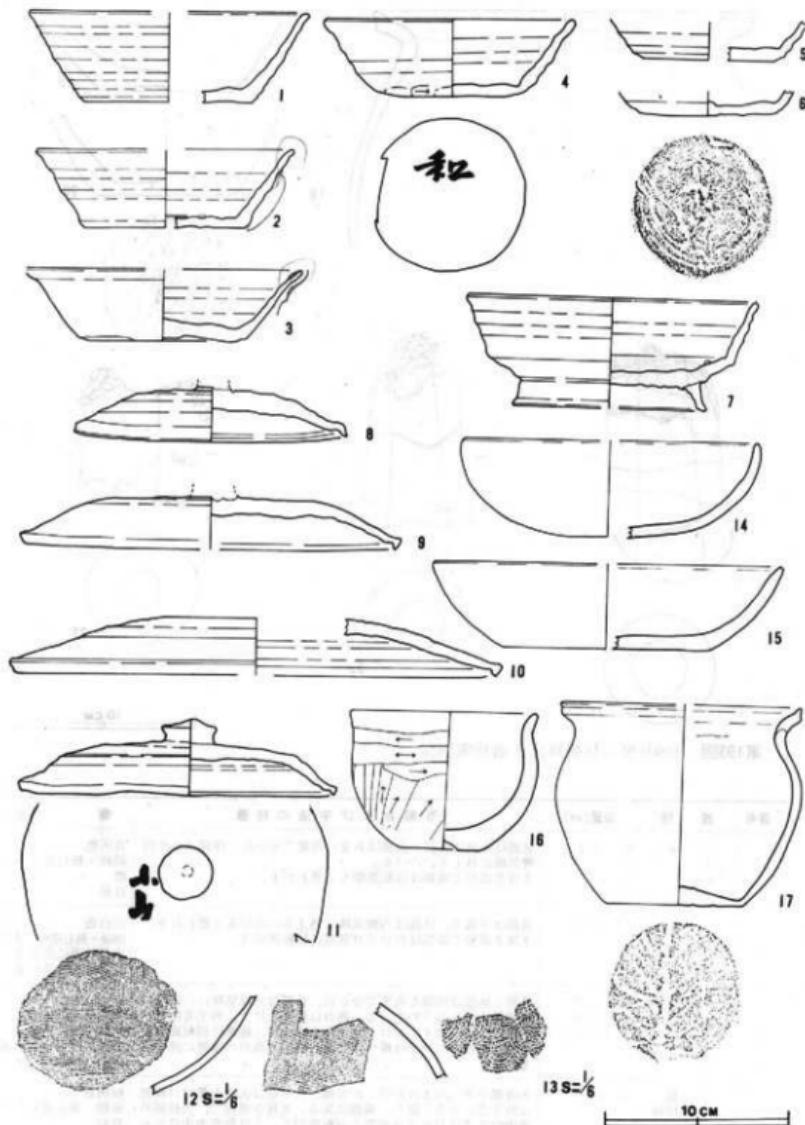
遺物は、土師器・須恵器・墨書き土器・羽口・砥石・鉄製品・鐵滓が、おおむね4本の柱穴を結んだ線の外側の床面付近から出土している。この中で、鉄製品が大部分を占めていることは注目される。



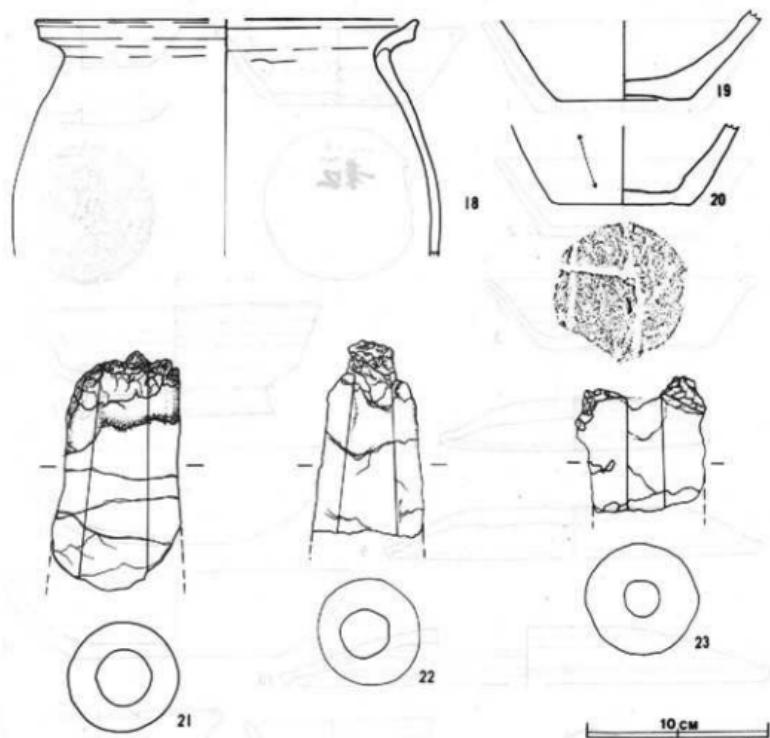
第191図 109号竪穴住居跡実測図

109号竪穴住居跡出土遺物観察表（第192・193・194・195図）

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	环 A (15.0) B 5.0 C (9.1)	底部は平底で、体部と底部はややあまい角度で分かれ。体部は内骨気球形外方にのび、口縁部を丸くおさめている。水焼き成形で、底部は尾ナギ調整。全体に摩滅が進行。	灰白色 細砂・長石粒・雪母不良
2	S	环 A (13.9) B 4.3 C (8.7)	底部は平底で、体部と底部はややあまい角度で分かれ。体部はほぼ直線的に外上方にのび、口縁部は僅かに外反して端部を丸くおさめている。水焼き成形で、底部は回転窓割り調整。口縁部内・外側は尾ナギ調整。	灰白色 砂粒・長石粒・雪母不良
3	S	环 A (14.9) B 3.9 C 8.0	やや盛り上がった厚手の底部から体部は薄く、やや内骨気球形外上方にのび、口縁部は肥厚。外反し、端部を丸くおさめている。水焼き成形で、底部は回転窓割り後、静止窓割り調整。体部下端部は一部手持ち窓割り調整。	青灰色 細砂・長石微粒 普通 口縁部内面と底部内面に漆付着 底部外面に墨痕
4	S	环 A 13.4 B 4.2 C 8.3	やや丸みを帯びた底部から、体部はあまい角度で分かれ。外縁気球に外上方にのび、口縁部を丸くおさめている。底部内面と体部内面の境界に僅かなくびれを見せる。右ロクロ水焼き成形で、底部は多方向の静止窓割り調整。体部下端部は手持ち窓割り調整。	灰色 細砂・長石微粒・雪母 やや不良 底部内面に気分付着 底部外面に墨痕

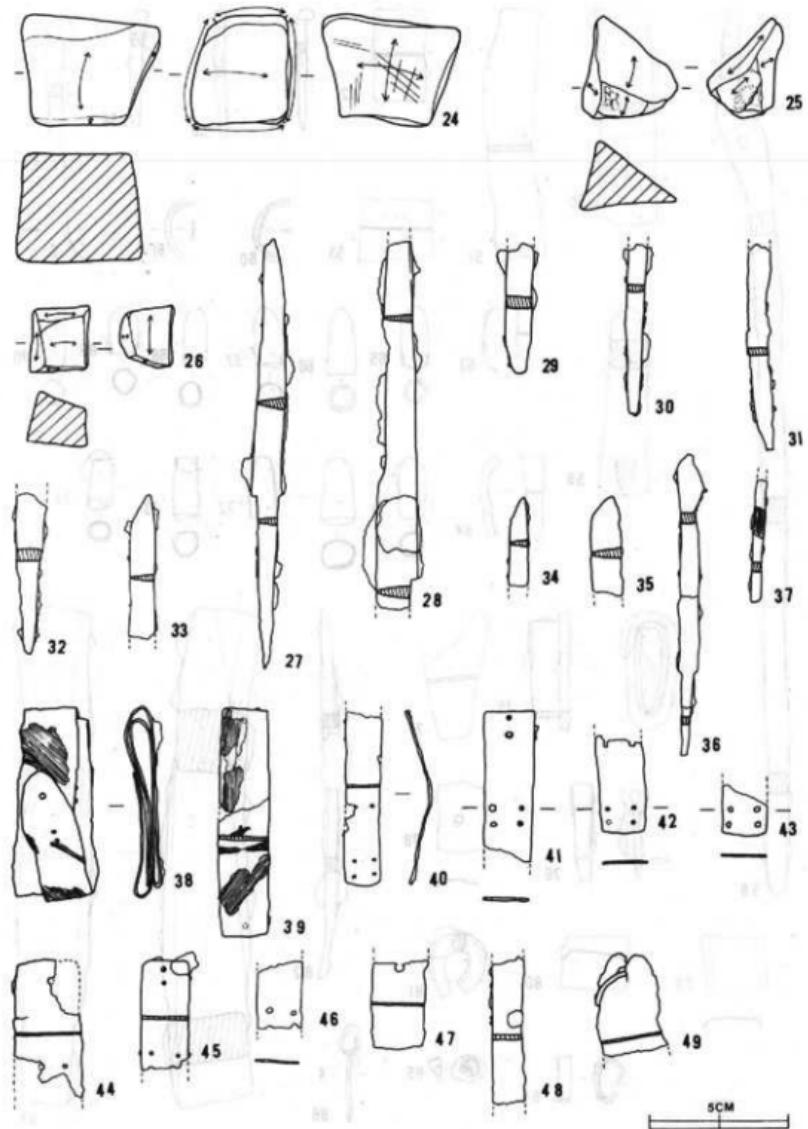


第192図 109号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)

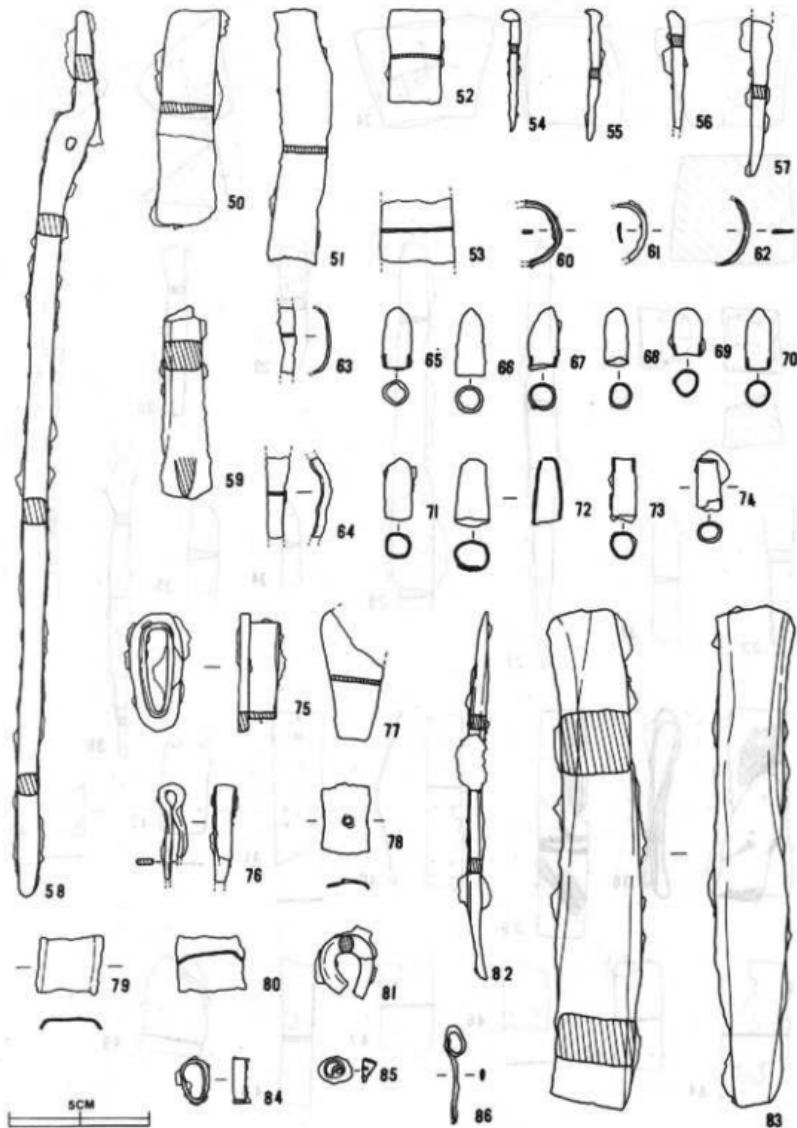


第193図 109号竪穴住居跡出土遺物実測図 (2)

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
5	S 环	C 7.1	底部は平底で体部と底部はあまい角度で分かれ。体部はやや内 脣気味に外上方にのびる。 水焼き成形で底部は回転鋸削りと思われる。	青灰色 細砂・長石微粒多 礫良好
6	S 环	C 7.4	底部は平底で、体部は内脣気味に外上方にのびると思われる。 水焼き成形で底部は右ロクロ使用の回転鋸切り。	灰白色 細砂・長石微粒 不良 底部外面に荒記号 底部内面に墨付着
7	S 高台付环	A 15.7 B 6.0 C (10.3)	底部と体部は明瞭な角度で分かれ。体部は外脣気味にのびて口 縁端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで、外下方にのび 内端部に接をなす。右ロクロ水焼き成形で、底部は回転鋸削り 調整。高台内・外面は横ナナテ調整。底部と高台の接界に接合部 を残す。	灰黄色 細砂・長石 微粒 良好 底部内面に鉄付着 口縁部内面に墨付着 底部外面に墨付着
8	S 蓋 (転用硯)	A 14.8	天井部中央につまみが付くが欠損。天井部は丸味を帯び口縁部 は外下方にかるく反り、端部は尖る。水焼き成形で、天井部外 面中位までは右ロクロ使用の回転鋸削り。天井部外面中位から 内面全体は横ナナテ調整。全體に歪む。	緑灰色 細砂・長石微粒 良好 口縁部内面に鉄付着 内面全体に墨付着



第194図 109号竪穴住居跡出土遺物実測図(3)



第195図 109号竪穴住居跡出土遺物実測図(4)

番号 器 球			法量(cm)	形 態 お よ び 手 法 の 特 徴		備 考			
9 S	表	A (20.1)		天井部中央につまみが付くが欠損。天井部はやや扁平で、口縫部は側面に内側し、端部は尖る。水抜き成形で、天井反部は右ロクロを使用の回転鋸削り調整。天井部外面中位より口縫部内・外面は横ナナゲ調整。		灰褐色 細砂・織・長石粒 不食 天井部内・外面に煤付着			
10 S	裏	A (24.6)		豊の柔か。天井部はなだらかに下降し、天井部と口縫部の境界は明瞭な棱をもつて、右ロクロ水抜き成形で天井部外面は回転鋸削り調整。内面全体と天井部中位から口縫部にかけ横ナナゲ調整。		灰褐色 細砂・織・長石粒 良好 天井部外面全体に灰を受ける。			
11 S	裏	A 17.0 B 4.1		天井部中央に扁平な宝珠形のつまみが付く。周囲が天井部から反り気味に口縫部に並ぶ。天井部と口縫部の境界に明瞭な棱をもつ。右ロクロ水抜き成形で天井部外面は回転鋸削り調整。つまみと口縫部内・外面は横ナナゲ調整。		灰白色 細砂・淡石粒・長石粒 微細・雲母・不食 天井部外面に墨青			
12 S	裏			体部の一部。外面は平行叩き目調整。内面はナナゲ調整。		灰褐色 細砂・長石粒 良好 SI118-19と同一個体			
13 S	裏			体部の一部。外面は平行叩き目調整。内面には同心円文が残る。		灰褐色 細砂 普通			
14 H	球	A (15.8) B 5.2 C (9.0)		底部と体部は境界をなさない。体部は内壁しつ立ち上がり、口縫部を丸くおさめている。内面全体は昆蟲巣調整。口縫部外面は横ナナゲ調整。底部及び体部外面は手持ち削削り調整。		にぶい橙色 砂粒・長石粒・雲母 普通 スコリ			
15 H	球	A (18.9) B 4.6 C (11.1)		底部は平底で球部は底部とやや傾斜的角度で分かれ、内壁しつ立ち方にのび、口縫部を丸くおさめている。内面全体は昆蟲巣調整。口縫部外面は横ナナゲ調整。底部及び体部外面は手持ち削削り調整。		暗褐色 砂粒・長石粒・石英 砂粒・雲母 普通			
16 H	小形 球	A 10.0 B 7.6 C (4.3)		小さな平底で、体部との境界はやや不規則である。体部は内壁しつ立ち上り、口縫部を丸く外反し、端部を丸くおさめている。口縫部外面は横ナナゲ調整。内部と底部内面は房ナナゲ及びナナゲ調整。口部外面は笠ナナゲ調整。底部と底部外面は笠ナナゲ調整。		にぶい橙色 砂粒・ 長石粒・雲母・スコリ 普通 有毛 体部外面全体に二次成形痕			
17 H	裏	A (12.9) B 9.8 C 7.4		小形裏。底面は平底で、体部は内壁しつ立ち上り、丸く凹曲する口縫部をつくり、口縫部をほぼ平直につまみ出す。底部中心は厚く作り体部は薄く作る。口縫部内・外面は側面に横ナナゲが見られるが、内・外面全に笠ナナゲ及びナナゲ調整。全体に摩滅が進む。		にぶい赤褐色 砂粒・長石粒・雲母 普通 底部外面に木炭痕			
18 H	縦	A (20.5) F (23.1)		やや弱の張った体部から「く」の字形に屈曲する口縫部をつく。口縫部を外反気味につまみ出す。体部は薄く、口縫部はやや深く作る。口縫部内・外面は横ナナゲ調整。体部内・外面は笠ナナゲ及びナナゲ調整。頭部外面に粘土粗面を残す。		にぶい橙色 砂粒・長石粒・雲母 普通			
19 H	裏	C 7.2		裏の底部。手底の底部から直線的に外上方にのびる体部がつく。体部と底部外面は削削り調整。体部と底部内面は昆蟲巣及びナナゲ調整。		にぶい橙色 砂粒・長石粒・雲母 普通 底部内面に鉄付着			
20 H	裏	C 7.4		裏の底部。やや小さな平底から内壁気味に外上方にのびる体部がつく。体部外面は縦位の荒削り。体部と底部内面はナナゲ調整。		灰褐色 砂粒・長石粒・雲母 普通 底部内面に鉄付着 底部外面に木炭痕			
番号	種 類	法量(cm)	形 態 の 特 徴	備 考	番号	種 類	法量(cm)	形 態 の 特 徴	備 考
21	羽 口	全长 (10.0) 外径5.8 孔径2.5	先端部は端が欠損。外面は多方向の荒削り調整。	先端部に少量の鉄付着。	24	底 右	5.0×4.0 3.85	台形を呈し、全面に使用 底が認められる。一部欠損。	耐灰岩 93 g
22	羽 口	全长(9.0) 外径5.2 孔径1.4	先端部の殆どは欠損、外面に凹凸を残す。	先端部は溶解し鉄付着。	25	底 右	3.6×2.4 0.7-2.4	三角形を呈し、全面に使用 底が認められる。一部自然面が認められるが凸凹が激しく使用しても平らにならなかつたと思われる。	耐灰岩 20.7 g
23	羽 口	全长(9.0) 外径6.0 孔径2.0	先端部。	先端部は溶解し鉄付着。	26	底 右	2.2×1.9 1.8	方形状を呈し、全面に使用 底が認められる。小形、	耐灰岩 11.5 g

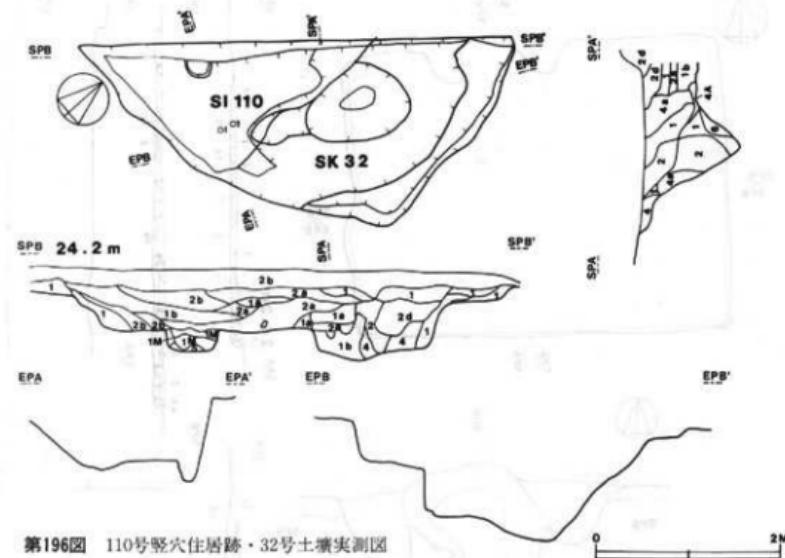
番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	
27 1 35	刀子		27は完形品で全長15.4cm、刃幅1.0cm、刃長9.1cm。 28・33・35は切先部。29・32は基部。		73 74	骨状 鉄製品		73は完形品で、全長2.0cm、幅0.8cm。		
36 37	鎖		36は完形品で全長10.8cm、刃幅0.9cm、基部0.3cm。 37は基部と思われる。		37は木質保存 75	錆金具	外法 4.3×1.9 幅 2.9×0.7	完形品。		
39 46	小札		39はほぼ完形品。 全長8.1cm、幅1.8cm、すべてに小孔がみられる。		39は木質保存 76	金 全長(3.4) 太さ0.2		厚さ0.2mmの鉄を折り曲げ、内側0.4mmの孔を作っている。		
38 47 49	小札状 鉄製品		38は、長さ29cmの鉄板を五つに折り曲げている。 47は径3mmの小孔を有する。 48は両端部欠損。49は一方の端が丸い。		38は木質保存 77 1 80	不明 鉄製品		77は錆跡か。78は中央に小孔有り。79・80は1.9×2.2cmで両側を若干折り曲げている。		
50 53	切削形 鉄製品		50・51・52は完形品。50は全長7.7cm、幅1.9cmで、小孔を摩孔する以前のもの。		81	環状 鉄製品	2.3×1.9 太さ0.6	一方が開く耳環状を呈している。		
54 57	釘		54・55は完形品。55は全長4.6cm、太さ0.35cm。 56・57は釘か。		82	棒状 鉄製品	長さ12.1 太さ0.5	断面が方形の棒状を呈し、両端部は尖る。		
58	鉗		全長31.5 太さ0.9	片方だけのものである。		83	棒状 鉄製品	長さ17.8 太さ 2.5×2.3	鉗頭あるいは半製品か。	
59	鑿	全長(6.9) 太さ1.4	頭部欠損。 刃部は断面V字形である。		84	鍔	1.6×1.0	刀子の鍔か。部分的に金または銀が認められる。		
60 1 64	リング		60～62は残存部が半円形を呈す。60は外径(2.3cm)、厚さ0.1cm。		85	不明 鉄製品		幅2～5mmの紐状の鉄が螺旋状に巻いている。 截断時の鉄片か。		
65 1 72	弓弦形 鉄製品		すべて完形品である。 69は全長1.6cm、径1.1cm。 72は全長2.4cm、径1.1cm。	69は表 面は鉄 が内面 に剥がれ る。	86	不明 鉄製品		幅4mmの紐状を呈し、一方の端が丸められている。		

110号豊穴住居跡（第196図）

調査区C2行区を中心に確認され、大部分が調査区域外に存在する。確認部は南北2.3m・東西1.9mで、32号土壌と重複し、重複状況からみて32号土壌は当跡より古い。

覆土は、褐色・暗褐色土を主体とする自然堆積である。壁は80度傾斜で立ち上がり、高さ60cmを測る。床面は、それほど綺まりが無い。ピットは1か所で、深さ23cmである。

遺物は、土師器・須恵器・瓦・羽口・鉄製品・鉄滓で、いずれも覆土中からの出土である。



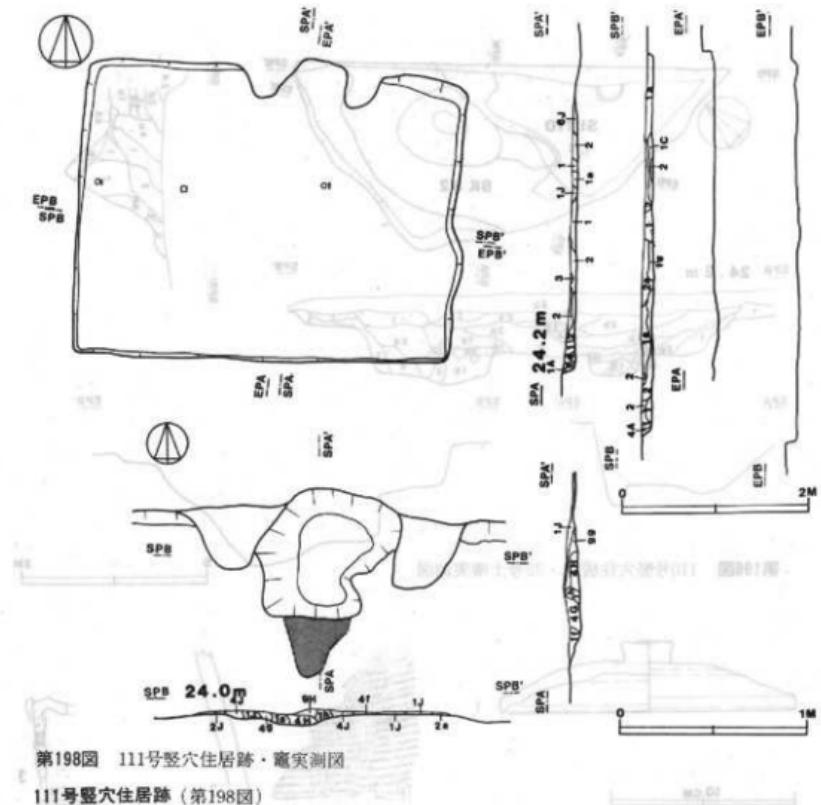
第196図 110号竪穴住居跡・32号土壤実測図



第197図 110号竪穴住居跡出土遺物実測図

110号竪穴住居跡出土遺物観察表（第197図）

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	A 15.6 B 3.9	天井部中央に扁平なつまみが付く。天井頂部はやや凹み。口縁部は下方向に屈曲する。右ロクロ水抜き成形で、天井部外面中位は回転窓削り調整。他は横ナナ子調整。	灰褐色 細砂・長石粒多・長石微粒 良好
2	S		体部の一部。体部外面は平行叩き目調整。内面は鹿ナナ子及びナナ子調整。	灰白色 細砂・長石粒・雲母不良
3	釘	か 全長 4.1 太さ 0.4	両端部欠損。	



第198図 111号竖穴住居跡・竪穴測図

111号竖穴住居跡 (第198図)

調査区C2 j区を中心に109号竖穴住居跡の南東に確認され、南北3.15m・東西4.05mを測り、主軸方向N-2°-Eを指す隅丸長方形を呈している。

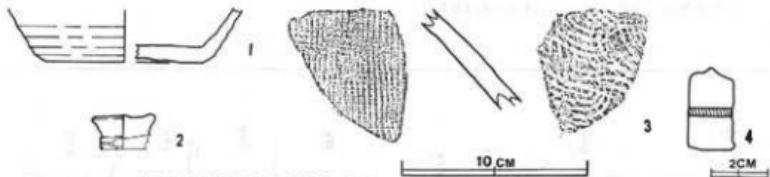
覆土は、褐色・暗褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。壁は北側で確認できないが、南側では高さ12cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は若干西側に傾斜するが、ほぼ平坦で、竪前面にやや硬い部分が認められる。柱穴は認められない。

遺物は、土器類・須恵器・瓦・鉄製品・鉄滓が少量、覆土中から出土している。

111号竖穴住居跡出土遺物観察表 (第199図)

番号	器種	法量(cm)	形態および平法の特徴	備考
1	S	C(8.4)	底部は平底で体部と底部はあまり角度で分かれ、体部はやや内傾気味に上方にのびる。水抜き成形で体部内面は横ナデ調整。底部内・外面はナデ調整と思われる。全体に摩滅が進行。	灰色 砂粒・長石微粒多 良好

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
2	S 罐		つまみのみ。天井部との境界付近に浅い溝をもつ。全体に横ナナゲ調整。	灰オリーブ色 砂粒・長石微粒・石英・雲母 不良
3	S 罐		体部の一部。体部外面は平行叩き目調整。内面は同心円文を残す。	灰色 細砂・長石粒多 普通
4	短鉄 骨製 形品	全長3.0 幅1.6 厚さ0.3	長方形を呈する。	



第199図 111号竪穴住居跡出土遺物実測図

112号竪穴住居跡（第200図）

調査区C2js区を中心に確認され、西側で113号竪穴住居跡と重複している。新旧関係は当跡が新しい。南北3.35m・東西3.61を測り、主軸方向N=8°-Wを指す隅丸方形を呈している。

覆土は、暗褐色土を主体とする自然堆積とみられる。壁は、高さ10cmで外上方へ立ち上がる。床面は外周部が比較的軟弱で、中央部は踏み固められやや低くなる。ピットは南西部を除く各コ一ナード、南壁中央部壁下の4か所あり、深さは8-39cmを測る。

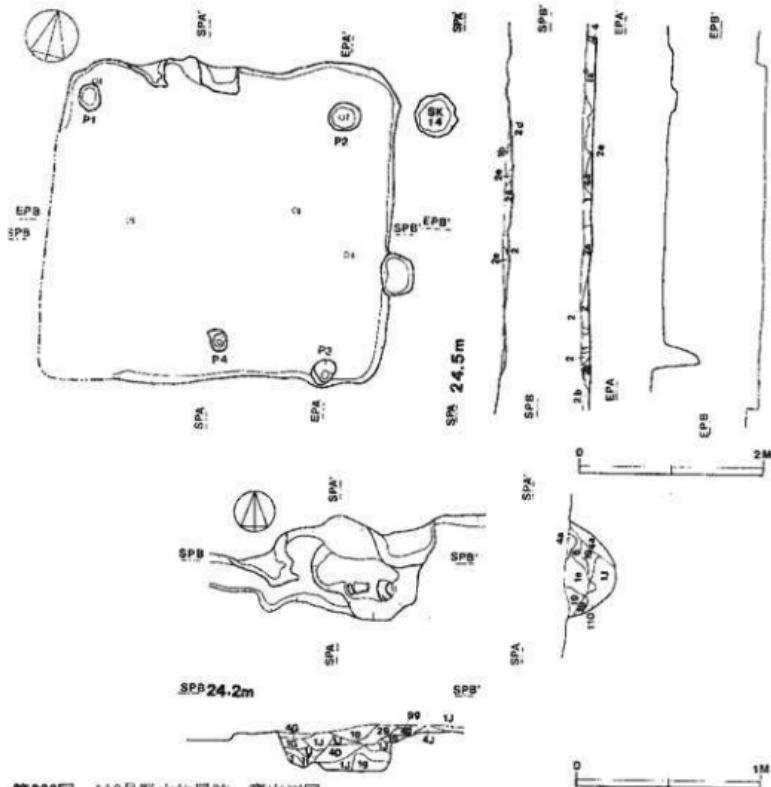
窓は、北壁やや西側寄りにあるが、遺存状態は悪く、構造は明らかでない。

遺物は、土師器・須恵器・墨書き土器・瓦・鉄津で、極少量が床面付近から出土している。

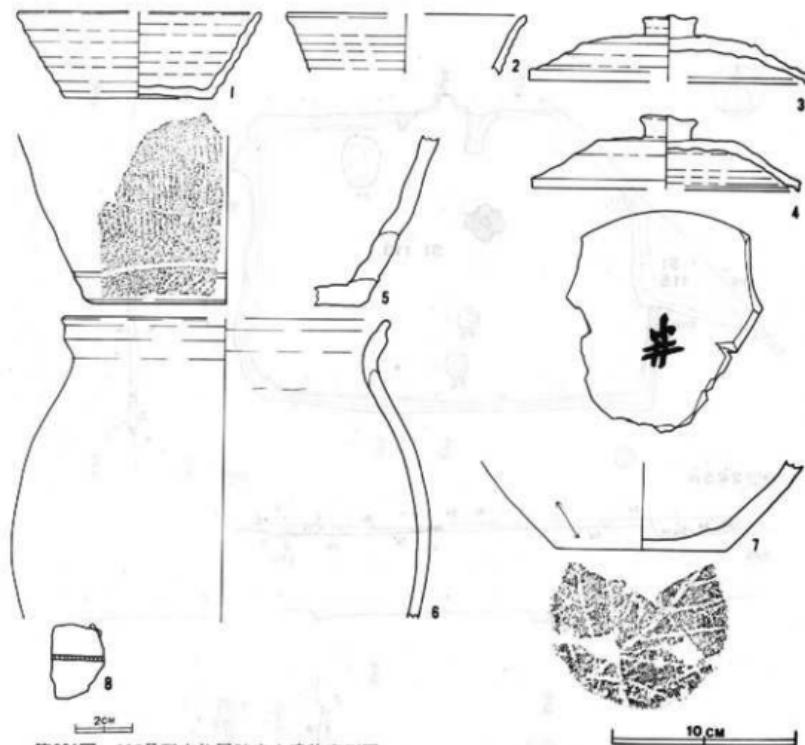
112号竪穴住居跡出土遺物観察表（第201図）

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S 环	A (12.8) B 4.6 C 7.8	底部は平底で、体部と底部はややあまい角度で分かれ。体部は外焰焼成形で、底部は回転削り切後、静止泡ナナゲ調整。全体にやや摩擦が進行。	灰白色 細砂・長石粒・石英粒・雲母不良
2	S 环	A (12.9)	底部は平底と思われるが欠損。体部はほぼ直線的に外上方にのびると思われる。口縁部は僅かに外反し、端部を丸くおさめている。水焼き成形で体部内面は横ナナゲ調整。	灰色 細砂・長石微粒 良好
3	S 罐	A (14.8) B 3.5	天井部中央にやや扁平で中心が僅かに高いつまみが付く。天井頂部は回転削りでやや平坦に仕上がる。天井部と口縁部の境界は明瞭で、口縁部は僅かに下方に向いて傾曲し、縁部は尖る。右ロクロ水焼き成形で、つまみと口縁部内面は横ナナゲ調整。天井部内面はかるい横ナナゲ調整。	灰色 砂粒・長石粒多・雲母 良好
4	S 罐	A (14.3) B 3.9	天井部中央にやや扁平で中心が僅かに高いつまみが付く。天井頂部は平坦に削られ、口縁部に向かって強く下屈する。天井部と口縁部は明瞭に分かれ、口縁部は下方に向いて屈曲し縁部は尖る。水焼き成形で、天井頂部から中位は回転削り。	灰白色 砂粒・長石粒・石英・ 雲母 普通 天井部内面に墨書き

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
5	S	C (15.1)	底部は平底で体部と底部には明瞭な角度で分かれ。体部はやや内斜気味に外上方にのびる。体部外面は平行叩き目調整。底部内面と底部内・外面はナナゲ調整。体部下端部に一条の深い溝が走る。やや季節感が進行。	灰白色 細砂・長石微粒・長石粒多 良好
6	H	A (17.3) F 22.4	やや明るい色の素朴な体部から、丸く屈曲する口縁部がつき、端部は強く外方につまみ出す。口部内・外面はナナゲ調整。体部内・外面は尾ナナゲ及びナナゲ調整。	褐色 砂粒・長石粒・雲母普通
7	H	C 9.2	罐の底部。平底の底部から、体部と蓋部には明瞭な角度で分かれ。体部は内張りつつ外上方にのびる。体部外面は尾ナナゲ調整。体部と蓋部内面はナナゲ調整。	褐色 砂粒・長石粒・雲母多 普通 底部外面に木葉痕
8	不明 鉄製品	全長 2.6 幅 1.9 厚さ 0.1	舌形状の板状鉄製品。	



第200図 112号竪穴住居跡・竪穴測図



第201図 112号竪穴住居跡出土遺物実測図

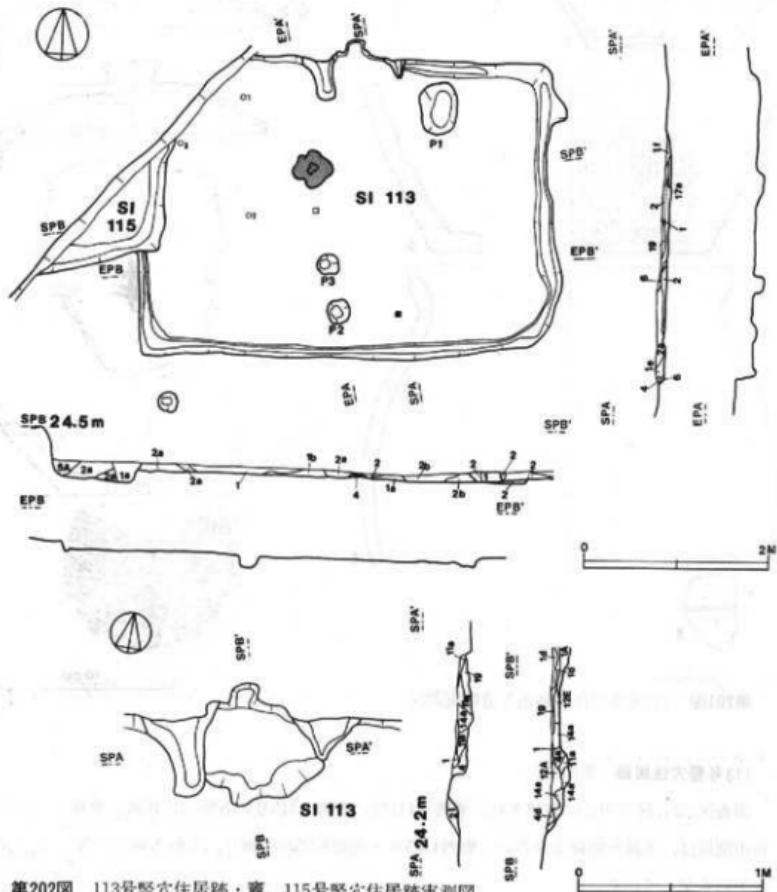
113号竪穴住居跡（第202図）

調査区C2・4区を中心に確認され、東側で112号、西側で115号の各竪穴住居跡と重複している。新旧関係は、本跡が両跡より古い。東西4.55m・南北3.25mを測り、主軸方向N-3°-Wを指す、長方形を呈している。

覆土は、暗褐色土を主体とする自然堆積とみられる。壁は高さ10cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。壁下には、幅10cm・深さ8cmの壁溝がほぼ全周している。床面は小さな起伏を有し、壁下付近まで良く踏み固められている。ピットは3か所認められ、深さは10~15cmを測る。

竈は、北壁ほぼ中央部にあるが、遺存状態は悪い。袖部は山砂を主体として構築され、火床は5cm程の焼土が堆積している。竈前面のやや西壁寄りに、山砂をもって築かれた、炉跡とみられるものが確認されている。

遺物は、土師器・須恵器・砥石・鉄製品・鐵滓が少量、全体に散在して出土している。

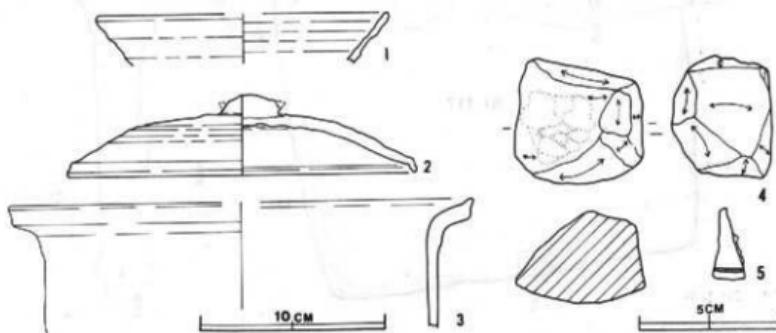


第202図 113号竪穴住居跡・竈, 115号竪穴住居跡実測図

113号竪穴住居跡出土遺物観察表（第203図）

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	A (15.5) B	底部は平底と思われるが欠損。体部は外上方にのび、端部を丸くおさめている。水洗き成形で口縁部内・外面と体部外面は横ナゲ調整。全体に薄手作り。	灰色 細砂・雲母 やや精良 普通
2	S	A 18.8 B 4.3	天井部の中央を僅かにはすれボタン状のつまみが付く。天井部はやや丸く、口縁部と天井部の境界は鋭く尖り、口縁部は外下方に屈曲する。右ロクロ水洗き成形で天井頂部は回転削り調査。天井部内面中央を除き他は横ナゲ調整。	暗青灰色 細砂・長石粒・長石 微粒・雲母

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴				備考
3	H 甕	A (24.8)	殆ど腹の張らない体部から「く」の字状に屈曲する口縁部がつき、腹部を外上方につまみ出す。口頭部内・外面は横ナナ調整。体部内・外面はナナ調整。				にふい褐色 砂粒・長石粒・雲母 ・スクリア 普通
4	砾石	4.6×4.2 3.3	方形を呈す。片面は凸凹が激しいため使用痕は部分的にしか認められないが、その他の面には全体的に使用痕が認められる	泥岩 92.7 g	不 明 鉄製品	2.5×1.1 0.1	三角形状を呈している。 参考



第203図 113号竪穴住居跡出土遺物実測図

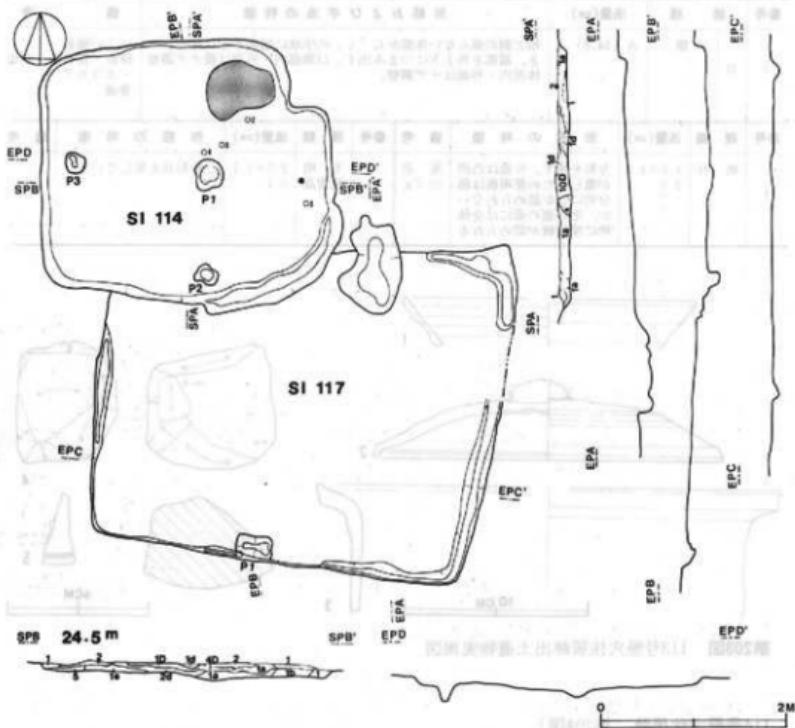
114号竪穴住居跡（第204図）

調査区C2hs区を中心に108号竪穴住居跡の南側に確認され、南側で117号竪穴住居跡と重複している。新旧関係は明らかでないが、当跡が新しいと考えられる。南北2.82m・東西3.15mを測り、主軸方向N-6°-Wを指す隅丸方形を呈し、東壁南半部に張り出しを有する。

覆土は、褐色・暗褐色土を主体とするが、多量の焼土や少量のロームブロックを含み、人為的な堆積とみられる。壁は高さ10cm程で、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は中央部に向かって低くなり、全面踏み固められている。ピットは3か所確認され、深さは10cmを測る。

竈は認められなかったが、北東隅に70×60cmの梢円形を呈する焼土が存在した。焼土はレンズ状に堆積し、炉跡とみられる。

遺物は、土師器・須恵器・羽口・漆紙様遺物・鉄滓が、中央部と東壁付近にかたまって出土している。なお、中央部床面から25×15cmほどの割石が1点出土している。

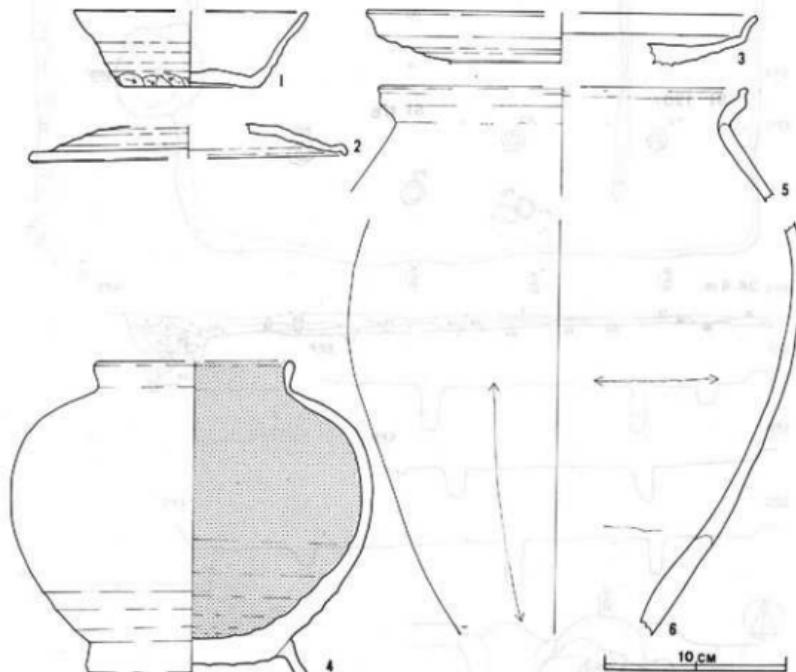


第204図 114・117号竪穴住居跡実測図

114号竪穴住居跡出土遺物観察表（第205図）

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	A (12.6) B 4.2 C 2.4 7.	やや盛り上がった平底の底部から体部は一且上昇気味に外上方にのび、体部中位から外傾気味に口縁部に至る。口縁端部を丸くおさめている。右ロクロ水洗成形で、底面は回転窪切り。体部下端部は手持ち削り調整。内面全体と口縁部外面は横ナナ子調整。	灰色、細砂・長石粒多良好 底部内面から体部内面に墨付着
2	S	A (17.0)	天井頭部はやや扁平で、口縁部は僅かに段をなし、端部は下方に短く屈曲する。つまみは欠け。水洗成形で、天井頂部は回転窪切り調整。口縁部内・外面は横ナナ子調整。	青灰色 細砂・長石粒・長石 微粒多良好
3	S	A (21.1)	体部は大きく開き、体部と口縁部は明瞭な角度で分かれ、外反気味に外上方にのびる口縁部がつく。口縁端部を丸くおさめている。貼り付け高台を持ちかけ欠損。水洗成形で、内面全体と口縁部外面は横ナナ子調整。	青灰色 細砂・長石粒・長石 微粒多良好
4	H	A (10.4) B 17.0 D 11.7	厚手の底部から体部は内側しつ立ち上がり口縁部は直面に立ち上がる。底部から頭部にかけては薄くなり口縁部は厚壁する。高台は貼り付けた「ハ」の字状に外下向きの凹。体部外側中位から下位は回転窪切り、内面全体は擦き落と色処理。	ぶい橙色 細砂・礫・雲母・スコリア 普通

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
5	H	A (19.9)	強く脇の張った体部から「く」の字状の口揃部が付く。口縁部は、内面に僅かな段をなし外反気味につまみ出る。	にいわゆる 砂粒・長石粒・雲母 普通
6	H	F 24.4	ゆるやかに内壁しつつ外上方にのびる体部で、底部と口縁部は欠損。体部外面は瓶位の罫ナメ調整。体部内面は横位の罫ナメ調整。	にいわゆる 砂粒・長石粒・雲母 ・織 普通



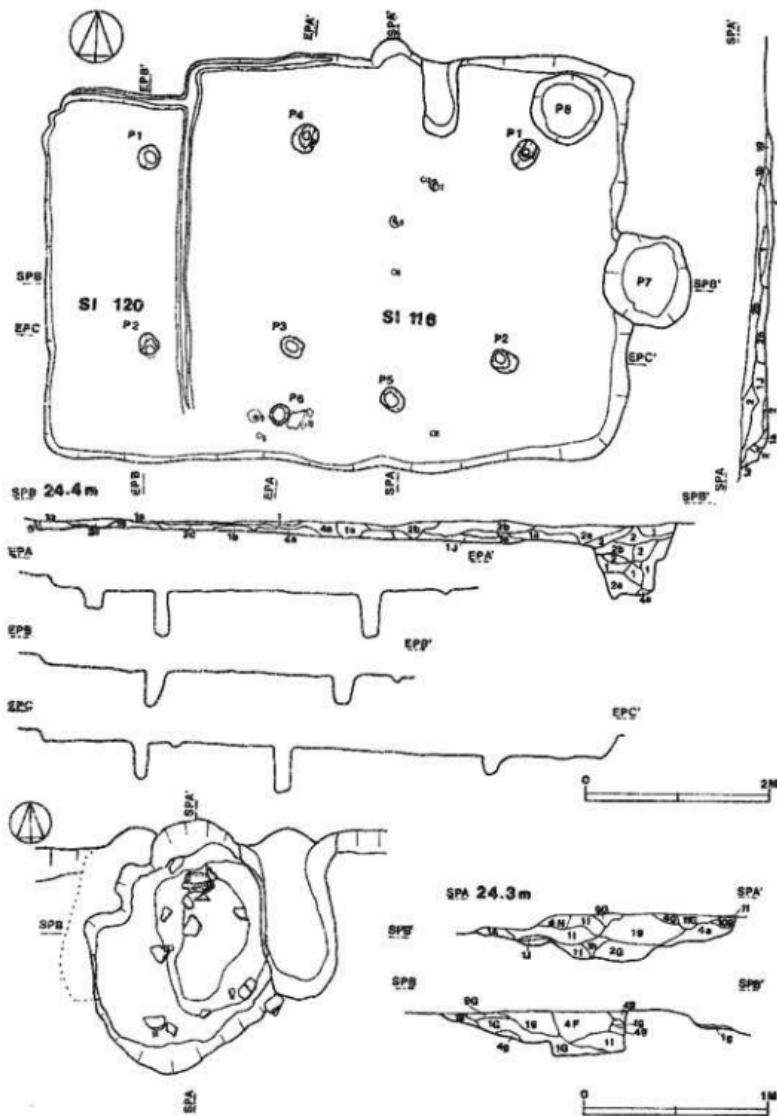
第205図 114号竪穴住居跡出土遺物実測図

115号竪穴住居跡（第202図）

調査区C2j4区を中心に確認されたが、南東コーナー一部だけの確認で、他は調査区域外に存在する。東側で113号竪穴住居跡と重複し、当跡が新しい。

覆土は、ロームブロックを含む人為的堆積とみられる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さ20cmを測る。床面は、比較的よく踏み固められている。

遺物は、土師器・須恵器が極少量出土している。



第206図 116号竖穴住居跡・竪、120号竖穴住居跡実測図

116号竪穴住居跡 (第206図)

調査区D2a区を中心に確認され、117号竪穴住居跡の南に位置している。西側で120号竪穴住居跡と重複し、当跡が新しい。規模は南北4.42m・東西4.84mで、主軸方向N-5°-Wを指すやや隅の丸い長方形を呈している。

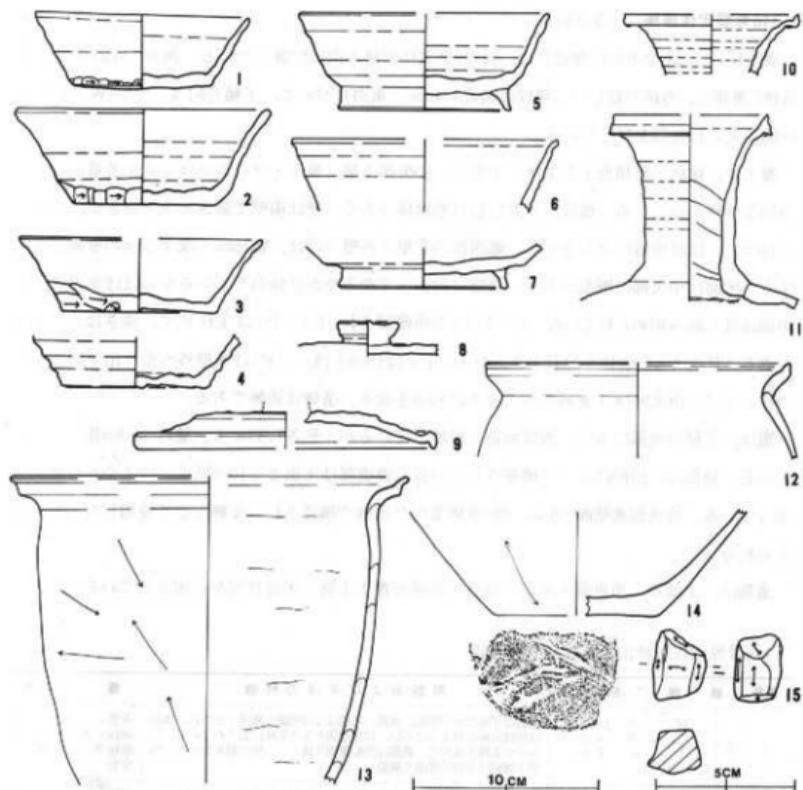
覆土は、褐色・暗褐色土を主体とするが、中央部下層に焼土・ロームブロックを多量に含む人為的な堆積がみられる。他は、おおむね自然堆積である。壁は南壁で高さ30cmを測るが、他は5~10cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。竪西側の北壁と西壁下には、幅16cm・深さ5cmの壁溝が存在する。床面は中央部に擾乱があり、東側に向かってゆるやかに傾斜しているが、ほぼ平坦で、南半部は良く踏み固められている。ピットは8か所確認され、P₁~P₄は主柱穴で、深さは20~50cmを測る。P₅は入口に伴う施設とみられる。P₆は19cmと浅い。P₇は東壁外へ張り出す隅丸方形のピットで、南北96cm・東西95cm・深さは55cmを測る。遺物は皆無である。

竪は、北壁中央部にあり、西側袖部が崩壊しているが、長さ1.35mで、壁外へ20cm掘り込まれている。袖部は、山砂によって構築されている。焼成部は床面より10cm低く、ゆるやかに煙道に至っている。焼成部奥壁寄りから、礫が2個重ねた状態で確認され、支脚として使用したものと考えられる。

遺物は、土師器・須恵器・羽口・磁石・鉄滓が覆土下層・床面付近から出土している。

116号竪穴住居跡出土遺物 (第207図)

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	环	A 11.4 B 4.2 C 7.4	底部は平底だが不定、体部と底部はほぼ直線的角度で分かれ。体部は外傾気味に外上方にのび、口縁端部を尖り気味におさめている。右ロクロ水焼き成形で、底部は回転窓切り後、一方の静止窓削り。体部下端部は手持ち窓削り調整。	灰色 細砂・長石粒・長石 微粒多・鉄分多 良好
2 S	环	A 13.4 B 5.2 C 7.7	底部は平底で、底部と体部は直線的角度で分かれ。体部は一旦内側する中位から外傾気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。右ロクロ水焼き成形で底部は回転窓切り後、静止窓削り及び窓ナテ調整。体部下端部は手持ち窓削り調整。	青灰色 細砂・長石粒多・ 長石微粒多 良好
3 S	环	A (13.0) B 4.0 C 8.3	底部は平底で底部と体部はほぼ直線的角度で分かれ。体部はやや外反気味に外上方にのび、口縁端部を尖り気味におさめている。右ロクロ水焼き成形で、底部は回転窓切り後、静止窓削り調整。体部下端部は手持ち窓削り調整。	灰白色 細砂・長石粒・確 不良
4 S	环	C 8.0	底部は平底で、体部はやや内傾気味に外上方にのびる。水焼き成形で、底部は回転窓切りで無調整。	灰色 細砂・長石粒 良好 内面全体に擦り着
5 S	高台付环	A (13.2) B 5.2 D 9.0	底部と体部の境界は、あまり棱を持つ。体部は外傾気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。高台は貼り付けでややふんばり気味に外下方にのび、外端部に棱を持つ。右ロクロ水焼き成形で、底部は回転窓削り調整。	外面一脉灰色 内面一脉にぶい緑色 細砂・長石粒多・鐵 母多・スコリア なまけ
6 S	高台付环	A (14.3)	高台付環と思われるが底部以下は欠損。体部は直線的に外上方にのび、口縁部は外反する。水焼き成形で、体部内面。口縁部内・外面は窓ナテ調整。	青灰色 砂粒・長石粒・長石 微粒 良好



第207図 116号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
7 S	高台付杯 (転用瓶)	D 9.2	底部と体部の境界はあまい棱を持つ。体部は窓統的に外上方にのびると思われる。高台は貼り付けで、ややふんばり気味に外下方にのり内・外端部に棱を持つ。水挽き成形で底部は回転範囲により調整。高台内外面は横ナナ子調整。	灰白色 細砂・長石微粒・雲母 不良 底部内面に墨付着
8 S	蓋		つまみは皿状に近いが中心に尖りを見せる。つまみの接合部付近は回転範囲により、明瞭な棱を持つ。水挽き成形で天井頂部は回転範囲削り後横ナナ子調整と思われる。つまみは横ナナ子調整。	灰色 砂粒・長石粒多 良好
9 S	蓋	A (15.9)	天井頂部はやや扁平で口縁部は僅かに段をなし。端部は下方向に屈曲する。水挽き成形で天井頂部は右ロクロ使用の回転範囲調整。口縁部内・外と天井部内面は横ナナ子調整。	灰色 砂粒・長石粒・長石 微粒多 普通
10 S	長頸壺	A (8.4)	口縁部は外反して大きく開き、端部はほぼ垂直につまみ出す。口縁部外端部に棱をもつ。水挽き成形と思われロ縁部内・外面は横ナナ子調整。	灰白色 細砂・長石微粒・鐵 分 普通

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
11 S	長頸瓶	A (8.3)	肩の張った体部から頸部にはほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は大きく外反し、口縁外端部に曲をなす。頸部内面に粒状巻き、口部底を残す。頸部と体部の境界内面に明瞭な接合部を残す。口部内部・外面は横ナナ子調整と思われる。体部内面はナナ子調整。	青黒色 細少・長石粒・長石微粒 良好 ほぼ全体に自然釉
12 H	甕	A (16.1)	肩の張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部がつき端部をほぼ垂直につまみ出す。口部内部・外面は横ナナ子調整。体部内・外面はナナ子調整。	にじい褐色 砂粒・長石粒・雲母 普通
13 H	甕	A (21.1) F 18.4	殆ど崩の張らない体部から「く」の字状に屈曲する口縁部がつき、頸部は強く外上方につまみ出す。粘土模様上げ成形で、体部内面に底跡を残す。	橙色 砂粒・長石粒 普通
14 H	甕	C 8.9	底部は平底で体部はやや内壁丸味に外上方にのびる。体部外面は窓ナナ子調整と思われる。体部内面はナナ子調整。底部内面に指押印痕を残す。	黄褐色 砂粒・長石粒・雲母 普通 底部外面に木裏板
15	甕	右 2.4×1.8 1.5	台形を呈し、全面に使用痕が認められる。一部欠損。小形。	凝灰岩 8 g

117号竪穴住居跡（第204図）

調査区C216区を中心に確認され、114号竪穴住居跡の南側にあり、重複している。新旧関係は明らかでないが、114号竪穴住居跡が新しいものとみられる。南北3.54m・東西4.36mで、主軸方向N-7°-Eを指す、やや隅の丸い長方形を呈している。

覆土はほとんどみられず、壁も南側で6cmほど認められるだけである。壁溝は、幅17cm・深さ8cmで、北壁の竪東側から南壁東半部にかけてと、西壁の一部に認められる。床面は、南壁下から竪に向かって若干傾斜を有し、全体的にやや軟弱である。ピットは南壁中央部直下に1か所認められ、入口の施設に伴うピットとみられる。

竪は、北壁東側寄りにあるが、上部を削平され、焼成部の掘り込みが確認されただけである。壁外へは、37cm程掘り込まれている。

遺物は、土師器・須恵器・瓦がそれぞれ1片と鉄製品が南東隅から出土している。
いずれも床面出土である。

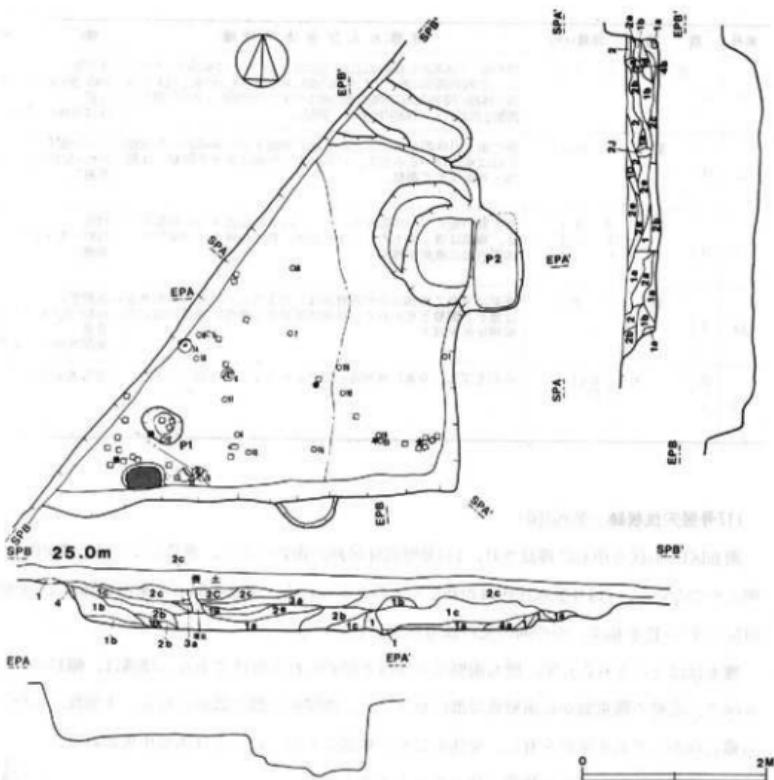


第204図

117号竪穴住居跡
出土遺物実測図

117号竪穴住居跡出土遺物観察表（第208図）

番号	種類	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	不明 鉄製品	全長(3.1) 太さ 0.25	断面は円形を呈する。両端部欠損。	



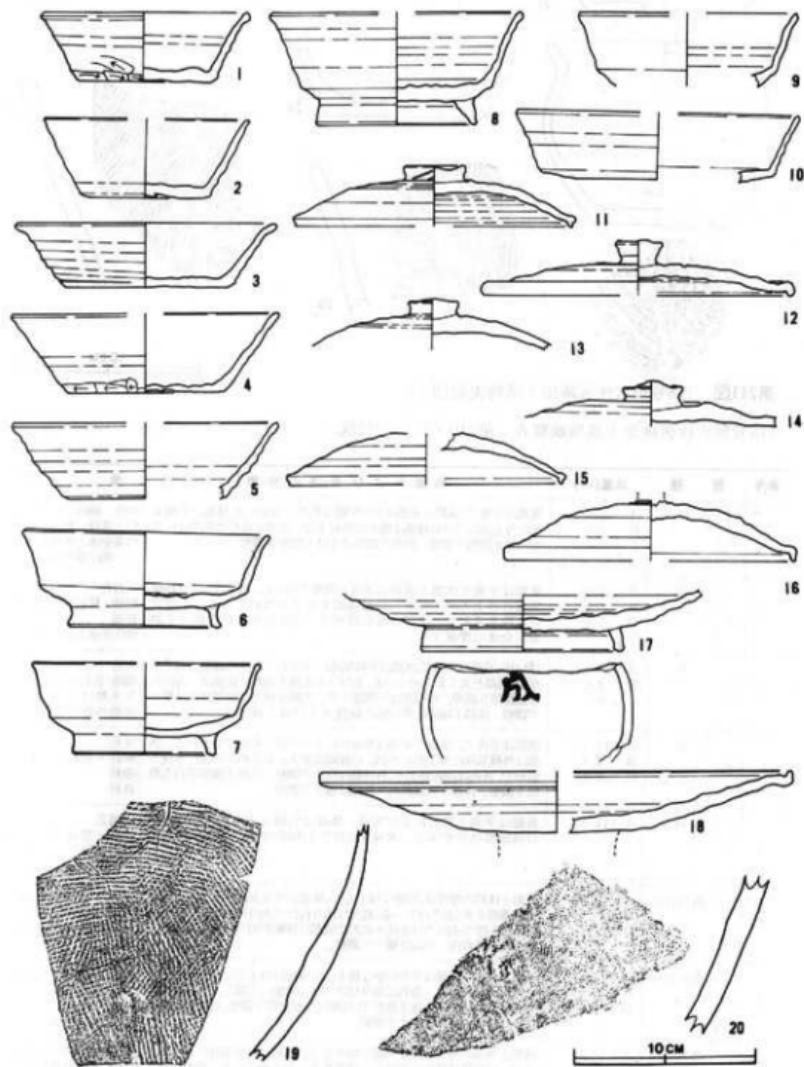
第209図 118号竖穴住居跡実測図

118号竖穴住居跡（第209図）

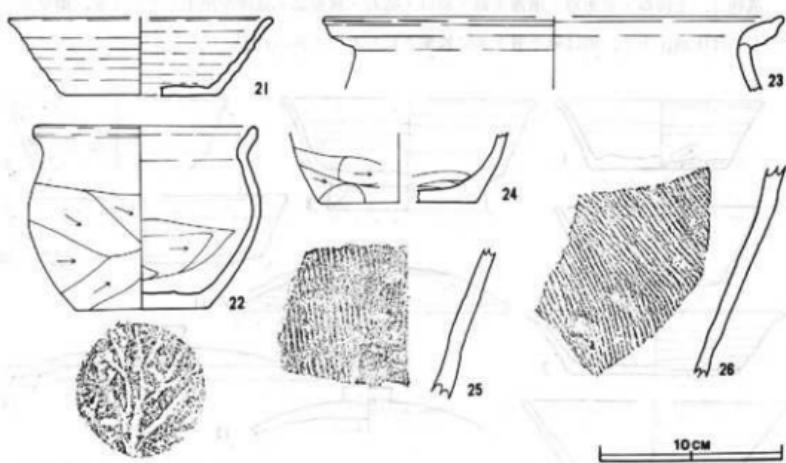
調査区D2 b2区を中心確認され、122号工房跡の西側に位置し、西半分は調査区域外に存在する。南北3.95m・東西4.5m（確認長）で、推定主軸方向N-5°-Wを指す長方形を呈するものとみられる。

覆土は、焼土・炭化粒子・ロームブロックを含む褐色土で、人为的堆積である。特に、北西側に大量の焼土が投棄されている。壁は70度内外の傾斜で立ち上がり、高さ30~40cmである。床面はほぼ平坦で、南壁下から北側にかけての幅約2mは、十分踏み固められている。南壁下やや西寄りに、45×30cmの範囲でロームを盛り、白色粘土を5cm程貼ったものがある。入口のステップとして使用したものと考えられる。ピットは2か所で、P₂は東壁やや北寄りに、壁外へ張り出し、92×70cmの長方形で、深さ40cmを測る。甌は確認できなかった。

遺物は、土師器・須恵器・墨書き器・羽口・砥石・鉄製品・鐵滓が出土しているが、南壁寄りのものは床面出土で、他は焼土層と共に投棄されたものとみられる。



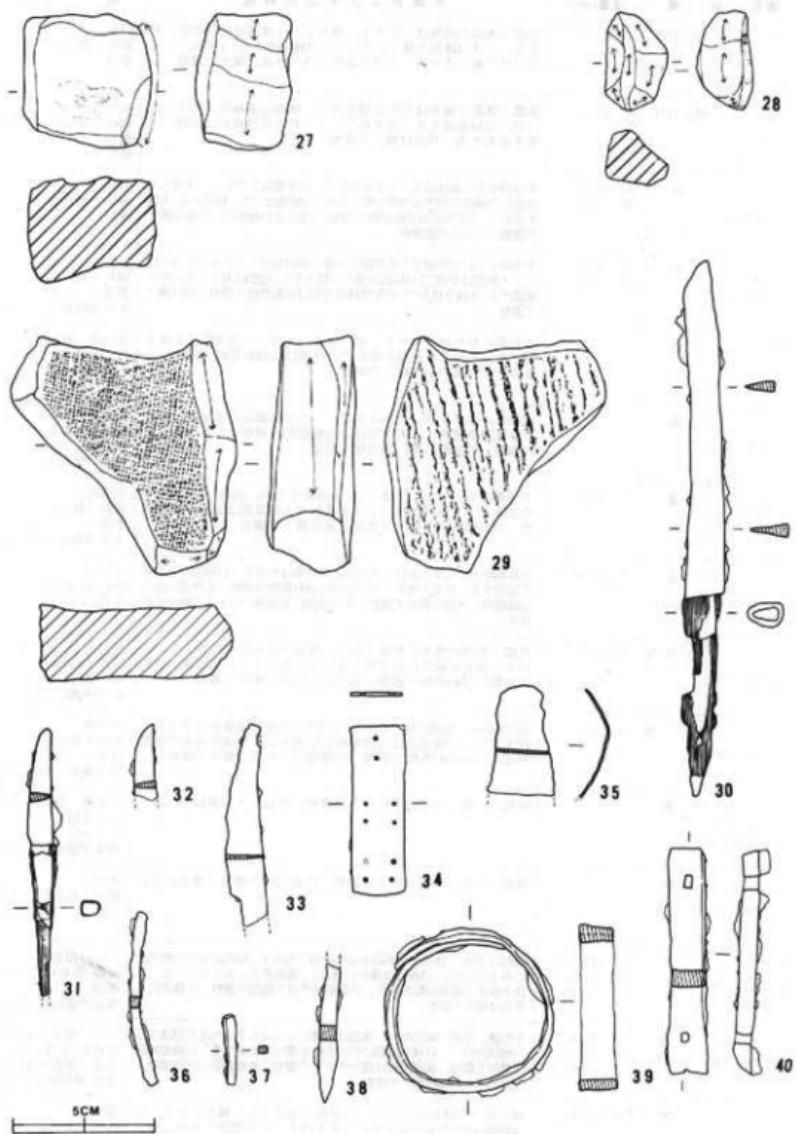
第210図 118号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1)



第211図 118号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)

118号竪穴住居跡出土遺物観察表(第210・211・212図)

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	环	A 11.0 B 3.9 C 7.2	底部は平底で、体部と底部はやや明瞭な角度で分かれ。体部は外傾気味に外上方にのびる。口縁部は僅かに外反する。水抜き成形で底部は一方に向の静止窓削り調整。体部下端部は手持ち鋸削り調整。	灰色、細砂・長石微粒、雲母、普通、内面全体と体部外面の一部に漆付着
2 S	环	A (11.1) B 4.4 C 5.8	底部は平底で体部と底部はあまり角度で分かれ。体部はやや外傾気味に外上方にのびる。口縁端部を丸くおさめている。左ロクロ口水抜き成形で、底部は回転窓切り。底部外面を除き横ナナ調整。全体に漆付着する。	灰白色、細砂・長石粒、鉄分多、普通、酸化成形と思われる
3 S	环	A 13.9 B 3.6 C 8.7	浅い环、底部は平底で、体部は外傾気味に外上方にのび、口縁部は強く外反し、端部を丸くおさめている。右ロクロ口水抜き成形で底部は一方に向の静止窓削り調整。外周部は一部横ナナ。内面全体と口縁部外面は横ナナ削り調整。体部下端部に深い粘土紐挽き上げ痕を残す。	灰色、細砂・長石粒・雲母多、なま塗け、底部外面に差記号
4 S	环	A (14.5) B 4.3 C 8.7	底部は平底で、体部と底部は窓削りにより明瞭な角度で分かれ。体部は外傾気味に外上方にのび、口縁部を丸くおさめている。水抜き成形で、底部は回転窓切り。外周部は横ナナ削り調整。体部下端部手持ち鋸削り調整。体部と口縁部内・外側は横ナナ調整。	灰色、細砂・長石粒、長石微粒、良好
5 S	环	A (14.3)	底部は平底と思われるが欠損。体部は外傾気味に外上方にのび、口縁端部はやや尖る。水抜き成形で、口縁部内・外側は横ナナ削り調整。	灰褐色、細砂・雲母多、なま塗け
6 S	高台付环	A 13.2 B 5.3 D 8.3	底部と体部の境界は、明瞭な棱をもつ。体部は外傾気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで、外下方にのび、外端部に棱を持つ右ロクロ口水抜き成形で底部は回転窓削り調整。口縁部と体部及び高台内・外側は横ナナ削り調整。	灰色、細砂・長石粒・長石微粒、普通、口縁部と体部内面に煤付着
7 S	高台付环	A (12.2) B 5.0 D 7.6	底部と体部の境界はやや明瞭な棱をもち。体部は外傾気味に外上方にのび、口縁端部は僅かに外反し、端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで「へ」の字形に外下方にのびる。水抜き成形で底部は回転窓削り調整。口縁部内・外側、体部外面、高台内・外側は横ナナ削り調整。	灰色、細砂・長石粒・長石微粒、普通、全体に漆付着
8 S	高台付环	A (13.3) B 6.2 D 8.8	底部と体部の境界はやや明瞭な棱をもち。体部は外傾気味に外上方にのび、口縁端部は僅かに外反し、端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで「へ」の字形に外下方にのびる。水抜き成形で底部は回転窓削り調整。口縁部内・外側、体部外面、高台内・外側は横ナナ削り調整。	灰色、細砂・長石粒・長石微粒多、良好、底部外面に漆付着



第212圖 118號竖穴住居跡出土遺物實測圖 (3)

番号	器種	法量(cm)	形態および平法の特徴	備考
9	S	A 11.9 高台付环	底部と体部の境界はややましい稜をもつ。体部は外輪気味に外上方にのび、口縫部は僅かに外反し。口縫部を丸くおさめている。貼り付け高台は欠損。水後き成形で内・外面は横ナナ調整。	灰色 細砂・長石粒・鉄分 普通 高台付環
10	S	A (15.4) 高台付环	底部と体部の境界は明瞭な稜を持つ。体部は直線的に外上方にのび、口縫部を丸くおさめている。貼り付け高台は欠損。水後き成形で内・外面は横ナナ調整。	青灰 細砂・長石粒・長石 微粒 良好
11	S	A (15.2) B 3.3 蓋	天井部中央に直線に近いつまみが付く。天井部はながらに下降し天井部と口縫部の境界は明瞭を欠く。口縫部は下方に屈曲する。水後き成形で、天井部頂部は回転削り調整。つまみと口縫部内面は横ナナ調整。つまみに荒削れ。	灰色 細砂・長石微粒 良好
12	S	A (16.7) B 3.0 蓋	天井部中央にやや扁平で天井部との接合部付近がくびれるつまみが付く。天井部は丸味を帯びる。右口クロ水後き成形で天井頂部は回転削り調整。つまみと天井部内面は横ナナ調整。	灰色 細砂・長石粒 普通 天井部内面に塗付素
13	S	蓋	天井部にやや扁平なボタン状のつまみが付く。天井部は丸味を帯びる。右口クロ水後き成形で、天井頂部は回転削り調整。つまみと天井部内面は横ナナ調整。	褐色 細砂・長石粒 普通 つまみと天井部外側に塗付素
14	S	蓋	天井部にボタン状のつまみが付く。天井頂部は凹ませる。右口クロ水後き成形で、天井頂部は回転削り調整。つまみは横ナナ調整。天井部外側に指頭痕を残す。	灰白色 砂粒・長石粒 不良 天井部外側に塗付素
15	S	A (14.8) 蓋	天井部はながらに下落し、口縫部は下方に向曲し、端部はやや尖る。つまみは欠損。水後き成形で天井頂部は回転削り調整。口縫部内・外面と天井部内面は横ナナ調整。	灰白色 細砂・長石粒 不良 天井部内面に塗付素
16	S	A (15.8) 蓋	天井部中央につまみが付くが欠損。天井部はやや丸く口縫部は下方に向曲する。水後き成形で天井部頂部は回転削り調整。天井部内面と口縫部内・外面は横ナナ調整。天井部頂部に左側溝のつまみの接合部を残す。	灰白色 細砂・長石微粒・雲母 不良
17	S	六付盤	底部と体部の境界は明瞭でなく、体部はゆるやかに外上方にのびる。高台は貼り付けで外下方にのびる。右口クロ水後き成形で底盤は回転削り調整。高台内・外面は横ナナ調整。	灰白色 砂粒・長石粒・石英 粒・雲母 不良 底部外側に墨斑
18	S	A (25.7) 高盤	非常に丸みのある外方に大きく開き、口縫部は僅かに下方向に段をなし。口縫部は上方に屈曲する。水後き成形で体部外側に一部削り削り調整。口縫部内・外面は横ナナ調整。	灰白色 細砂・長石粒・鉄分 普通 底盤成形と思われる
19	S	盤	体部の一筋。外面は平行叩き目調整。内面はナナ調整。	灰褐色 細砂・長石粒 良好 S 109-12 同一 側面 内面に塗付素
20	S	裏	体部の一部、外面は叩き目調整。内面はナナ調整。摩滅が進行。	灰色 細砂・長石粒・雲母 不良
21	H	A (14.2) B 4.2 C (8.3) 环	高台は平底で、体部と底盤はましい角度で分かれ、体部はやや内輪気味に外上方にのび、口縫部は僅かに外反し、底盤を丸くおさめている。水後き成形で底盤削り底盤切り。外縫部は手持ち削り調整。口縫部内・外面は横ナナ調整。	にじむ褐色 細砂・長石粒・雲母 普通 体部外側に塗付素
22	H	A 11.5 B 10.2 C 7.2 旗	小頭型、平底の底盤から、体部は内側につづいて上カリ丸く屈曲する口縫部が付く。口縫外縫部にやや丸味を帯びた曲をなす。口縫部外側は削り調整。体部内面は直ナナとナナ調整。底盤内面はナナ調整。11.5mm部・外側は横ナナ調整。	にじむ褐色 砂粒・長石粒・雲母 普通 底部外側に本塗装 体部外側に塗付素
23	H	A (24.8) 旗	頭の張った体部から「」の字状に屈曲する口縫部が付く。口縫部は外反気味に外上方につまみ出る。口縫部内・外面は横ナナ調整。	褐色 砂粒・長石粒・雲母 普通 口縫部外側に塗付素

番号	種類	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
24	H	C (8.5)	底部は平底で体部は内側しつつ立ち上がる。体部下位は掩削り調整。内面全体はナゲ調整。	灰褐色 砂粒・長石粒・石英 ・玄母 普通 底部外側に木葉痕
25	H	廣	体部の一部。外面は平行叩き目調整。内面は荒ナナ及びナゲ調整。	褐色 細砂・長石粒・玄母 普通
26	H	廣	体部の一部。外面は平行叩き目調整。内面はナナ調整。	にふい褐色 細砂・長石粒・玄母 普通
番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
27	砥石	4.6×4.5 3.4	方形を呈す。 一面のみに使用痕が認められる。	流紋岩 106.5g
28	砥石	3.5×2.2 1.75	全面に使用痕が認められる。	砂岩 15.5g
29	砥石 (軒用砥)	7.7×6.6 2.5	一側面のみに使用痕が認められる。	丸製 36 37 38
30	刀子		30は定形品で全長19.0cm、刃幅3.3cm、刃長11.9cm。 32は初切部。 33は刀子か。	外法5.9 内法4.9
31				
33				
34	小札	全長6.0 幅1.8	定形品。 上部に二個、中位と下部に四個づつ小孔有り。	不明 40 鉄製品 全長7.9 幅1.3 厚さ0.6

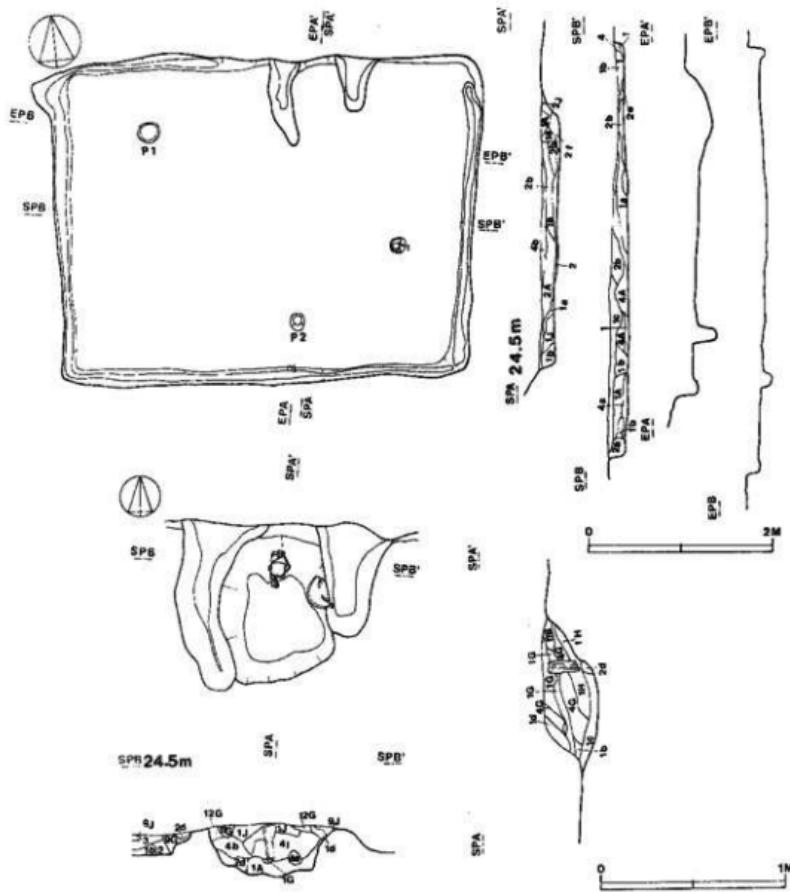
119号竪穴住居跡（第213図）

調査区D2aa区を中心に確認され、111号竪穴住居跡の南側に位置している。南北3.54m・東西4.53mを測り、主軸方向N-6°-Eを指すやや隅の丸い長方形を呈している。

覆土は、東半部が褐色・暗褐色土を主体とする自然堆積で、西半部がロームブロックを含む黒褐色土を呈し、人为的な堆積とみられる。壁は全体的に低く14cm前後で、ほぼ垂直に立ち上がる。北壁東側を除く壁下には、幅15cm・深さ6cmの壁溝が回る。床面は中央部がやや凹み、北側に向かってやや低くなるが、全体的に良く踏み固められている。ピットは北東隅と、南壁近くのほぼ中央部の2か所検出され、深さは11~25cmを測る。

龕は、北壁やや東側寄りにあり、長さ1.7m・幅2.1m・焚口幅0.5mで、壁外へは掘り込まれていない。袖部は、山砂によって構築されている。焼成部は床面より約10cm低く、35度の傾斜で煙道へ続く。奥壁寄りに長さ17cm・幅7cmの割石を立て、上部に土器片を数片重ね、支脚としている。

遺物は、土師器・須恵器・瓦・鉄製品が若干床面から出土している。

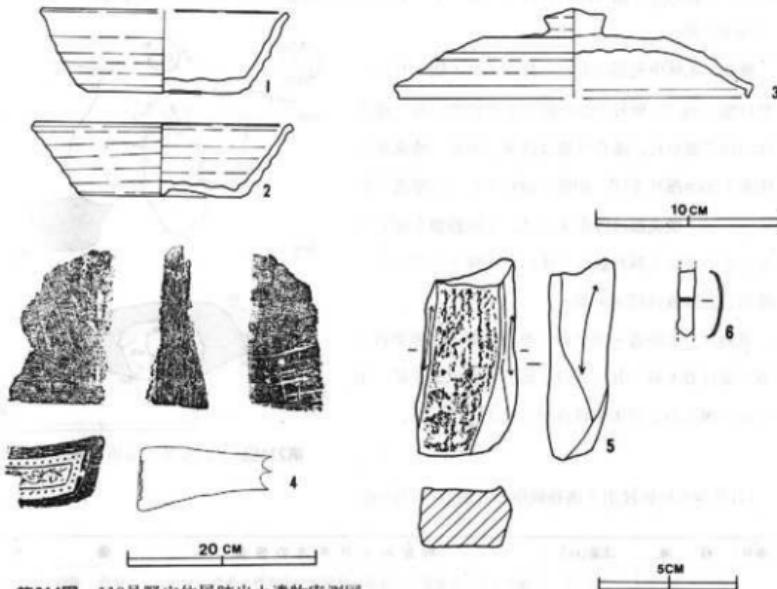


第213図 119号竪穴住居跡・竪穴剖面図

119号竪穴住居跡出土遺物観察表（第214図）

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	环	A 13.8 B 4.0 C 8.5	底部は平底で、体部と底部はややあまい角度で分かれ。体部は外傾気味に外上方にのびる。口縁端部を丸くおさめている。右ロクロ水焼き成形で底部は削ぎ切りで無調整。口縁内部・外側は横ナナ調整。	灰色 砂粒・長石粒多・雲母多 良好
2 S	环	A (13.1) B 4.4 C 8.1	底部は平底で、体部と底部はややあまい角度で分かれ。体部は外傾気味に外上方にのびる。口縁端部を丸くおさめている。左ロクロ水焼き成形で、底部は削ぎ切りで無調整。底部内面と体部内面及び口縁内・外側は横ナナ調整。全体に掌形が進行。	灰色 細砂・長石大粒多・ 雲母分多 普通

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
3	S 蓋	A (18.9) B 4.8	天井部中央に、扁平な宝珠形のつまみが付く。天井部は扁平で口縁部と天井部の境界は明瞭な棱をもつ。右ロクロ水挽き成形で天井頂部は回転荒削り後かるい横ナギ。天井部中位は回転荒削り調整。全体に丁寧な作り。	灰色、細砂、長石微粒、鐵分 普通 天井部内面に一部漆付着
4	軒平瓦	全長(14.0) 厚さ 6.4	頭は無段式で、瓦当面内区は均整唐草文、外区は珠文を配す。 凸・凹面と側面は荒削り調整。	灰色 砂粒、長石粒、鐵 堅緻
番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
5	砥石 (転用砥)	6.4×3.3 2.0	二面面のみに使用痕が認められる。	瓦製 6 リング 外径2.3 厚さ0.05 ほぼ芯のみ残存。



第214図 119号竪穴住居跡出土遺物実測図

120号竪穴住居跡（第206図）

調査区D2as区を中心に確認され、116号竪穴住居跡によって東半部が失われている。南北4.0mで、東西は1.4mだけ確認できる。推定主軸方向はN-5°-Wを指す。

覆土は褐色土で、自然堆積とみられる。壁は高さ12cmでやや外上方へ向けて立ち上がる。北壁下のみ幅18cm・深さ6cmの壁溝が存在する。床面はほぼ平坦で、やや軟弱である。ピットは北西

隅の2か所で、深さは30cm内外である。

遺物は皆無に近く、西壁下から鉄錠1点を出土したのみである。

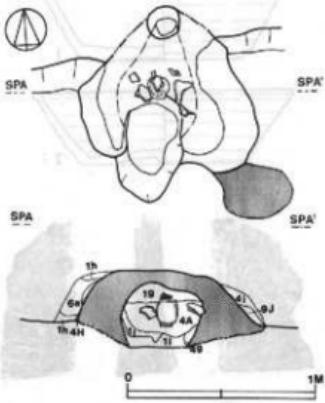
121号竪穴住居跡（第215・216図）

調査区D2bs区を中心に確認され、112号竪穴住居跡の南に位置している。南北4.29m・東西4.79mを測り、主軸方向N-6°-Wを指す隅丸方形を呈している。南西部で122号工房跡と重複し、同跡より新しい。

覆土は、褐色・暗褐色土を主体とし、おおむね自然地盤であるが、北西部にロームブロックを多量に含む層が認められ、人为的堆積とみられる。壁は、70度内外の傾斜をもって外上方へ立ち上がり、南壁で42~50cm・北壁で30cmの高さを測る。東壁南半部の壁下に、幅14cm・深さ5cmの壁溝が存在する。床面は、南壁下から竪前面にかけて5度前後の傾斜で低くなるほかは、ほぼ平坦で、比較的良好踏み固められている。ピットは5か所確認され、P₁~P₄が主柱穴で深さは25~54cmを測る。

竪は、北壁中央部にあり、長さ1m・幅0.93m・焚口幅0.3mで、壁外へ27cm掘り込まれている。袖部は山砂で築かれ、遺存状態は良好である。焼成部は床面を20cm掘り下げ、40度の傾斜をもって煙道に至っている。焼成部ほぼ中央には、土器器表を倒立させ、その上に土器片数片を重ね、支脚としている。煙出し孔は直径17cmを測る。

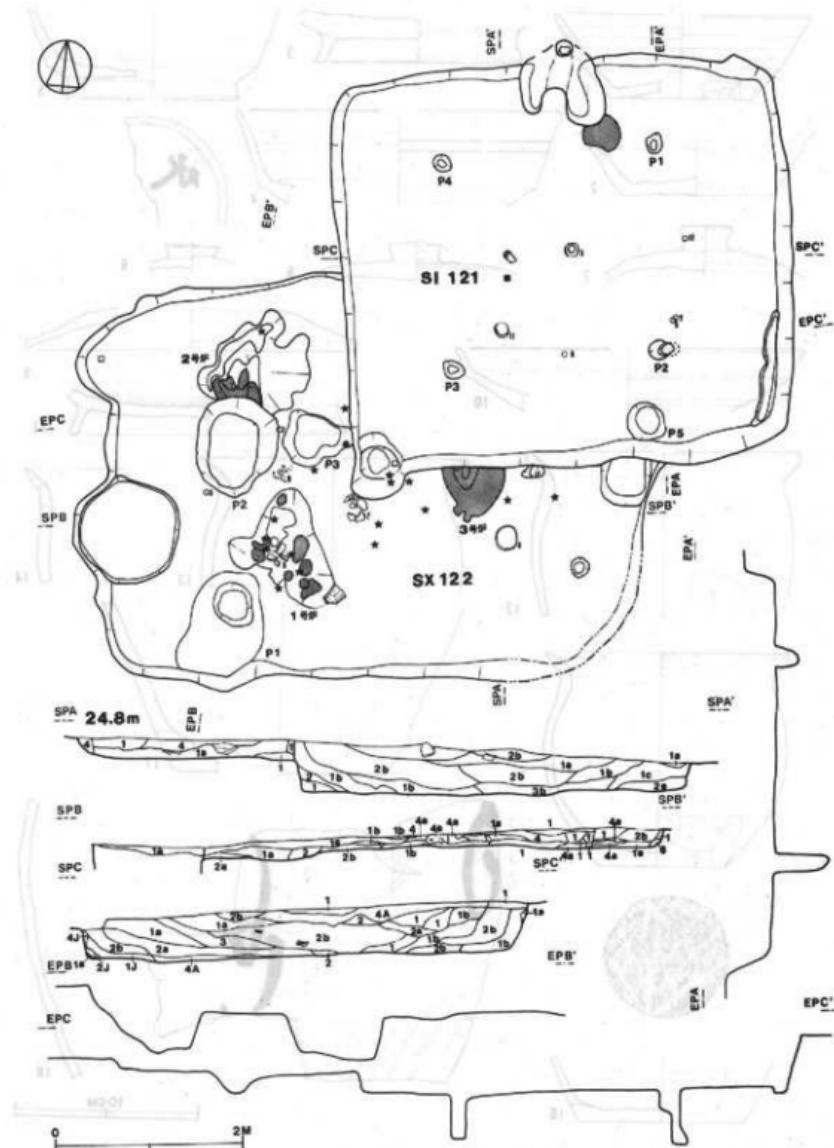
遺物は、土器器・須恵器・墨書き土器・人面墨書き土器・漆付着土器・瓦・羽口・砥石・鉄錠が少量、中央部の覆土および床面付近から出土している。



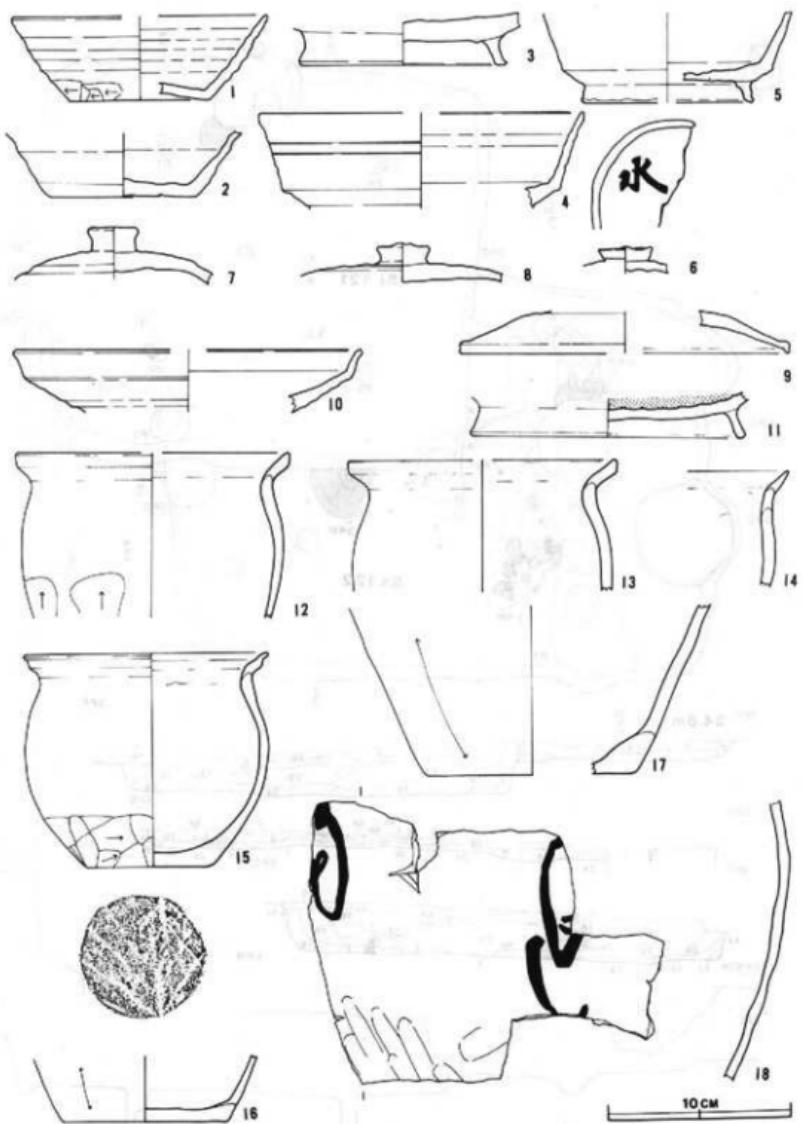
第215図 121号竪穴住居跡竪実測図

121号竪穴住居跡出土遺物観察表（第217・218図）

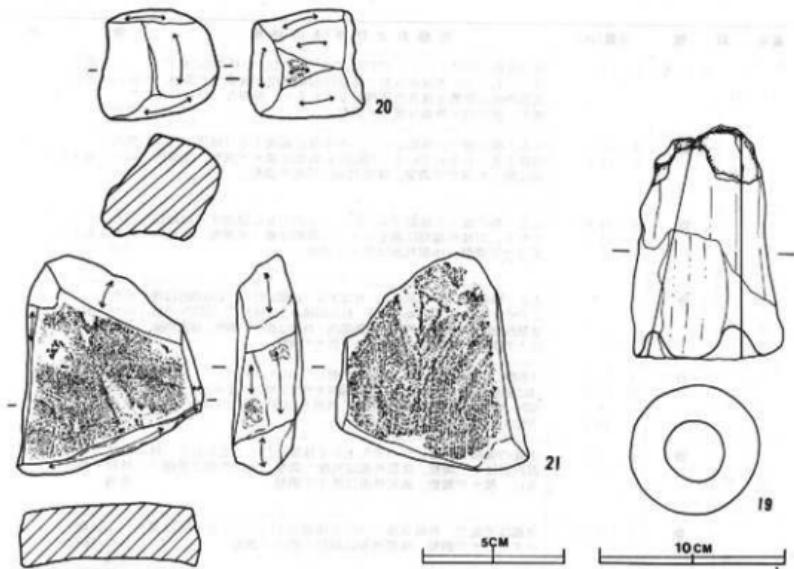
番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	环	A (13.7) B 4.6 C (7.5)	盛り上がった底部で、体部と底部はやや明瞭な角度で分かれ。体部はやや内脛気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。水抜き成形で、底部は静止窓削り調整。体部下端部は手持ち窓削り調整。	灰色 細砂・長石粒 普通 体部内面中位から底部内面に漆付着
2 S	环	C 7.8	底部は平底で、体部と底部は窓削りによる明瞭な角度で分かれ。体部はやや内脛気味に外上方にのびる、水抜き成形で、底部は回転窓切り後一方向の静止窓削り調整。底部内面と体部内・外表面は横ナタ調整。	灰色 細砂・長石微粒・雲母 普通
3 S	高台付环	D 11.3	底部は厚く作る。高台は貼り付けで「ハ」の字状に外下方にのび、外端部にややあまい縁を作る。右クロクロ水抜き成形で底部は回転窓削り調整。高台内・外表面は横ナタ調整。	灰白色 砂粒・長石粒・雲母 普通 底部内面全体に漆付着



第216図 121号竪穴住居跡・122号工房跡実測図



第217図 121号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1)



第218図 121号竪穴住居跡出土遺物実測図 (2)

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
4 S	高台付环	A (17.5)	大形6と思われる。底部と体部の境界はやや明瞭な棱を持ち、体部は外縁気味に外上方にのび、口縁端部をやや尖り気味におさめている。貼り付け高台は外方。水抜き成形で、口縁部内・外面は横ナデ調整。体部外側に二条の矢矢文様を見る。	暗青灰色 砂粒・長石粒多・長石微粒多 良好
5 S	高台付环	D 9.3	底部と体部の境界はやや明瞭で体部はやや内縁気味に外上方にのびる。高台は貼り付けで外下方にのび、外縁部に不整な様を持つ。水抜き成形で底部は回転荒削り。体部内・外面と高台内・外面及び底部外側の一部は横ナデ調整。	暗オリーブ灰色 砂粒・長石粒・長石微粒多 普通 底部外側に墨書
6 S	蓋		やや低いつまみが天井部中央に付く。右ロクロ水抜き成形で、つまみは横ナデ調整。天井部は回転荒削り調整。	灰色 細砂・長石微粒 良好
7 S	蓋		天井部中央に扁平なボタン状のつまみが付く。天井部は丸味を帯びる。右ロクロ水抜き成形で天井頂部は回転荒削り調整。つまみは横ナデ調整。	オリーブ灰色 細砂・礫・長石粒 普通 天井部内面に漆付有
8 S	蓋		天井部中央にボタン状のつまみが付く。天井部はやや平坦。水抜き成形で、天井頂部は回転荒削り調整。天井部内面は横ナデ調整か。	灰色 細砂・長石粒 良好
9 S	蓋	A (17.8)	天井頂部は扁平で天井部と口縁部の境界はやや明瞭な棱を持ち、口縁部は下方に屈曲する。つまみが付くと思われるが欠損。水抜き成形で、天井頂部は回転荒削り調整。天井部内・外面と口縁部内・外面は横ナデ調整。	灰褐色 細砂・長石粒・なま焼け 天井部内・外面に煤付有
10 S	高环	A (18.8)	体部は大きく開く。体部と口縁部の境界にやや明瞭な棱を持ち、口縁部は外反気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。脚部は欠損。水抜き成形で体部内面と口縁部内・外面横ナデ調整。	青灰色 細砂・長石粒・長石微粒・石英 良好

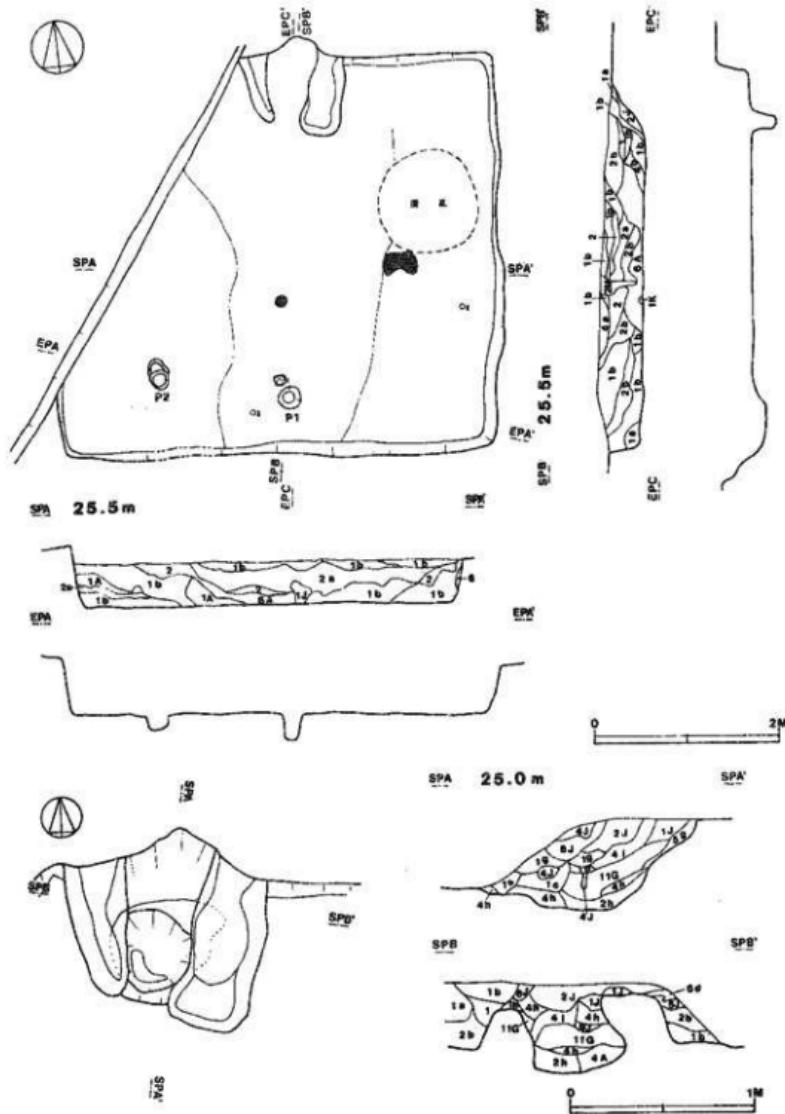
番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
11	H 古付盤	D 14.9	高台は貼り付けで、「ハ」の字形に外下方向に内・外縁部に縁を持つ。右クロス焼き成形で底面部は回転窯開口後横ナナ子調整。底面部内側は危険さ後黒色処理がなされるが、明瞭なロクロ目を残す。高台内・外側は横ナナ子調整。	にぶい橙色 砂粒・雲母・スコリア 普通
12	H 座	A (14.6) F 14.1	かるく崩れの残った体部から「L」の字形に屈曲する口縁部が付き、端部を丸くおさめている。口頭部内・外側は横ナナ子調整。体部内面は尾ナナ子後ナナ子調整。体部外側は危険さ後ナナ子調整。	橙色 砂粒・長石粒多 普通
13	H 座	A (14.4) F 14.1	かるく崩れの残った体部から、強く「L」の字形に屈曲する口縁部が付き、口縁外端部に面をなす。口頭部は横ナナ子調整。体部内面はナナ子調整。体部外側は尾ナナ子調整。	橙色 砂粒・長石粒多 普通
14	H 座		あまり崩れの残らない体部から、外反する口縁部が付き、口縁端部は薄くやや尖り気味におさめている。粘土結晶込み上成形で、底部内・外側、体部外側に粘土結晶を残す。口頭部内・外側は横ナナ子調整。体部内面はナナ子調整。体部外側は危険さ後ナナ子調整。	橙色 砂粒・長石粒・雲母 普通
15	H 座	A 13.0 B 11.7 C 6.2 F 13.1	小形器。平底の底部から、体部は内側しつ立ち上がり、「L」の字形に屈曲する口縁部が付き、口縁端部を外反50度につまみ出す。口頭部内・外側は横ナナ子調整。体部内・外側と底部内面はナナ子調整。体部下辺は危険さ後ナナ子調整。全体に丁寧な作り。	明赤褐色 砂粒・長石粒・雲母 良好 底部外側に木葉灰。
16	H 座	C 9.0	平底の底部で内側しつ立ち上がる体部が付くと思われる。体部内面はナナ子調整。体部外側は危険さ後ナナ子調整。底部内面は危険さ後ナナ子調整。底部外側は尾ナナ子調整。	橙色 砂粒・長石粒多 普通
17	H 座	C (11.2)	底部は平底で、外縁気味にのびる体部が付く。内面全体は尾ナナ子及び部ナナ子調整。体部外側は段位の尾ナナ子調整。	にぶい橙色 砂粒・長石粒多・雲母 普通 底部外側に木葉灰
18	H 座		体部の一部。体部内面は尾ナナ子調整。体部外側は段位の尾ナナ子調整。	にぶい黃色 滑砂・長石 粒・長石滑粒・雲母 普通 底部外側に人頭整骨 体部内面に炭化物付着

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
19	羽口	全長(9.2) 外径6.2 孔径2.6	大形羽口。先端部は細くなる。外側は多方向の危険さ後ナナ子調整。	先端部は溶解し少量の糞付着	21	砥石(板用)	7.7×6.3 1.8	瓦面を除き全表面に使用痕が認められる。	瓦製
20	砥石	4.1×3.8 3.5	二側面を除いて使用痕が認められる。	砂岩 85g					

124号竪穴住居跡（第219図）

調査区D2e1区を中心に確認され、131号竪穴住居跡の西側に位置し、北西部は調査区外に存在する。南北4.35m・東西4.25mを測り、主軸方向N=6°-Eを指す方形を呈している。

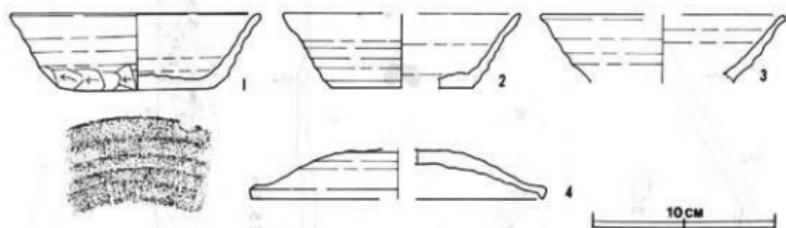
覆土は、褐色・暗褐色土を主体とし、ほとんどの層に炭化粒子を含む。また、中・下層にはロームブロックを含む層があり、人为的堆積とみられる層が多い。壁は18~30cmの高さを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面はほぼ平坦で、南壁下から廻前面にかけての幅1.6mが良く踏み固められており、その他はやや軟弱である。床面は中央部には、粘土塊が2か所認められる。ピットは南壁寄りの2か所で、深さは20cmを測る。



第219図 124号窖穴住居跡・墓穴測図

窓は、北壁ほぼ中央部にあり、長さ0.96m・幅1.07m・焚口部幅0.3mで、壁外へ25cm程掘り込まれている。袖部は山砂で構築され、遺存状態は良好である。焚口部は床面より13cm低く、45度の傾斜で煙道部へ続く。火床には、10数cmの焼土が堆積している。

遺物は、土器器・須恵器・羽口・鉄滓が極少量出土しただけで、ほとんど床面から出土している。



第220図 124号竪穴住居跡出土遺物実測図

124号竪穴住居跡出土遺物観察表（第220図）

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	环	A 13.5 B 4.3 C 8.5	底部は平底で体部と底部はやや明瞭な角度で分かれ。体部はやや内臂気味に外方にのび、口縁部は丸くおさめている。水洗き成形で底部は丁寧な回転削り調整。底部下端部は回転削り調整と思われる。口縁部内外は手持ち型削り調整。	灰白色 細砂・長石粒・雲母多 不良 体部外面に線刻
2 S	环	A (12.9) B 4.1 C (7.8)	底部は平底で体部と底部は明瞭な角度で分かれ。体部は外傾気味に外方にのび、口縁部は丸くおさめている。水洗き成形で底部は丁寧な回転削り調整。底部下端部は回転削り調整と思われる。口縁部内外は横ナギ調整。	青灰色 細砂・長石微粒 やや精良 良好
3 S	环	A (13.2)	底部は平底と思われる。体部は内臂気味に外方にのび、口縁部は僅かに外反して端部を丸くおさめている。水洗き成形で口縁部内外は横ナギ調整。	灰色 細砂・礫・長石粒多 普通
4 S	蓋	A (15.9)	天井部中央につまみが付くが欠損。天井部は丸柱を帯び、天井部と口縁部の境界はやや明瞭な棱を持ち、口縁部は下方に向曲する。水洗き成形で天井部頭部から天井部中央にかけて右クロコ使用の回転削り調整。口縁部内外は横ナギ調整。	オリーブ灰色 細砂・礫・長石粒普通 天井部外面にベンガラ付着

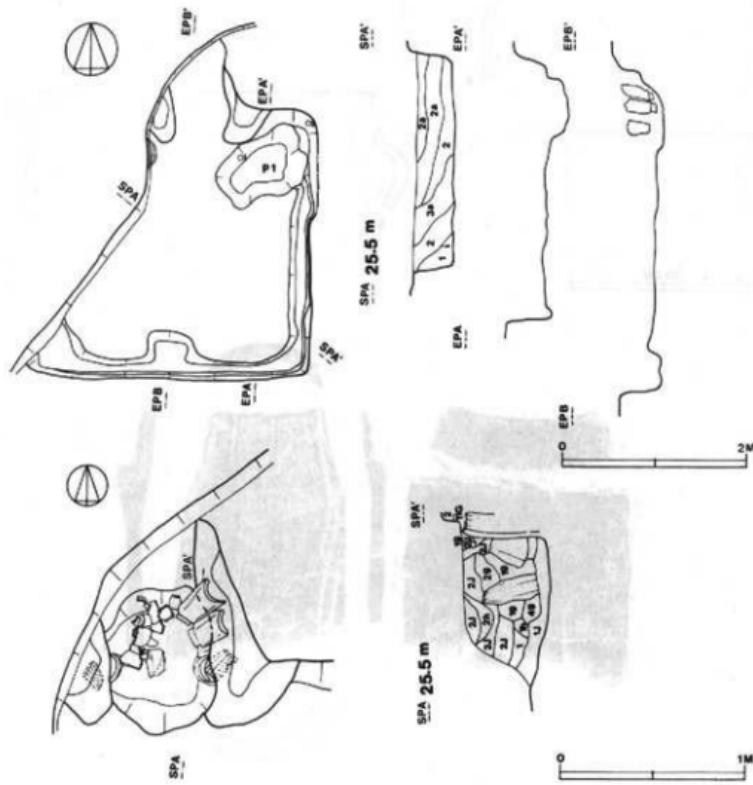
125号竪穴住居跡（第221図）

調査区D1 fs区を中心に確認され、西半部は調査区域外に存在する。南側には、4号溝が東西に走っている。南北2.92m・東西3.88mを測り、主軸方向N-2°-Eを指す方形を呈している。

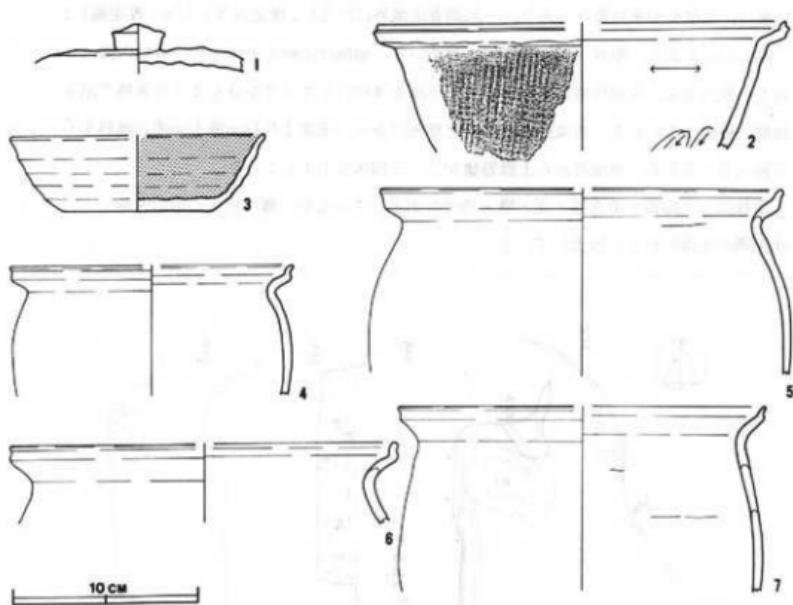
覆土は、暗褐色土の自然堆積で、北西方から流入している。壁は高さ42cmを測り、垂直に立ち上がる。壁下には幅21cm・深さ7cm、断面U字形の壁溝が回っている。南壁中央部では幅47cmと広がり、ピット状を呈している。床面は南壁下から北側に向かって低く傾斜するが、全体的に良く踏み固められている。ピットは、北東隅に96×65cm・深さ23cmの楕円形のものが存在するほかは認められない。

窓は、北壁やや東側寄りにあり、一部調査区域外に出るが、推定長さ1.17m・推定幅1.2m・焚口幅0.53mを測り、壁外へ1m掘り込まれている。袖部は山砂を主体とし、右袖内側に3枚の丸瓦と1枚の平瓦。左袖内側に1枚の丸瓦が玉縁を下位にして立てかけるよう立てる状態で出土した。袖部の補強とみられる。焼成部はほとんど壁外にあり、床面より13cm低く50度の傾斜をもって煙道部へ立ち上がる。焼成部から土師器甕が二~三個体分出土している。

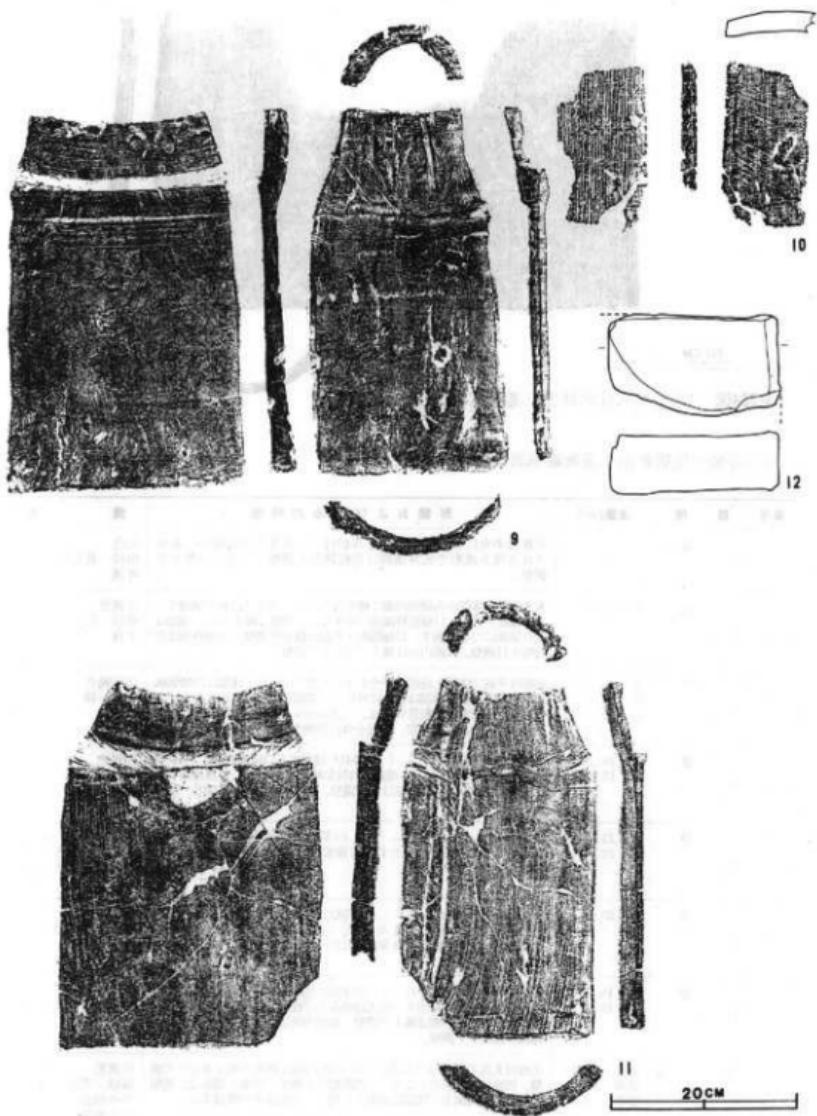
遺物は、土師器・須恵器・瓦・埠・鐵滓が出土しているが、窓内出土のものを除くと、大部分北東隅の床面付近から出土している。



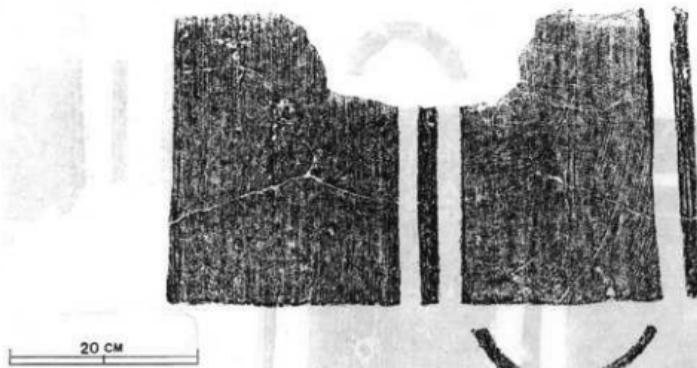
第221図 125号竪穴住居跡・窓実測図



第222圖 125号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1)



第223図 125号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)



第224図 125号竪穴住居跡出土遺物実測図(3)

13

125号竪穴住居跡出土遺物観察表(第222・223・224図)

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	蓋	天井部中央にボタン状のつまみが付く。天井頂部は扁平。右口クロ水洗き成形で天井頂部は圓軸混削り調整。つまみは横ナナ子調整。	灰色 細砂・長石粒 普通
2	S	瓶	A (22.0) 大きさ聞く体部から頸部内面に棱を持ち、「く」の字状に鋭く屈曲する口縁部を持つ。口縁部外端面に段差なし、明瞭な棱を持つ。端部より突起気泡こぼみ出す。口縁部内・外面は横ナナ子調整。体部外は平行叩き目調整。体部内面は横ナナ子及びナナ子調整。	灰黄色 細砂・長石・雲母 不良
3	H	环	A 13.5 B 4.0 C 8.1 底部は平底で体部と底部はややあいまい角度で分かれ。体部は内側気味に外上方方にひく縫隙部は僅かに外反し。端部を丸くおさめている。水洗き成形で底部は圓軸混削り後、「二方向からの静止説明」。体部下端部は手持ち混削り調整。全体内面は横ナナ子調整。全体外は後黑色處理。	淡赤褐色 砂粒・礫・長石粒 普通
4	H	甕	A (15.2) F 15.0 丸く脇の張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、口縁部外端面に浅い溝を巡らし、端部を外反気味につぼみ出す。口縁部内・外面は横ナナ子調整。体部内面はナナ子調整。全体に薄手作り。	赤褐色 砂粒・長石粒・雲母 良好
5	H	甕	A (21.5) F 22.6 丸く脇のはった体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、端部を外上方につぼみ出す。口縁部内・外面は横ナナ子調整。体部内・外面はナナ子調整。	にぶい橙色 砂粒・長石粒・雲母 普通 口部・体部外面に塗付層
6	H	甕	A (20.8) 脇の張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、口縁部はほぼ垂直につぼみ出す。口縁部内・外面は横ナナ子調整。体部内面はナナ子調整。全体外はナナ子調整。	にぶい橙色 砂粒・長石粒・スコリア・雲母 普通
7	H	甕	A (19.7) F 19.6 やや脇のはった体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、端部を外反気味につぼみ出す。粘土絞込み上げ成形で体部内面に段階を残す。口縁部内・外面は横ナナ子調整。体部内面は横ナナ子及びナナ子調整。全体外はナナ子調整。	にぶい橙色 砂粒・長石粒・雲母 良好
8	丸	瓦	全長 (26.8) 狹端 17.6 厚さ 2.0 玉縁付丸瓦で、中位より広面にかけ欠損。凸面は荒削り後、丁寧なナナ子調整。凹面は、布目の上より、一部凹削りを施す。側面と窓面は、荒削り調整で、側面上下端部に面取りを施す。凸面はやや掌盛する。	灰黄色 細砂・雲母・礫 やや精良 やや軟質
9	丸	瓦	全長38.0 狹端13.0 広端19.0 厚さ 1.8 玉縁付丸瓦の完形品。凸面は荒削り調整で、凹面は布目を残し、端面付近に一部凹削りが見られる。側面は瓦ナナ子調整で上下端部に面取りを施す。端面は荒削り調整。	灰黄色 細砂・長石粒・雲母 礫・雲母 やや硬質

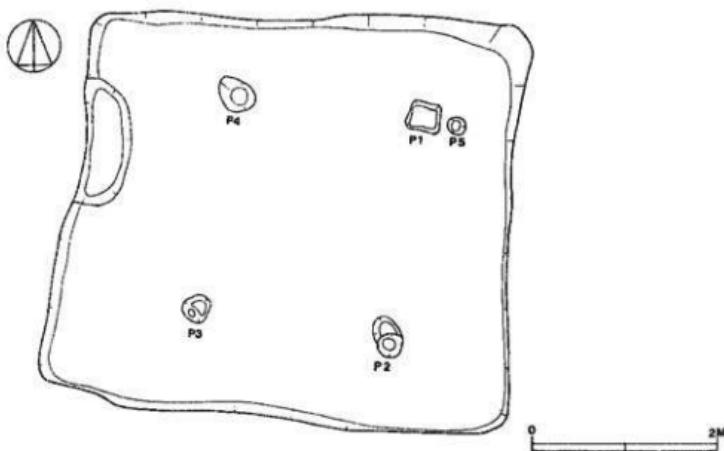
番号	種類	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
10	平瓦	全長(15.0)	凸面は横位の窓目叩きを施し、凹面は布目で粘土クズを残す。裏面は荒削り溝調。全体に摩減する。	にじみ黄褐色 砂粒・長石粒・雲母 軟質
11	丸瓦	全長 37.0 狭端 (13.2) 広端 (17.8) 厚さ 2.4	玉縁付丸瓦。凸面は荒削りで、玉縁は横位の窓目叩き。後にナナメ調整。凹面は、布目を残す。側面は荒ナメ調整で、上下端部に面取りを施す。	にじみ黄褐色 細砂・長石粒・雲母 多くやや硬質
12	蹲	全長 (18.4) 厚さ 6.0	残存五面は厘ナメ調整。	灰白色 砂粒・長石粒 軟質
13	丸瓦	全長 (31.2) 広端 17.6 厚さ 1.1	玉縁は欠損。凸面は横位の窓目叩き調整。凹面は布目を残す。側面は荒削り調整で上下端部に面取りを施す。端面は荒削り調整。凸面はやや摩減する。全体に薄手作り。	にじみ黄褐色 砂粒・長石粒・雲母 やや軟質

127号竪穴住居跡（第225図）

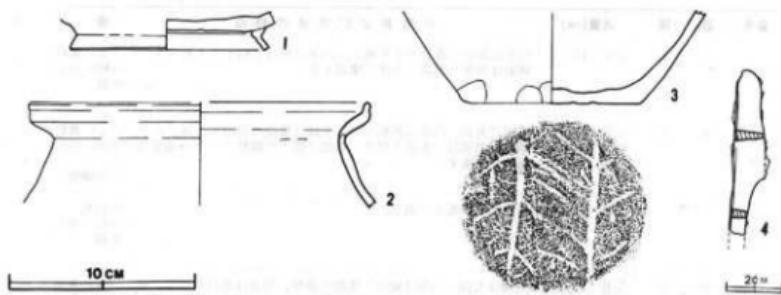
調査区B4d区を中心に確認され、45号竪穴住居跡の東に位置している。南北4.24m・東西4.8mを測り、主軸方向N-6°-Eを指す長方形を呈している。

壁はほとんど確認されず、北東部は床面も若干削平されている。ピットは北東コーナー部に2か所、他の3コーナーに各1か所存在する。P₂・P₃は、2本の重複がみられる。深さは25cm前後を測る。竪穴は確認できなかった。

遺物は、土師器・須恵器・鉄製品が少量出土している。



第225図 127号竪穴住居跡実測図



第226図 127号竪穴住居跡出土遺物実測図

127号竪穴住居跡出土遺物観察表（第226図）

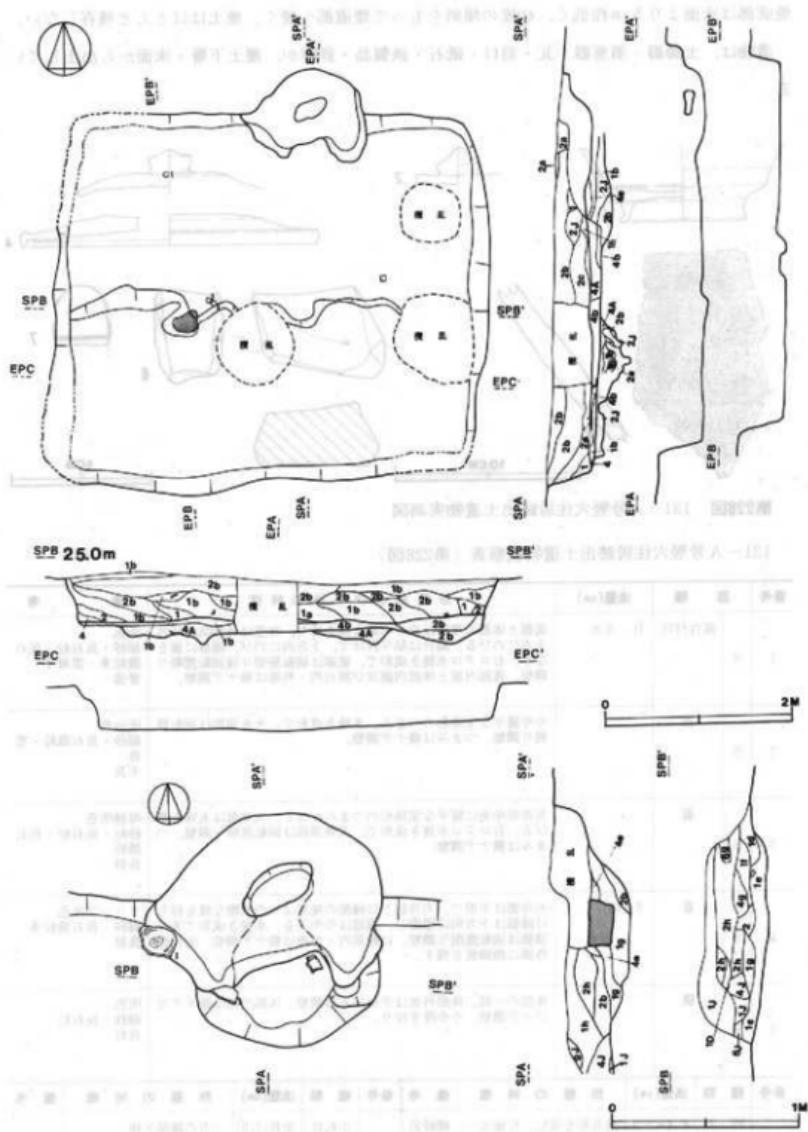
番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	高台付环	D 10.7	貼り付け高台で一旦内側するが強く外下方にのが。外端部に棱を持つ。水焼き成形で、底部は右ロクロ使用の面転荒削り調整。底部内面と高台内・外面は横ナデ調整。	灰白色 砂粒・長石粒多・長石微粒 普通 底部内面に鉄分付着
2 H	甕	A (18.1)	胴の張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、端部を垂直にしまみ出す。口頭部内・外面は横ナデ調整。体部内・外面はナデ調整。	褐色 砂粒・長石粒 普通
3 H	甕	C 9.6	平底の底部。体部内・外面は跳ナデ及びナデ調整。底部内面は跳削り及びナデ調整。	にいじ褐色 砂粒・長石粒・雲母 普通 底部外面に木葉痕
4 刀	子	全長 (5.9) 刃幅 1.1 刃長 (3.9)	刃部と茎部との境に間を開く。基部欠損。	

131-A号竪穴住居跡 (第227・229図)

調査区D2e2区を中心に確認され、124号竪穴住居跡の東に位置している。南北4.05m・東西4.65mを測り、主軸方向N-5°-Eを指す隅丸方形を呈している。

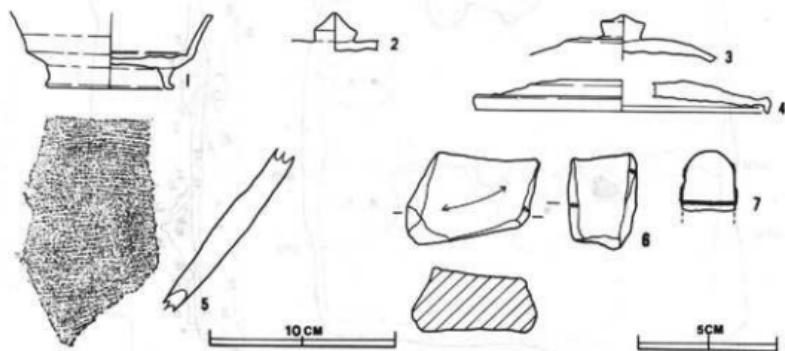
覆土は、全体的に褐色・暗褐色土の自然堆積であるが、北西部に炭化粒子・ロームブロックを含む人為的な堆積とみられる層がある。壁は南壁で高さ45cm、他は高さ30~35cmを測り、80度内外の傾斜をもって外上方へ立ち上がる。床面は中央部で段をなし、北半部が6cm程高くなるほかはほぼ平坦で、やや軟弱である。中央部やや西壁寄りに焼土があり、周辺に木炭片が認められる。ピットはP₁・P₂・P₆・P₇の4か所確認され、深さは30cm前後を測る。

窓は、北壁中央部やや東側寄りにあり、長さ1.23m・幅1.2m・戸口幅0.5mを測り、壁外へ0.5m程掘り込まれている。袖部は、下層に砂質土、上層に山砂を用いて構築されているが、短いものである。



第227図 131-A号竪穴住居跡・竪穴測図

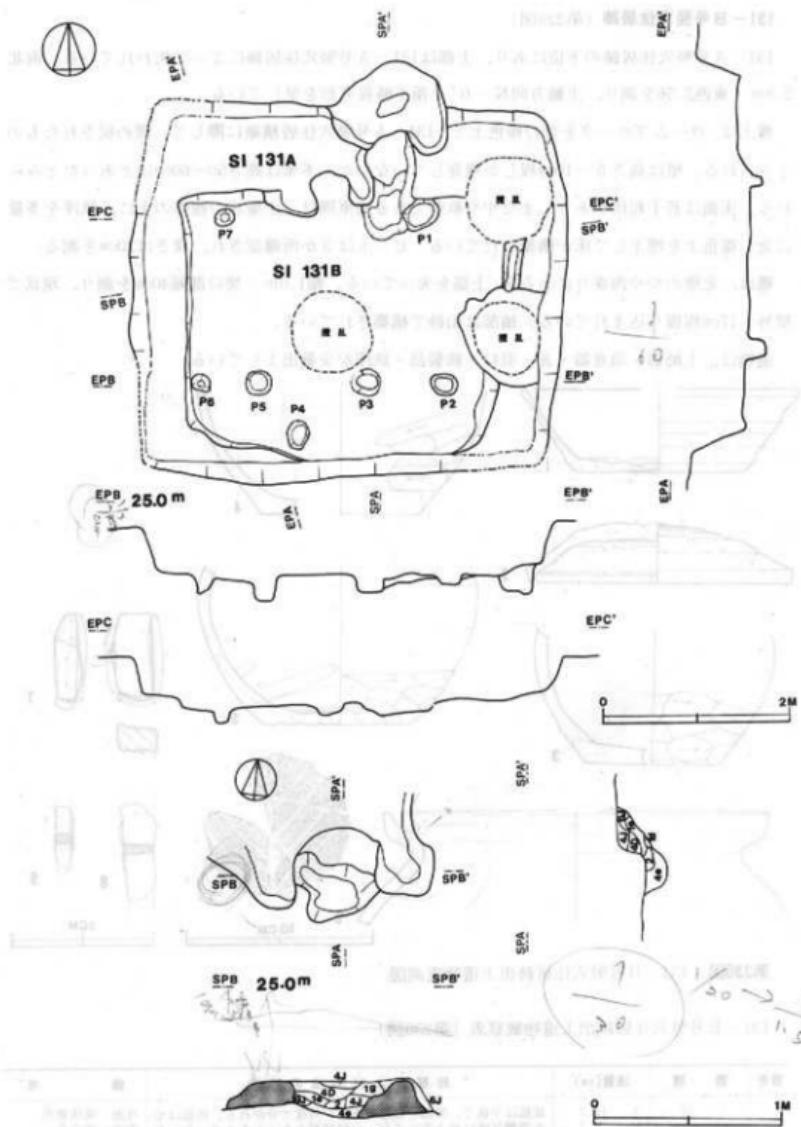
焼成部は床面より 5 cm 程低く、40度の傾斜をもって煙道部へ続く。焼土はほとんど残存しない。遺物は、土師器・須恵器・瓦・羽口・砥石・鉄製品・鉄滓が、覆土下層・床面から出土している。



第228図 131-A号竪穴住居跡出土遺物実測図

131-A号竪穴住居跡出土遺物観察表（第228図）

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	高台付环	D 6.8	底部と体部の境界はやや明瞭な棱を持ち、体部は外輪気柱に外上方にのびる。高台は貼り付けで、下方向にのび、端部に面をなす。右ロクロ水挽き成形で、底部は回転窓切り後回転窓削り調整。底部内面と体部内面及び高台内、外面は横ナデ調整。	灰色 細砂・長石粒・長石 微粒多、雲母多 普通
2 S	蓋		やや扁平な宝珠形のつまみ。水挽き成形で、天井頂部は回転窓削り調整。つまみは横ナデ調整。	灰白色 細砂・長石微粒・雲 母不良
3 S	蓋		天井部中央に扁平な宝珠形のつまみが付く。天井部は丸味を帯びる。右ロクロ水挽き成形で、天井頂部は回転窓削り調整。つまみは横ナデ調整。	暗緑灰色 砂粒・長石粒・長石 微粒 良好
4 S	蓋	A 15.7	天井部は平坦で、天井部と口縁部の境界はやや明瞭な棱を持ち口縁部は下方向に屈曲し、端部はやや尖る。水挽き成形で天井頂部は回転窓削り調整。口縁部内・外面は横ナデ調整。天井部外面に指頭痕を残す。	オリーブ灰色 細砂・長石微粒多 良好
5 S	裏		体部の一部。体部外面は平行叩き目調整。体部内面は跳ナデ及びナデ調整。やや厚手作り。	灰色 細砂・長石粒 良好
番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
6	砥石	4.4×3.3 2.0	長方形を呈し、片面と一側面に使用痕が認められる。	硬砂岩 79 g 7 小札井 鉄製品 全長(3.5) 幅 1.7 一方の端部欠損。



第229圖 131-A號豎穴住居跡, 131-B號豎穴住居跡・竪穴測圖

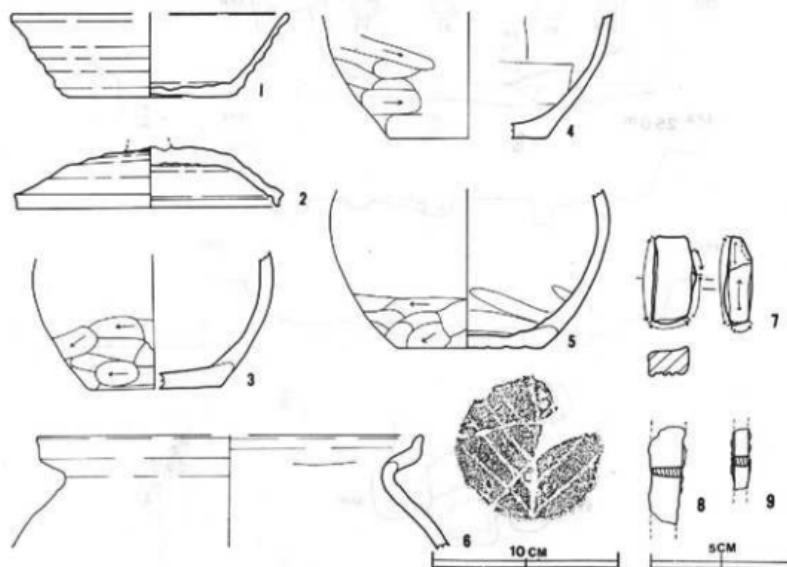
131-B号竪穴住居跡（第229図）

131-A号竪穴住居跡の下位にあり、上部は131-A号竪穴住居跡によって失われている。南北2.9m・東西3.56を測り、主軸方向N=0°を指す略長方形を呈している。

覆土は、ロームブロックを含む褐色土で、131-A号竪穴住居構築に際して、埋め戻されたものとみられる。壁は高さ5~10cm程しか残存していないが、本来は高さ50~60cmほどあったとみられる。床面は若干起伏があり、またやや軟弱である南東隅は、土壤状の掘方の上に、鉄滓を多量に含む褐色土を埋土して床が構築されている。ピットは3か所確認され、深さは20cmを測る。

窓は、北壁のやや西寄りにあるが、上部を失っている。幅1.0m・焚口部幅40cmを測り、現状で壁外へ17cm程掘り込まれている。袖部は山砂で構築されている。

遺物は、土師器・須恵器・瓦・羽口・鉄製品・鉄滓が少量出土している。

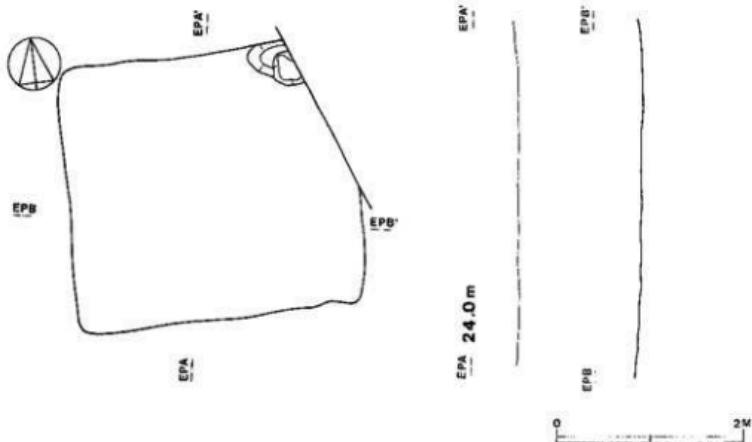


第230図 131-B号竪穴住居跡出土遺物実測図

131-B号竪穴住居跡出土遺物観察表（第230図）

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	环	A 14.7 B 4.5 C 9.4	底部は平底で、体部と底部はあまり角度で分かれ。体部はやや内輪気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。右ロクロ水焼き成形で、底部は回転窓切り後、静止窓削り調整。体部内面と口縁部内・外面は横ナナ調整。	外面一暗灰黄色 内面一灰白色 細砂・長石粒・雲母不良

番号	種類	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
2	S	蓋 A14.0	天井部はあらか丸味を帯び、天井部と口縁部の境界は鋭く明瞭な後を持つ。口縁部は下方向に屈曲し、底部はやや尖る。右ロクロ水洗き成形で、天井底部は輪郭距離前り調整。天井部円柱から口縁部内・外側は鏡ナデ調整。	灰色 細砂・長石粒・長石 微粒 良好
3	H	C (7.0) F 12.8	小形鑿。底部は平底で、体部は内凹しつつ立ち上がり、球形の体部を形成するとと思われる。底部内面と体部内面は鏡ナデ及びナデ調整。体部外側は荒削り調整。底部外側は木製底の上よりナデ調整。	淡赤褐色 砂粒・長石粒・スコリア・玄母 普通
4	H	C (8.5)	底部は平底で、体部は内凹しつつ立ち上がり。体部内面は鏡ナデ後ナデ調整。体部外側は荒削り調整。	に、に、に、褐色 砂粒・長石粒・玄母 普通 底部外側に木製底
5	H	C 7.8 F15.0	底部は平底で体部は内凹しつつ立ち上がり、球形の体部を形成する。底部内面はナデ調整。底部内・外側は鏡ナデ及びナデ調整。体部下辺は荒削り調整。	に、に、に、褐色 砂粒・長石粒・玄母 普通 底部外側に木製底
6	H	A (20.6)	強く側の張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、縫部を外上方につまみ出す。口縁部内・外側は鏡ナデ調整。体部内・外側はナデ調整。	に、に、に、褐色 砂粒・長石 普通



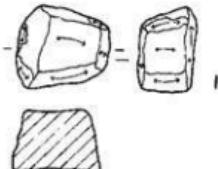
第231図 132号竖穴住居跡実測図

132号竪穴住居跡（第231図）

調査区C3f1区を中心に確認され、108号竪穴住居跡の北東方に位置するが、上部を削平され、また北東部は現道路によって失われ、全容は明らかでない。規模は、推定東西3.12m・南北2.8mを測り、推定主軸方向N-1°-Eを指す略方形を呈するものとみられる。覆土・壁・床面については明らかでない。

窓は、北壁やや東寄りに焼土がみられることから、その付近に存在したものと思われる。

遺物は、土師器・砥石である。



132号竪穴住居跡出土遺物観察表（第232図）

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
1	砥石	3.3×2.9	舌形を呈す。一部自然面	鉄分付 有 硬砂岩 29g
		2.0	の残る一面を除いて使用 軋が認められる。	

第232図 132号竪穴住居跡出土
遺物実測図

133号竪穴住居跡（第233図）

調査区D2e4区を中心に確認され、131号竪穴住居跡の東に位置している。南北3.77m・東西4.33mを測り、主軸方向N-0°を指す隅丸長方形を呈している。

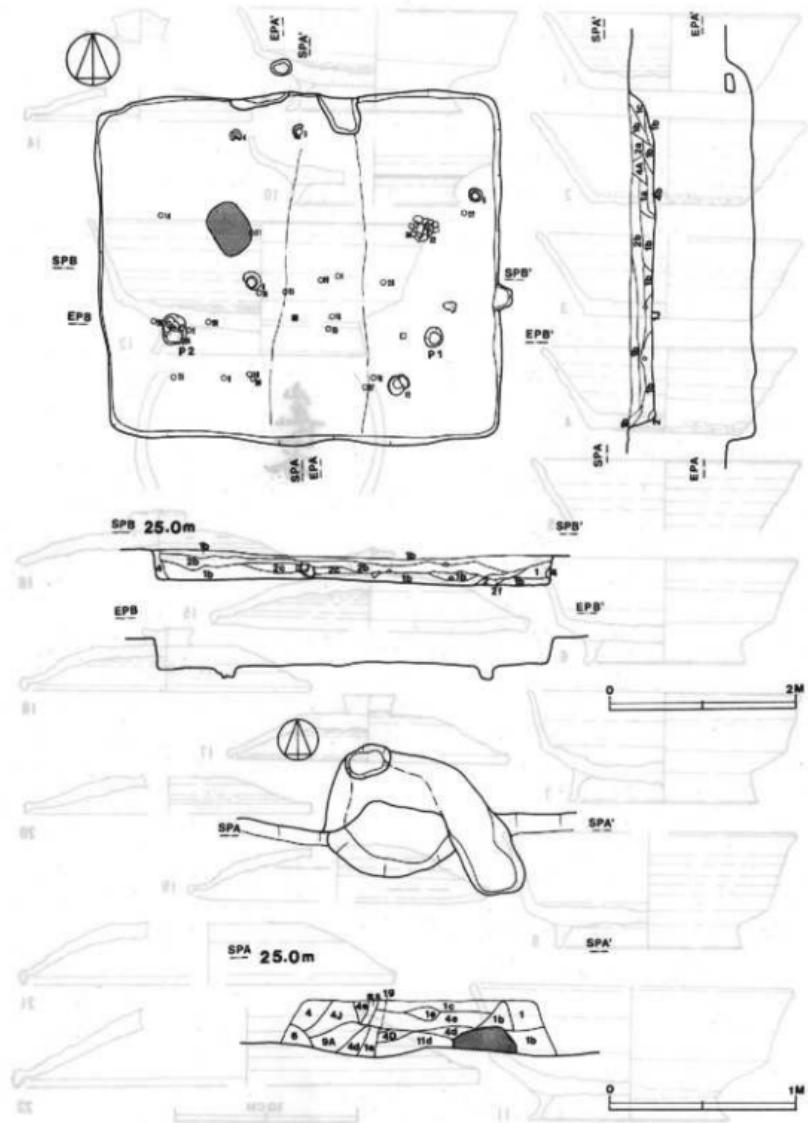
覆土は、ロームブロック・炭化粒子を少量含む褐色・暗褐色土を主体とし、おおむね自然堆積とみられるが、北側に一部人为的堆積とみられる層がある。壁は高さ16cmを測り、87度の傾斜をもって外上方へ立ち上がる。床面は若干起伏を有し、南壁下から窓前面にかけての幅1.05mが良く踏み固められている。他はやや軟弱である。中央部やや西寄りに57×45cmの砂のブロックが存在する。ピットは2か所で、深さは15cmを測る。

窓は、北壁中央部にあり、窓の軸線は住居跡の主軸方向と異なり、N-20°-Wを指す。西側袖部は失われているが、壁外へ41cm程掘り込まれ、長さ1mを測る。袖部は山砂によって構築されている。焼成部は床面とはほぼ同じレベルで、ゆるやかに煙道へ続く。

遺物は、土師器・須恵器・墨書き土器・瓦・羽口・砥石・鉄製品・鉄滓が、南部の覆土下層から床面にかけて出土している。

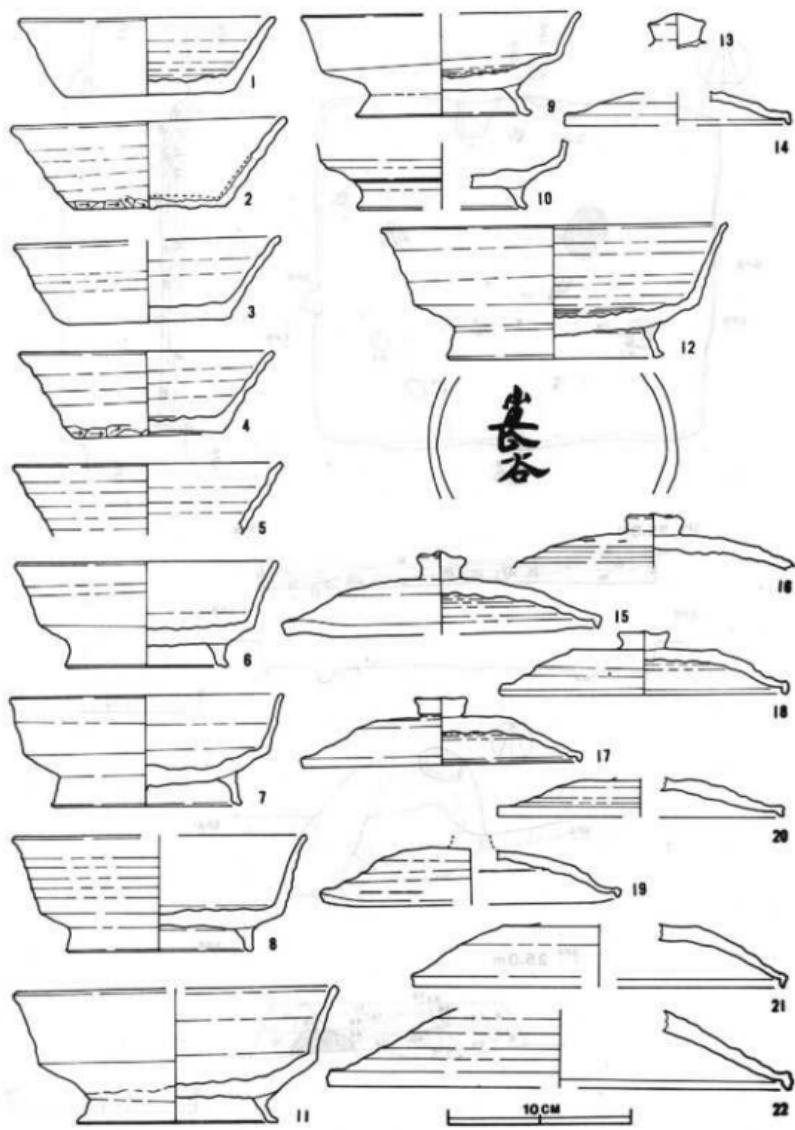
133号竪穴住居跡出土遺物観察表（第234・235・236図）

番号	種類	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
			底部はほぼ平底で、体部と底部は垂直な角度で分かれ。体部は外輪気味に外上方にのび、口縁部を丸くおさめている。右ロクロ水焼き成形で、裏部は回転洗削り済み。体部外と口縁部内・外側は硝ナテ調整。	
1	S	A 13.6 B 4.3 C 9.2		灰色 細緻・長石粒・板岩 微粒 普通

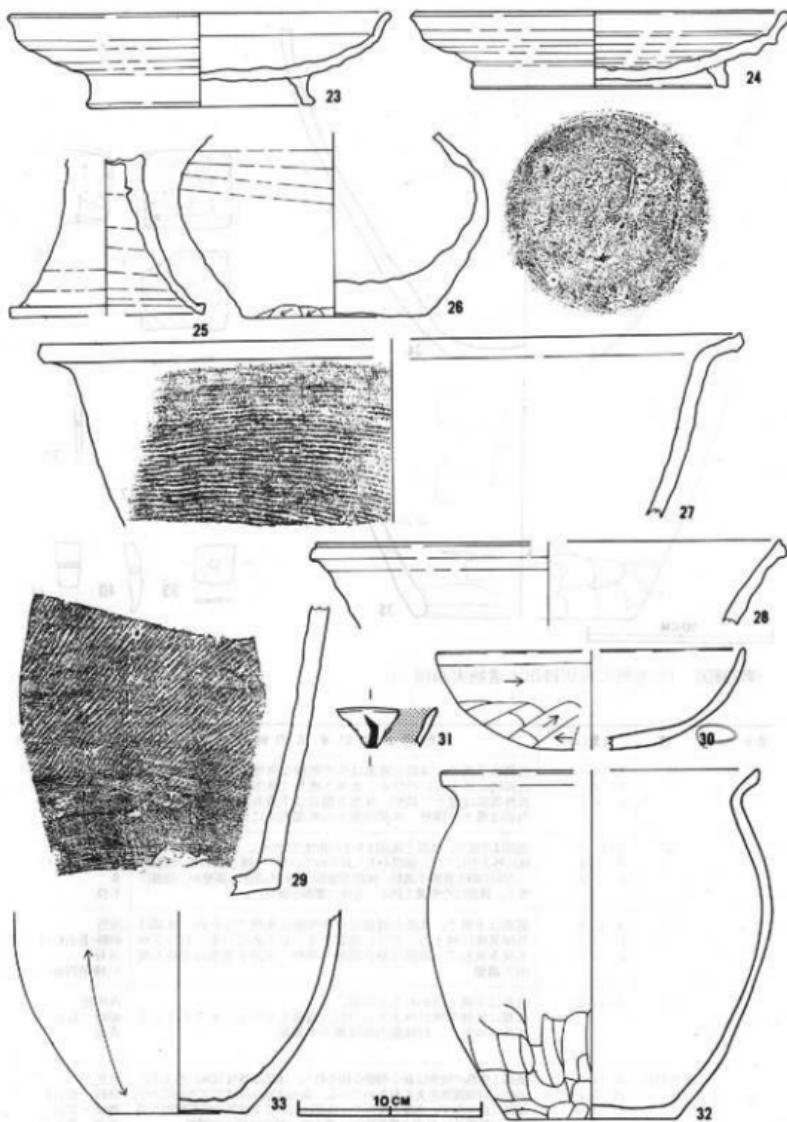


第233図 133号竪穴住居跡・窓実測図

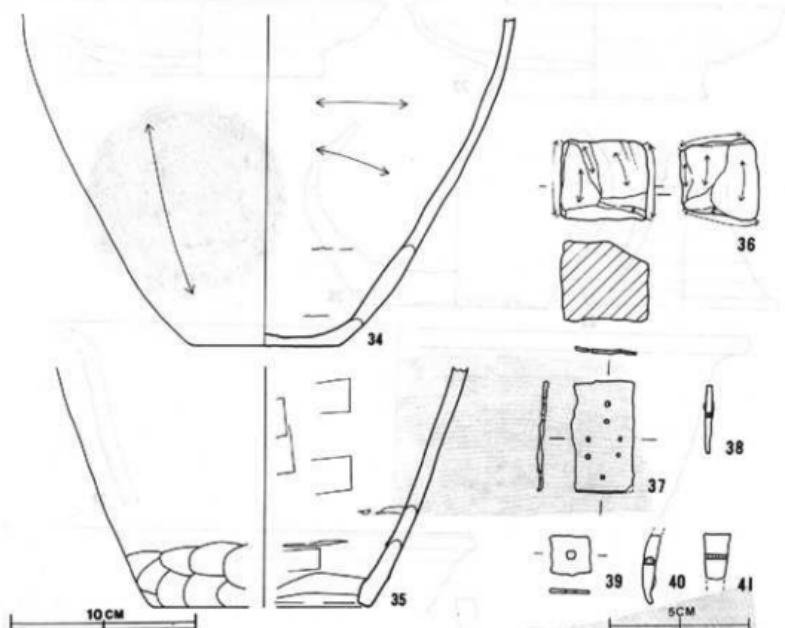
(1) 国営鹿嶋海上公園出土物出土地点：窓跡



第234図 133号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)



第235図 133号竪穴住居跡出土遺物実測図 (2)



第236図 133号竪穴住居跡出土遺物実測図(3)

番号	器 理	法量(cm)	形 态 お よ び 手 法 の 特 権	備 考
2	S 环	A 14.6 B 4.7 C 8.1	底部は平底で、体部と底部はやや明瞭な角度で分かれ。体部は直線的に外上方にのびる。水挽き成形で底部は削鉗尾切り。底部外周部は荒ナガ調整。体部下端部は手持ち荒削り調整、体部内面は横ナガ調整。体部内面から底部内面にかけ器壁が剥落。	灰白色 細砂・雲母・長石粒 不良
3	S 环	A (14.2) B 4.4 C 8.8	底部は平底で、体部と底部はあいまいな角度で分かれ。体部はやや内寄気味に外上方にのび、端部を丸くおさめている。水挽き成形で、底部は一方向の静止剝削り調整。体部下端部は手持ち荒削り調整か。底部は厚く、体部はやや薄く作る。全体に摩減が進行。	灰色 細砂・長石粒・雲母 多不良
4	S 环	A 13.6 B 4.7 C 8.0	底部は平底で、体部と底部はやや明瞭な角度で分かれ。体部は外側気味に外上方にのび、端部を丸くおさめている。右ロクロ水挽き成形で、底部は静止剝削り調整。体部下端部は手持ち荒削り調整。	灰色 細砂・長石粒・長石微粒 良好 口縁部内面に糠付着
5	S 环	A (14.3)	底部は平底と思われるが欠損。体部は外側気味に外上方にのび、端部を丸くおさめている。水挽き成形で。口縁部内面は横ナガ調整。	青灰色 細砂・長石微粒 普通
6	S 高台付环	A 14.0 B 5.7 D 8.9	底盤と体部の境界は鋭く明瞭な棱を持ち、体部は外反気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで下方に向いており、端部に面をなす。水挽き成形で、底部は右ロクロ使用の削鉗尾切り調整。口面・外面と底部内面は荒ナガ調整。	灰色 細砂・長石粒・長石 微粒・雲母 普通
7	S 高台付环	A 14.6 B 6.1 D 10.4	底部と体部の境界は明瞭な棱を持ち。体部は外傾気味にのび、口縁部は僅かに外反する。高台は貼り付けで、下方に向いており、端部に面をなす。右ロクロ水挽き成形で底部は削鉗尾切り調整。底部内面中位から体部内・外面、口縁部内・外面及び高台内・外面は横ナガ調整。	灰色 細砂・長石粒・長石 微粒 良

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
8 S	高台付坏	A(15.7) B 6.3 D 11.1	底部と体部の境界は明瞭な棱を持ち、体部は外輪気味に外上方にのび、口縁部はやや外反し、端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで下方に向いており、右ロクロ水洗き成形で底部は回転削り調整。底部内面中心付近を除き全体に横ナナ調整。	淡黄色 細砂・長石粒・礫・ スコリア なま焼け
9 S	高台付坏	A(14.9) B 5.5 D 9.6	底部と体部の境界は鋭く明瞭な棱を持ち、体部は外反気味に外上方にのび、口縁部を丸くおさめている。高台は貼り付けで「」の字形に外下方向にのび、端部に凸をなす。右ロクロ水洗き成形で底部は厚く、体部と高台は薄く作る。底部は回転削り調整。	灰色 細砂・長石粒・長石 微粒 普通
10 S	高台付坏	D(9.2)	底部と体部の境界はやや不明瞭で、体部はやや内輪気味にのびると思われる。高台は貼り付けで「」の字形に外下方向にのび、端部に凸をなす。水洗き成形で底部は回転削り調整。高台内・外面は横ナナ調整。	オリーブ灰色 細砂・長石粒 普通
11 S	高台付坏	A(17.2) B 7.4 D 10.9	大型高台付坏である。底部と体部の境界は鋭く明瞭な棱を持ち、体部はやや外反気味に外上方にのび、口縁部を丸くおさめている。高台は貼り付けで「」の字形に外下方向にのび、端部に凸をなす。右ロクロ水洗き成形で底部はやや厚く体部から口縁部にかけて薄く作る。底部は回転削り調整。	灰色 細砂・長石粒・長石 微粒・礫 普通
12 S	高台付坏	A(18.8) B 7.3 D 11.3	大型高台付坏である。底部と体部の境界はやや明瞭な棱を持ち、体部は外反気味に外上方にのび、端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで「」の字形に外下方向にのび、端部に凸をなす。右ロクロ水洗き成形で、底部はやや厚く体部から口縁部にかけて薄く作る。底部は回転削り調整。	灰白色 細砂・長石粒・礫 良好 底面部外面に墨書き
13 S	蓋		やや扁平な玉珠形のつまみ。 全体に横ナナ調整。	灰白色 細砂・長石微粒・ 雲母 普通
14 S	蓋	A(12.1)	天井部は丸味を帯びるが、中井上り平坦になる。天井部と口縁部の境界はやや明瞭な棱を持ち、口縁部は下方に向曲する。水洗き成形で、天井部中位迄は回転削り調整。中位から口縁部内・外面及び天井部内面は横ナナ調整。	青灰色 砂粒・長石粒・長石微粒 普通 天井部内面に漆付青
15 S	蓋	A(18.0) B 4.5	天井部中央に扁平な玉珠形のつまみが付く。天井部は丸くならかに下降する。天井部と口縁部の境界は明瞭な棱を持ち、口縁部は下方に向曲し、端部は凸をなす。右ロクロ水洗き成形で、天井部中位まで回転削り調整。つまみと天井部頂部及び口縁部内・外面は横ナナ調整。天井部内面に若干漆付青	オリーブ灰色 細砂・長石粒 普通
16 S	蓋		天井部中央にピターン状のつまみが付く。天井部は丸い。水洗き成形で、天井部頂部から天井部中位まで右ロクロ使用の回転削り調整。つまみは横ナナ調整。	黄灰色・經砂・長石 微粒・雲母 普通 天井部外面に重ね燒き痕
17 S	蓋	A 15.1 B 3.7	天井部中央に扁平なボタン状のつまみが付く。天井部は扁平で、天井部と口縁部の境界はやや明瞭な棱を持ち、口縁部は下方に向曲する。右ロクロ水洗き成形で。天井部は回転削り調整。つまみは横ナナ調整。	黄灰色 細砂・長石微粒・ 雲母 普通
18 S	蓋	A 15.4 B 3.5	天井部中央に中心の高く、周囲が凹むつまみが付く。天井頂部は、平坦で天井部と口縁部の境界は明瞭な棱を持ち、口縁部は下方に向曲する。右ロクロ水洗き成形で。天井頂部から天井部中央にかけ回転削り調整。つまみと口縁部内・外面は横ナナ調整。	青灰色 細砂・長石粒・長石 微粒 普通
19 S	蓋	A(16.0)	つまみは付くが欠損。天井部は丸く、天井部と口縁部の境界はやや明瞭な棱を持ち、口縁部は下方に向曲する。水洗き成形で、大井底部は左ロクロ使用の回転削り調整。	淡灰色・經砂・砂粒多 普通 天井部内面に自然物、大井部内面に重ね燒 痕・黒化焼成と思われる
20 S	蓋	A(15.3)	つまみは付くが欠損。天井部はやや丸味を帯び、天井部と口縁部の境界は明瞭な棱を持ち、口縁部は下方に向曲し、端部はやや尖る。水洗き成形で、天井部中位は回転削り調整。大井頂部と口縁部内・外面から天井部内面中位にかけ、横ナナ調整。	淡灰色 細砂・長石粒・長石 微粒 普通
21 S	蓋	A(20.1)	天井部中央につまみが付くと思われるが欠損。天井頂部は回転削りにより平坦に仕上げられる。天井部と口縁部の境界はやや明瞭な棱を持ち、口縁部は下方に向曲する。水洗き成形で天井頂部から天井部中位にかけ回転削り調整。	灰色 細砂・長石粒・長石 微粒 普通
22 S	蓋	A(25.0)	謎の蓋と思われる。天井部はなだらかに下降し、天井部と口縁部の境界は明瞭な棱を持ち、口縁部は下方に向曲する。水洗き成形と思われる。口縁部内・外面と天井部内面は横ナナ調整。	灰白色 細砂・長石粒・長石 微粒 普通

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
23	古付蟹	A 24.0 B 5.1 D 12.3	体部は内側外側に外上方へ大きく開く。体部と口縫部の境界は明瞭な縦を持ち、口縫部はやや外反し、縫部を丸くおさめている。高台は貼り付けで「ハ」の字状に外下方にのびる。右クロ水焼き成形で底部は凹状削り。口縫部内・外側と高台内・外側は横ナナ子調整。	オリーブ灰色 砂粒・長石粒・灰右 鐵紋 普通
24	古付蟹	A 20.2 H 4.2 D 13.8	底部と体部は境界をなさない。体部は外上方に大きめに開き、体部と口縫部の境界は幅く明瞭な縦を持ち、口縫部は外縫気味に立ち上がり、端部を丸くおさめている。高台は外下方にのび、縫部に面をなす。右クロ水焼き成形で口縫部内・外側と高台内・外側は横ナナ子調整。	灰色 砂粒・長石粒・灰 良好 底部外側に煙割分
25	高 壱	E(10.3)	通しのない脚部で縫部は上方にのびて面をなす。粘土接着上げ成形と思われる。内・外側は横ナナ子調整。	青灰色 砂粒・長石粒・雲母多 普通
26	足 無 沢	C 10.1	底部は平底で、体部は内側しつ立ち上がり、網は強く張る。底部は厚く体部にむかって薄く作る。底部は多方向の底削り調整。肩から網にかけ四輪削り調整。底部内側から体部内面は横ナナ子調整。	明紫灰色 砂粒・長石粒・灰右 鐵紋・鐵 普通
27	蟹	A(38.0)	大形蟹。網の張らない体部から「く」の字状に屈曲する口縫部が付き、口縫外端面をなす。体部外側は平行叩き目調整。体部内面は尾ナナ子及びナナ子調整。口縫部内・外側は横ナナ子調整。全体に厚底が進行。	灰白色 砂粒・長石粒・雲母 なま焼け
28	蟹	A(25.2)	網の張らない体部から直線口縫部に至る。口縫外端部に面をなす。内・外側とも横ナナ子調整。	暗青灰色 砂粒・長石粒・長右 鐵紋・鐵 良好
29	底		平底の底部で体部は直線的に外上方にのびる。体部外側は平行叩き目調整。体部内面はナナ子調整。体部下部は静止尾削り調整。	灰色 砂粒・長石粒・長右 鐵粒・鐵 普通
30	壺	A(16.7) B 5.4	底部と体部の境界は明瞭でなく、体部は内側しつつ外上方にのびる。口縫部を丸くおさめている。底部内面は垂直子調整。体部内面と口縫部内・外側は尾ナナ子調整。底部外側と体部外側に尾削り調整。	棕色 砂粒・長石粒・スコ リア 普通
31	壺		口縫部から体部の一部は水焼き成形と思われる。内面は尾削り後黒色処理。	にじい褐色 砂粒 普通 体部外側に墨跡
32	腹	A(17.1) B 18.8 C 9.3	底部は平底で、体部は内側しつ立ち上がり、「く」の字状に屈曲する口縫部が付き、口縫外端部に面をなす。口縫部内・外側は横ナナ子調整。体部外側は尾削り及び尾ナナ子調整。底部内面と体部内面はナナ子調整と思われる。底部外側は丁寧な尾ナナ子調整と思われる。全体に厚底が進行。	浅黄褐色 砂粒・長石粒 普通
33	腹	C 7.6 F 17.6	底部は平底で、体部は内側しつ立ち上がる。体部外側は腹位の尾ナナ子調整。体部内面は尾ナナ子及びナナ子調整。底部内・外側はナナ子調整。	にじい褐色 砂粒・長石粒・雲母 普通
34	壺	C 7.9	底部は平底で、体部は内側しつ立ち上がる。体部外側は尾ナナ子調整。体部内面と底部内・外側は荒い尾ナナ子調整。内面に底部と体部の接合部を残す。	褐色 砂粒・長石粒・雲母 良好
35	壺	C(11.6)	底部は正円状に抜ける。底部から体部は外縫気味に外上方にのびる。粘土組積み上げ成形で、体部内面に粘土組糸を残す。体部内・外側は尾ナナ子調整。底部下位は尾削り調整。	褐色 砂粒・長石粒・雲母 普通
番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
36	砾石	3.1×2.8 2.7	方形を呈し、全面に使用 板が認められる。	泥鉢岩 37.8g
37	小札	長径(4.0) 小札の小札で七個の小札 幅 2.2	を有す。	

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
38	計 か	1.4×0.25 0.15	断面方形の針金板を有する。		39	不 明		39は中央に孔を有し、長さ1.3cm、幅1.4cm。	
					41	鉄製品			

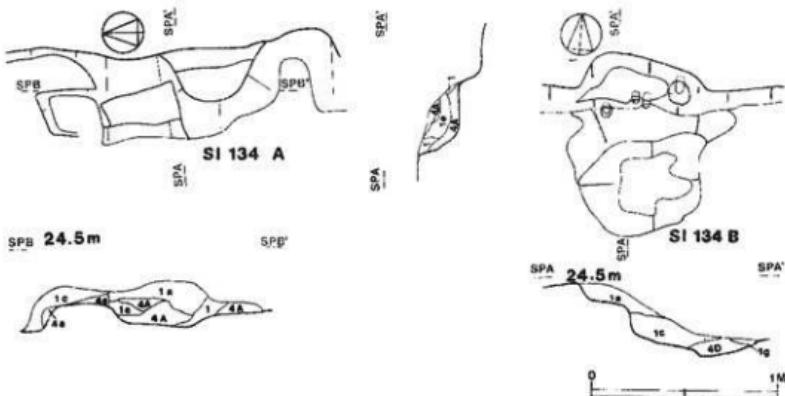
134-A号竪穴住居跡（第237・238図）

調査区K-D2b区を中心に確認され、119号竪穴住居跡の南側に位置し、134-B号竪穴住居跡と重複し、134-B号竪穴住居跡より新しい。規模は、東西4.54m・南北3.05mを測り、主軸方向N=81°-Eを指す長方形を呈している。

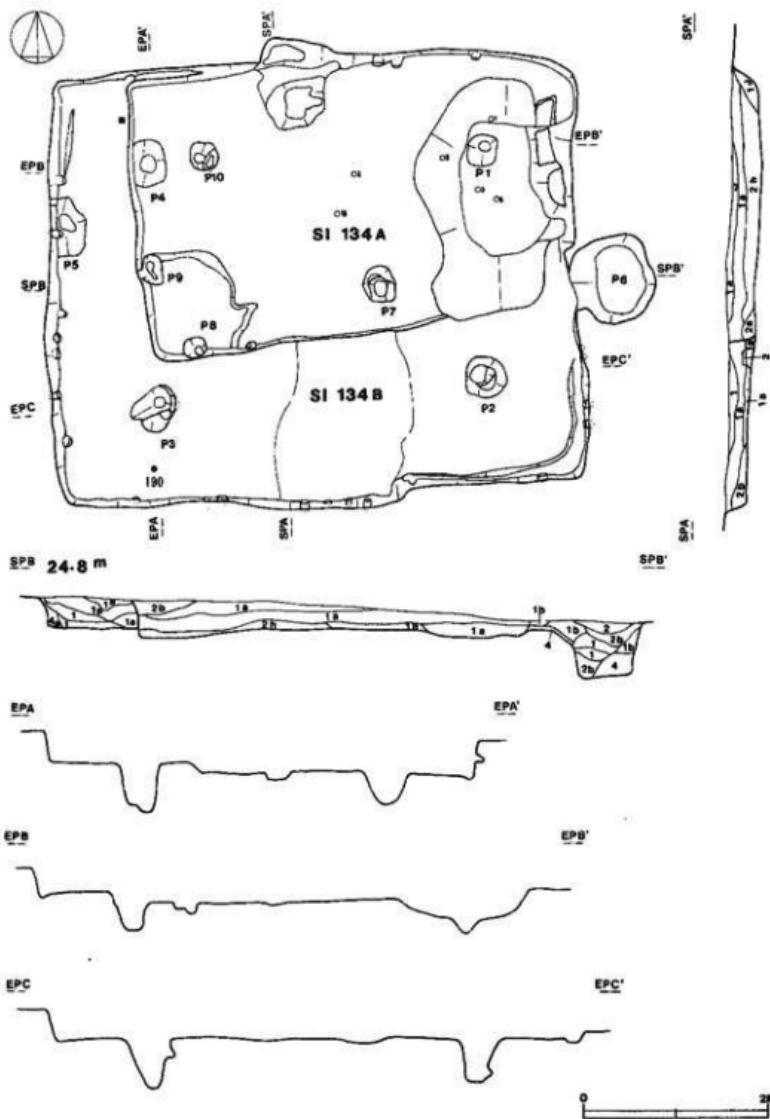
覆土は、おおむね褐色で、自然堆積とみられる。壁は西壁が高さ40cm、他は高さ30cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面が北側に若干傾斜しているほかは、ほぼ平坦でやや軟弱である。ピットは、P₇・P₁₀が当跡に伴うものとみられる。深さは30cm前後を測る。東壁寄りに2.6×1.5mの長辺円形の上塙、南西隅に1×1mの隅丸方形の土壤が存在するが、前者は当跡より新しいもので、竈を破壊している。

竈は、東壁ほぼ中央部に存在したものとみられるが、前述のように土壤によって破壊され、焼土がわずかに認められる程度である。

遺物は、土師器・須恵器・樂器土器・漆紙・瓦・羽口・鉄製品・鉄滓が、東半部の覆土および床面付近から出土している。



第237図 134-A・B号竪穴住居跡概要図



第238図 134-A・B号竪穴住跡実測図



第239図 134-A号竖穴住居跡出土遺物実測図

134-A号竖穴住居跡出土遺物観察表（第239回）

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	環	A(13.6) B 4.5 C (9.4)	底部は平底で、体部と底部は鋸削りにより明瞭な角度で分かれ。体部はやや外反気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。水抜き成形で、底面は多方向の静止磨削面。体部下端部は手持ち鋸削り調整。	内面一灰黄色 外面一暗灰色 細砂・長石粒・雲母 微量 不良
2 S	環	A(10.7) B 3.7 C (6.9)	底面は平底で、体部と底部は明瞭な角度で分かれ。体部は内背気味に外上方にのび、口縁端部をやがて尖る。水抜き成形で、底面は静止磨削面。口縁部内・外側、体部内・外側及び底部内面は横ナナゲ調整。体部下端部に一筋ナナゲが見られる。全体にやや磨手作り。	灰色 細砂・長石粒・長石 微量 良好
3 S	高台付环	D 8.3	底部と体部の境界は、ややあまい棱を持つ。高台は貼り付けで、外下方方向にのび、内外端部に棱をなす。石クロクの水抜き成形で、底部は回転鋸削り調整。高台内・外側は横ナナゲ調整。	灰色 細砂・長石粒・長石 普通
4 S	高台付环	D (7.3)	高台は貼り付けで外下方方向にのび、外端部に鋸けた縫をもつ。水抜き成形で、底部は右クロク使用の回転鋸削り調整。高台内・外側は横ナナゲ調整。	灰色 細砂・長石粒・長石 微量 普通 底部外側に鉛錆跡
5 S	短 鼻 罩	A(15.6) F 21.6	ほぼ球形をなす体部から頭部内面にあまい棱を残しつつ、「く」の字状に屈曲する口縁部が付く。口縁外端部にやや丸味を帯びた面をなす。内面に水抜き成形を思わせるクロクが残る。	灰色 細砂・長石粒・長石 微量 良好 外側全体に黄白色の自然釉
6 S	鼻		平底の底部で体部は外上方にのびる。体部外側は平行叩き目調整。体部下位は静止磨削面調整。体部内面はナナゲ調整。	灰色 細砂・長石粒・長石 微量 良好
7 S	鼻		体部の一部。体部外側は平行叩き目調整。体部内面はナナゲ調整。	明褐色 細砂・長石粒 普通
8 S	鼻		体部の一部。体部外側は平行叩き目調整。体部内面はナナゲ調整。	灰色 細砂・長石粒・やや精良 良好
9 H	環	C (7.2)	底部は平底で体部と底部はややあまい角度で分かれ。体部は内背気味に外上方にのびる。水抜き成形と思われる。底部と体部下端部は回転鋸削り調整。底部内面と体部内面は磨削後黒色處理。	にふい橙色 砂粒・長石粒 普通
10 H	高台付环	D (7.0)	高台は貼り付けで下方に向いてのび、端部を丸くおさめている。水抜き成形と思われる。底部は右クロク使用の回転鋸削り調整。高台内・外側は横ナナゲ調整。	灰褐色 細砂・長石粒・雲母 普通
11 H	高台付环	D 6.7	高台は貼り付けで外下方に向いてのび、外端部に優かな段となく。水抜き成形と思われる。底部は右クロク使用の回転鋸削り調整。底面内凹は磨削後黒色處理。高台内・外側は横ナナゲ調整。	にふい橙色 砂粒・長石粒 普通
12 H	高台付环		体部の一部。水抜き成形と思われる。内面磨削後黒色處理。	にふい橙色 細砂・長石粒散在・雲母 普通 体部外側に墨書
13 H	高台付皿	A(13.4) B 2.6 D 6.6	体部は内背気味に外上方に大きく開き、口縁端部を丸くおさめている。高台は削り出して幅く尖る。水抜き成形で底部は回転鋸削り調整。底は全体に横ナナゲ調整。全体に磨手作り。	にふい橙色 細砂・長石・雲母 普通
14 H	高环		脚部のみ。粘土巻き上げ成形と思われる。内面に螺旋状の粘土痕を残す。外側全体は横ナナゲ調整。	にふい橙色 細砂・長石粒・石英粒 普通
15 新	平 瓦	厚さ(6.8)	頭は無段式で、瓦当面内区に均整感草文、外区に神文を配す。凸・凹面は削り調整。	紫褐色 細砂・長石粒多 豊穣

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
16	砥石	3.7×4.5 1.6	台形を呈し、全面に使用 痕が認められる。一部に 擦痕がみられる。	波紋岩 35g	18 · 19	釘		18は頭部を折り曲げてい る。 19は彎曲している。	
17	砥石 (転用鉄)	5.6×4.1 2.3	瓦面を除いて全面面に使 用痕が認められる。	瓦製	20	管状 鉄製品	全長2.1 径1.0	厚さ0.5mmの鉄板を管状 に折り曲げている。	

134-日号堅穴住居跡（第237・238図）

調査区D2b₆区を中心に確認され、北半部を134-A号堅穴住居跡によって破壊されている。規模は、東西5.69m・南北4.83mを測り、主軸方向N-2°-Wを指す長方形を呈している。

覆土は、大半が失われているが、褐色・暗褐色土を主体とする自然堆積とみられる。壁は80度前後で立ち上がり、壁高は20~40cmを測る。壁面下位および床面との境付近に、径10cm内外で、真横または30度位の角度で外下方へ向かう深さ10cm内外の小ピットが、各壁に數か所から10か所程が不規則に存在する。南東コーナー部の壁直下には、幅15cm・深さ5cmの壁溝が認められる。床面は北側が失われているが、残存部は壁周辺が若干低くなり、ほぼ平坦である。南壁下から北壁に向けての幅1.5mは良く踏み固められ、他はやや軟弱である。ピットは8か所あり、各コーナー部のP₁~P₄は主柱穴とみられる。深さは35~52mを測る。P₂とP₃は2本のピットが重複し、建て替えが考えられる。P₆は97×95cmの楕円形で、東壁中央部の壁外へ張り出して存在する。深さ56cmを測る。

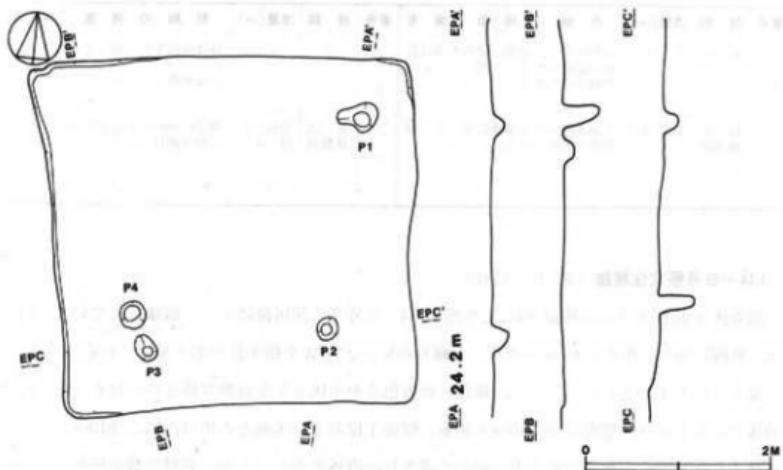
竈は、北壁中央部に位置するが、134-A号堅穴住居跡によって破壊されている。壁外へ15cm程掘り込まれてることと、焼成部が皿状に掘り下げられていることが確認された。

遺物は極少量で、土師器・磁石・鉄製品・漆紙・漆しづり料が出土している。漆紙は南壁下や西寄りの床面、漆しづり料は南壁下中央部の床面からそれぞれ出土している。

135号堅穴住居跡（第240図）

調査区D3b₃区を中心に確認されているが、確認面がほぼ床面で、上部は削平されている。推定規模は、東西3.94m・南北3.73mを測り、主軸方向N-7°-Wを指す略方形を呈している。床面は、確認できない部分もあるが、わずかに東側へ傾斜する。ピットは4か所確認され、深さは10~30cmを測る。竈は確認できなかった。

遺物は、少量の土師器・須恵器・鉄製品・鉄滓が、床面から出土している。



第240図 135号竪穴住居跡実測図

135号竪穴住居跡出土遺物観察表(第241図)



第241図
135号竪穴住居跡
出土遺物実測図

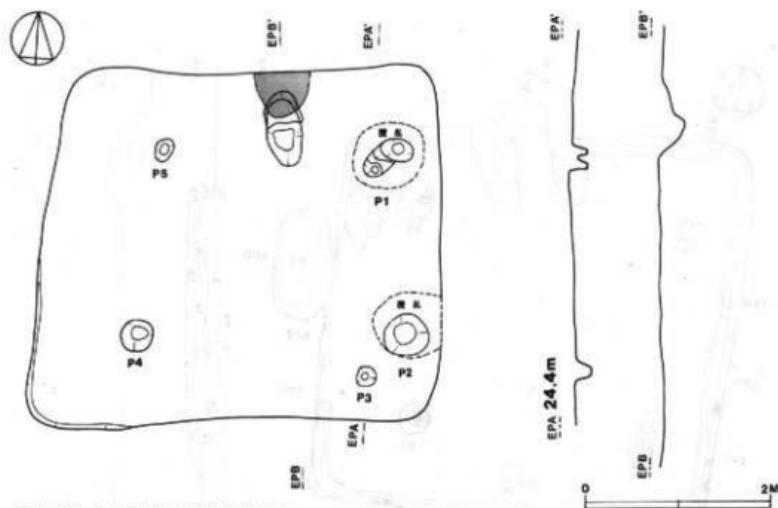
番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
1	刀子	全長(4.0) 幅 0.9	基部片とみられるが両端 部欠損。	木質付 看

136号竪穴住居跡(第242図)

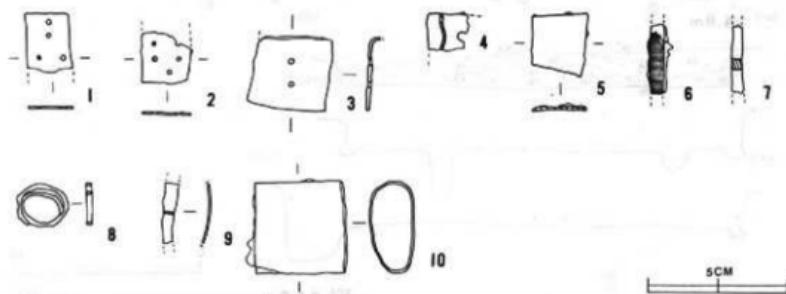
調査区D3 b2区を中心に確認され、135号竪穴住居跡の西側に位置している。上部が削平され、確認面が床面または床面より下位にあり、壁が確認できたのは、南西コーナー付近だけである。規模は、東西4.3m・南北3.78mを測り、主軸方向N-2°-Wを指す隅丸長方形を呈している。ただ、東壁は70cm程東側にあったと推定される。床面は擾乱もみられるが、ほぼ平坦である。ピットは5か所確認されたが、P₁～P₄が主柱穴とみられ、深さは15～48cmを測る。

竈は、焼成部の掘り込みと若干の焼土しか残存しないが、北壁中央部に存在していた。

遺物は、少量の土師器・須恵器・石器・鉄製品・鉄滓が、南西隅の床面から出土している。



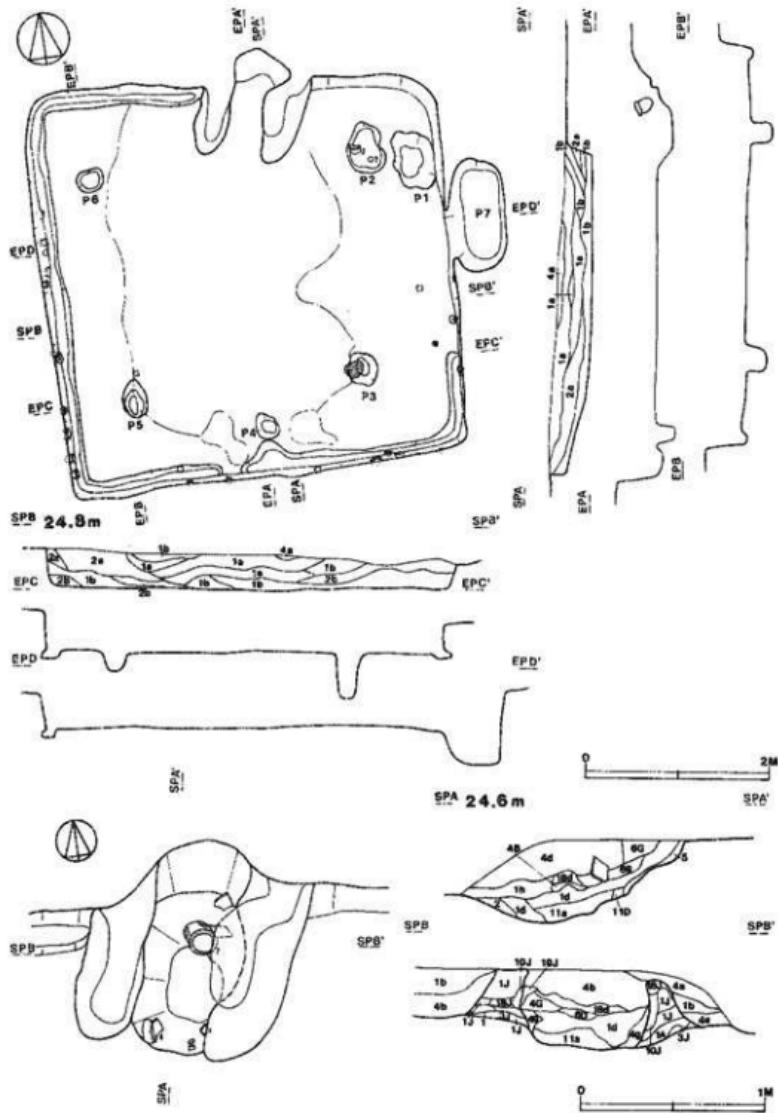
第242図 136号竪穴住居跡実測図



第243図 136号竪穴住居跡出土遺物実測図

136号竪穴住居跡出土遺物観察表（第243図）

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
1 1 4	小札		1は全長2.1cm、幅1.5cm 3は小さく思われる。		8	リング	外法 1.8×1.5 内法 1.0	幅1.5mmの紐状の鉄がリ ング状に巻いている。	
5	短筒形 鉄製品	全长2.0 幅 1.9 厚さ0.1	台形状を呈する鉄片。		9	不明 鉄製品	外法 2.1×0.4 内法 0.05	両端部欠損。	
6 7	釘		いずれも両端部欠損。	6は木 質付着	10	鍔	全长3.3 幅 3.3 厚さ0.1	断面が倒卵形を呈してい る。	



第244図 137号堅穴住居跡・竪穴測図

137号竪穴住居跡（第244回）

調査区D3e区を中心に確認され、東西4.44m・南北4.39mを測り、主軸方向N-2°-Wを指すほぼ方形を呈している。

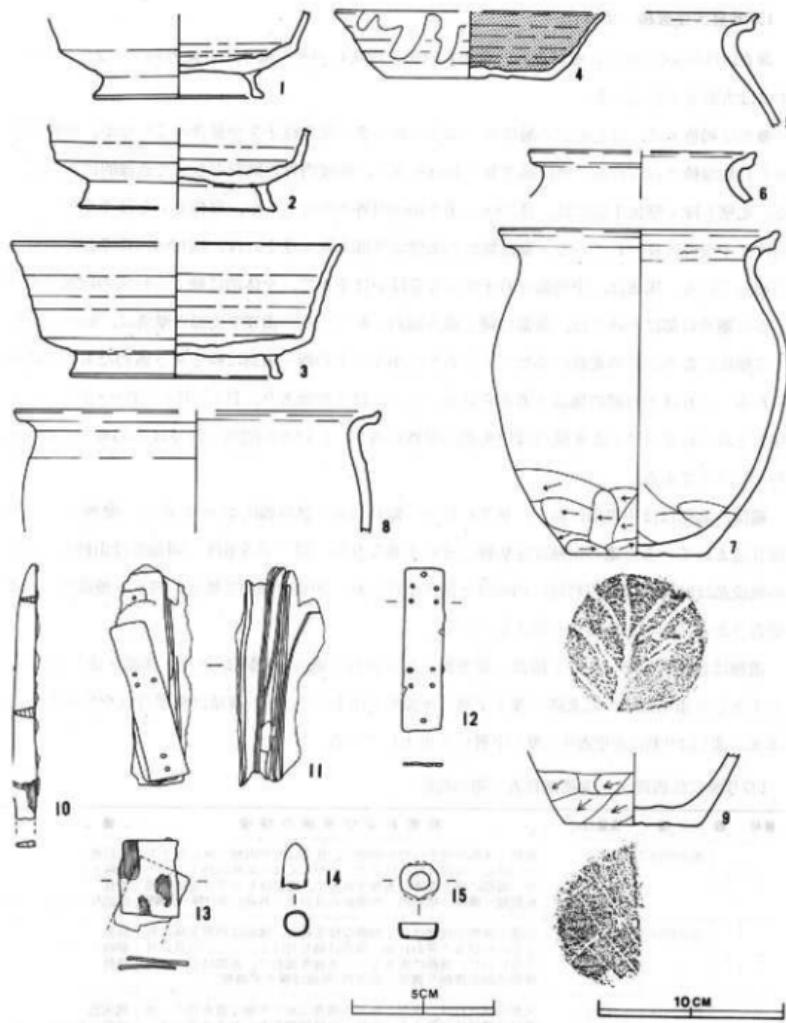
覆土は褐色土で、ほとんどの層にローム小ブロック・炭化粒子を少量含んでいるが、堆積状態から自然堆積とみられる。壁は高さ36~40cmを測り、80度内外の傾斜をもって直線的に立ち上がる。北壁を除く壁面下位には、径10cm・深さ10cm内外の小ピットが、真横ないしはやや外下方へ向けて不規則に穿たれている。竪西側から東壁北半部を除く壁下には、幅12cm・深さ10cmの縫溝が回っている。床面は、中央部が若干低くなるほかは平坦で、全体的に硬く、柱穴の内側の南壁下から竪焚口部にかけては、非常に硬く踏み固められている。南壁中央部の縫溝は、50cmにわたって幅広になり、その北側に小ピットがあり、小ピットの西・東側に砂を突き固めたものが認められる。これは入口部の施設と考えられる。ピットは7か所あり、P₂・P₃・P₅・P₆がが柱穴とみられる。P₇は東壁ほぼ中央部の壁外にあり、1.19×0.62m・深さは0.65mを測る梢円形のピットである。

窓は、北壁ほぼ中央部にあり、長さ1.17m・幅1.11m・焚口幅0.41mを測り、壁外へ27cm程掘り込まれている。窓の主軸は住居跡のそれと異なりN-22°-Eを指す。内袖部は山砂を突き固め焼成部は80cmのほぼ円形状に13cmほど掘り下げられ、30度の傾斜で煙道へ続く。焼成部やや奥壁寄りから完形の土師器甕が出土している。

遺物は比較的少ないが、土師器・須恵器・瓦・羽口・砥石・鉄製品・鉄滓・漆紙・漆しづり料が主として南半部と、北東隅の覆土下層・床面から出土している。漆紙は東壁付近やや南寄りの床面、漆しづり料は南壁寄りの覆土中層から出土している。

137号竪穴住居跡出土遺物観察表（第245回）

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	高台付环	D 8.8	底部と体部の境界はやや明瞭で、体部はやや内骨氣味に外上方にのびる。高台は貼り付けで、ややふんばり気味に外下方にのび、窓部に窓をなす。水洗き成形で、底部は右クロ使用の圓転免削り調整。体部内・外側から高台内・外側にかけ模ナナ調整。	灰白色 細砂・泥母 不良 体部内・外側に浅付着
2 S	高台付环	D(10.6)	底部と体部の境界は鋭く明瞭な棱を持ち、体部は内骨氣味に外上方にのびると思われる。高台は貼り付けで、「ハ」の字状に外下方にのび、窓部に窓をなす。水洗き成形で、底部は右クロ使用の圓転免削り調整。高台内・外側に模ナナ調整。	灰色 細砂・長石粒 良好
3 S	高台付环	A(17.6) B 7.2 D 11.4	人形の高台付环。底部と体部の境界は鋭く明瞭な棱を持ち。体部は外骨氣味に外上方にのび、口縁底部を丸くおさめている。高台は貼り付けで「ハ」の字状に外下方にのびる。右クロ水洗き成形で底部は圓転免削り。高台にやや歪みがあるが正確な作り。	褐色 砂粒・長石粒・長石 微粒多 良好
4 H	环	A(14.4) B 3.6 C 8.9	底部は平成で、底部と体部はやや明瞭な角度で分かれ。体部は外骨氣味に外上方にのび、口縁底部を丸くおさめている。水洗き成形で、底部は右クロ使用の圓転免削り調整。口縁底部・外側に模ナナ調整。底部下端部同底部削り調整。内面無色釉味。	にぶい黄褐色 細砂・泥母 普通 体部内・外側に浅付着
5 H	甕		胴の歪った体部から、口縁部はやや丸く曲じ、下方向に段をなす。口縁底部は外反気味につまみ出す。口縁部内・外側は模ナナ調整。体部内・外側はナナ調整。	にぶい褐色 砂粒・長石粒・泥母 普通



第245図 137号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
6	H	A (12.1)	側の張った体部から、丸く屈曲する口縁部が付き、端部をやや外反気味につまみ出す。口縁部内・外面は横ナギ調査。	にぶい褐色 砂粒・長石粒・雲母 普通

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
7	鋸	A 15.0	底部は平底で体部は内骨しつつ立ち上がり、丸く彎曲する口縁部が付く。端部を外上方につまみ出す。口縁部内・外面は横ナナ子調整。底部内面はナナ子調整。体部内・外面は丸ナナ子後。ナナ子調整。底部下位は笠削り調整。全体に丁寧な作り。	に近い赤褐色 砂粒・長石粒・雲母 ・透 底部外面に木葉痕
		B 17.5		
		C 7.4		
		F 15.9		
8	鋸	A(19.6) F 18.8	瓶の張った体部から、丸く彎曲する口縁部が付き、端部を外上方につまみ出す。口縁部内・外面は横ナナ子調整。体部内・外面はナナ子調整。	灰赤色 砂粒・長石粒・雲母 ・透
9	鋸	C 7.2	平底の底部で、体部は内骨しつつ立ち上がると思われる。底部内面と体部内面はナナ子調整。体部外面は笠削り調整。	に近い橙色 砂粒・長石粒・雲母 ・透 底部外面に木葉痕
番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	備考
10	刀子	全长(9.2) 刃幅0.7 刃長8.3	刃部と基部の間に開き有するが基部の基部欠損。	木質付 着
11	小札	11:3 8枚が束になったもの、 12:8 完成品で全長5.8cm、 幅1.4cm。		14 不 明 鉄製品 外法1.4 内法0.7
12	鉄製品	2.7×2.0 厚さ 0.1	2枚が重なる。	15 鉄製品 外法1.4 内法0.7
13	鉄製品			木質付 着

138号竪穴住居跡（第246図）

調査区KD3ei区を中心に確認され、137号竪穴住居跡の西側に位置している。東西4.82m・南北4.03mを測り、主軸方向N-1°Wを指す隅丸長方形を呈している。

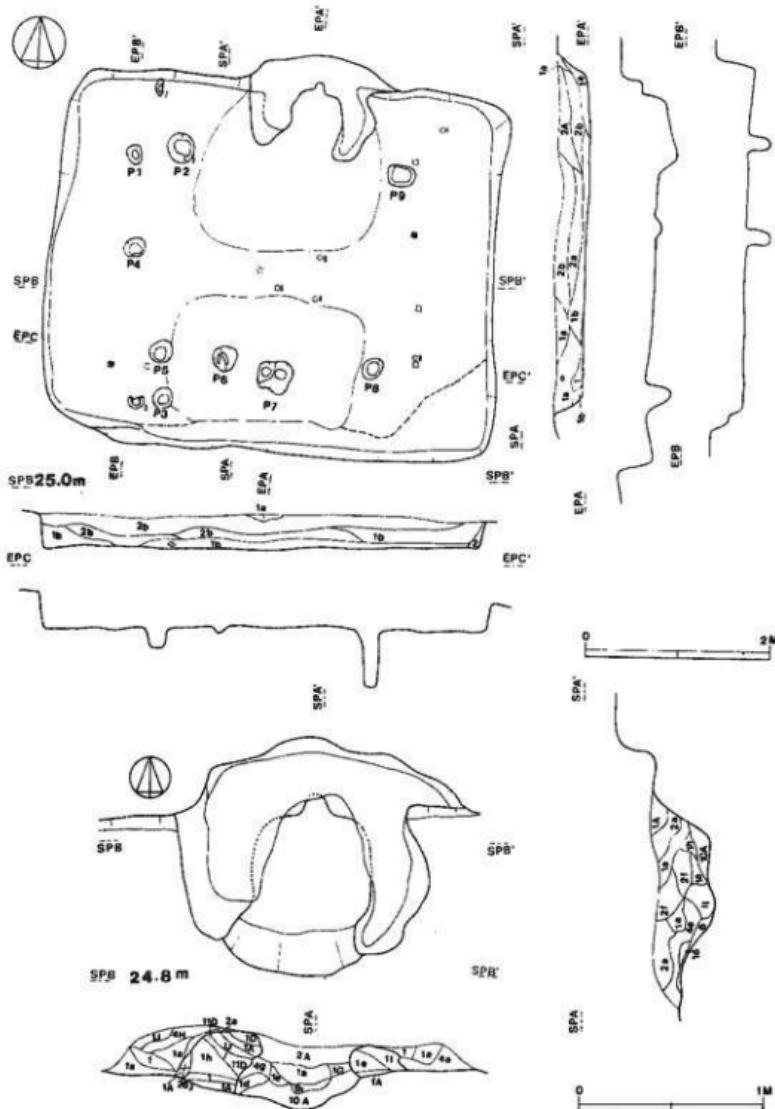
覆土は、ローム小ブロック・炭化粒子を含む層が多いが、褐色・暗褐色土を主体とする自然堆積とみられる。壁は高さ26~40cmを測り、80度内外の傾斜をもってほぼ直線的に立ち上がる。床面は全体的に起伏を有し、南壁付近・焚口前面の柱穴間は特に踏み固められているが、東・西壁付近は軟弱である。ピットは9か所確認され、P₂・P₅・P₈・P₉が主柱穴と考えられる。深さは22~60cmを測る。

窓は、北壁ほぼ中央部にあり、上部が破壊されているが、長さ1.0m・幅1.35m・窓口幅0.6mを測り、壁外へは掘り込みますに構築されている。袖は山砂を用い、焼成部は床面より17cm低く、50度の傾斜で煙道へ続く。焼土は両袖部直下に多い。

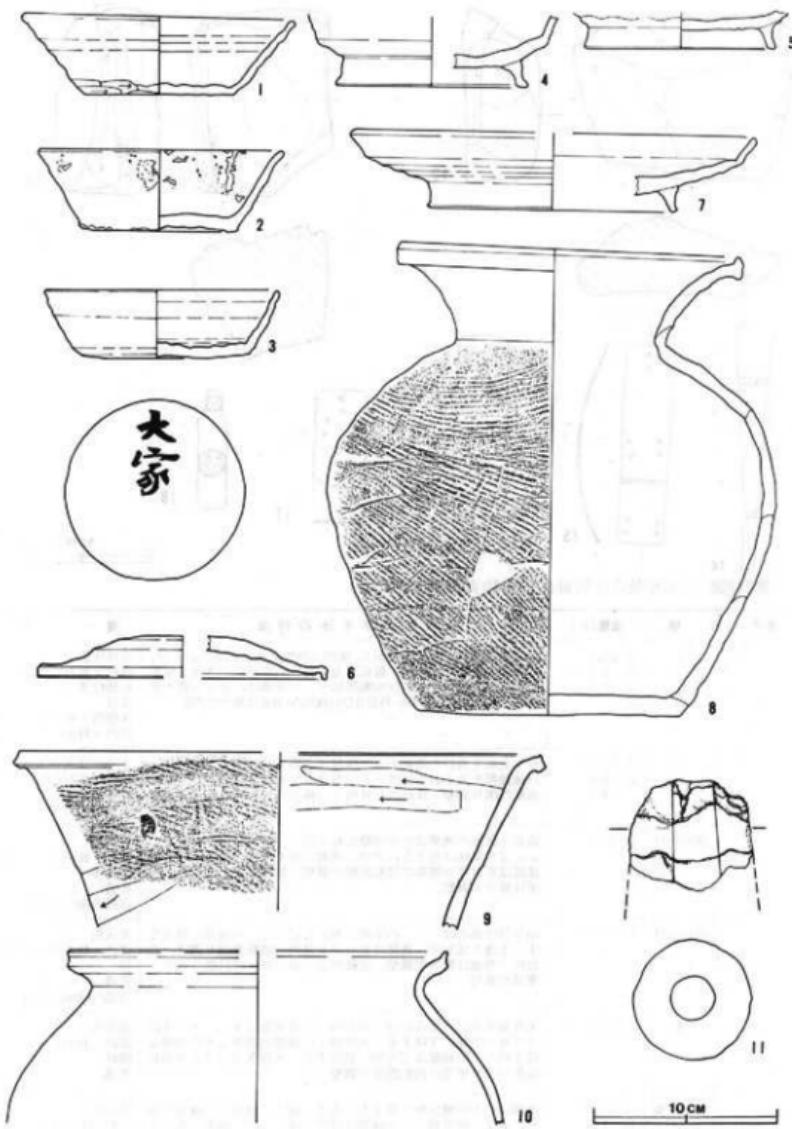
遺物は、土師器・須恵器・羽口・砥石・鉄製品・鐵滓が、覆土中・下層・床面からほぼ全域にわたって出土している。

138号竪穴住居跡出土遺物観察表（第247-248図）

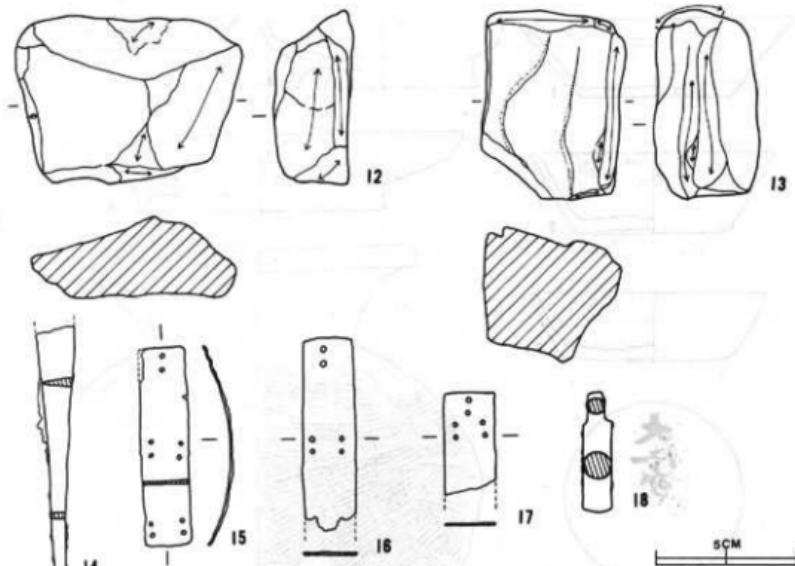
番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	A 14.4 B 4.4 C 8.0	底部は平底で、体部と底盤はやや明瞭な角度で分かれ。体部は外焰気味に外上方にのび、口縁部を丸くおさめている。右口クロス抜き成型で、底盤は回転窓切り後、一方の静止窓削り、外底盤は丸ナナ子調整。体部下端部手持ち窓削り調整。	灰白色 砂粒・長石粒・長石 ・透 褐色多・雲母 ・透



第246図 138号竪穴住居跡・窓実測図



第247図 138号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1)

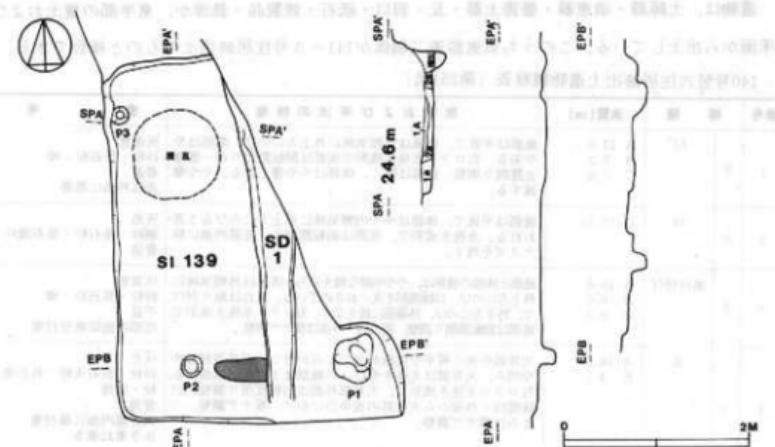


第248図 138号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
2	壺 S	A 13.1 B 4.4 C 8.2	盛り上がった平底の底部から、体部は外縁気味に外上方にのび、口縁部は僅かに外反し、端部を丸くおさめている。水挽き成形で、底部は右ロクロ使用の回転窓切り。外端部は、かるい段ナデ調整。底部内面と体部内・外面及び口縁部内・外面は横ナデ調整。	暗青灰色 砂粒・長石粒多・長石微粒多 良好 体部内・外面と口縁部内・外面に漆付着
3	壺 S	A 12.7 B 3.8 C 9.1	やや丸味を帯びた底部から、体部は内縁気味に外上方にのび、口縁部を丸くおさめている。右ロクロ水挽き成形で、底部は回転窓切り調整。体部内・外面と口縁部内・外面は横ナデ調整。	オリーブ灰色 砂粒・長石粒・埋良好 底部外面に墨書き
4	高台付壺 S	D (10.4)	底部と体部の境界はやや明瞭な棱を持つ。高台は貼り付けで、ふんぱり気味に外下方にのび、端部に面をなす。水挽き成形で、底部は右ロクロ使用の回転窓切り調整。体部外端と高台内・外面は横ナデ調整。	青灰色 細砂・長石粒・長石微粒多 普通 底部内面に漆付着
5	高台付壺 S	D (10.3)	貼り付け高台は「ハ」の字状に外下方にのび、外端部に棱をなす。水挽き成形で、底部は右ロクロ使用の回転窓切り調整。高台内・外面は横ナデ調整。底部外面に高台貼り付け痕を残す。摩滅が進行。	青灰色 細砂・長石粒・雲母普通 底部内・外面に漆付着
6	壺 S	A (15.7)	天井部中央につまみが付くが欠損。天井頂部は丸く、天井中位より反り気味に下降する。天井部と口縁部の境界はやや明瞭な棱を持ち、口縁部は下方向に屈曲する。水挽き成形で天井頂部は右ロクロ使用の回転窓切り調整。	緑灰色 細砂・長石粒・長石微粒普通
7	台付壺 S	A (21.9) B 4.2 D (13.6)	体部はやや内縁気味に外上方へ大きく開き、体部と口縁部の境界にあまい棱を持つ。口縁部は外縁気味にのび、端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで、外下方にのび外端部に棱をなす。水挽き成形で口縁部内・外面と高台内・外面は横ナデ調整。端正な作り。	灰白色 砂粒・長石微粒・雲母多 やや不良

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考	
8	S	短頭甌 A 18.4 B 25.3 C 14.3 F 24.3	底部は平底で、体部は内湾しつつ立ち上がり、「く」の字状に屈曲し大きく外反する口縁部が付く。口縁外端部は僅かに段をなし、上方に広がり面をなす。甌部外面に一条の沈線を巡らす。体部外面は平行叩き目調整。底部外面は箒ナジとナゼ調整。	灰色 細緻・長石粒・長石 微粒多 普通	
9	H	甌	脛が張らず、直線的に外上方にのびる体部から外反する口縁部が付く。口縁外端部は下方向に段をなし、内傾する面を作り先端は尖る。体部内面は横位の箒ナジで一部指彫押圧調整。体部外面は平行叩き目調整後ナゼ調整。内面に粘土痕跡。	にぶい橙色 砂粒・長石粒・雲母 多 普通 体部内面に焼付着	
10	H	甌	A(20.5)	丸く脛の張った体部から丸く屈曲し、外端部に明瞭な棱をもつ口縁部が付く。口縁端部を外上方につまみ出す。口縁部内・外面は箒ナジ調整。体部内・外面は箒ナジ後、ナゼ調整。	にぶい橙色 砂粒・長石粒・雲母 普通

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
11	羽口	全長(6.1) 外径 6.2 孔径 2.2	先端部。箒削り痕を残す。 黒く物化する		14	刀子	全長(8.8) 茎径0.5~1.3	茎部、 刃部欠損。	
12	砥石	8.1×5.8 2.7	長方形を呈し、部分的に使用痕が認められる。	砂岩 157.5g	15 17	小札		15は全長7.05cm、幅1.7cm で彎曲し、ほぼ完成品。	
13	砥石	6.6×4.7 4.2	西側面のうち二面に使用痕が認められる。中央が楕円状に凹んでいる。	硬砂岩 158g	18	不規則 鉄製品	全長4.2 幅 0.5~1.0 太さ0.5~0.9	断面は円形を呈す。	



第249図 139号竪穴住居跡実測図

139号竪穴住居跡（第249図）

調査区D3 fs区を中心に確認され、137号竪穴住居跡の東に位置し、東半部は道路によって破壊されている。また、中央部南北方に1号溝が走り、当跡を破壊している。規模は南北3.91mで、東西は3.1mまで確認できた。推定主軸方向は、N - 0°を指す。

覆土は、ロームブロックを含む褐色土で、人為的堆積とみられる。壁はほとんど確認できず、

高さ5cmを測る。床面は、若干東側へ傾斜している。ピットは3か所で、P₂は柱穴とみられる。遺物は、土師器・須恵器・鉄製品・鐵滓が覆土中から少量出土している。

140号竪穴住居跡（第250図）

調査区D2e9区を中心に確認され、138号竪穴住居跡の西側に位置している。東西4.48m・南北3.85mを測り、主軸方向N-0°を指す隅丸長方形を呈している。3号掘立柱建物と重複し、当跡が古いものとみられる。

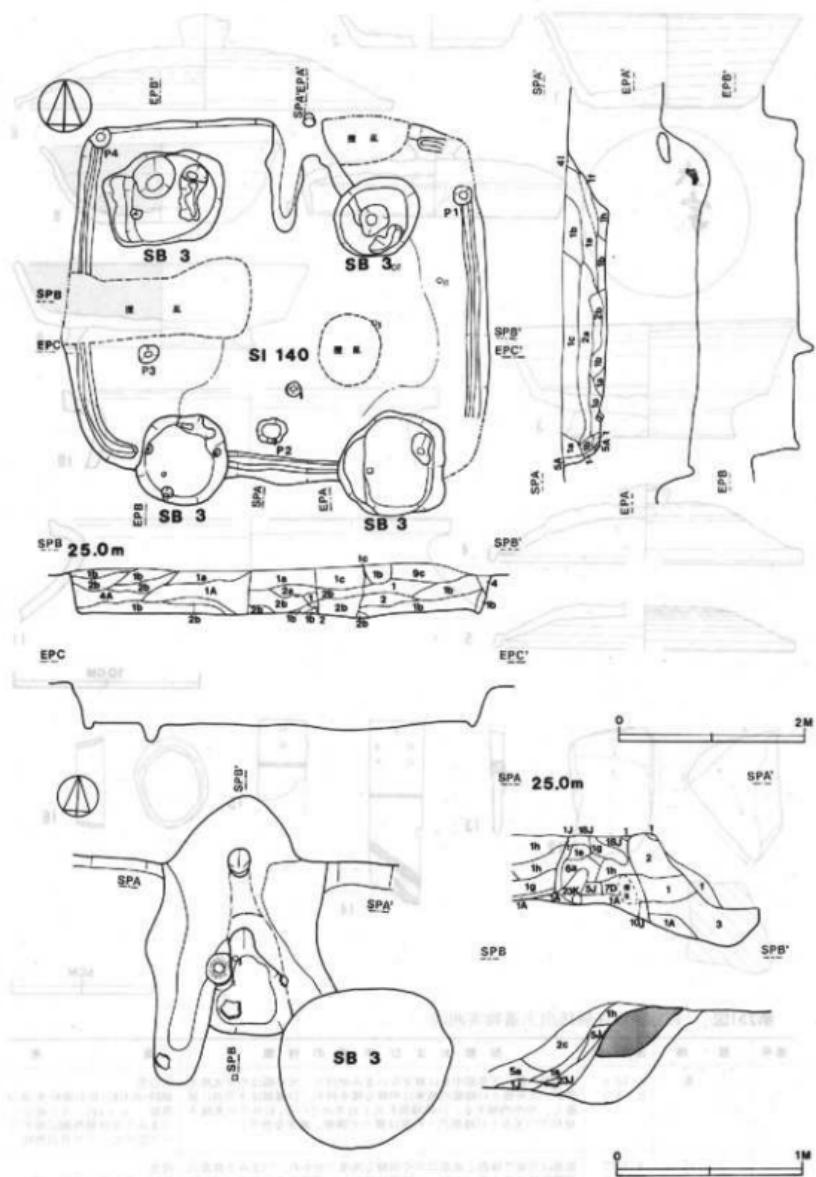
覆土は、攪乱坑があるものの、ローム小ブロック・炭化粒子を含む褐色・暗褐色土で、自然堆積とみられる。壁は高さ30-45cmを測り、85度内外の傾斜をもって外上方へ立ち上がる。北壁を除く壁下には、幅13cm・深さ5cmの壁溝が回る。ピットは4か所確認され、P₃は主柱穴と考えられる。深さは20cmを測る。他の柱穴は、攪乱や3号掘立柱建物跡によって確認できなかった。

竈は、北壁中央部やや東寄りにあり、長さ1.55m・幅0.9m・焚口幅0.47mを測り、壁外へ28cm程掘り込まれている。竈の主軸方向は、住居跡のそれと異なりN-13°-Wを指している。袖部は、西袖が山砂を主体とし須恵器環を2個重ねて芯とし、東袖がロームを主体として、それぞれ築かれている。焼成部は床面より10cm低く、50度の傾斜で煙道へ続く。

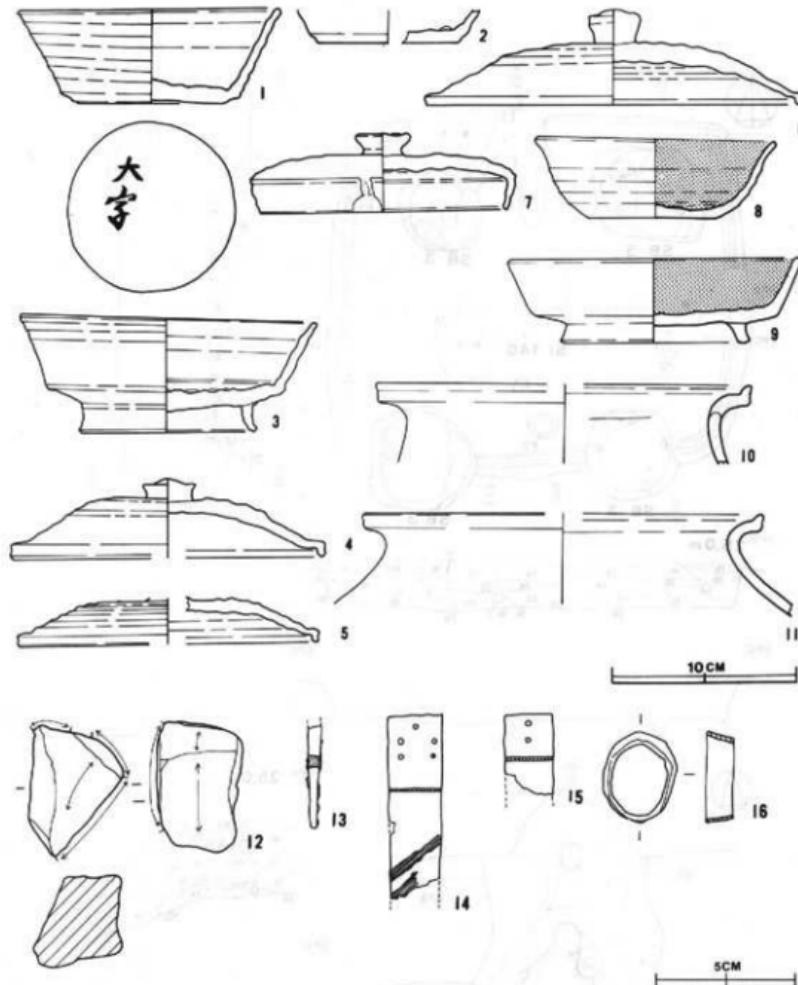
遺物は、土師器・須恵器・墨書き土器・瓦・羽口・砥石・鉄製品・鐵滓が、東半部の覆土および床面から出土している。このうち須恵器蓋二側体が141-A号住居跡出土のものと接合できる。

140号竪穴住居跡出土遺物観察表（第251図）

番号	器種	法盤(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	壺	A 13.9 B 5.2 C 7.8	底部は平底で、体部は外傾気味に外上方にのび、端部はやや尖る。右口クロ水抜き成形で底部は回転窓切り後一部静止頭削り調整。底部は厚く、体部はやや薄く作る。やや擦過する。	灰赤色 砂粒・長石粒・礫 普通 底部外面に悲音
2 S	环	C (7.5)	底部は平底で、体部はやや内側気味に外上方にのびると思われる。水抜き成形で、底部は回転窓切り。底部内面に粘土テクスチャを残す。	灰色 砂粒・長石粒・長石微粒 普通
3 S	高台付环	A 15.8 B 6.5 D 9.3	底部と体部の境界は、やや細胞な模を持ち、体部は外傾気味に外方にのび、口縁部は丸くおさまっている。高台は貼り付けで、外下方にのび、外周部に縫をなし、右口クロ水抜き成形で、底部は回転窓削り調整。高台内・外側は横ナナテ調整。	灰黄色 砂粒・長石粒・礫 不良 底部内面に横分行看
4 S	蓋	A(16.5) B 4.3	天井部中央に扁平な宝珠形のつまみが付く。天井部底はやや凹み、大井部は丸味を帯び、口縁部は下方向に屈曲する。右口クロ水抜き成形で、天井部外側は回転窓削り調整。口縁部内・外側から天井部内面中央にかけ、横ナナテ調整。つまみは横ナナテ調整。	灰色 砂粒・長石大粒・長石微粒・苦母 普通 天井部内面に焼付看 走き痕ね見き
5 S	蓋	A(15.9)	天井部中央につまみが付くが欠損。天井部はやや圓形で、大井部と口縁部の境界にやや明瞭な模を持つ。口縁部は僅かに段をなし、下方に向屈曲する。口縁部を丸くおさめている。水抜き成形で天井部は回転窓削り調整。口縁部内・外側は横ナナテ調整。	灰色 砂粒・長石粒・長石微粒 良好 走き痕ね見き
6 S	蓋	A 20.0 B 5.1	蓋の蓋と思われる。天井部中央にボタン状のつまみが付く。天井部底はやや丸く、なだらかに下延する。天井部と口縁部の境界はやや弱めな模を持ち、口縁部は下方向に屈曲する。右口クロ水抜き成形で、大井部から中央にかけ回転窓削り。	灰色 砂粒・長石粒・長石微粒 良好 天井部内面に黃白色の白粉 走き痕ね見き S 141-Aと接合



第250図 140号竪穴住居跡・竪穴測図



第251図 140号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
7	S	A 13.4 B 4.3	短縫底の壺。天井部中央に扁平なつまみが付く。天井部はやや丸味を帯び、天井部と口縁部の境際は明瞭な棱を持ち、口縁部は下方向に屈曲し、やや内傾する。口縁底部を丸くおさめている。右ロクロ水洗き成形でつまみと口縁部内・外面は模ナデ調整。端正を作り。	灰白色 細砂・長石粒・長石微粒多・鉄分良好 S 141-1と接合つまみと天井部外面に糊オリーブ色のビードロ状自然粒
8	H	A 12.7 B 4.4 C 6.8	底部は平底で体部と底部はやや明瞭な角度で分かれ、つまみと体部は内壁気味に上方にのび、口縁部は外反し、底部を丸くおさめている。水洗き成形と思われ、底部は右ロクロ使用の同軸差削り調整。体部下端部は手持ち荒削り調整。内面は荒磨き後黒色処理。	橙色 砂粒・長石粒・雲母・鐵 普通

番号	種類	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
9	HII	A 13.5 B 4.5 D 10.2	半たく浅いが、底部と体部の境界はやや明瞭を残す。外側気孔に外上方にのび、口縁部を丸くおさめている。右ロクロ水抜き成形で、底部は回転直削り調整と思われる。内面全体は磨き後黒色処理。外面部全体は摩減が激しく調整は不明。	にいは黄褐色 砂粒・長石粒 普通
10	H	A (20.1)	胴の強った体部から、丸く屈曲する口縁部が付き、端部はほぼ垂直につまみ出す。口縁部内・外面は横ナデ調整。体部内・外面はナデ調整と思われる。	にいは橙色 砂粒・長石粒多 普通
11	H	A (21.5)	大きく胴の張った体部から、やや丸く屈曲する口縁部が付き、端部はほぼ垂直につまみ出す。口縁部内・外面は横ナデ調整。体部内面は横ナデ調整と思われる。体部外側はナデ調整か。やや摩減が進行。	灰褐色 砂粒・長石粒 普通
番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
12	砾石	4.4×3.8 2.8	二側面を除いたその他の面に使用感が認められる。	凝灰岩 44.5g 14 15
13	鐵	全長(3.6) 半径 0.4	基部。	16 リング 外法 3.3×2.6 内法 2.6
				14は全長(6.3cm)、幅1.9cm。 14、15の下部欠損。 定形品。

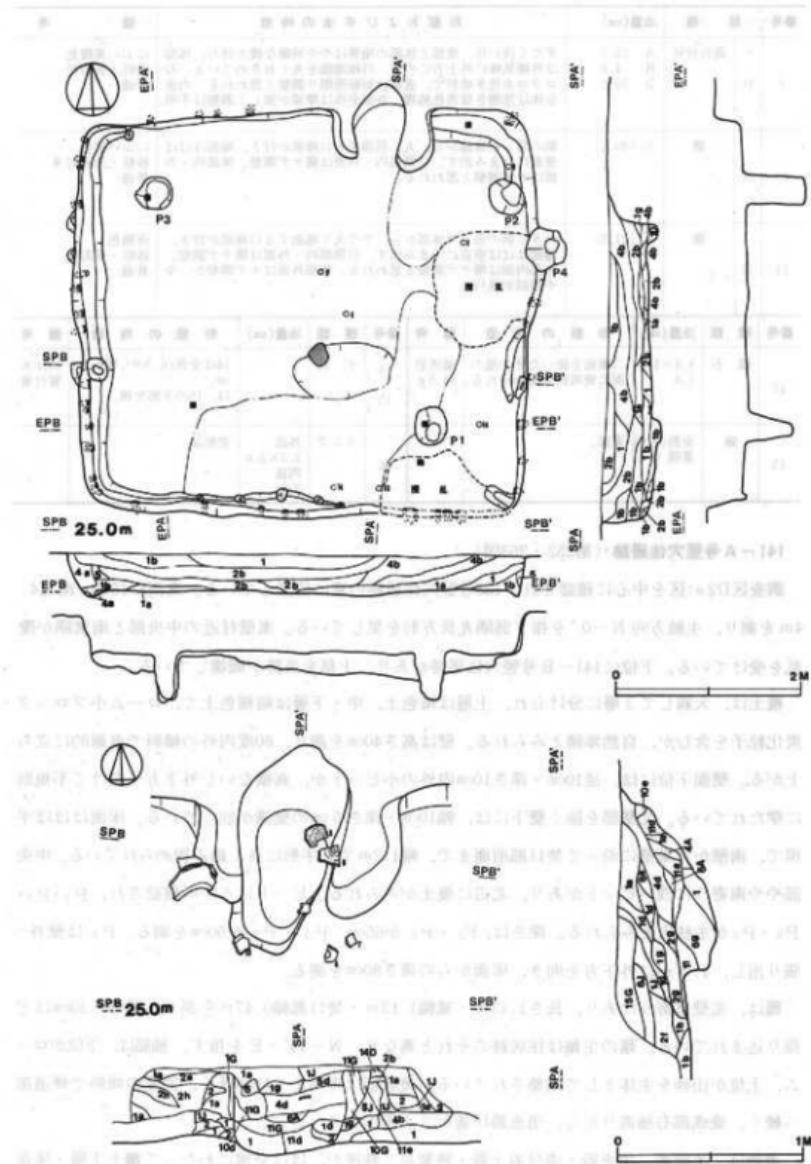
141-A号竪穴住居跡・(第252・253図)

調査区D2e7区を中心に確認され、133号竪穴住居跡の東に位置している。東西5.15m・南北4.4mを測り、主軸方向N-0°を指す弱隅丸長方形を呈している。東壁付近の中央部と南東隅が擾乱を受けている。下位に141-B号竪穴住居跡があり、上部を当跡が破壊している。

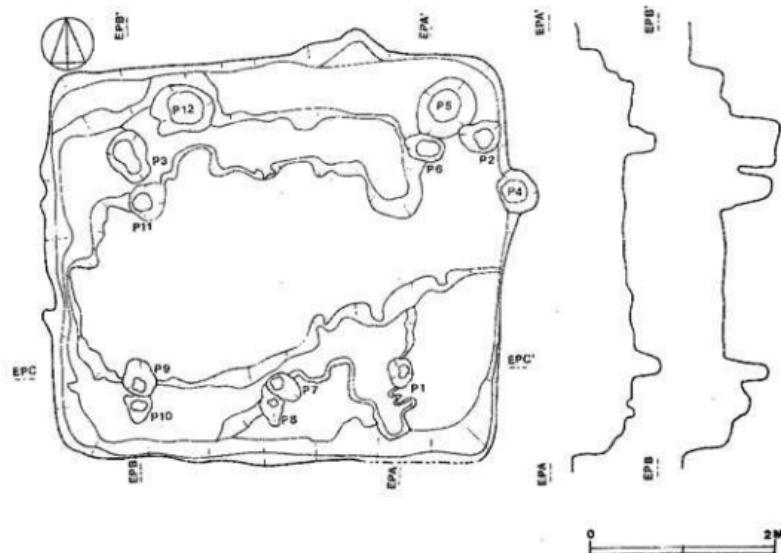
覆土は、大別して3層に分けられ、上層は褐色土、中・下層は暗褐色土で、ローム小ブロック・炭化粒子を含むが、自然堆積とみられる。壁は高さ40cmを測り、80度内外の傾斜で直線的に立ち上がる。壁面下位には、径10cm・深さ10cm内外の小ビットが、真横ないし外下方に向けて不規則に穿たれている。北壁部を除く壁下には、幅10cm・深さ5cmの壁溝が回っている。床面はほぼ平坦で、南壁から東壁に沿って焚口部前面まで、幅1.2mでL字形に良く踏み固められている。中央部やや南寄りに浅いビットがあり、北辺に焼上がりがみられる。ビットは6か所確認され、P₁・P₃・P₆・P₉が主柱穴とみられる。深さは、P₁・P₆が65cm、P₃・P₉が50cmを測る。P₄は壁外へ張り出し、わずかに外下方を向き、床面からの深さ80cmを測る。

窓は、北壁東寄りにあり、長さ1.13m・袖幅1.13m・焚口部幅0.47mを測り、壁外へ30cmほど掘り込まれている。窓の主軸は住居跡のそれと異なり、N-14°-Eを指す。袖部は、下位がローブム、上位が山砂を主体として構築されている。焼成部は床面より15cm低く、30度の傾斜で煙道部へ続く。焼成部右袖寄りから、須恵器環蓋が2点出土している。

遺物は、土師器・須恵器・漆付着土器・鉄製品・鉄滓が、ほぼ全域にわたって覆土下層・床面から出土している。



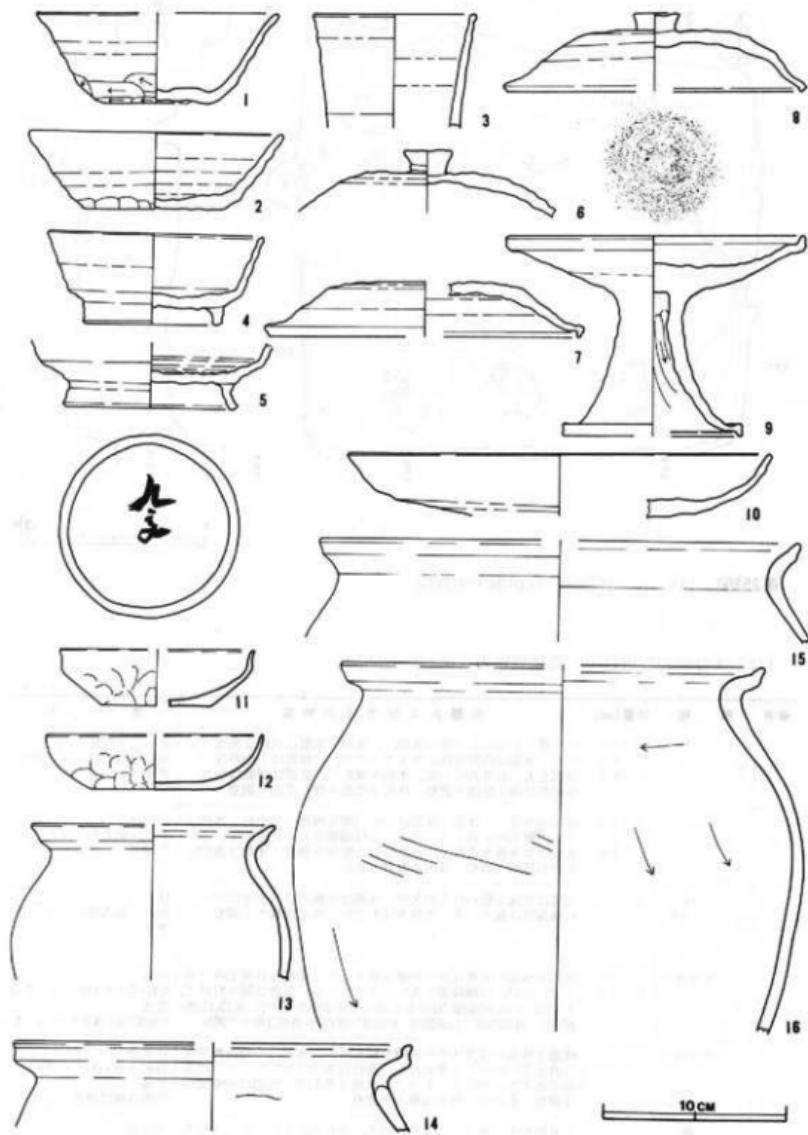
第252図 141-A号竪穴住居跡・竪穴測図



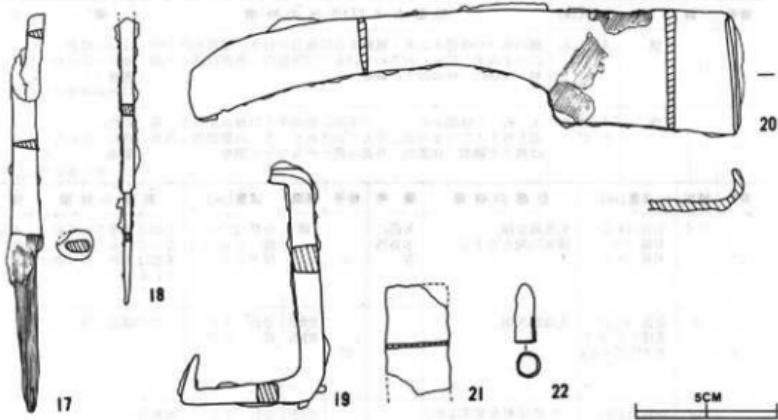
第253図 141-A・B 号竪穴住居跡出土方実測図

141-A号竪穴住居跡出土遺物観察表（第254・255図）

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	環	A(13.0) B 4.9 C (6.8)	やや盛り上がった平底の底部で、体部と底部は直角的な角度で分かれ。体部は内壁気味に外上方にのび、口縫端部はやや外反し、端部を丸くおさめている。水洗き成形で、底部は回転鋸切り。外周部は静と荒削り調整。体部下端部手持ち荒削り調整。	オーリア灰色 細粒・長石大粒・長石微粒 普通
2 S	環	A 13.7 B 4.2 C 7.6	底部は平底で、体部と底部はやや直角的な角度で分かれ。体部はやや内壁気味に外上方にのび、口縫端部を丸くおさめている。右クロコ水洗き成形で、底部は静止荒削り調整。体部下端部は手持ち荒削り調整。全体に厚底が成形。	灰白色 砂粒・長石粒・長石微粒 雲母多 不規
3 S	環 〔コップ形〕	A 8.7	底部は平底と思われるが欠損。体部は直線的に外上方にのび、口縫端部は面をなす。水洗き成形で内・外面は横ナナテ調整。	灰色 細粒・長石微粒・鉄分多 普通
4 S	高台付環	A 11.5 B 5.0 D 7.5	底部と体部の境界はやや直角的な棱を持ち。体部は外壁気味に外上方にのび、口縫端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで、下方方にのび、外端部に棱をなす。右クロコ水洗き成形で、底部は回転鋸切り。体部内面と口縫端部・外側及び高台・外側は横ナナテ調整。	灰色 細粒・長石粒・長石微粒・雲母 普通 山根型内面と体部外側に進行層。
5 S	高台付環	D 9.1	底部と体部の境界はやや直角的な棱を持ち。体部はやや内壁気味に外上方にのびると思われる。高台は貼り付けで、「ハ」の字状に下方方にのびる。右クロコ水洗き成形で、底部は回転鋸切り調整。高台内・外側は横ナナテ調整。	灰黄色 砂粒・長石粒・石英粒 普通 底部外向に墨書き。
6 S	蓋		天井部中央に扁平なつまみが付き。天井部は丸い。左ロクロ水洗き成形で、天井部から天井部中位にかけ曲輪端削り調整。つまみは横ナナテ調整。	灰白色 砂粒・長石粒・長石微粒・雲 鉄分多 普通



第254圖 141—A號竖穴住居跡出土遺物實測圖 (1)



第255図 141-A号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
7 S	壺	A 16.8 B 15.9 C 4.2	天井部中央につまみが付くが欠損。天井部は扁平で、やや反り気味に下降する。天井部と口縁部の境界は既く明瞭な棱を持ち、口縁部は下方向に屈曲し、やや内傾する。水抜き成形で天井部は回転荒削り調整。口縁部内・外表面は横ナナテ調整。	青灰色 細砂・長石粒・長石微粒 良好 天井部内部に黄白色の自然施 逆さ重ね焼き
8 S	壺	A 16.0 B 10.8 E (9.6)	天井部中央に扁平なつまみが付く。天井部は丸く、天井部と口縁部の境界はやや明瞭な棱を持ち、口縁部は下方向に屈曲し、やや内傾する。右ロクロ水抜き成形で、天井部中央は回転荒削り調整。天井部、口縁部内・外表面から天井部内部中心位にかけ横ナナテ調整。	灰白色 細砂・長石粒・長石微粒・ 鉄分 良好 天井部内部中央部に荒目 天井部内部に漆付着
9 S	高盤	A 22.9 B 10.8 E (9.6)	体部は外上方に大きく開き。体部と口縁部の境界にあまい棱を持つ。口縁部はほぼ垂直につまみ出し、端部はやや尖る。支柱部は支柱から瓶に向かって大きく反り、段をなして下方向に屈曲し、端部はやや尖る。右ロクロ水抜き成形で支柱内面はナナテ調整。他は横ナナテ調整。	緑灰色 細砂・長石粒・長石微粒 ・雲母 普通
10 S	台付盤	A 22.9	体部と底部は境界をなさない。体部は内壁気味に大きく開き、体部と口縁部の境界は丸い。口縁部は外上方にのびる。貼り付け高台は欠損。水抜き成形と思われる。底部外面は右ロクロ使用の回転荒削り調整。他は横ナナテ調整。	オリーブ色 細砂・長石粒・長石微粒 普通
11 H	环	A (10.5) B 3.1 C (5.9)	平底の底部で、体部は内壁しつつ外上方にのび、口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、端部を高く外反気味におさめている。体部内面と口縁部内・外表面は横ナナテ調整。体部外面と底部外面は荒削り調整。	にじむ橙色 細砂・雲母 普通
12 H	环	A (11.7) B 3.0 C 8.8	平底の底部で、体部は内壁しつつ外上方にのび、口縁部を丸くおさめている。底部内面と体部内面及び口縁部内・外表面は横ナナテ調整。体部外面と底部外面は荒削り調整。	橙色 細砂・雲母 普通
13 H	環	A (13.2) F 15.6	丸く脇の張った体部から丸く屈曲する口縁部が付き、口縁外端部にあまい棱を持つ。内面全体はナナテ調整。体部内面に一部指頭押圧調整。口頭部外面は横ナナテ。体部外面はナナテ調整。やや摩滅する。	にじむ橙色 砂粒・長石粒・雲母 普通
14 H	環	A (21.4)	脇の張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、端部をほぼ垂直につまみ出して丸くおさめている。口頭部内・外表面は横ナナテ調整。体部内・外表面はナナテ調整。	赤色 砂粒・長石粒・雲母 普通

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
15	H 瘦	A(25.8)	刷の張った体部から丸く屈曲する口縁部が付き、端部を外上方につまみ出して丸くおさめている。口頭部内・外側は横ナナフ調整。体部内・外側はナナフ調整。	にいじ褐色 砂粒・長石粒・雲母 普通 口頭部内面に炭化物付着
16	H 瘦	A(22.8) F 27.7	丸く張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、端部を外上方につまみ出して丸くおさめている。口頭部内・外側は横ナナフ調整。体部内・外側はナナフ及びナナフ調整。	赤色 砂粒・長石粒・雲母 普通 口・頸・体部外面に煤付着
番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
17	刀子	全長(14.2) 刃幅 0.8 刃長 (9.7)	切先部欠損。 桿側に間を開く。	基部に 木質残 存
20	縦	全長(19.5) 幅 2.0~4.2 厚さ 0.3	刃部は使用されて細くなっている。 茎部は表面へ折り曲げている。	木質付 着
18	鎌	全長(10.2) 茎径0.2~0.4 太さ0.25~0.4	先端部欠損。	21 刃部 鉄製品
		全長 (3.9) 幅 2.2	一方の端部欠損。	
19	鎌	全長(14.9) 太さ 0.95	「コ」の字形を呈するが、両端部に行くに従って細くなる。	22 刃部 鉄製品
		全長 2.1 幅 0.75	完形品。	

141-B号竪穴住居跡 (第253図)

141-A号竪穴住居跡の下位にあり、建て替えるとみられる。規模は、東西4.5m・南北4mとみられるが、東壁は明瞭でない。主軸方向N-0°を指す長方形を呈している。

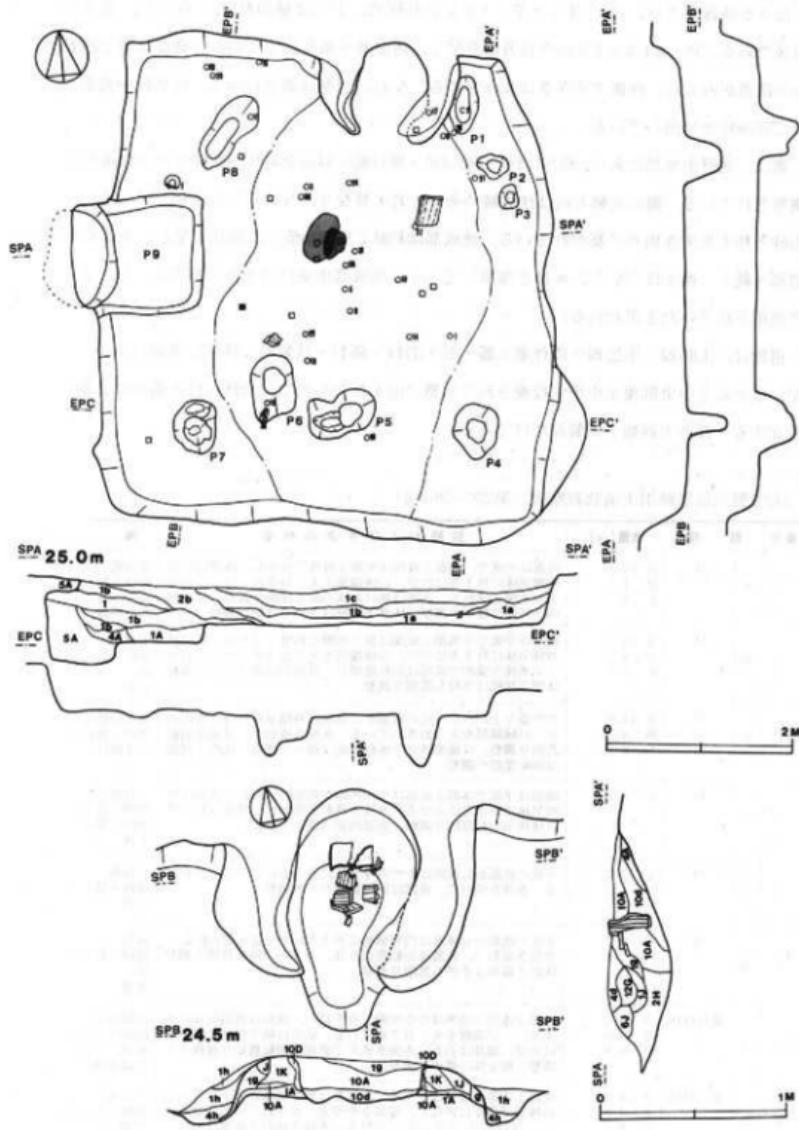
覆土は、ロームブロックを多量に含む明褐色土で、141-A号竪穴住居跡の床面を構成する土層で、人為的に埋め戻したものとみられる。壁は高さ14cmほど確認され、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は中央部がやや低くなり、硬く締まっている。当跡の床面構築にあたっては、東壁中央部を除く壁下を幅70cm内外で溝状に深く掘り下げ、ロームを充填して床面としている。ピットは3か所確認されている。竪は明らかにできなかった。

遺物は、土師器が若干出土しているだけである。

142号竪穴住居跡 (第256図)

調査区E3a7区を中心に確認され、107号竪穴住居跡の北側に位置し、北東隅を現在の道路によって失っている。規模は、東西4.95m・南北5.2mを測り、主軸方向N-9-Eを指す方形を呈している。

覆土は、ロームブロック・焼土・炭化粒子を若干含む層がみられるが、褐色土を主体とする自然堆積の層とみられる。壁は高さ30~50cmを測り、75度の傾斜で外上方へ立ち上がる。床面はほぼ平坦で、南壁下から竪焚口部前面にかけての幅2.5mの範囲が、良く踏み固められている。ピッ



第256図 142号竪穴住居跡・窓実測図

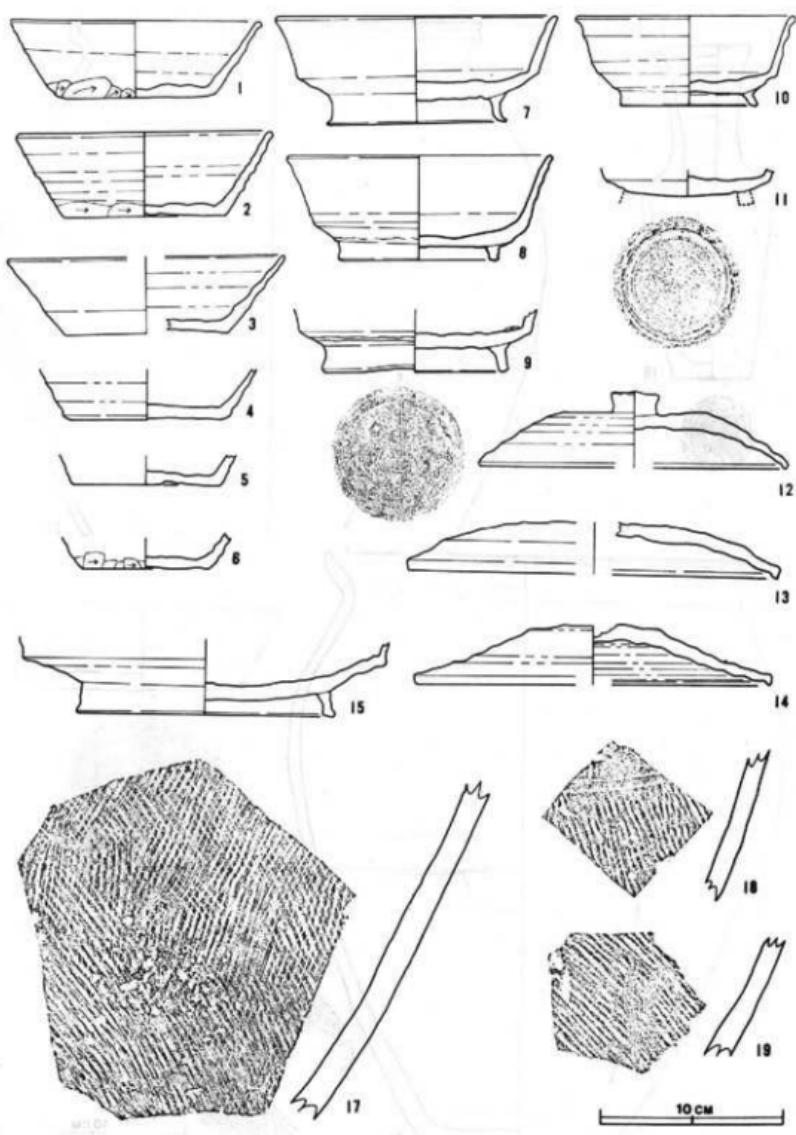
トは9か所確認され、P₂・P₄・P₇・P₈が主柱穴、P₅は補助柱穴とみられ、深さは40cm前後である。P₉は1.4×1.2mの長方形を呈し、西壁外へ張り出している。底部は東と西とで25cmの段差がみられ、西側での深さは42cmを測る。なお、西壁は高さ12cmで、住居跡中央部へ向かって37cm程せり出している。

竈は、北壁中央部にあり、長さ1.3m・幅1.4m・焚口幅0.34mを測り、壁外へ15cm程掘り込んで構築されている。竈の主軸方向は住居跡のそれと若干異なり、N-16°-Eを指している。袖部は、山砂と粘土を突き固めて築かれている。焼成部は床面より15cm低く、皿状を呈し、ゆるやかに煙道部へ続く。焼土は、厚さ7cmほど堆積している。焼成部中央には平瓦が数片出土し、支脚として使用されていたと思われる。

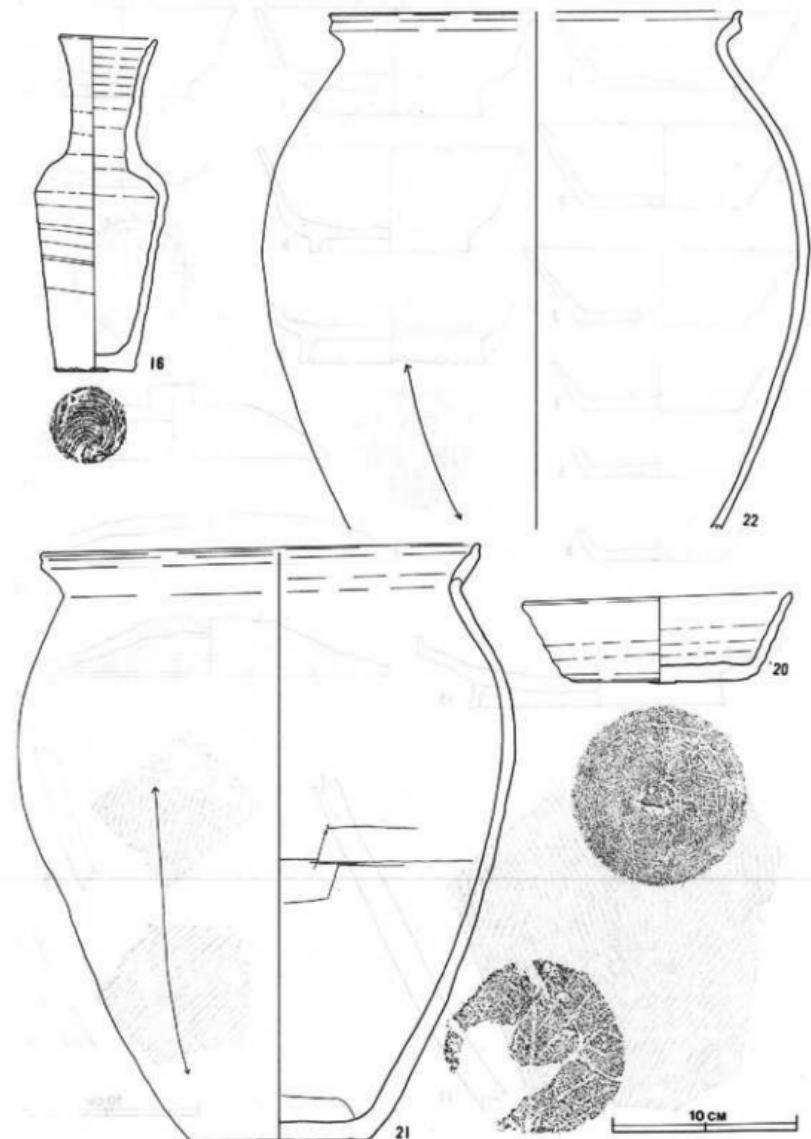
遺物は、土師器・須恵器・漆付着土器・瓦・羽口・砥石・鉄製品・鐵滓が多量に出土しているが、ほとんど中央部覆土中から投棄された状態で出土したもので、当跡に伴う遺物は、竈周辺に存在する一部の土器類と鉄製品だけである。

142号竈穴住居跡出土遺物観察表（第257~261図）

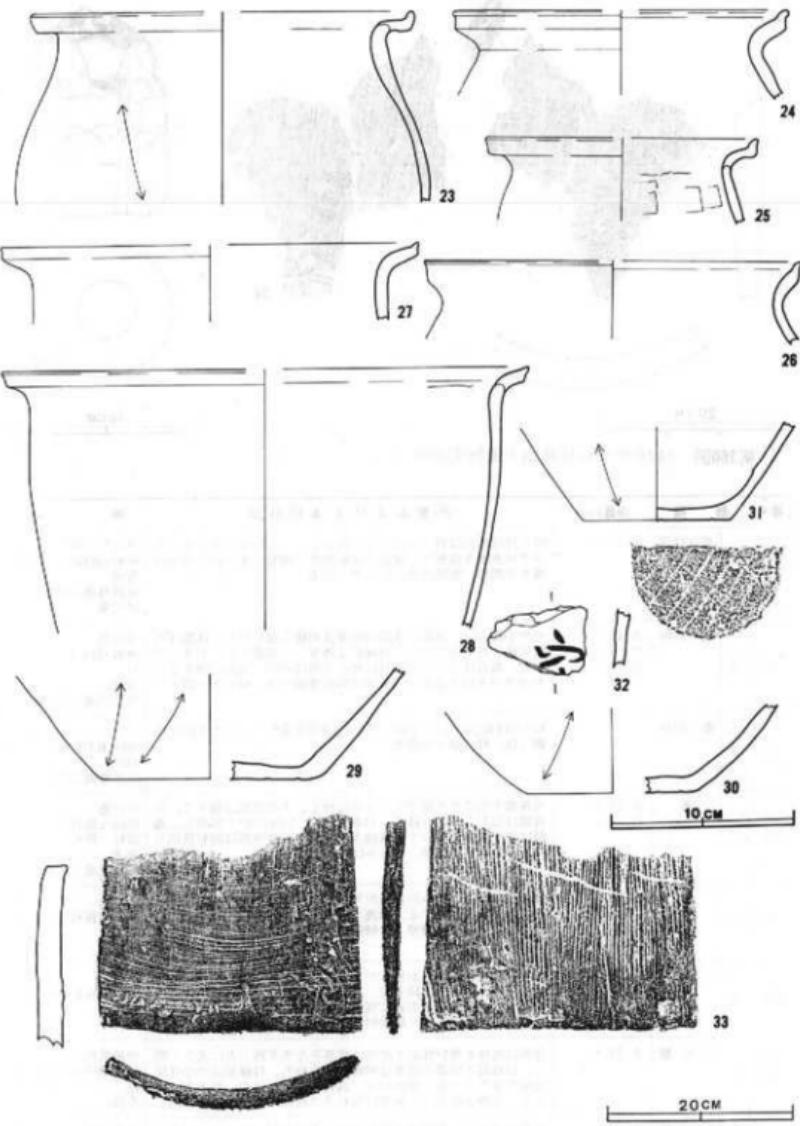
番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	环	A 13.2 B 4.3 C 8.5	底部は平底で、体部と底部は明瞭な角度で分かれ。体部はやや内壁気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。右ロクロ水焼き成形で、底部は丸めた状の静止窯削り調整。口縁部内・外面は横ナナ調整。体部下端部は手持ち窯削り調整。	灰白色 細砂・長石粒・長石微粒・雲母 やや不良
2 S	环	A 13.7 B 4.6 C 8.7	底部は平底で平底部と底部は鋭く明瞭な角度で分かれ。体部は外壁気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。右ロクロ水焼き成形で底部は回転窯切り。外周部は静止窯削り調整。体部下端部は手持ち窯削り調整。	灰白色 砂粒・長石粒・雲母・ 種不良
3 S	环	A(14.8) B 4.2 C (8.7)	やや盛り上った平底の底部から体部は外壁気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。水焼き成形で、底部は回転窯削り調整。口縁部外面と体部外面は横ナナ調整。体部下端部は回転窯削り調整。	に古い橙色 細砂・長石粒微粒 なまけ
4 S	环	C 8.1	底部は平底で体部と底部はやや明瞭な角度で分かれ、体部は外壁気味に外上方にのびる。水焼き成形と思われ、底部は右ロクロ使用の回転窯削り調整。底部内面は横ナナ調整。	灰白色 細砂・長石粒・長石微粒・雲母 不良
5 S	环	C 7.8	平底の底部から体部はやや内壁気味に外上方にのびると思われる。水焼き成形で、底部は回転窯切りで無調整。	灰白色 細砂・長石粒・雲母 不良
6 S	环	C 6.7	平底の底部から体部は内壁気味に外上方にのびると思われる。水焼き成形で、底部は回転窯切り後、多方向の静止窯削り調整。体部下端部は手持ち窯削り調整。	灰色 細砂・長石粒多・雲母 普通
7 S	高台付环	A 15.1 B 6.0 D 9.8	底部と体部の境界はやや明瞭な棱を持ち、体部は外壁気味に外上方にのびる端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで外下方にのび、端部は尖る。水焼き成形で底部は回転窯切り後横ナナ調整。他全体に横ナナ調整。	明緑灰色 細少長石粒・長石微粒 普通 内面全体に漆仕事
8 S	高台付环	A 14.1 B 4.8 D 8.7	底部と体部の境界は不明瞭で、体部は外壁気味に外上方にのび、口縁部は僅かに外反し、端部をやや丸くおさめている。高台は貼り付けで下方に向くのびる。水焼き成形で底部は右ロクロ使用の回転窯削り調整。他は横ナナ調整。	灰白色 細砂・長石微粒 普通 内面全体に漆仕事



第257図 142号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)



第258図 142号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)

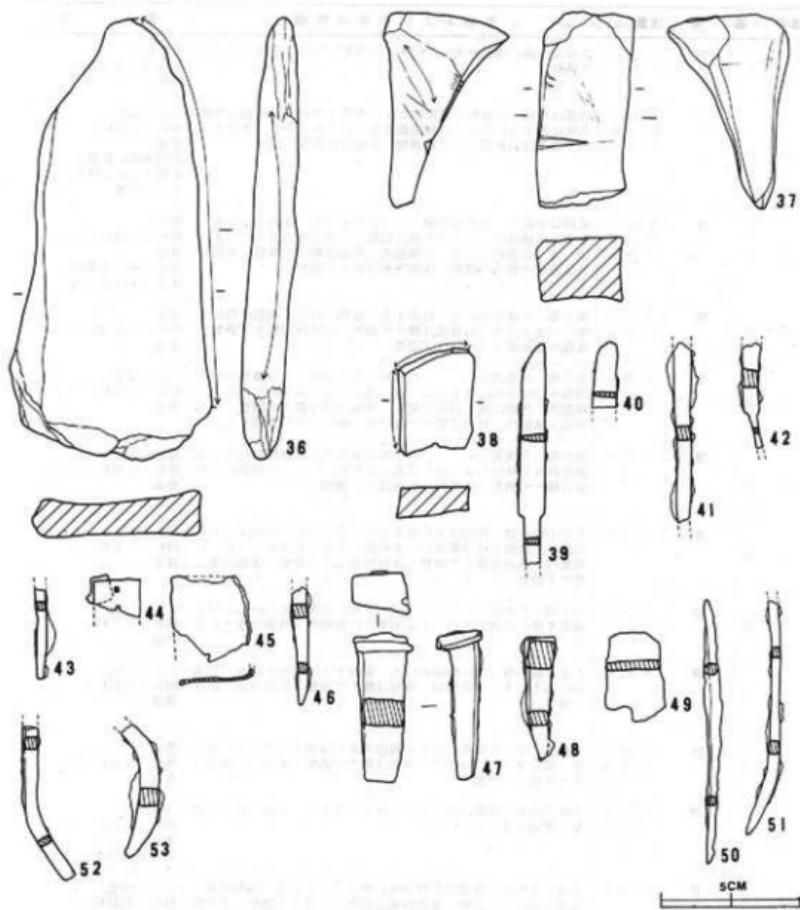


第259図 142号竪穴住居跡出土遺物実測図(3)



第260図 142号竪穴住居跡出土遺物実測図(4)

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
9	S 高台付环 (転用鏡)	D 10.0	貼り付け高台は外下方にのび。僅かに「ハ」の字状をなす。右ロクロ水挽き成形で、底部は回転窓削り調整。高台内・外面は横ナナテ調整。底部内面に粘土クズ付着。	オリーブ灰色 細砂・長石粒・長石微粒 普通 底部外面に窓記号と 墨付着
10	S 高台付环	A 11.7 B 4.9 D 7.6	やや小形の环。底部と体部の境界は明瞭な棱を持ち、体部は外反気味に外上方にのび、口縁部は外反し、端部を丸くおさめている。高台は「ハ」の字状に外下方に向て、端部に窓をなす。右ロクロ水挽き成形で、底部は回転窓削り後、軽いナナテ調整。	青灰色 細砂・長石粒・長石微粒 普通 底部内面に漆付着
11	S 高台付环		貼り付け高台が付くが欠損。右ロクロ水挽き成形で、底部は回転窓削り後。軽い横ナナテ調整。	灰色 細砂・長石粒・長石微粒 良好 底部外面に窓記号
12	S 蓋	A(16.5) B 4.2	天井部中央にやや履平なつまみが付く。天井部は扁平で、天井部はなだらかに下降し、口縁部は下方向に更に屈曲し、端部はやや尖る。右ロクロ水挽き成形で、天井頂部は回転窓削り後、軽い横ナナテ調整。つまみは横ナナテ調整。	灰白色 細砂・長石粒・長石微粒・鐵分 普通 酸化焼成と思われる
13	S 蓋	A(20.0)	天井部中央につまみが付くが欠損。天井部はやや履平で、口縁部は下方向に屈曲する。水挽き成形で、天井部と口縁部の境界は右ロクロ使用の回転窓削り調整。口縁部内・外面は横ナナテ調整。摩滅が進行。	灰白色 細砂・長石粒・雲母 多不良
14	S 蓋	A(19.1)	天井部中央につまみが付くが欠損。天井頂部はやや履平で、天井部は反り氣味に下降する。天井部と口縁部の境界は明瞭な稜を持ち、口縁部は下方向に屈曲し、端部はやや尖る。水挽き成形で、天井頂部から天井部中位まで回転窓削り後、軽い横ナナテ調整。	灰色 砂粒・長石微粒多 普通
15	S 台付盤	A 13.9	底部は丸味を帯び体部と底部は境界をなさず外上方に大きく開く。口縁部と体部の境界は明瞭な棱を持ち。口縁部はやや外反気味に立ち上がると思われる。高台は貼り付けで、外下方にのびる。水挽き成形で、底部は右ロクロ使用の回転窓削り調整。	明褐色 細砂・長石粒・長石微粒 不良
16	S 長頭瓶	A 5.2 B 18.1 C 4.1	底部は平底で、体部は直線的に外上方にのび、肩部で内傾する。腹部は長く、外反気味に外上方にのび、口縁部を丸くおさめている。水挽き成形と思われる。底部は回転窓削りで、ややすわりが悪い。	暗青灰色 細砂 良好 一部自然釉



第261図 142号竪穴住居跡出土遺物実測図(5)

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
17	S		体部の一部。体部外面は平行叩き目調整。剥離面を見る。内面は荒ナデ後ナデ調整。	外面一灰色 内面一にぼい橙色 細砂・長石粒 普通
18	S		体部の一部。体部外面は平行叩き目調整。内面はナデ調整。	緑灰色 細砂・長石粒 良好

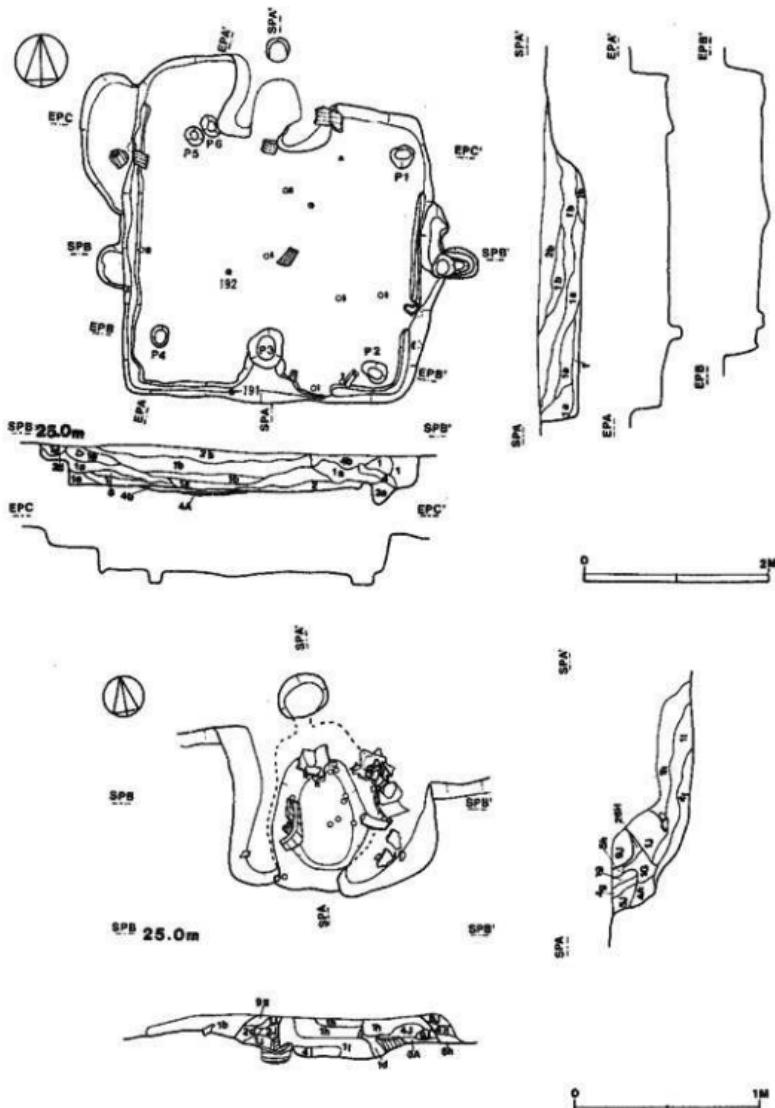
番号	種類	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
19	S	蜜	体部の一部。体部外表面は平行叩き日調整。内面は荒削り及びナダ調整。	灰白色 砂粒・長石粒・雲母 不良
	H	A 14.3 B 4.8 C 9.6	底部は平底で、体部と底部はあまり角度で分かれ、体部は外側気味に外上方にのび、口縁部を丸くおさめている。水洗き成形で底部は回転差切りで無調整。底部はやや厚く作る。	にぶい橙色 砂粒・長石粒 普通 底部外間に荒巻き 底部内面から体部外間にかけ塗付着
20	H			
21	H	A 23.5 B 31.9 C 9.7	底部は平底で、体部は内側しつ立ち上がり、体部上位で丸く張る。口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部を外上方につまみ出し丸くおさめている。口縁部内・外側は横ナダ調整。体部外表面は部位の笠ナダ調整。体部内面は笠ナダ及びナダ調整。	橙色 砂粒・長石粒・雲母・櫻 普通 底部外間に木葉模 体部外間に便付着
22	H	蜜	強く張った体部から丸く屈曲する口縁部が付き、端部を外反気味につまみ出す。口縁部は横ナダ調整。体部外表面笠ナダ調整。体部内面は笠ナダ及びナダ調整。	橙色 砂粒・長石粒・雲母・スコリア 普通
23	H	A(20.4) F 22.3	丸く張った体部から「く」の字状に強く屈曲する口縁部が付き、端部をほげ垂れ方に外上方につまみ出して丸くおさめている。口縁部内・外側に刷毛目痕を見る。頭部内面は横ナダ調整。頭部外表面と体部内・外表面は横ナダ及びナダ調整。やや摩滅する。	にぶい橙色 砂粒・長石粒 普通
24	H	蜜	頭の張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、端部を外反気味につまみ出して丸くおさめている。口縁部内・外表面は横ナダ調整。体部内・外表面はナダ調整。	橙色 砂粒・長石粒・雲母 普通
25	H	蜜	やや小形の蜜。体部は丸く張るものと思われる。口縁部は丸く屈曲し、端部をほげ垂れ方に外上方につまみ出して丸くおさめている。口縁部内・外表面は横ナダ調整。体部外表面はナダ調整。体部内面は笠ナダ調整。	橙色 砂粒・長石粒・雲母 良好
26	H	蜜	頭の張った体部からやや「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、端部を僅かに外上方につまみ出す。口縁部内・外表面は横ナダ調整。	にぶい橙色 砂粒・長石粒 普通
27	H	蜜	あまり脇の張らない体部から丸く屈曲する口縁部が付き、外端部に曲をなす。口縁部内・外表面は横ナダ調整。頭部内面に荒巻きを残す。	にぶい橙色 砂粒・長石粒・雲母 普通
28	H	蜜	やや脇の張った体部から丸く屈曲する口縁部が付き、外端部に曲をなす。口縁部内・外表面は横ナダ調整。体部内・外表面は笠ナダ後、ナダ調整。	橙色 砂粒・長石粒・雲母 普通
29	H	蜜	C(11.5) 平底の底部で体部は外上方にのびる。体部内・外表面は笠ナダ調整。摩滅が進行。	浅黄褐色 砂粒・長石粒・雲母 普通 底部外間に木葉模
30	H	蜜	C(9.2) 平底の底部から体部は内側気味に外上方にのびる。底部内面と体部内面はナダ調整。体部外表面は荒削りと笠ナダ調整。やや摩滅する。	にぶい橙色 砂粒・長石粒・雲母 普通 底部外間に木葉模
31	H	蜜	C 8.0 平底の底部から体部は、やや内側気味に外上方にのびる。底部内面は荒削り調整。体部内面は笠ナダ後ナダ調整。体部外表面は笠ナダ調整。	橙色 砂粒・長石粒・雲母 普通 底部外間に木葉模
32	H	蜜	蜜の体部と思われる。体部外表面はナダ調整。内面は笠ナダ調整。	橙色 砂粒・長石粒・長石微粒 ・石英・雲母 普通 体部外間に荒巻き
33	平	瓦 全長(22.9) 広幅 27.4 厚さ 1.9	瓦片は欠損。凸面は笠位の轟日叩きがみられ、叩きしめた円弧を描く。広幅付近に指輪痕を残す。凹面は布目を残し、広幅付近は削除調整。側面と端部は荒削り調整で、側面の一部に面取りを施す。	にぶい青橙色 砂粒・長石粒・雲母多 ・透 やや硬質

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴				備考		
34	隅切瓦	全長(29.0) 広端(4.5) 厚さ 3.2	四隅を切断したものと思われる。凸面に窓位の縦目叩きがみられ、広端間に一部粘土を強く押し出すナデを見る。凹面は若干を残す。端面と隣面は荒削り調整。				浅黄色 砂粒・長石粒・礫 軟質		
番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
35	羽口	全長(11.4) 外径 6.7 孔径 3.0	外面は多方向の荒削り調整、底部の調板はやや不良。	先端部 は溶解 し鉄付 着。	45	短形 鉄製品	全長(3.0) 幅(2.7)	一方が小さく折り曲がっている。	
36	砥石	15.4×7.0 1.1	三角形を呈し、一側面のみに使用痕が認められる。	粘板岩 209.5 g	46	針か	全長(4.1) 太さ 0.6	頭部欠損。	
37	砥石	3.1×6.8 2.1	長方形を呈す。全面に使用痕が認められ、側面の数か所に擦痕がみられる。	流紋岩 87.5 g	47	鑿	全長 5.2 太さ 1.5	ほぼ完形品。 刃部は断面V字状を呈している。	
38	砥石 (軸用砥)	3.5×2.6 1.0	二側面のみに使用痕が認められる。	精良器 磨片利 用	48	楔	全長 4.3 太さ 1.0	完形品。	
39 40	刀子		39は全長(7.8cm)、刃幅0.9 cm、刃長6.5cm。 40は刀子の切先部とみられる。		49	六打鍬	全長 3.2 幅 1.9	一部欠損している。	
41 43	鉋		いずれも両端部欠損して いるが頭の茎とみられる。		50	棒状 鉄製品	全長 9.4 太さ 0.6	完形品。 前面は方形で、両端部は尖る。	
44	小札	全長(1.4) 幅 1.6	大部分欠損。		51 53	不明 鉄製品		51は全長(8.5cm)、太さ 0.3cm。 一方の端部欠損。	

143号竪穴住居跡（第262図）

調査区D3i3-i4区を中心に確認され、137号竪穴住居跡の南方に位置し、3号溝を破壊して構築されている。規模は、東西3.5m・南北3.7mを測り、主軸方向N-3°-Eを指す略方形を呈している。

覆土は、ロームブロックを少量含む褐色土で、自然堆積とみられる。壁は高さ32~44cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。西壁部には2か所の壁外テラスを有している。北壁部を除く壁下には、幅5~7cm・深さ4cmの壁溝が回っている。南壁中央部の壁溝は、幅広く内側へ張り出している。床面は、南壁直下から竪穴口部前面にかけての幅1.1mが特に踏み固められ、竪方向へ向けて若干低くなっている。ピットは6か所確認され、P₁・P₂・P₄・P₅が主柱穴とみられるが、深さはいずれも10cm内外である。他に東壁中央部に壁外へ張り出すピットが存在するが、当住居廐絶後のピットである。



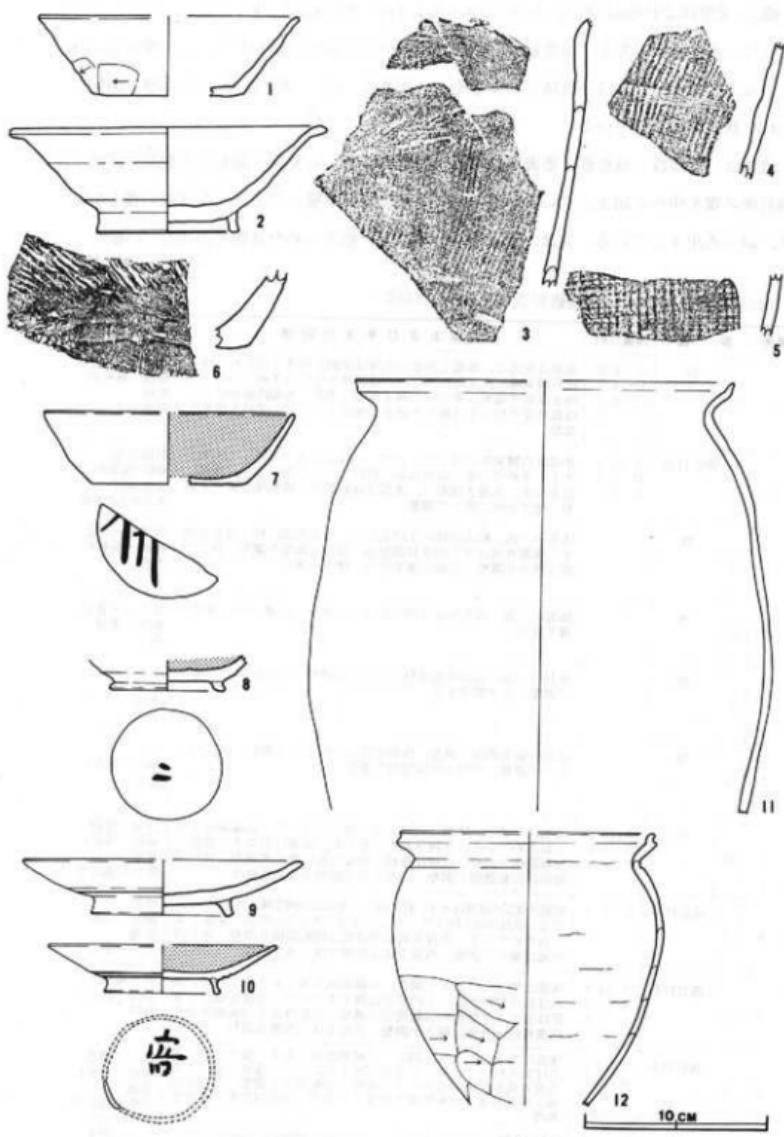
第262図 143号竪穴住居跡・竪実測図

窓は、北壁ほぼ中央部にあり、長さ1.2m・幅1.1m・縦口部幅0.31mを測り、壁外へ38cm掘り込まれている。袖は、丸瓦・須恵器杯・割石を山砂で塗り固めて築かれている。窓成部は床面と同一レベルで、焼土が10cmほど堆積し、ゆるやかに煙道部へ続く。奥壁寄りに土師器甕二個体分が、つぶれた状態で出土している。

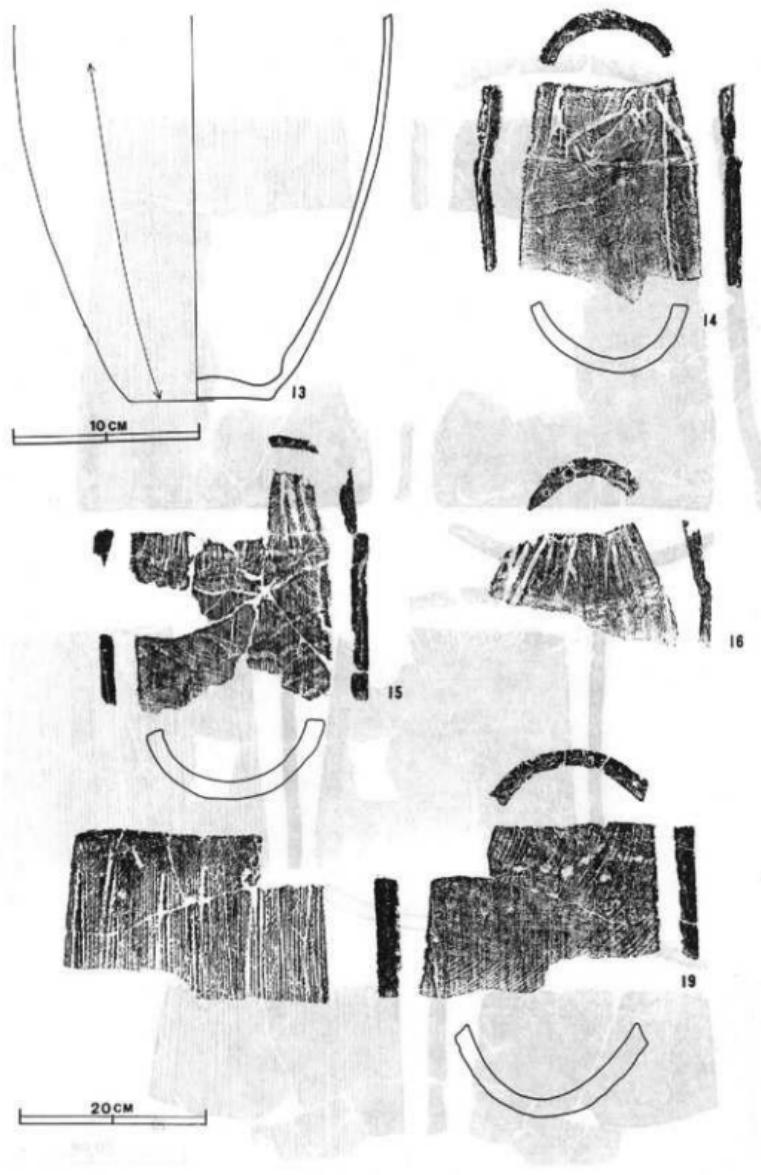
遺物は、土師器・須恵器・墨書き土器・漆付着土器・瓦・石製品・砾石・鉄製品・鉄滓・漆紙が、竈前面の覆土中から出土している。漆紙は、中央部覆土中層から2点、南壁際の覆土中層から1点、計3点出土している。瓦は、西壁外のテラス上に敷きつめた状態で出土している。

143号竪穴住居跡出土遺物観察表（第263～266図）

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	环	A(13.9) B 4.3 C (8.2)	底部は平底で、体部と底部の境界は明瞭な角度で分かれ、体部は外傾気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。水洗き成形で底部は多方方向の静止窓削り調整。体部内面中位から体部外側中位にかけ横ナナ子調整。体部下位は突起手持ら窓削り調整。	黄褐色 細砂・長石粒・灰石微粒、 表面普通
2 S	高台付碗	A 17.2 B 5.7 D 7.7	体部は内傾気味に外上方にのび、口縁部は強く外反して縁部を丸くおさめている。高台は貼り付けた、下方に向て、下方向にのび、縁部に窓をなす。水洗き成形で、底部は回転窓削り調整後、横ナナ子調整。全体は横ナナ子調整。	明褐色 細砂・長石粒・灰石微粒、 表面無地 体部外張に比較的大きさ有
3 S	甕		体部の一部、粘土被拂み上げ成形で、体部内面に粘土被拂を残す。体部外表面は平行叩き目調整後、肩部は窓削り調整。体部内面は窓ナナ子調整。全体に薄手作り。厚底が突出。	灰オリーブ色 細砂、長石粒 不直
4 S	甕		体部の一部。体部外表面は格子状叩き目調整。内面はナナ子調整、薄手作り。	オリーブ黄色 細砂 不良
5 S	甕		体部の一部。体部外表面は格子状叩き目調整。内面は窓ナナ子調整、やや厚底。	灰色 細砂 普通
6 S	甕		底部は静止窓削り調整。体部外表面は平行叩き目調整。体部内面はナナ子調整。体部下位は窓削り溝。	灰色 細砂 良好
7 H	环	A(13.4) B 3.9 C (8.3)	底部は平底で、体部は内傾気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。水洗き成形と思われる。底部は右ロクロ使用の回転窓削り調整。口縁部端面と体部外表面は横ナナ子調整。体部下部は回転窓削り調整。内面全体は黒磨き後墨色処理。	上部、灰色 細砂・長石粒、少々 骨渣 底部外張に墨色
8 H	高台付环	D 5.9	底部と体部の境にはあまり接を特徴。体部は外傾気味に外上方にのびる。高台は貼り付けた、「ハ」の字状に外下方にのび、縁部を丸くおさめている。水洗き成形で底部は回転窓削り調整。高台外表面は横ナナ子調整。内面全体は黒磨き後墨色処理。	灰色 細砂、空母 普通 底部外表面に墨色
9 H	高台付瓶	A 14.9 H 3.0 D 7.5	体部は外上方に大きく開き、口縁端部を丸くおさめている。高台は貼り付けた「ハ」の字状に外下方にのび、縁部に窓をなす。底部は右ロクロ使用の回転窓削り調整。体部外表面と口縁部外表面及び高台内・外表面は横ナナ子調整。内面全体は黒磨き後墨色処理。	青赤褐色 細砂、長石粒、空母 良好
10 H	高台付皿	A(12.1) B 2.7 D 6.2	体部は外上方に大きく開き、口縁端部にあまり接を特徴。高台は貼り付けた「ハ」の字状に外下方にのび、縁部に窓をなす。水洗き成形で底部は右ロクロ使用の回転窓削り調整。口縁部外表面と体部外表面は回転窓削り後横ナナ子調整。内面は黒磨き後墨色処理。	上部、褐色 砂粒、長石粒、空母 普通 底部外表面に墨色
11 H	甕	A(20.4) F 25.0	体部は内側しつかり上上がり、「く」の字状に開曲する口縁部が付き、口縁端部を外上方にこまみ出す。内面全体は横ナナ子調整。体部外表面は窓ナナ子後、ナナ子調整。体部外表面は窓ナナ子調整。	上部、褐色 砂粒、長石粒、空母 普通 体部外表面全体に墨付有



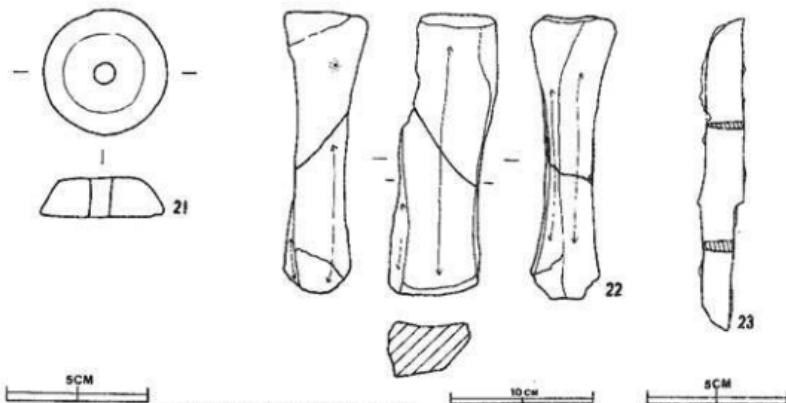
第263圖 143号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)



第264图 143号竖穴住居跡出土遺物実測図(2)



第265図 143号竪穴住居跡出土遺物実測図(3)



第266図 143号竪穴住居跡出土遺物実測図(4)

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
12	H 瓦	A 13.3 F 14.7	丸く盛った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、口縁外端部はやや凹む。体部内面と底部内面に粘土埴装を残す。口頭部内・外面は撚ナナ調整。体部内面は箆ナナ後ナナ調整。体部外面部中位までは箆ナナ調整。中位から下位は箆削り調整。	明赤褐色 砂粒・長石粒・雲母・微良好
13	H 瓦	C 7.7 F 20.2	平底の底部から体部は内側しつつ外方にのびる。体部内面に粘土埴装を残す。体部外表面は複数の箆ナナ調整。底部外表面と体部内面は箆ナナ。底部内面はナナ調整。全体に摩滅が進行。	にぶい褐色 砂粒・長石粒多・石英粒多普通
14	丸 瓦	全长(28.5) 底端 13.8 厚さ 1.6	玉縁付丸瓦。凸面は箆削り調整。四面は布目を残すが、一部布の当たらない面を見る。側面は分割断面のままで無調整。端面は箆ナナ調整。	灰白色 砂粒・長石粒多・長石微粒質
15	丸 瓦	全长(25.0) 底端(4.5) 厚さ 1.8	玉縁付丸瓦。凸面は箆削り調整。四面は布目を残す。側面は箆削り調整で、上・下端部に曲取りが施されている。端面は箆削り調整。	灰オリーブ色 砂粒・長石粒多・長石微粒多 やや軟質 内面に煤付着
16	丸 瓦	全长(14.0) 底端(11.5) 厚さ 1.7	玉縁付丸瓦。凸面は箆削り調整。四面は布目を残す。側面と端面は箆削り調整。	褐灰色 砂粒・長石粒多・長石微粒多 硬質 断面に灰分付着
17	平 瓦	全长 42.5 底端 24.3 広端 28.5 厚さ 1.8	中央付近が欠損し、「コ」の字状に残存。凸面は棍位の縫目叩きが確認され、広端付近は箆削りと指輪押痕が見られる。四面は布目を残すが一部布の当たらない面を見る。側面と端面は箆削り調整。	灰色 砂粒・長石粒多・長石微粒多 やや硬質 四面と側面に煤付着
18	平 瓦	全长(26.9) 底端(16.5) 厚さ 1.6	凸面には棍位の縫目叩きがみられ。四面は布目を残すが、底端付近は布が当たらない。側面と端面は箆削り調整で、端面に凹みを持つ。	灰褐色 砂粒・長石粒多・長石微粒多 堅硬
19	平 瓦	全长(17.7) 底端(15.0) 厚さ 2.0	全体に歪みを持つ。一枚作りかと思われる。四面に粘土タタラ取りの痕跡を残す。凸面は棍位の縫目叩きがみられる。四面は布目を残す。側面と端面は箆削り調整。全体にやや摩滅。	黄褐色 砂粒・長石粒・暗 硬質 底端に灰分付着
20	平 瓦	全长(23.6) 底端(24.1) 厚さ 1.8	凸面は棍位の縫目叩きがみられ。四面は布目を残すが、底端付近は布が当たらない。側面と端面は箆削り調整。全体にやや摩滅する。	灰黄色 砂粒・長石粒多・長石微粒多 やや硬質

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
21	粘板岩	底径4.4 高さ1.5 孔径0.8	舌形を呈す。	粘板岩 34.3 g	23	刀子	全長10.9 刃幅1.3 刃長6.6	ほぼ完形品。 様と刃部に闇を有する。	
22	砥石	20.0×5.5 3.4	長方形を呈す大形の砥石で、二側面を除いて全面に使用痕が認められる。	流紋岩 850.5 g					

144号竪穴住居跡（第267図）

調査区 E3a1 区を中心に確認され、102号竪穴住居跡の北方に位置している。規模は、東西4.25 m・南北4.4 mを測り、主軸方向N-0°を指す隅丸方形を呈している。

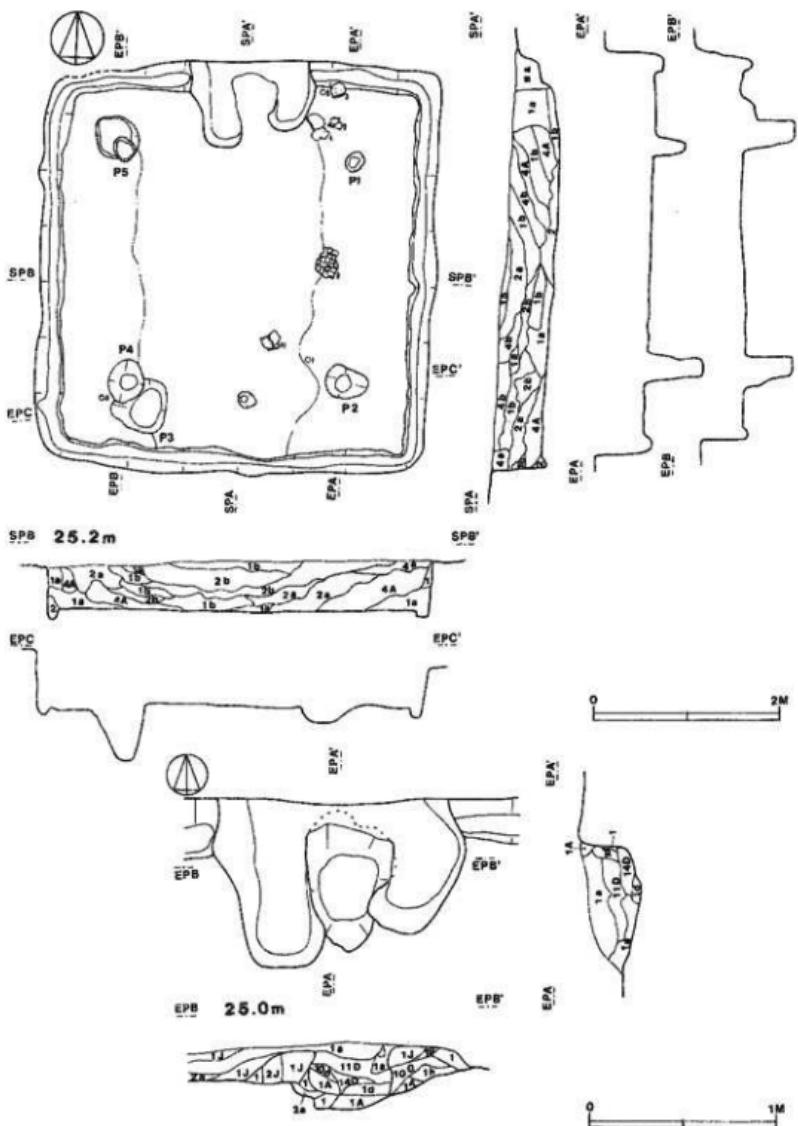
覆土は、上部に暗褐色土、下層に褐色土が堆積し、ローム小ブロック・炭化粒子を含み、部分的に人为的な堆積がみられる。壁は高さ50cmと深く、ほぼ垂直に立ち上がる。壁下には、幅15cm・深さ10cmの壁溝が全周する。床面は、南壁部から北側に向かってゆるやかに下がっている。また、南壁直下から窓前面にかけての中央部の幅2 mほどは、特に踏み固められている。ピットは5か所で、深さは、35~60cmを測る。

窓は、北壁中央部にあり、上部は擾乱を受けているが、長さ0.9m・幅1.3m・焚口部幅0.3mを測り、壁外へは掘り込まずに構築されている。袖は山砂を主体として築かれ、焼成部は床面より10cm低く、焼土および灰が15cm程堆積している。焼造部はほぼ垂直に立ち上がる。

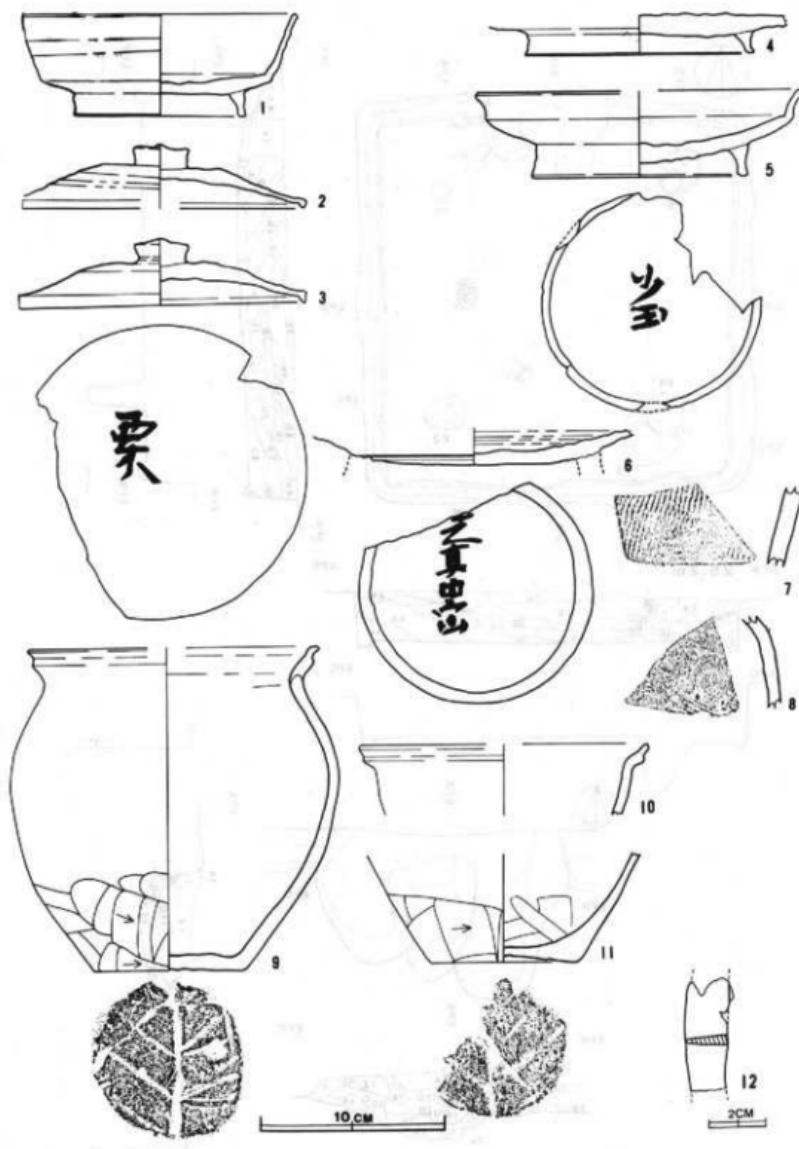
遺物は、土器師・須恵器・墨書き土器・瓦・羽口・鉄製品が東半部の床面付近から出土しているが、点数は少ない。

144号竪穴住居跡出土遺物観察表（第268図）

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	高台付环	A 14.6 B 5.5 D 9.2	底部と体部の境界は鋭く明瞭な稜を持ち、体部は外傾気味に上方にのびる。口縁部は僅かに外反し、端部を丸くおさめている。高台は外下方にのび、外縁部に稜をなす。右クロクロ木挽き成形で、底部は回転範削り調整。体部内面から口縁部外縁にかけ模ナナ。	灰色 砂粒・長石粒・長石微粒、 雲母 普通 底面内面に鉢分付着
2 S	蓋	A(15.3) B 3.5	天井部中央に、中心が高く周囲が凹むつまみが付く。天井頂部は扁平で、天井部と口縁部の境界は明瞭な稜を持ち、口縁部は下方に向て屈曲する。水挽き成形で、天井頂部から天井部中位にかけ右クロクロ使用の回転範削り調整。全体に摩滅が進行。	灰白色 砂粒・長石粒多・長石微粒、 雲母 普通
3 S	蓋	A 15.3 B 3.6	天井部中央に扁平な丸形のつまみが付く。天井部中位からやや反り気味に下降し、口縁部は下方に向て屈曲する。水挽き成形で、天井部中位は右クロクロ使用の回転範削り調整。つまみと天井頂部及び天井部中位から内面全体に模ナナ調整。	にぶい褐色 砂粒・長石粒・長石微粒、 雲母 なま焼け 天井部内面に剥落
4 S	合付蓋	D 12.3	貼り付け合はせは外下方にのび、「へ」の字状をなし内・外縁部に鋭い棱を持つ。水挽き成形で底部は右クロクロ使用の回転範削り調整。高台内・外縁は模ナナ調整。	暗灰色 砂粒・長石粒・長石微粒 良好 底面内面に黄白色の自然物



第267図 144号竖穴住居跡・竪穴測図



第268図 144号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
5 S	台付盤	A(17.3) B 4.7 D 11.6	底部と体部は境界をなさない。体部は丸味を帯びた底部から内骨氣味に外上方にのび、口縁部は強く外反し、端部を丸くおさめている。高台は私り付けで、下方に向いて、端部をやや丸くおさめている。右ロクロ水廻き成形で、底部は回転削り調整。	黄灰色 細砂・長石粒・長石微粒 普通 底部外面に墨書き
6 S	台付盤		貼り付け高台は欠損。水廻き成形で、底部は右ロクロ使用の回転削り調整。	灰白色 細砂・長石粒・長石微粒・雲母 不良 底部外面に墨書き
7 S	裏		体部の一部。外面は平行叩き目調整後一部に鋸削りがみられる。内面は見ナゲ及びナデ調整。	灰黄色 細砂・やや精良 普通
8 S	盤		体部の肩部。外面は平行叩き目調整。内面はナデ調整。	灰色 細砂・長石粒 良好
9 H	裏	A(15.4) B 17.4 C 8.0 F 17.5	底部は平底で、体部は内厚しつつ立ち上がり、「く」の字状に屈曲する口縁部が付く。口縁外端面に凹みを持たせ、端部を外反気味につまみ出す。頭部内面と体部内面に軽度粗面を残す。体部内面と体部外端面には見ナゲ、体部外端下部は鋸削り調整。	にいむ褐色 砂粒・長石粒・雲母・スコリア 普通 底部外面に木葉痕
10 H	裏	A(15.3)	底部は平底と思われるが欠損。体部は内厚し、「く」の字状に屈曲する口縁部が付く。口縁外端面に凹みを持たせ、端部を外方につまみ出す。口縁内部・外面は見ナゲ調整。	にいむ褐色 砂粒・雲母 普通
11 H	裏	C 7.8	やや盛り上がった平底の底部から体部はやや内骨氣味に外上方にのびる。体部外面は鋸削り調整。体部内面と底部内面はナデ調整。	にいむ褐色 砂粒・長石粒・雲母・スコリア 普通 底部外面に木葉痕
12	刀子か	全长(3.8) 刃幅 1.5	両端部欠損。	

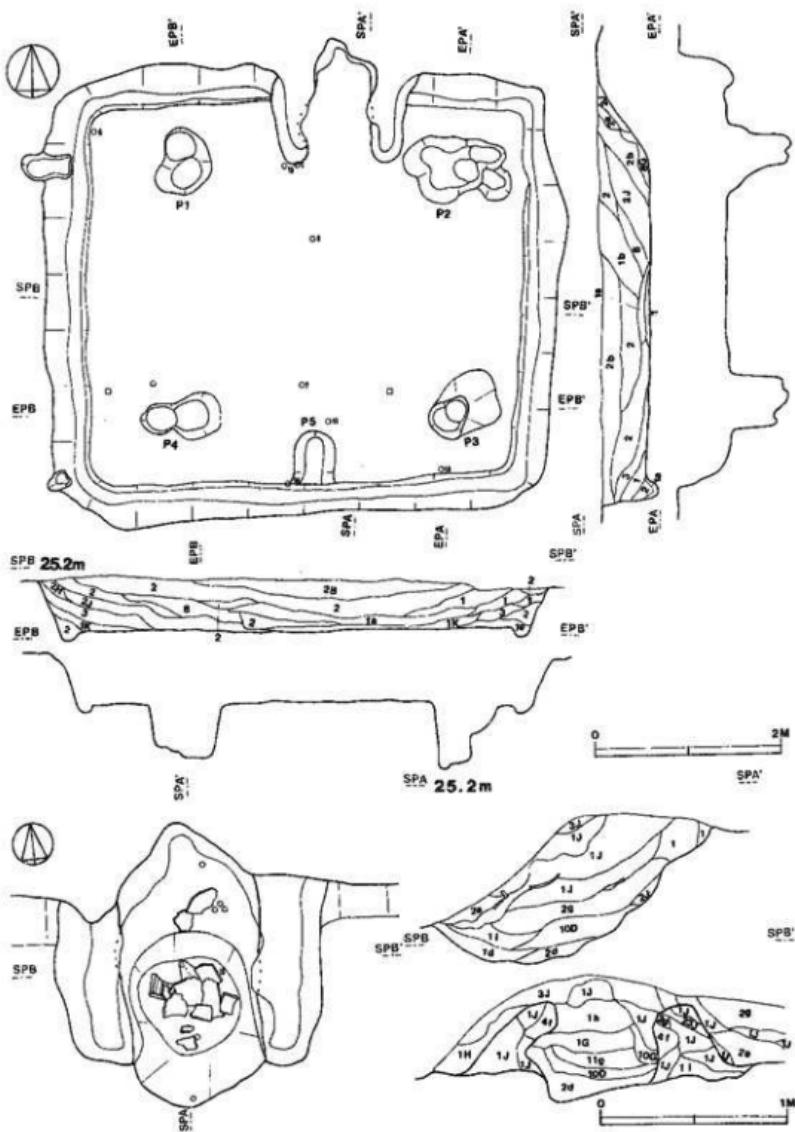
145号竪穴住居跡 (第269図)

調査区 D2 j8 区を中心確認され、144号竪穴住居跡の西に位置している。規模は、東西5.48m・南北4.85mを測り、主軸方向N-0°を指す長方形を呈している。

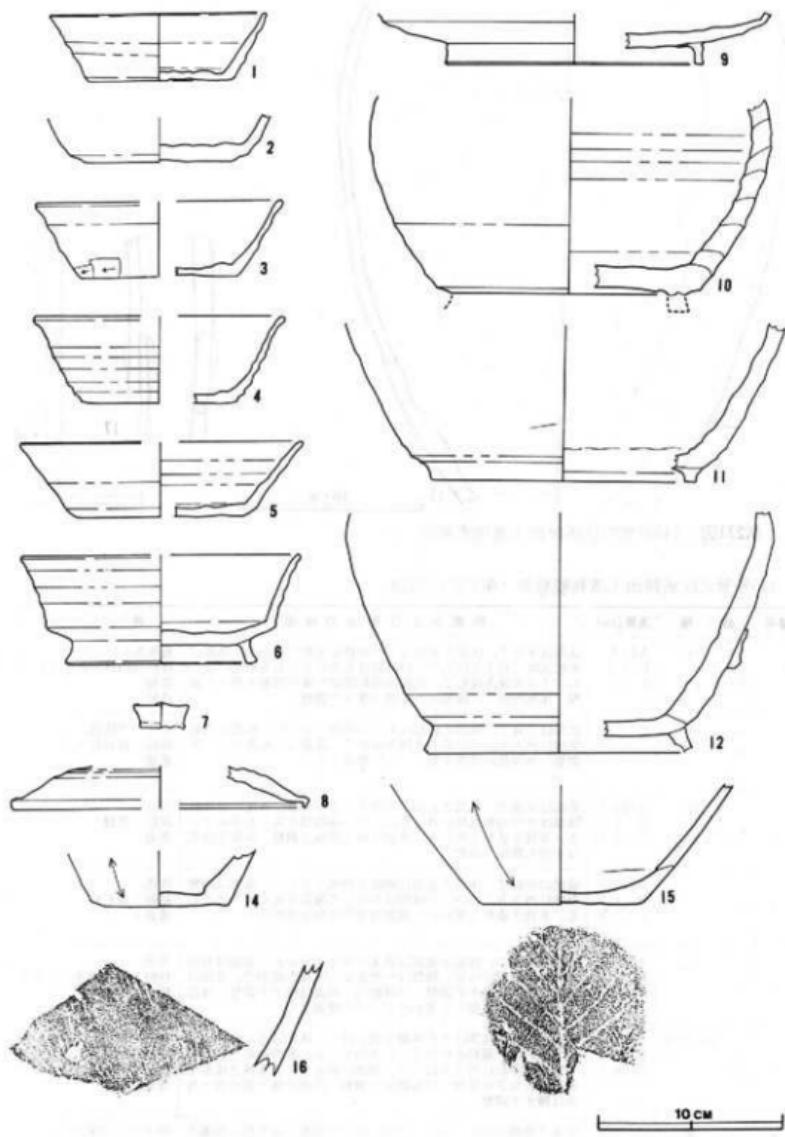
覆土は、暗褐色土を主体とし、北半部には、北方からロームブロックを含む層が人为的な堆積を示している。また、南半部は、自然堆積の状況を示している。壁は高さ50cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。壁下には、幅15cm・深さ10cmの壁溝が全周する。床面は平坦で、全体的に踏み固められている。南壁中央部の壁溝に接して浅いピットがあり、入口部の施設とみられる。ピットは4か所確認され、それぞれ2個のピットが重複している。いずれも壁寄りの外側にあるピットが新しく、拡張または建て替えが行われたものとみられる。深さは、30cm内外である。

竪は、北壁やや東寄りにあり、長さ1.53m・幅1.38m・焚口部幅63cmを測り、壁外へ32cm程掘り込んで構築されている。袖は砂を突き固めて築かれている。焼成部は床面より18cm低く、30度の傾斜をもって煙道部へ続く。焼土は、20cm程堆積している。焼成部中央には、つぶれた土師器表・瓦・石が出土している。

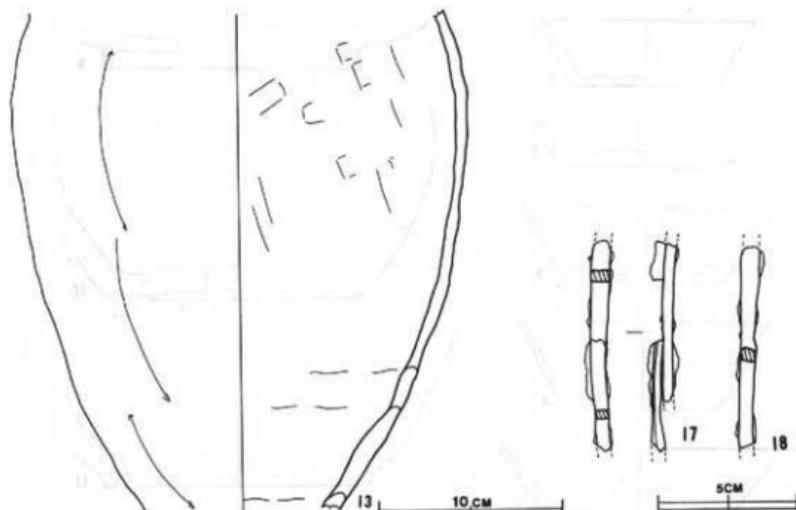
遺物は、覆土から土師器・須恵器・転用硯・瓦・羽口・鉄製品・鉄津が出土している。



第269図 145号竪穴住居跡・窓実測図



第270図 145号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)



第271図 145号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)

145号竪穴住居跡出土遺物観察表(第270・271図)

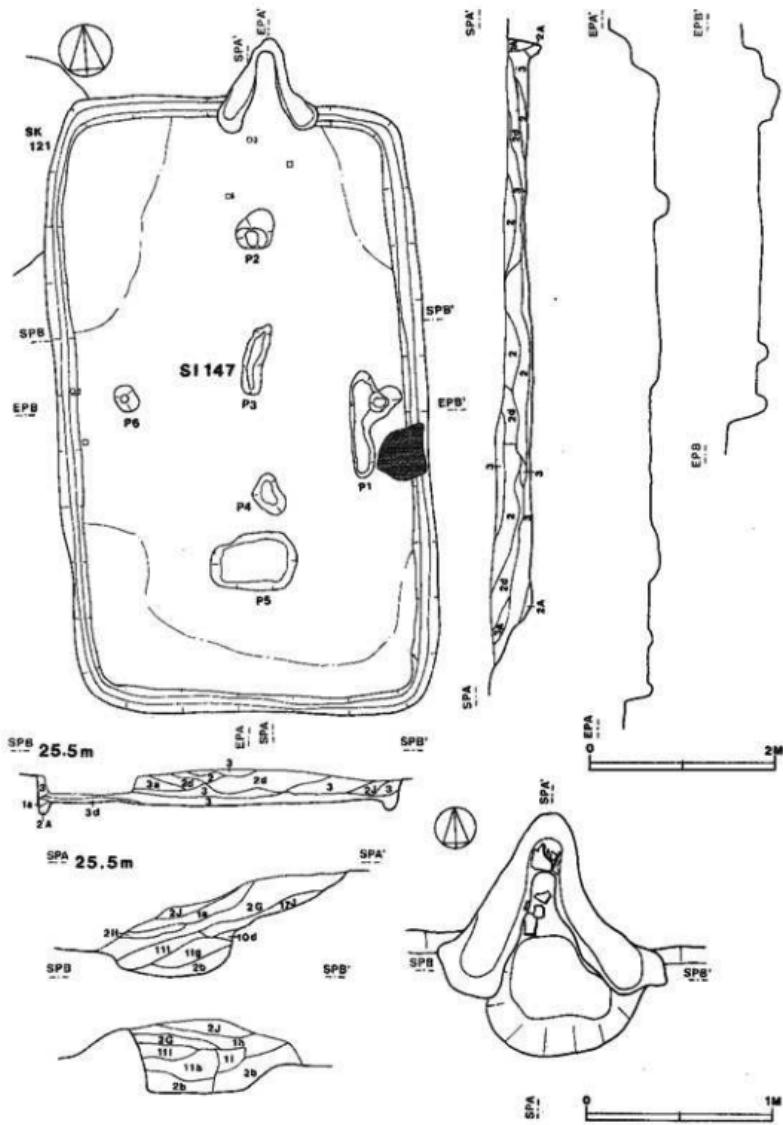
番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	環	A 11.6 B 3.6 C 7.5	底部は平底で、体部と底部はやや明瞭な角度で分かれ。体部は外側気味に外上方にのび、口縁端部をやや丸くおさめている。右ロクロ水洗き成形で、底部は回転荒切り後外周部を荒ナナテ調整。体部内面と口縁部内面は横ナナテ調整。	青灰色 砂粒・長石粒・長石微粒・雲母 良好
2 S	環	C 7.5	底部は平底で、体部と底部はあまり角度で分かれ。体部は内側気味に外上方にのびる。水洗き成形で、底部は回転荒切り無調整。外周部に荒傷を残す。やや摩滅する。	オリーブ灰色 細砂・長石粒・鉄分 普通
3 S	環	A(13.1) B 4.1 C (8.3)	底部は平底で、体部と底部は荒削りによる明瞭な角度で分かれ。体部は内側気味に外上方にのび、口縁部を丸くおさめている。水洗き成形と思われる。底部は静止荒削り調整。体部下端部は手持ち荒削り調整。	灰色 細砂・雲母 普通
4 S		A(13.1) B 4.7 C (7.9)	底部は平底で、体部と底部は明瞭な角度で分かれ。体部は内側気味に外上方にのび、口縁部は外反して端部を丸くおさめている。水洗き成形と思われる。底部外周部は静止荒削りか。	灰色 細砂・長石粒 普通
5 S	環	A(15.0) B 4.1 C (8.7)	底部は平底で、体部と底部はあまり角度で分かれ。体部は外側気味に外上方にのび、端部はやや尖る。水洗き成形で、底部は回転荒切り後端ナナテ調整。口縁部内・外面は横ナナテ調整。体部下端部は回転荒削りと思われる。やや摩滅する。	灰色 砂粒・長石粒多・長石微粒 普通
6 S	高台付環	A(14.7) B 5.9 D 10.3	底部と体部の境界はやや明瞭な棱を持ち、体部は外反気味に外上方にのび、端部をやや丸くおさめている。高台は貼り付けで、「ハ」の字状に外下方にのび、端部に面をなす。水洗き成形で、底部は右ロクロ使用の回転荒削り調整。内面全体と高台内・外側は横ナナテ調整。	灰色 細砂・長石粒・長石微粒・鉄分 普通
7 S	蓋		中高で四面が凹むつまみ。全体に横ナナテ調整。接合部に溝巻き状にさみがみられる。	明オリーブ灰色 細砂 普通

番号	器種	法蓋(cm)	形態および手法の特徴	参考
8 S	盞	A(15.7)	天井頂部は丸く、天井部と口縁部の境界はやや明瞭な棱を持ち、口縁部は下方向に屈曲し、端部はやや尖る。水滴き成形と思われる。天井頂部は右ロクロ使用の回転鏡削り調整、天井部中位から口縁部内、外表面及び大井部内面は横ナナ子調整。	オーリーブ灰色 細砂・長石微粒・鉄分 普通 天井部内面に黄白色の自然釉 走き重ね焼き
9 S	台付盤	D(13.8)	底部と体部は境界をなさない。体部は外上方に大きく開く。高台は貼り付けで、ややふんばり気味に下方向にのび、端部に凹をなす。水滴き成形で、底部は右ロクロ使用の回転鏡削り調整。体部外面と高台内・外表面は横ナナ子調整。	灰色 細砂・長石粒・長石微粒 良好
10 S	台付壺		体部は内側しつつ外上方に立ち上がる。口縁部と高台は矢折。粘土盛積も上げ成形と思われる。体部断面に不規則な気泡を見る。体部内面は横ナナ子調整。体部外表面は丸ナナ子調整。体部下端部は四回目削り裏窓。底部外面は底部削り後ナナ子調整。全体は厚手な作り。	灰白色 細砂・長石粒・鉄分多 普通 底部内面に黄白色の自然釉
11 S	台付壺	D(14.3)	体部は内青氣味に外上方にのびる。高台は貼り付けで下方に向くのび、端部に凹をなす。体部外表面と高台内・外表面は横ナナ子調整。体部外表面は丸ナナ子調整。体部下端部は回転鏡削り調整。体部外表面と高台外表面に粘土凝灰を残す。	灰白色 細砂・長石粒・長石微粒・鉄分多 良好 底部内面に黄白色の自然釉
12 S	台付壺	F 23.0	体部は内側しつつ立上がる。高台は「へ」の字状に外下方にのびるが端部は矢折。体部外表面に他の須恵器片が付着。	灰白色 細砂・長石粒・鉄分多 良好 外表面全体と底部内面に緑黒色の ビードロ状自然釉 SD09と接合
13 H	壺	F 24.3	体部は内側しつつ外上方に立上がる。体部内面に粘土凝灰を残す。体部内面は丸ナナ子調整。体部外表面は底部の丸ナナ子調整。	明赤褐色 砂粒・長石粒・長石微粒・雲母 普通 体部外表面に況付有
14 H	壺	C 7.3	平底の底部。体部内・外表面は丸ナナ子調整。底部内面はナナ子調整。底部外表面は木葉模の上から丸ナナ子とナナ子調整。	赤褐色 砂粒・長石粒・雲母 良好
15 H	壺	C 8.6	平底の底部から体部は内青氣味に外上方にのびる。体部内・外表面は丸ナナ子調整。	にじみ・褐色 砂粒・長石粒多・雲母 普通 底部外表面に木葉模
16 H	壺		体部の一部。体部外表面は平行引き目調整。内面はナナ子調整。摩滅が進行。	にじみ・黄褐色 細砂・長石粒 不良
17	鉢		基部。 17は2本が付着している。	
18			18は全长(7.1cm)、直径0.55cm、両端部欠損。	

147号竪穴住居跡 (第272図)

調査区 E1f 区を中心に確認され、146号工房跡の南方に位置し、西壁寄りで12号掘立柱建物跡と、北西隅で121号土塹と重複している。新旧関係は、両跡とも当路より新しいものとみられる。規模は、東西3.97m・南北6.59mを測り、主軸方向N-0°を指す隅丸長方形を呈している。

覆土は、暗褐色土を主体とし、最下層と上層の一部にロームブロックを多量に含み、人為的堆積とみられるが、他は自然堆積とみられる。壁は、高さ20~30cmを測り、70度内外の傾斜をもって立ち上る。壁下には、幅15cm・深さ15cm内外の豊溝が全周する。床面はほぼ平坦で、北東・北西の各隅と、南東隅から南壁付近を経て、南西隅にかけてのコの字形の部分を除いては、良く踏み固められている。また、東壁中央部直下に、粘土を突き固めたステップ状のものと、小ピット

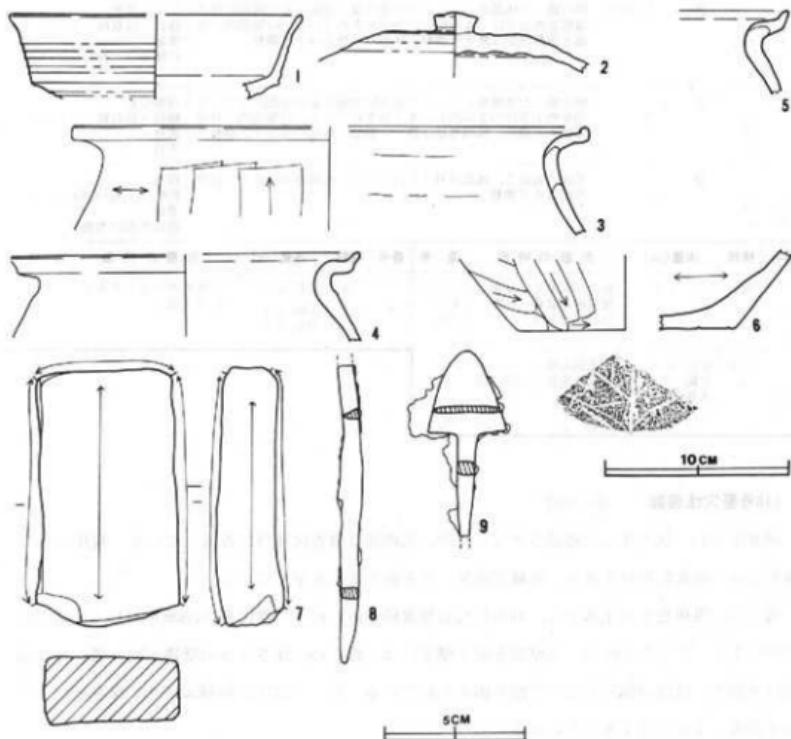


第272図 147号竪穴住居跡・竪穴測図

があり床面の状態と考え合わせると、入口部の施設とみられる。

竈は、北壁中央やや東寄りにあり、長さ1.3m・幅1.2m・焚口部幅0.6mを測り、壁外へ70cm掘り込まれている。袖部は山砂を主体として築かれているが、短いものである。焼成部は床面より12cm低く、ゆるやかに煙道部へ続く。焼土は、厚い部分で15cmの堆積がみられる。煙道部付近に土師器甕が、つぶれた状態で出土している。

遺物は床面付近から少量の土師器・須恵器・羽口・砥石・鉄製品・鐵滓が出土している。



第273図 147号竪穴住居跡出土遺物実測図

147号竪穴住居跡出土遺物観察表（第273図）

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S 高台付甕	A(15.5) B(15.5)	底部と体部の境界はやや明瞭な棱を持つ。体部は外輪気味に外上方にのび、口縁部で外反し、端部を丸くおさめている。貼り付け高台は欠損。水焼き成形と思われる。内面全体と口縁部外縁にかけて横ナナ字調整。全体に擦流す。	灰白色 砂粒・長石粒・長石擦粒、 鉄分 普通 体部内面に漆付着

番号	種類	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
2 S	垂 （転用硯か）		天井部中央にボタン状のつまみが行く。天井頂部はやや扁平、水滴形成形で、天井頂部は墨軸挽削り調整。つまみは横ナナ調整。天井部内面中央部に硯としての使用痕がみられる。	灰色 砂粒・長石粒・長石微粒・鉄分多 普通
3 H	瓶	A(27.4)	脇の張った体部から丸く出た口縁部が付き、外端部に面をなす。口縁部内・外面と頸部内面には横ナナ調整。体部内・外面は先ナナ後ナナ調整。体部内面に粘土紐痕を残す。	朱色 砂粒・長石粒多・雲母良好
4 H	瓶	A(18.6)	脇の張った体部から「く」の字状に強く突出する口縁部が付き、端部を外上方につまみ出し、丸くおさめている。口縁部内・外面と頸部内面は横ナナ調整。体部内・外面はナナ調整。	にない褐色 砂粒・長石粒・雲母普通 口縁部内・外面に爆付有
5 H	瓶		脇の張った体部から「く」の字状に突出する口縁部が付き、端部を外上方につまみ出し、丸くおさめている。口縁部内・外面は横ナナ調整。体部外側は原ナナ調整。体部内面はナナ調整。	浅黄褐色 砂粒・長石粒・石英粒・雲母不良
6 H	瓶		平底の底部で、体部は外上方にのびる。体部外側は原ナナ調整。内面はナナ調整。	暗色 砂粒・長石粒・石英粒・雲母普通 底部外側に本葉痕
番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
7	紙石	9.1-4.9 2.2	長方形を呈し、全面にシルト 使用痕が認められる。 欠損部分あり。	シルト 170g
8	刀子	全長(10.7) 刃幅 0.6 茎長 5.8	切先部欠損。 刃部と茎部との間に開 き有する。	
番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
9	瓶	全長(6.7) 刃幅 2.4 刃長 3.0	三角形の平底式である。 下部欠損。	

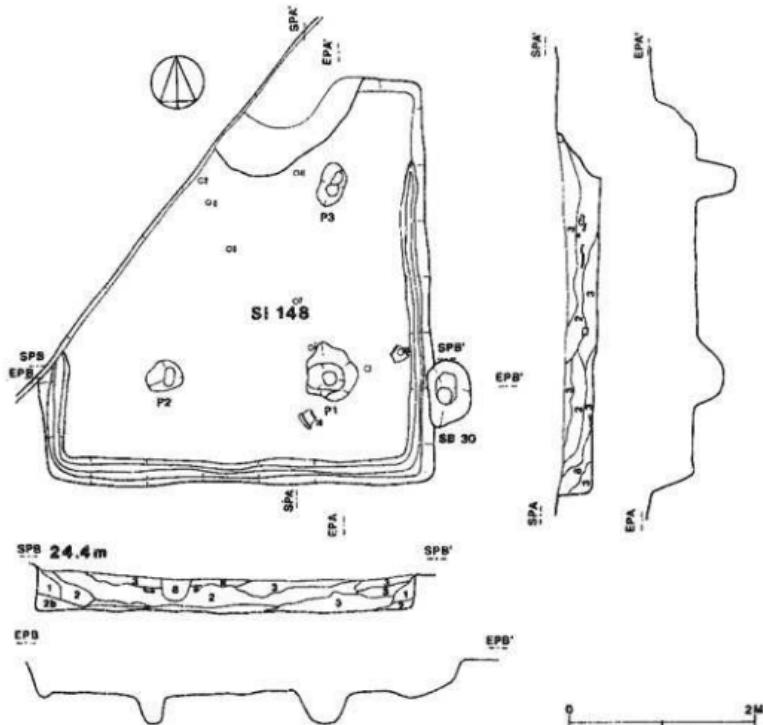
148号竪穴住居跡（第274図）

調査区 D117区を中心に確認されているが、北西部は調査区域外に存在している。規模は、東西4.26m・南北4.34mを測り、主軸方向N=0°を指す方形を呈している。

覆土は、黒褐色土を主体とし、おおむね自然堆積とみられる。壁は高さ35cmを測り、75度内外の傾斜をもって立ち上がる。北壁部を除く壁下には、幅16cm・深さ3cmの壁溝が回っている。床面は平坦で、ほぼ全面にわたって踏み固められている。ビットは3か所確認され、深さは40~53cmを測る。支柱穴は4本とみられる。

竈は、北壁や東寄りに確認され袖部は山砂を主体として構築されている。焼成部は床面より10cm低く、急傾斜で煙道部へ続く。

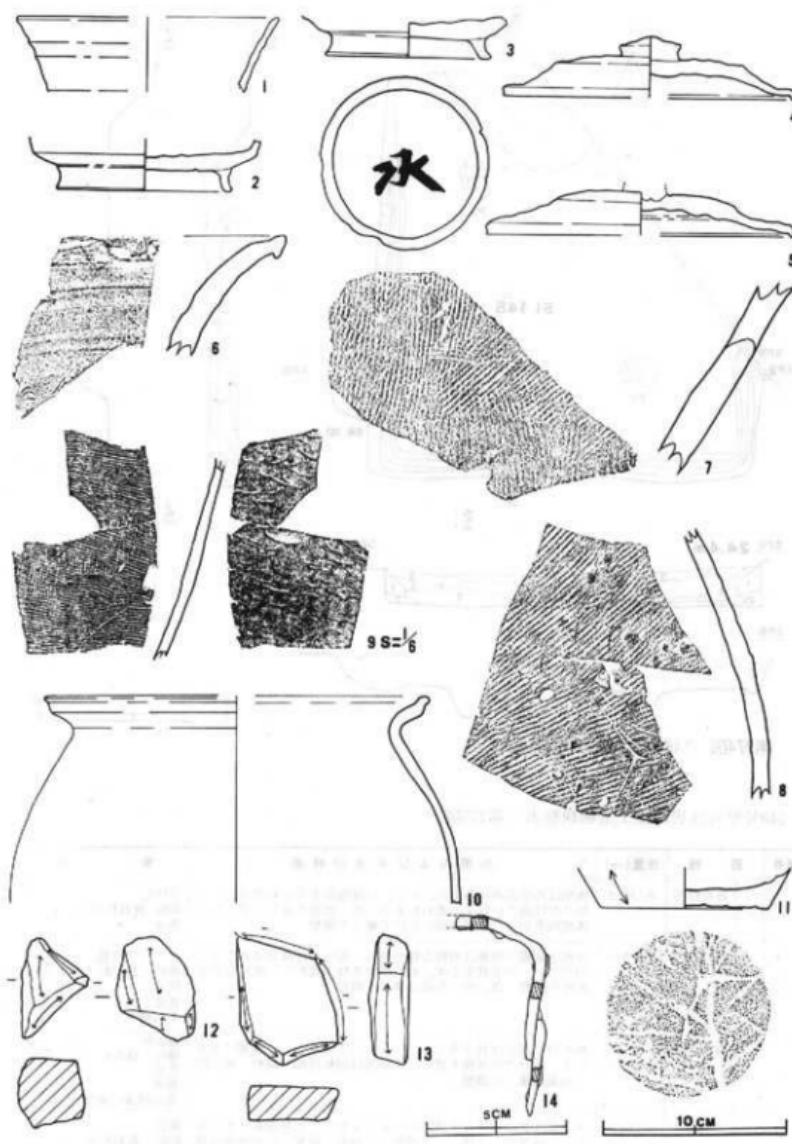
遺物は、土師器・須恵器・墨書き器・漆付着上器・瓦・羽口・砥石・鉄製品・鉄斧が、竈前面から中央部付近の覆土中から出土している。また、ほぼ中央部覆土下層より大形の削石が数個出土している。



第274図 148号竪穴住居跡実測図

148号竪穴住居跡出土遺物観察表（第275図）

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S 高台付坏	A(13.9)	体部は外傾気味に外上方にのび、口縫端部を丸くおさめている。貼り付け高台が付くと思われるが欠損。水焼き成形と思われる。体部内面から口縫部外側にかけて横ナガ調整。	青灰色 細砂・長石粒・長石微粒 普通 堅ねぬき
2	S 高台付坏	D 9.5	体部と底部の境界は明瞭な棱を持つ。貼り付け高台は外下方にのび「ハ」の字状をなし。右ロクロ水焼き成形で、底部は回転削り調整。高台内・外面は横ナガ調整。	オリーブ底色 細砂・長石粒・長石微粒 鉄分 普通 堅ねぬき
3	S 高台付坏	D 9.0	貼り付け高台は外下方にのび「ハ」の字状をなし、端部に面をなす。右ロクロ水焼き成形で、底部は回転削り調整。高台内・外面は横ナガ調整。	青灰色 細砂・長石粒・長石微粒 鉄分 普通 成形外面に傷跡
4	S 蓋	A(15.6) B 3.4	天井部中央に扁平な宝珠形のつまみが付く。天井頂部はやや扁平で、以りつつ下降し、天井部とは縫部の境界にやや明瞭な棱を持つ。口縫部は下方に削出し、端部はやや尖る。水焼き成形で、天井頂部から天井部中央にかけ、右ロクロ使用の回転削り調整。	灰色 細砂・長石粒多・長石微粒多 良好 生き重ね焼き

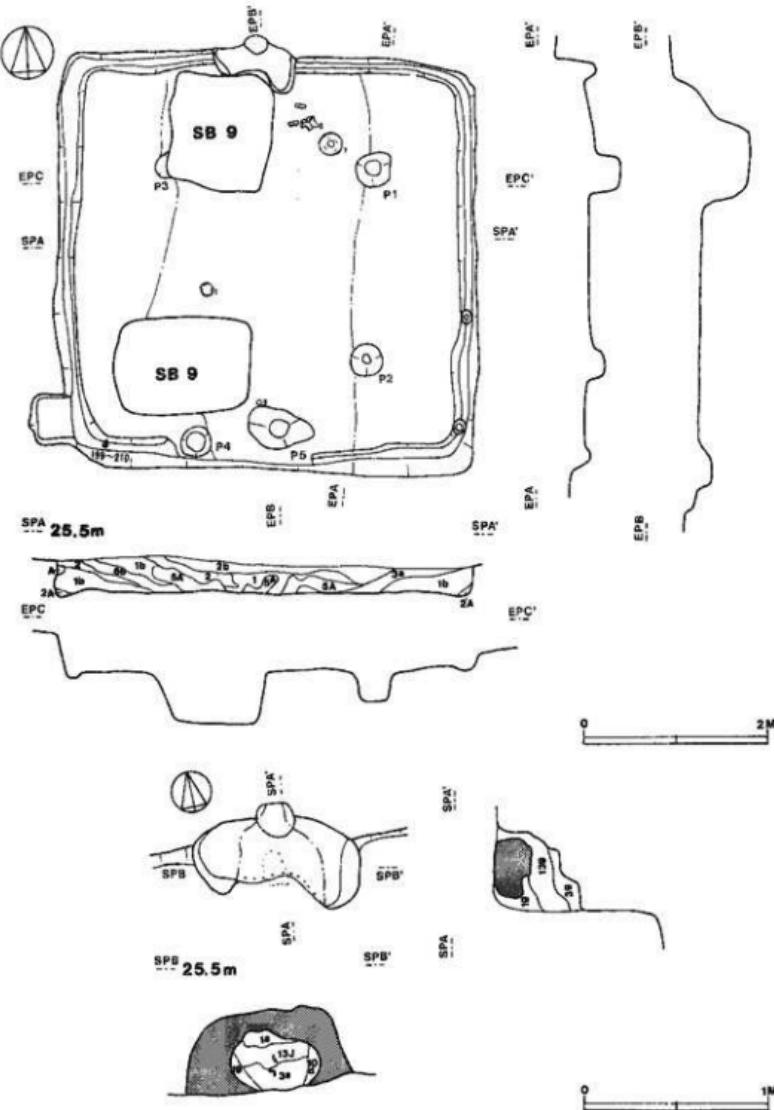


第275図 148号竪穴住居跡出土遺物実測図

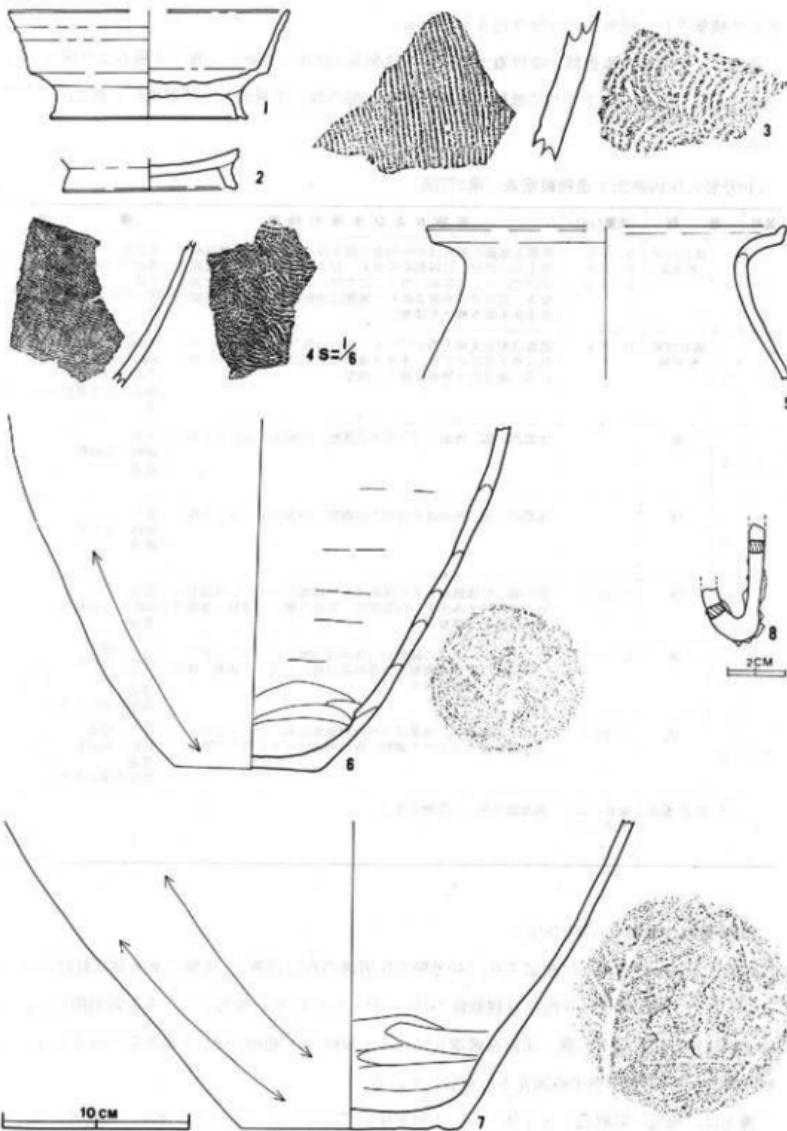
番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
5 S	盃	A(16.4)	つまみは欠損。天井頂部はやや丸く、反り気味に下降し、天井部と口縁部の境界はややあまい模をもつ。口縁部は下方に向て屈曲する。右ロクロ水抜き成形で、天井部は回転窓削り、天井部内面中位は回転窓削りか。天井部外側に折頭底を残す。	青灰色 細砂・長石粒・長石微粒 ・礫 普通
6 S	盃		口縁部の一部。内面と口縁外端部は横ナナ調整。外面は刷毛ナナと彌状工具による波状文を施す。	外面一暗緑灰色 内面一灰褐色 細砂・長石粒 良好
7 S	盃		体部の一部。外面は平行叩き目調整。内面はナナ調整で粘土底を残す。	緑灰色 細砂・長石粒 良好
8 S	盃		体部の一部。外面は平行叩き目調整。表面に気泡がみられ、部分的に剝離する。内面はナナ調整。指頭押圧痕を残す。	暗青灰色 細砂・長石粒 良好
9 S	盃		体部の一部。外面は平行叩き目調整。内面は荒ナナ調整。	にぶい褐色 細砂・長石粒 なま焼け
10 S	盃	A(20.4) F 24.1	丸く削った体部から「く」字状に屈曲する口縁部が付き、口縁端部を外上方につまみ出して丸くおさめている。口縁部内・外表面は粗ナナ調整。体部内面は荒ナナ調整。体部外表面は荒ナナ後、ナナ調整。やや摩滅する。	にぶい褐色 砂粒・長石粒・石英・雲母 普通
11 S	盃	C 9.0	平底の底部。内面は荒ナナとナナ調整。	橙色 砂粒・長石粒 普通 底部外側に木葉痕
番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
12	砥石	3.4×2.4 2.3	三角形を呈し、全面に使用痕が認められる。欠損部分あり。	流紋岩 163g
13	砥石 (軸用砥)	4.0×3.3 1.2	全面を除いて全面に使用痕が認められる。	鉄分付 着 研磨器 片利用
番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
14	不透明 鉄製品	太さ0.25 0.4	2本が付着し一方はし字 状を呈している。	

149号竪穴住居跡 (第276図)

調査区 E 1c 8区を中心に確認され、146号工房跡の南西に位置し、西側で9号掘立柱建物跡の P₂・P₃と重複している。新旧関係は、9号掘立柱建物跡が新しく、当跡の甌。床面を破壊している。規模は、東西4.56m・南北4.49mを測り、主軸方向 N - 3° - E を指す略隅丸方形を呈している。覆土は、暗褐色土を主体とし、3層に大別でき、上・下層は自然堆積、中層はロームブロック・炭化粒子を含み、人為的な堆積とみられる。壁は高さ15~45cmを測り、80度内外の傾斜をもって立ち上がる。壁下には、南壁中央部1.4mの間を除き、幅8~15cm・深さ5~15cmの壁溝が回っている。床面はほぼ平坦で、南壁下から窓前面にかけての幅2mの範囲は良く踏み固められている。ピットは5か所確認され、P₁~P₃が主柱穴とみられる。深さは50cm内外を測る。



第276図 149号竪穴住居跡・竪穴実測図



第277図 149号竪穴住居跡出土遺物実測図

窓は北壁ほぼ中央部にあり、焚口部は8号掘立柱建物跡に破壊されている。袖部は山砂を主体として構築され、壁外へ15cm掘り込まれている。

遺物は、土師器・須恵器・漆付着土器・瓦・鉄製品・鐵滓・漆紙が、覆土下層および床面付近から出土している。このうち漆紙は、南西コーナー部の覆土中層から土師器裏片と共に出土している。

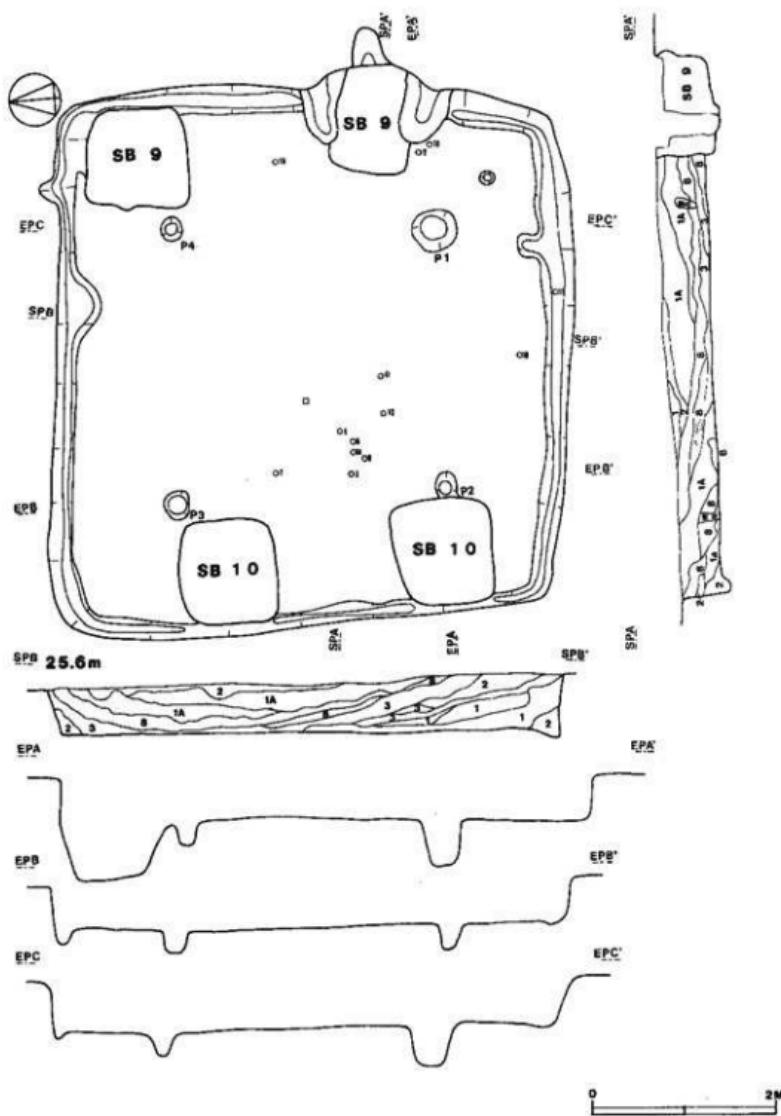
149号竪穴住居跡出土遺物観察表（第277図）

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	高台付环 (転用碗)	A(14.9) B 5.9 D 10.6	底部と体部の境界はやや明瞭な縁を持つ。体部は外輪気吹で上方にのび、口縁部をやや丸くおさめている。高台は貼り付けて、「ハ」の字状に外下方にのび、縁部にやや凹んだ面をなす。右ロクロ水吹き成形で底部は回転旋削りと想われる。高台内・外側は擦ナデ調整。底部内面中央を除き擦ナデ調整。	灰白色 細砂・長石粒・長石微粒・雲母 不良 高台内面と底部外側に墨付有
2 S	高台付环 (転用碗)	D 9.4	底部はやや丸味を帯びている。高台は貼り付けて、「ハ」の字状に外下方にのびる。水吹き成形で底部は回転旋削りと思われる。高台内・外側は擦ナデ調整。	灰白色 細砂・雲母 不良 高台内面と底部外側に墨付有
3 S	裏		体部の一部。外側は平行叩き目調整。内面は同心円文を残す。	灰色 細砂・長石粒 普通
4 S	裏		体部の一部。外側は平行叩き目調整。内面は同心円文を残す。	灰色 細砂・長石粒 普通
5 H	裏	A(19.3)	胸の張った体部から丸く屈曲する口縁部が付き、口縁端部を外上方につまみ出す。口縁部内・外側は擦ナデ調整。体部内外側は擦ナデ調整。	褐色 砂粒・長石粒多・雲母 普通
6 H	裏	C 7.6	やや小形で、平底の底部から体部は内側しつつ立ち上がる。内側全体は擦ナデとナデ調整。体部外側は擦ナデ調整。体部内側に粘土斑痕を残す。	にぶい褐色 砂粒・長石粒・雲母・スコリア 普通 底部外側に木葉痕
7 H	裏	C 11.8	平底の底部から、体部はやや内輪気吹で上方にのびる。内側全体は擦ナデとナデ調整。体部外側は丁寧な擦ナデ調整。	にぶい褐色 砂粒・長石粒・雲母 普通 底部外側に木葉痕
8 不明鉄製品	全長(7.0) 大きさ 0.5		両端部欠損。一部彎曲する。	

150号竪穴住居跡（第278図）

調査区 E1c6区を中心に確認され、149号竪穴住居跡の西に位置し、東側で8号掘立柱建物跡のP6・P7と、西側で10号掘立柱建物跡のP3・P4とそれぞれ重複している。新旧関係は、両掘立柱建物跡が新しく、窓・床面を破壊している。規模は、東西6.32m・南北5.58mを測り、土軸方向 N-98°-E を指す略陽角方形を呈している。

覆土上は、褐色・暗褐色土を主体とし、下層を除いてはロームブロックを含み、人为的堆積とみられる。壁は高さ45~65cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁下には、幅15cm・深さ10cmの横溝



第278図 150号堅穴住居跡測図

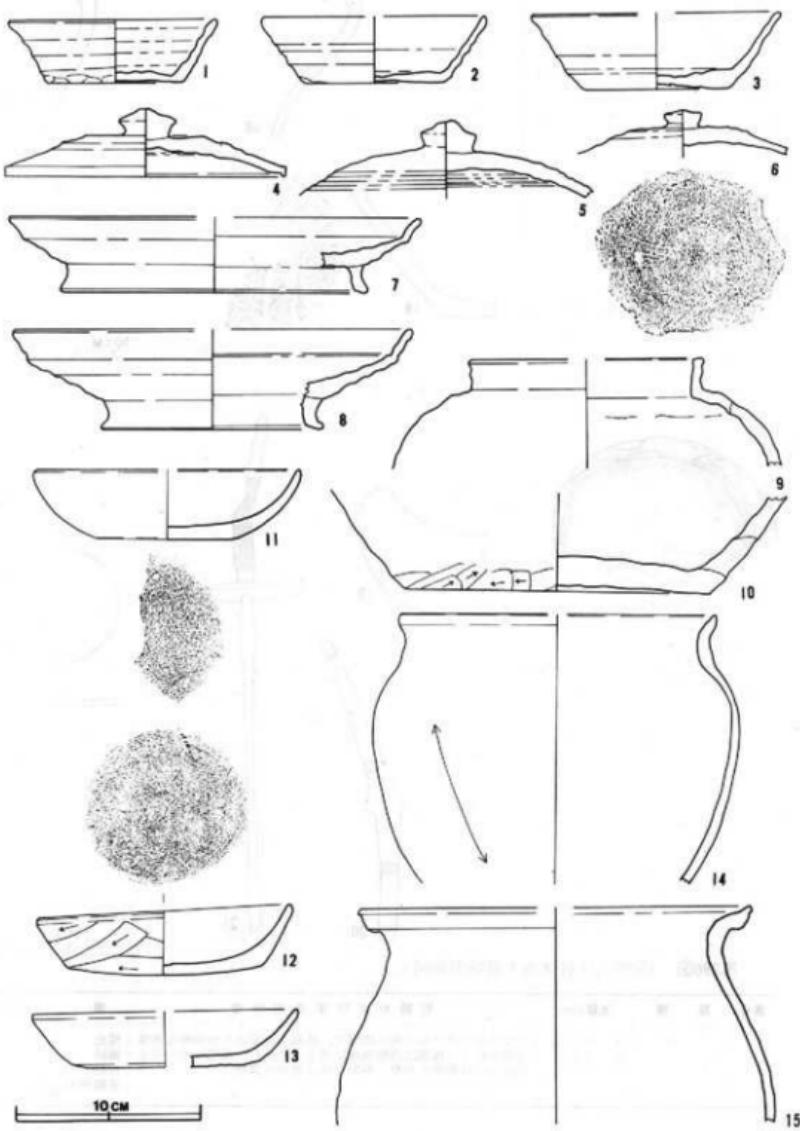
が全周する。床面は失われている部分もあるが、南壁中央から竈焚口部にかけての3.5×3.5mの範囲は良く踏み固められている。ピットは5か所確認され、P₂・P₃・P₄は径30cm・深さ30cm内外であるが、P₁は径50cm・深さ50cmを測る。

竈は、東壁やや南寄りにあるが、前述のように9号掘立柱建物跡によって大部分が失われている。袖部は山砂を主体として構築され、幅1.55mを測る。壁外へ50cmほど掘り込まれている。

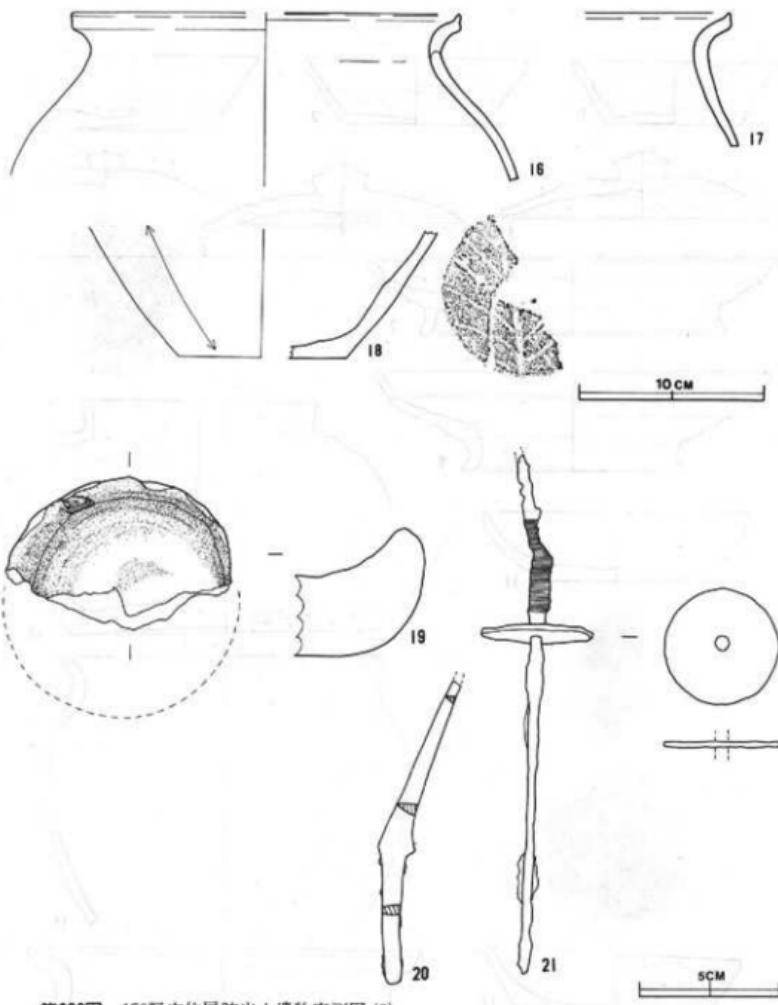
遺物は、土師器・須恵器・漆付着土器・瓦・羽口・土製品・鉄製品・鉄滓が、踏み固められた床面付近から出土している。

150号竪穴住居跡出土遺物観察表（第279・280図）

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	壺	A(11.1) B 3.5 C 7.3	底部は平底で、体部と底部は肩削りによって鋭く明瞭な角度で分かれれる。体部は外側気味に外上方にのび、口縁部はやや尖る。右ロクロ水洗き成形で、底部は一方向の静止窓削り調整。底部下端部は手持たれ窓削り調整。	灰白色 細砂・長石粒・長石微粒 良好
2 S	壺	A(12.0) B 3.6 C 7.5	底部は平底で、体部と底部は明瞭な角度で分かれれる。体部は外側気味に外上方にのび、口縁部はやや尖る。水洗き成形で、底部は回転窓削り調整。底部中心を薄く作る。	灰白色 細砂・長石微粒・雲母 不良 全体に漆付着
3 S	壺	A(13.4) B 4.2 C 8.1	底部は平底で、体部と底部は明瞭な角度で分かれれる。体部はやや内側気味に外上方にのび、口縁部を丸くおさめている。右ロクロ水洗き成形で、底部は回転窓削り後、多方向の静止窓削り調整。口縁部内・外側と底部内・外側は横ナナテ調整。	灰白色 細砂・長石粒・長石微粒 普通
4 S	蓋	B 15.0 D 3.7	天井部中央にやや扁平な宝珠形のつまみが付く。天井部は僅かに内凹し、天井部は直線的に下傾する。天井部と口縁部の境界に明瞭な棱を持ち、口縁部は斜く下方に向て屈曲する。水洗き成形で、天井部中央から天井部中にかけ右ロクロ後回転窓削り調整。	灰白色 細砂・長石大粒・長石微粒 普通
5 S	蓋		天井部中央にやや扁平な宝珠形のつまみが付く。天井部は丸い。水洗き成形で、天井部中央から天井部中央にかけ右回転窓削り後、多方向の静止窓削り調整。つまみは横ナナテ調整。全体に漆塗が進行。	灰白色 細砂・長石粒・長石微粒・雲母 不良
6 S	蓋		天井部中央に小形で扁平な宝珠形のつまみが付く。天井部は丸く、天井部は丸く、外反しながら下降する。水洗き成形で、天井部は右ロクロ使用の回転窓削り調整。つまみと天井部内面は横ナナテ調整。天井部内間に露記号	灰白色 細砂・長石粒・長石微粒 普通
7 S	台付盤	A(22.2) B 4.1 D(16.7)	体部は内側気味に外上方に大きく聞く。体部と口縁部の境界にあまい棱を持ち、口縁部は外反して端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで、外下方にのびる。水洗き成形で、口縁部内・外側と高台内・外側は横ナナテ調整。	灰白色 細砂・長石粒・長石微粒・雲母 不良
8 S	台付盤	A(21.3) B 5.5 D(12.1)	体部は内側気味に外上方に大きく聞く。体部と口縁部の境界にややあるいは後を持ち、口縁部は外反気味に外上方にのびて端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで、下方に向てのび、端部に面をなす。水洗き成形で、口縁部内面と高台内・外側は横ナナテ調整。	灰白色 細砂・長石粒・長石微粒・雲母 不良
9 S	短頸壺	A(12.6)	丸く脇の張った体部から頸部内面に稜を持ち、口縁部はほぼ直角に立ち上がり、端部は平坦におさめている。口縁部内・外側は横ナナテ調整。体部外側は回転窓削り後、斜・横ナナテ調整。体部内面はナナテ調整。体部内面に粘土痕跡を残す。摩滅が進行。	灰白色 細砂・長石粒・長石微粒 不良
10 S	甕	C 16.7	やや盛り上がった平底の底面から体部はやや内側気味に外上方にのびる。底面内・外側と体部内面は、ナナテ調整。体部外側は横ナナテ調整。僅かに平行叩き目状を見る。体部下端部は静止窓削り調整。	灰白色 細砂・長石粒・長石微粒・雲母 不良
11 H	壺	A(14.3) B 3.3 C (7.6)	底部は平底で、体部と底部の境界は明瞭でない。内面全体は荒削り調整。口縁部外側は横ナナテ調整。体部外側と底部外側は荒削り調整。	灰白色 細砂・石英・雲母 良好



第279図 150号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)



第280図 150堅穴住居跡出土遺物実測図(2)

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
12	H	A 13.5 B 3.9 C 10.6	やや丸味を帯びた平底の底部で、体部と底部はやや明瞭な角度で分かれ。体部は内壁気味に外上方にのび、端部はやや尖る。内面全体は荒磨き調査。外表面は荒削り調査。	橙色 細砂 良好 底部内面に線刻

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴		備考				
			形態	手法					
13 H	壺	A(14.3) B 3.0 C (9.1)	やや深いが、底部は平底で、体部と底部はやや明瞭な角膜な角がある。体部はやや内擣気味に外上方にのびる。端部を大きくおさめている。内窓全体は荒削り調整。口縁部外面は横ナナ子調整。体部外面と底部外面は荒削り調整。		褐色 細砂・スコリア 普通				
14 H	壺	A(16.6) F 19.9	側の張った体部から上方につまみ出す。かるく外反する口縁部が付く。口窓部内・外面は横ナナ子調整。体部外面は荒削り後、磨ナナ子調整。体部内面は荒ナナ子後ナナ子調整。		にぶい黄褐色 砂粒・長石粒・空母・スコリア 普通 体部外面に煤付着				
15 H	壺	A(21.2) F 23.8	側の張った体部からやや丸く屈曲する口縁部が付き、端部を外上方につまみ出す。口窓部内・外面は横ナナ子調整。体部内面はナナ子調整。		にぶい褐色 砂粒・長石粒多・長石微粒 ・空母・空母 普通 窓部内面から体部内面にかけ 塗付着				
16 H	壺	A(20.7)	丸く張った体部から丸く屈曲する口縁部が付き、端部をほぼ垂直につまみ出す。口窓部内・外面は横ナナ子調整。体部内・外面は荒ナナ子後、ナナ子調整。窓部内・外面と体部内面に粘土紙を残す。		にぶい褐色 砂粒・長石粒・空母・スコリア 普通				
17 H	壺		側の張った体部からやや丸く屈曲する口縁部が付き、端部をほぼ垂直につまみ出す。口窓部内・外面は横ナナ子調整。体部内・外面は荒ナナ子調整。		にぶい褐色 砂粒・長石粒・空母・スコリア 普通				
18 H	壺	C (9.0)	平底の底部で、体部は内擣気味に外上方にのびる。体部外面は丁寧な繊維の荒ナナ子調整。内面全体は、ナナ子調整。		淡黄褐色 砂粒・長石粒・空母・スコリア 普通 底部外面に木葉痕				
番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
19	壺 埋	径 (8.6)	一部釉薬化する。 2分の1欠損。		21	纺錐車	全長 (18.7) 筋輪径 4.1 筋輪厚さ 0.2	筋輪の上部に糸が巻きついている。 ほぼ光形品。	
20	刀子	全长(11.6) 刃幅0.4~0.7 基長5.0	切先部欠損。 裡側と刃側の両側に 隙を開く。						

151号竪穴住居跡 (第281図)

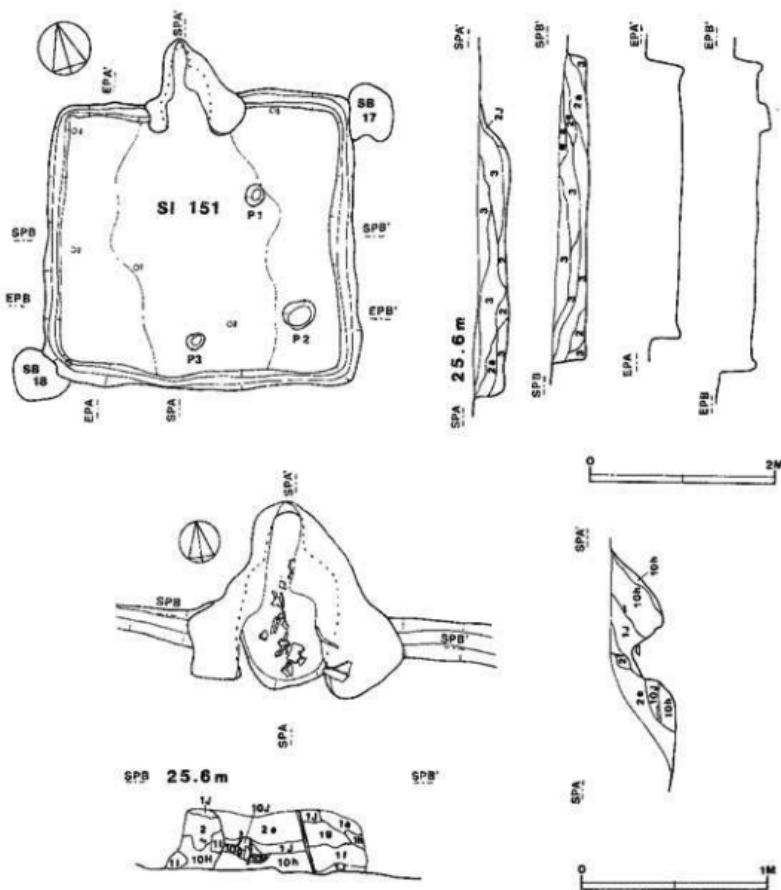
調査区 E1g4区を中心に150号竪穴住居跡の南方に位置し、東西3.34m・南北3.2mを測り、主軸方向N-16°Eを指す方形をしている。北東隅において17号掘立柱建物跡のP5、南西隅において18号掘立柱建物跡のP6とそれぞれ重複し、向掘立柱建物跡より当跡が新しい。

覆土は、暗褐色土を主体とし、自然堆積の状態を示している。壁は、高さ35cmではほぼ垂直に立ち上がる。壁下には、幅10cm・深さ4cmの壁溝が全周する。床面はほぼ平坦で、南壁中央付近から竪焚口部前面にかけての幅約1.5mは、良く踏み固められている。ピットは3か所確認されているが、いずれも小さく、また浅いものである。

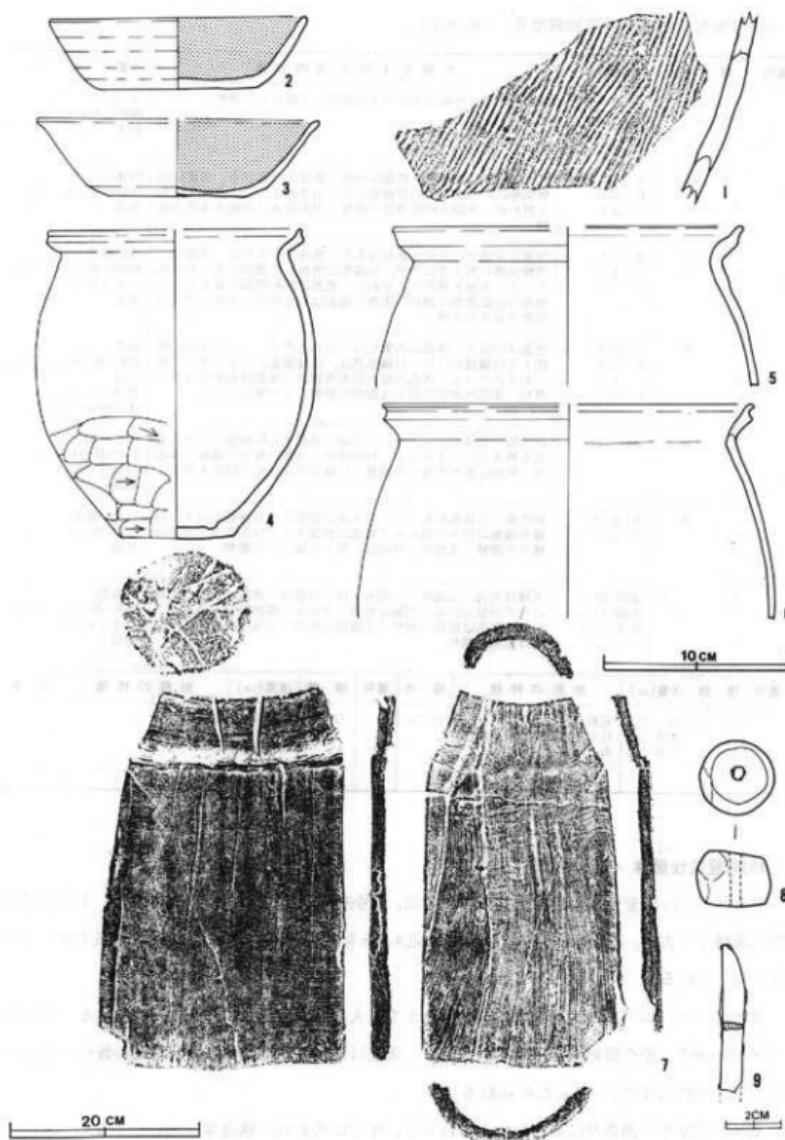
竪は、北壁中央部やや西寄りにあり、長さ1.0m・幅1.13m・焚口部幅0.46mを測り、壁外へ0.66m掘り込んで、構築されている。竪の主軸方向は、住居跡のそれと若干異なり、N-10°Eを指している。袖部は、砂とロームを突き固めて築かれ、右側袖部のはば中央部に玉様を下にして

九瓦を立て、補強している。焼成部は床面と同じレベルで、ゆるやかに煙道部へ続く。焼成部には、土師器壺二個体分が、押しつぶされた状態で出土している。

遺物は、土師器・須恵器・瓦・羽口・鉄製品・鐵滓が西半部の覆土下層および床面から出土している。



第281図 151号竪穴住居跡・溝実測図



第282図 151号竪穴住居跡出土遺物実測図

151号竪穴住居跡出土遺物観察表（第282図）

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴		備考				
			体部の一部。外面は平行叩き目調整。内面はナチ調整。						
1 S	袋				灰色 細砂・長石粒 普通				
2 H	环	A 13.6 B 3.8 C 8.3	底部は平底で、体部と底部は明瞭な角度で分かれる。体部は内骨氣味に、外上方にのみ端部を丸くおさめている。水洗き成形と思われる。底部は回転削削り調整。内面全体は並削き後黒色處理。		黒褐色 細砂・長石粒・雲母 普通				
3 H	环	A(15.0) B 4.2 C 7.0	底部は平底で、体部と底部はあまり角度で分かれる。体部は内骨氣味に外上方にのみ、端部は外反して端部を丸くおさめている。水洗き成形かと思われる。底部は回転削切り後右クロロ使用の回転削削り調整。体部下端部は回転削削り調整。内面は並削き後黒色處理。		淡黄褐色 細砂・長石粒・雲母 ・スコリア 普通				
4 II	袋	A(13.5) B 16.6 C 6.0 F 14.9	底部は平底で、体部は内壁しつつ立ち上がり、「く」の字状に屈曲する口縁部が付く。口縁部は、ほぼ垂直につまみ出でて丸くおさめている。体部内面と底部内面及び体部外面中段はナチ調整。体部外面中位以下は施削り調整。やや摩滅する。		褐色 砂粒・長石粒・石英粒・ 雲母 普通 底部外面に木葉机				
5 H	袋	A(18.7)	側の張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付く。端部を外上方につまみ出す。口縁部内・外面は横ナチ調整。体部内・外面は原ナチ後ナチ調整。口縁部内面に枯土斑紋を残す。		に赤い褐色 砂粒・長石粒・雲母・ スコリア 普通				
6 II	袋	A(20.0) F 22.4	側の張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付く。口縁部外面に凹みを持たせて端部は外反する。口縁部内・外面は横ナチ調整。体部内・外面は、原ナチ後、ナチ調整。		に赤い褐色 砂粒・長石粒・雲母 普通				
7	丸	全長 39.0 広端(17.0) 厚さ 1.8	玉縁付丸瓦。広端部の一部を欠損。凸面は、荒削り調整で玉縁にナチが見られる。凹面は布丁の上から一部荒削りが施されている。側面は荒削り調整で上端部は施取りが施されている。端面は荒削り調整。		灰褐色 砂粒・長石粒・長石微粒多・石英粒 雲母				
番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
8	土玉	径 2.7 厚さ 1.9 孔径 0.5	光形品。 孔が穿たれた面は平頭である。	13.5g	刀子	全長(5.2) 刃幅 0.8	切先部。		

152号竪穴住居跡（第283図）

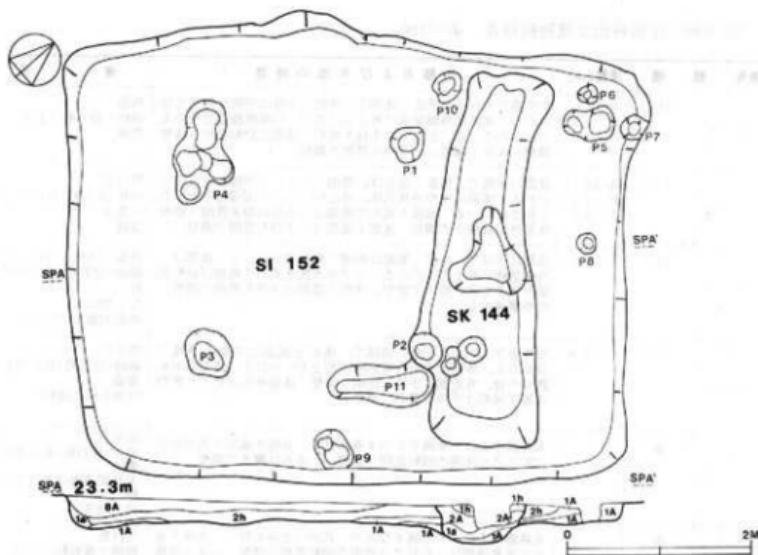
調査区 C3d・E4を中心にして11号竪穴住居跡の北、1号連房式竪穴造構の下位に位置し、1号連房式竪穴造構より古い。規模は、東西5.93m・南北4.9mを測り、主軸方向N-6°-Eを指す隅丸長方形を呈している。

復土は、ロームブロックを多量に含む褐色土で、人為的に埋められたものとみられる。壁は高さ20~30cmで、やや傾斜をもって立ち上がる。床面はほぼ平坦である。ピットは10数か所確認されたが、主柱穴はP1~P4とみられる。

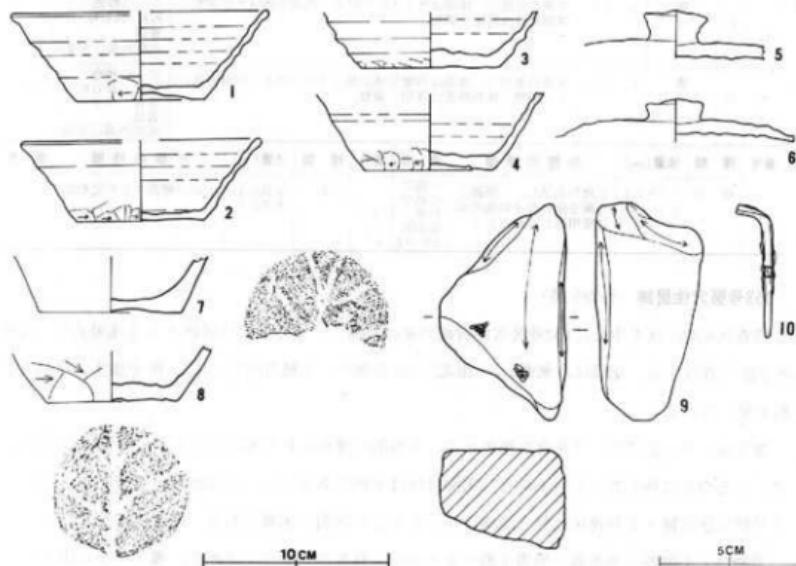
窓は、北壁や西寄りにあったとみられるが、すでに失われ、構造等は明らかでない。

遺物は、土師器・須恵器・瓦・羽口・砥石・鉄製品・鉄滓・漆紙が出土している。

なお、東壁寄りに、当住居跡の床面を破壊して144号土塙が存在している。



第283図 152号竪穴住居跡・144号土壤実測図



第284図 152号竪穴住居跡出土遺物実測図

152号竪穴住居跡出土遺物観察表（第284図）

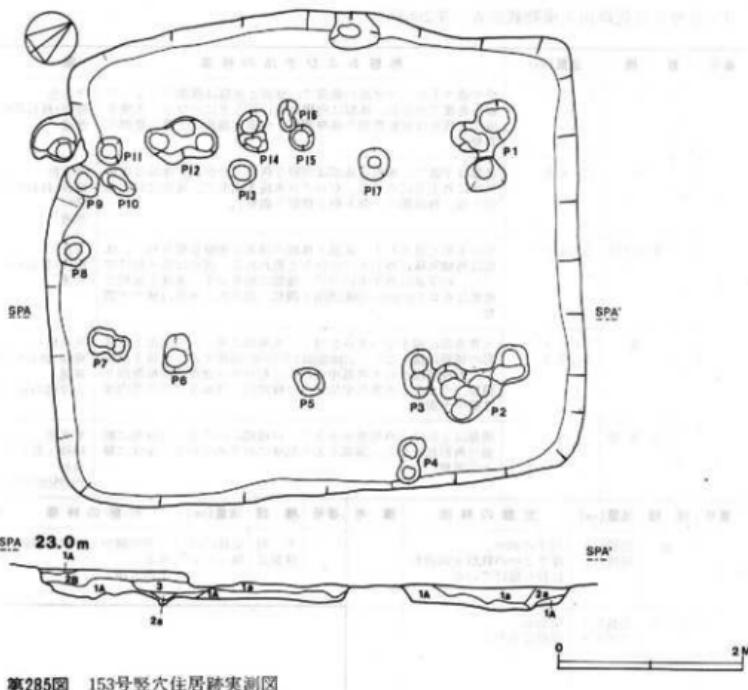
番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴		備考				
			外	内					
1 S	环	A(13.6) B 4.8 C 6.8	やや盛り上がった平底の底部で、体部と底部は明瞭な角度で分かれる。体部は外筋気味に外上方にのび、口縁部端部をややんくおさめている。右ロクロ水洗き成形で底部は回転窓切り後無調整。体部下端部は手持ち窓削り調整。		灰色 砂粒・長石粒・長石微粒 普通				
2 S	环	A(12.5) B 4.4 C 6.7	底部は平底で、体部と底部は、窓削りによって明瞭な角度で分かれる。体部はやや外筋気味に外上方にのび、ロクロ水洗き成形で底部は回転窓切り後多方向の差ナナ調整。体部下端部は手持ち窓削り調整、やや掌減する。		灰白色 砂粒・長石粒・長石微粒多 ・雲母 普通				
3 S	环	C 7.3	底部は平底で、体部と底部は明瞭な角度で分かれる。体部は、内筋気味に外上方にのびる。ロクロ水洗き成形で底部は回転窓切り後多方向の差ナナ調整。体部下端部は手持ち窓削り調整、やや掌減する。		外面一灰色 内側一黒褐色 砂粒・長石粒・長石微粒・云 母 なまぬけ 体部内面にコケ付着				
4 S	环	C 6.9	やや盛り上がった平底の底部で、体部と底部は明瞭な角度で分かれる。体部はやや内筋気味に外上方にのびる。底部は回転窓切り後無調整。外周部は手持ち窓削り調整。体部外表面は横ナナ調整。体部下端部は手持ち窓削り調整。		暗灰色 砂粒・長石粒・長石微粒 普通 内面全体に漆付着				
5 S	盖		大井部中央にやや扁平なつまみが付く。水洗き成形で大井頂部は右ロクロ使用の回転窓削り調整。つまみは横ナナ調整。		暗灰色 砂粒・長石粒・長石微粒 普通 大井部内面に黄白色の自然 釉 迷き焼き				
6 S	盖		大井部中央に、やや扁平なボタン状のつまみが付く。水洗き成形で天井頂部は右ロクロ使用の回転窓削り調整。つまみは横ナナ調整。掌城が進行。		灰白色 砂粒・長石粒・雲母 不良				
7 H	盖	C 7.6	平底の底部で、体部は外上方にのびる。内面全体はナナ調整。体部外表面は免削り調整。		によい褐色 砂粒・長石粒・石英粒 普通 底部外表面に木葉痕				
8 H	盖	C 7.0	平底の底部で、体部は内筋気味に外上方にのびる。内面全体はナナ調整。体部外表面は免削り調整。		によい褐色 砂粒・長石粒・石英粒・ 雲母・スコリア 普通 底部外表面に木葉痕				
番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
9	砥石	7.7×4.4 3.1	三角形を呈し、一側面と二側面を除いたその他の面に使用痕が認められる。	一部分 二段分 付番 玄石岩 136.0 g	斜	全長5.4 太さ0.3		上部が寄曲するが完形成。	

153号竪穴住居跡（第285図）

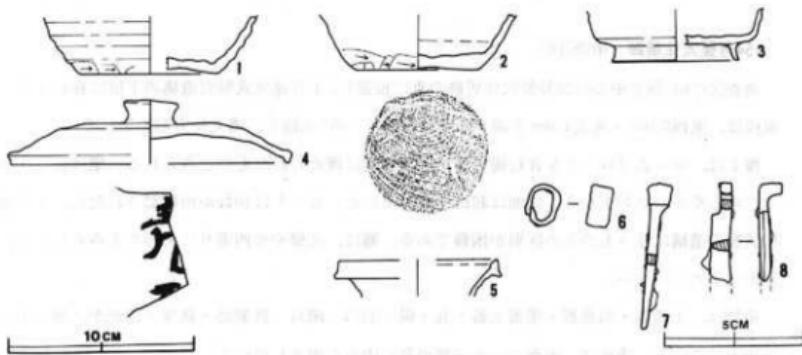
調査区 C4d2 区を中心に 152 号竪穴住居跡の東に位置し、1 号竪穴住居跡と 1 号連房式竪穴遺構の下位に存在する。規模は、東西 5.7・南北 5.1m を測り、主軸方向 N - 4° - W を指す、略隅丸方形を呈している。

覆土は、ロームブロックを含む褐色土で、人為的に埋められたものとみられる。壁は高さ 20cm で、ゆるやかに外上方へ立ち上がる。床面はほぼ平坦である。ピットは 20 数か所確認されたが、1 号竪穴住居跡・1 号連房式竪穴遺構に伴うものとの区別が困難である。竈は明らかでない。

遺物は、土師器・須恵器・墨書き器・瓦・羽口・鉄製品・鉄滓・漆紙が、覆土中から出土している。漆紙は、南東コーナー付近の覆土中から出土している。



第285図 153号竪穴住居跡実測図



第286図 153号竪穴住居跡出土遺物実測図

153号竪穴住居跡出土遺物観察表（第286図）

番号	種類	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	坪 C (7.8)	やや盛り上がった平底の底部で、体部と底部は簾削りによって鋭い角度で分かれ。体部は内青気味に外上方にのびる。水後き成形で底部は回転底切り後無調整。体部下端部は手持ち簾削り調整。	灰白色 細砂・長石微粒・雲母普通
2	S	坪 C 6.5	底部は平底で、体部と底部は明瞭な角度で分かれ。体部は内青気味に外上方にのびる。右ロクロ水後き成形で、底部は回転底切り後、外周部の一部を静止簾削り調整。	青灰色 細砂・長石较多・長石微粒普通
3	S	高台付坪 D (6.9)	やや小形と思われる。底部と体部の境界に明瞭な棱を持ち、体部は外傾気味に外上方にのびると思われる。高台は貼り付けで「へ」の字状に外下方にのび、面部に面をなす。水後き成形で底部は右ロクロ使用の回転底削り調整。高台内・外面は横ナナテ調整。	灰色 細砂・長石粒・鉄分普通
4	S	天井 A (14.8) B 3.4	天井頂部に扁平なつまみが付く。天井部は丸く、口縁部と天井部の境界に棱をなし、口縁部は下方方に屈曲する。水後き成形で、大井頂部から天井部中位にかけ右ロクロ使用の回転底削り調整。つまみと天井部中位から口縁部内・外及び大井部内面は横ナナテ調整。	灰白色 細砂・長石粒・長石微粒普通 大井部内面に墨書き
5	S	長脚壺	壺部は上位ほど外反度が大きく、口縁部にいたる。口縁部は断面三角形をなし、壺部を尖り気味におさめている。全体に横ナナテ調整。	暗灰色 細砂・長石粒 良好 内外面に黄白色の自然釉

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
6	鍔	長径1.5 矧径1.1	刀子の鍔か。 厚さ2mmの鉄板を胡蝶形に折り曲げている。		8	不規 鉄製品	全長(3.5) 幅0.4~0.7	一方の端がL字状に屈曲する、 下部欠損。	
7	算か	全長5.2 大きさ0.4	定形品。 頭部は方形。						

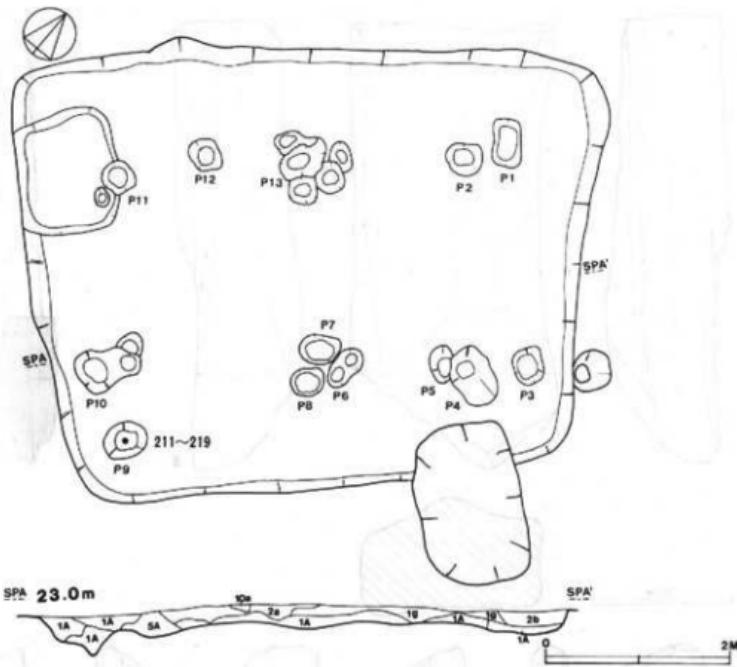
154号竪穴住居跡（第287図）

調査区C4d6区を中心に29号竪穴住居跡の東に位置し、1号連房式竪穴遺構の下位に存在する。

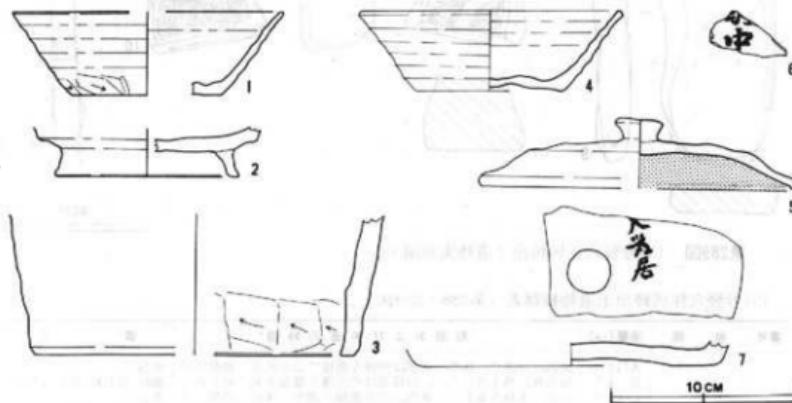
規模は、東西5.9m・南北4.8mを測り、主軸方向N-0°を指す。隅丸反方形を呈している。

覆土は、ロームブロックを含む褐色土で、人為的に埋められたものとみられる。壁は高さ20cmで、ゆるやかに立ち上がる。床面は起伏を有している。ピットは10数か所確認されたが、1号連房式竪穴遺構に伴うものとの区別が困難である。竈は、北壁やや西寄りにあったとみられるが、痕形を留めていない。

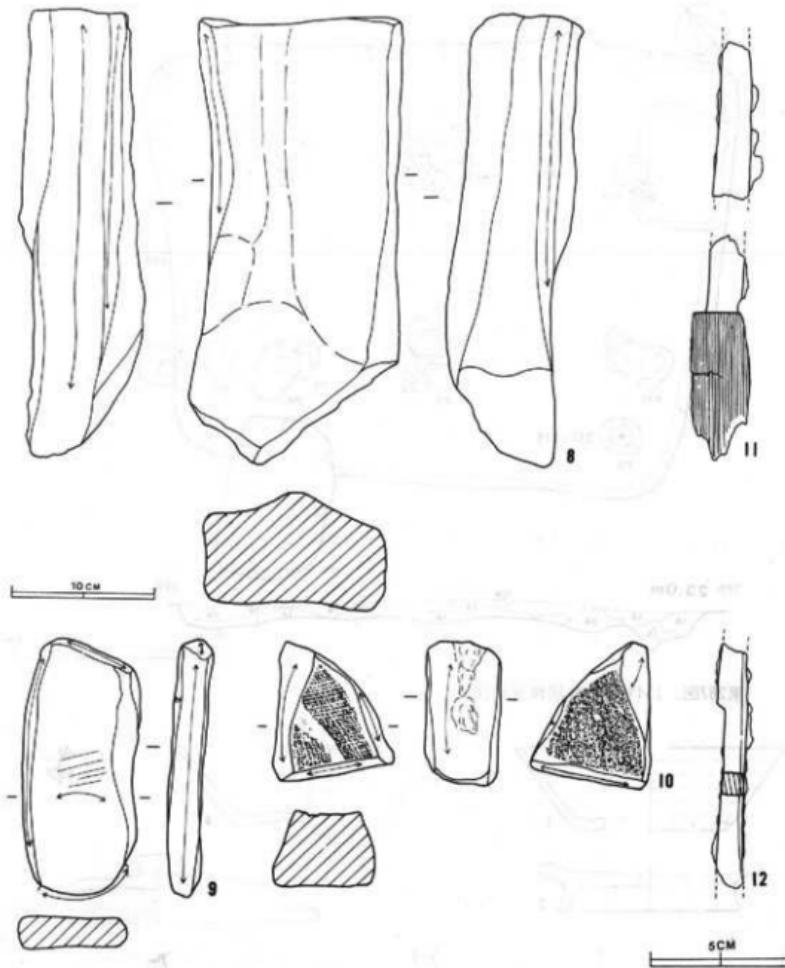
遺物は、土師器・須恵器・墨書き器・瓦・磚・羽口・磁石・鉄製品・鐵滓・漆紙が、覆土中から出土している。漆紙は、南西コーナー部のP9内から出土している。



第287図 154号竪穴住居跡実測図



第288図 154号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)



第289図 154号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)

154号竪穴住居跡出土遺物観察表(第288・289図)

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	A(14.4) B 4.5 C (8.0)	底部は平底で、体部と底部は明確な角度で分かれる。体部は外縁気味に外上方にのび、口縁部はやや薄く端部を丸くおさめている。水洗き成形で、底部は静止泥削り調整。体部下端部は手持ち泥削り調整。	灰色 細砂・長石粒・長石微粒 普通 底部内面と体部内面に 漆付着 泥削り痕

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴		備考	
			高台付体 (軸用鏡)	D(9.9)		
2 S			体部と底部の境界はあまい波を持つ。高台は貼り付けで「ハ」の字状に外下方にのびて底部に曲をなす。水焼き成形で底部は左ロクロ使用の刮削箇所調整。高台内・外表面は擦ナデ調整。		灰色 細砂・長石粒・長石微粒 普通 底部内面に塗付着 底部外面上に塗付着	
	瓶	C(27.0)	底部は正円状に抜ける。体部は外傾気味に外上方にのびる。底部内面はナダと範削り調整。体部外表面は、擦ナデ調整。		灰白色 細砂・長石粒・長石微粒・ 空母不良	
3 S	瓶	A 14.2 B 4.3 C 8.0	やや盛り上がった平底の底部で、体部と底部はやや明瞭な角度で分かれる。体部は外傾気味に外上方にのびて底部を丸くおさめている。水焼き成形で、底部は回転施切り後、静止施削り調整。		にふい橙色 細砂・長石粒・空母 普通 底部内面に塗付着	
4 H	瓶	A(16.9) B 3.8	天井部中央に扁平なつまみが付く。天井部はやや扁平で天井部と口縁部の境界に棱を持ち、口縁部は、やや外下方に屈曲する。水焼き成形でつまみは機ナデ調整。他内・外表面も全体に距離き調整で内面は黒色処理。		にふい橙色 細砂・長石粒・空母 普通 天井部外面上に墨点	
5 H	瓶	A(16.9) B 3.8	天井部の一部と思われる。水焼き成形。		灰白色 細砂・長石微粒 普通 天井部外面上に墨点	
6 H	瓶	C 18.0	やや盛り上がった平底の底部。内・外表面は、擦ナデ調整。		にふい黄褐色 細砂・長石粒・石英粒・滑母 普通 底部外面上に輕穏状H点	
番号	種類	法量(cm)	形態の特徴		備考	
			砥石	30.3×14.7 4.4		
8	砥石	9.2×4.0 2.05	三脚面のみに使用感が認められる。大形。	点紋粘 板石 602.0 g	刀子 金長(14.8) 刃幅 1.2 刃長 9.1	大形の刀子とみられる が、両端部欠損。 玉部に 木質が 残存して いる。
9	砥石	4.9×3.7 (軸用紙) 2.6	長方形を呈し、金剛に使 用感が認められる。片面 に擦痕が多くみられる。	粘板岩 76.0 g	刀子か 金長(8.4) 刃幅 1.1 刃長 9.2	両端部欠損。
10	砥石	4.9×3.7 (軸用紙) 2.6	三角形を呈す。瓦面を除 いた平面に使用感が認 められる。	瓦		

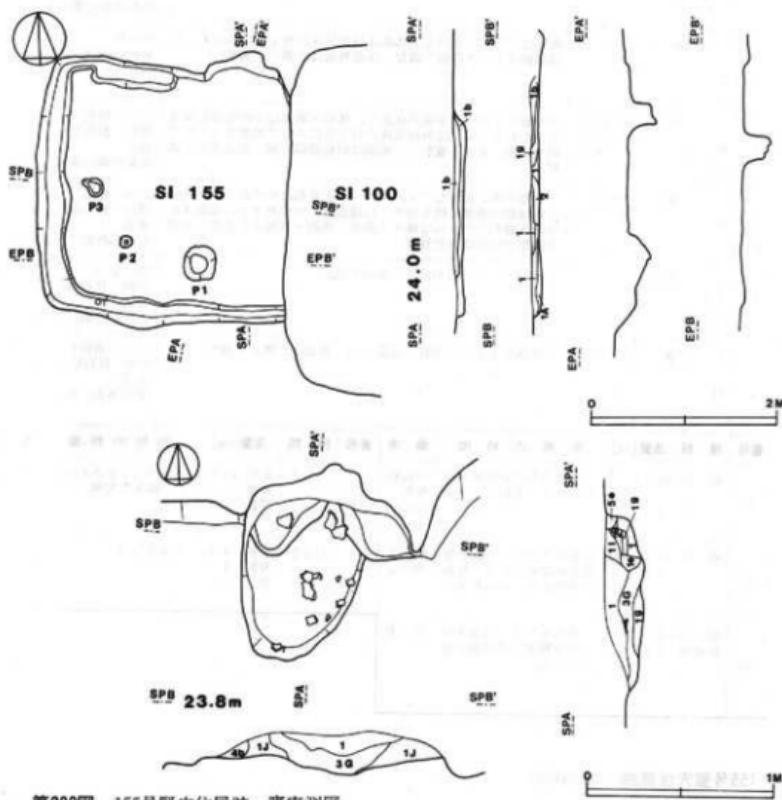
155号堅穴住居跡（第290図）

調査区 C3i 区を中心に確認され、北東コーナー部で94号堅穴住居跡、東側で100号堅穴住居跡と、それぞれ重複している。100号堅穴住居跡は当跡より新しいが、94号堅穴住居跡との新旧関係は明らかでない。規模は、東側が100号堅穴住居跡によって失われているので明らかでないが、残存部は東西2.66m・南北2.82mを測り、主軸方向 N-6°-E を指す隅丸長方形を呈していたものとみられる。

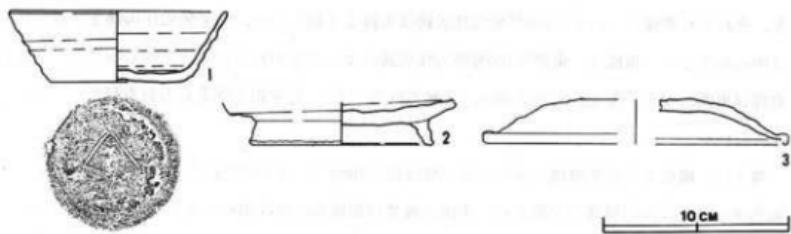
覆土は、褐色土で自然堆積とみられる。壁は高さ10cmで、ゆるやかに立ち上がる。壁下には、幅20cm・深さ5cmの壁溝が全周する。床面は窓口部前面が踏み固められているが、他は比較的軟弱である。ピットは3か所確認され、P1は深さは26cmを測る。

竈は、北壁にあり、長さ1.2mを測る。両袖は不明瞭である。焼成部は床面より9cm低く、焼土の堆積は7cmほどみられた。

遺物は、土師器・須恵器・鐵滓が少量出土している。



第290図 155号竪穴住居跡・竈実測図



第291図 155号竪穴住居跡出土遺物実測図

155号竪穴住居跡出土遺物観察表(第291図)

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	环	A 11.5 B 3.9 C 7.0	底部は平底で、体部と底部はやや明瞭な角度で分かれ。体部はやや内側丸味に外上方にのび口縁端部を丸くおさめている。右クロロ水挽き成形と思われる。底部は回転窓切りで無調整。口縁部内・外面は横ナナゲ調整。	灰色 細紗・長石粒・長石微粒 良好 内面全体に漆付有 底部外面に范記号
2 S	高台付环	D 9.8	貼り付け高台は外下方にのび、「ハ」の字をなし、外端部の棱は不整形。水挽き成形で底部は、右クロロ使用の回転窓削り調整。高台内・外面は横ナナゲ調整。	灰色 細紗・長石粒・長石微粒 雲母 普通 高台端部に鉄分及び漆付有
3 S	蓋	A(15.2)	天井部中央につまみが付くが欠損。天井部は丸味を帯び。口縁部は僅かに段をなし、下方向に屈曲する。水挽き成形で天井頂部と口縁部外側から天井部内面にかけ横ナナゲ調整。天井部外側中位は右クロロ使用の回転窓削り調整。	灰色 細紗・長石粒多・長石微粒 普通

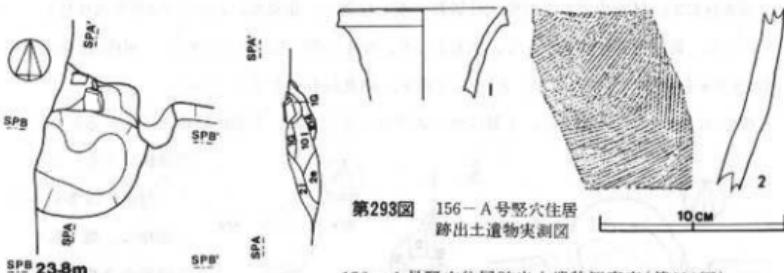
156-A号竪穴住居跡(第173・292図)

調査区C3j8区を中心に確認され、北西部は100号竪穴住居跡によって失われている。規模は、東西4.17m・南北4.33mを測り、主軸方向N-4°-Eを指す、略隅丸方形を呈している。

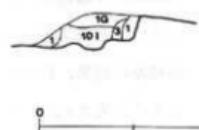
覆土は薄いが、ロームブロックを含む褐色土で、人為的堆積とみられる。壁は高さ約5cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は、ロームブロックで比較的軟弱である。ピットは3か所で、北西コーナーを除く各コーナー部にあり、深さは20cm内外である。

窓は、北壁ほぼ中央部にあり、西半部を100号竪穴住居跡によって失われ、また上部は擾乱を受け、不明瞭である。

遺物は、土師器・須恵器・瓦・鉄滓が少量、覆土下層から床面にかけて出土している。



第293図 156-A号竪穴住居跡出土遺物実測図

第292図 156-A号竪穴住居跡
窓実測図

156-A号竪穴住居跡出土遺物観察表(第293図)

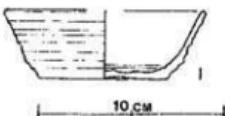
番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	長颈壺	A (8.8)	頸部は上位ほど外反度が大きくなり、口縁部は下方向に広がって面をなす。外面は摩滅が進行。	暗灰色 細紗・長石粒 長石微粒・鉄分多 良好 内外面に暗灰色の自然釉
2 S	蓋		体部の一部。外面は平行叩き目調整、内面は、荒削りとナナゲ調整。	灰色 細紗・やや精良 普通

156-B号竪穴住居跡（第294図）

調査区・平面形状は、156-A号竪穴住居跡と同じで、A号の下位に存在する。従ってA号はB号の建て替えとみられる。

壁は高さ約15cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。北東コーナー付近から東壁にかけての壁下には、L字状に幅15cm・深さ5cmの壁溝が存在している。床面はA号の床より8cm低く、南壁付近から北壁方に向けて若干低くなるほかは、ほぼ平坦である。南壁中央部付近から竪焚口部前面にかけての幅1.85mは、良く踏み固められている。ピットは5か所確認され、P₄～P₇の深さは約40cmを測る。P₈の深さは10cmで、覆土中から長さ20cmの木炭片が出土している。竪は不明である。

遺物は、土師器・須恵器が少量出土している。



第294図 156-B号竪穴住居跡
出土遺物実測図

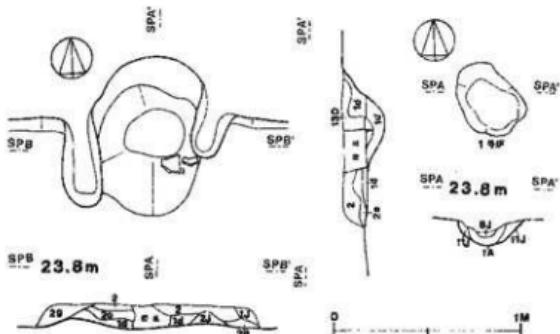
156-B号竪穴住居跡出土上遺物観察表（第294図）

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	环	A (10.6) B 3.7 C 6.8	底部は平底で、体部と蓋部はややあまい角度で分かれれる。体部は、内壁気泡に外上方にのび端部を丸くおきめている。右ロク口水挽き成形で、底部は、回転鋸切り後回転鋸削り。蓋部と体部の境界内面に浅い溝を走らす。全体に端正な作り。	暗青灰色 細緻・長石粒・右英 良好

157号竪穴住居跡（295・296図）

調査区C3h₉区を中心に7号竪穴住居跡の南に位置し、南東部において158号竪穴住居跡と重複している。新旧関係は判然としない点もあるが、当跡が古いものとみられる。規模は、東西3.72m・南北3.0mを測り、主軸方向N=8°-Eを指す、隅丸長方形を呈している。

覆土は、褐色土を主体とし、下層はロームブロックを含み、人為的堆積とみられるが、他は自



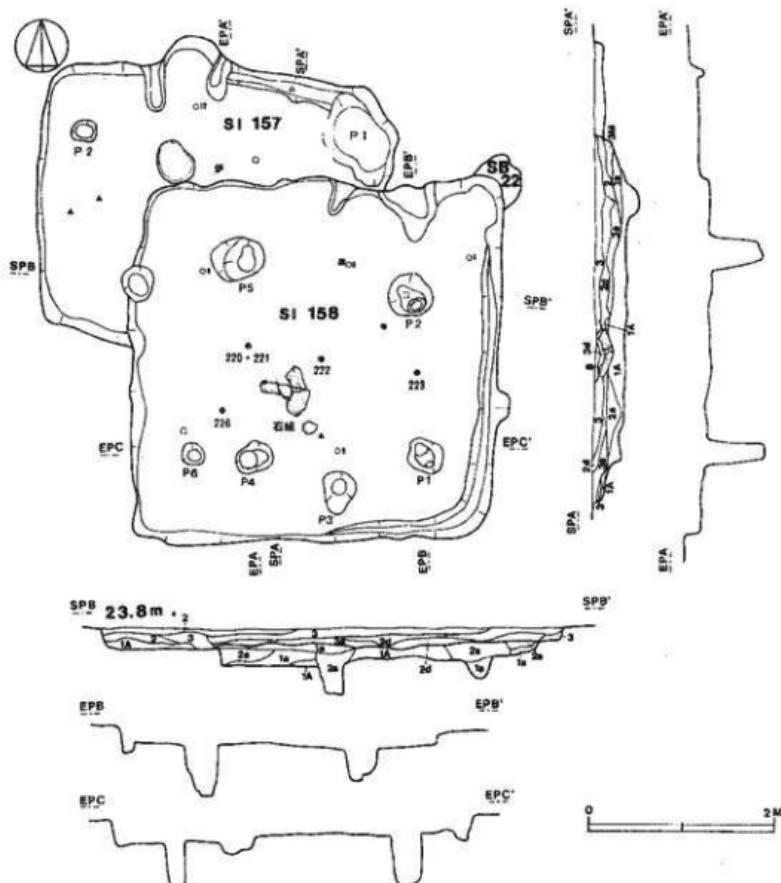
第295図 157号竪穴住居跡竪・炉跡実測図

然堆積である。北東コーナー付近には多量の焼土が堆積し、焼土屑内から土師器が多数検出されている。この焼土層は、断面観察の結果、投棄されたものと考えられる。壁は高さ約20cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。床面はほぼ平坦で、比較的軟弱

である。ピットは、当跡に確実に作うものは3か所である。P1は北東隅にある土壤状のピットで、内部から土師器が出土している。中央部やや北寄りの竈焚口部前から、40×30cmの楕円形の炉跡が確認されている。炉床は、床面を約15cm皿状に掘り凹め、壁面に山砂を敷き、中央部にロームを突き固め、さらに山砂をもって構築されている。いずれも熱によって赤色焼土化している。なお、この炉跡は、当住居廃絶後に築かれたものである。

竈は、北壁やや西側寄りにあり、長さ0.85m・幅0.85m・焚口部幅0.49mを測り、壁外へ35cm掘り込んで構築されている。袖部は山砂で築かれているが、遺存状態は良くない。

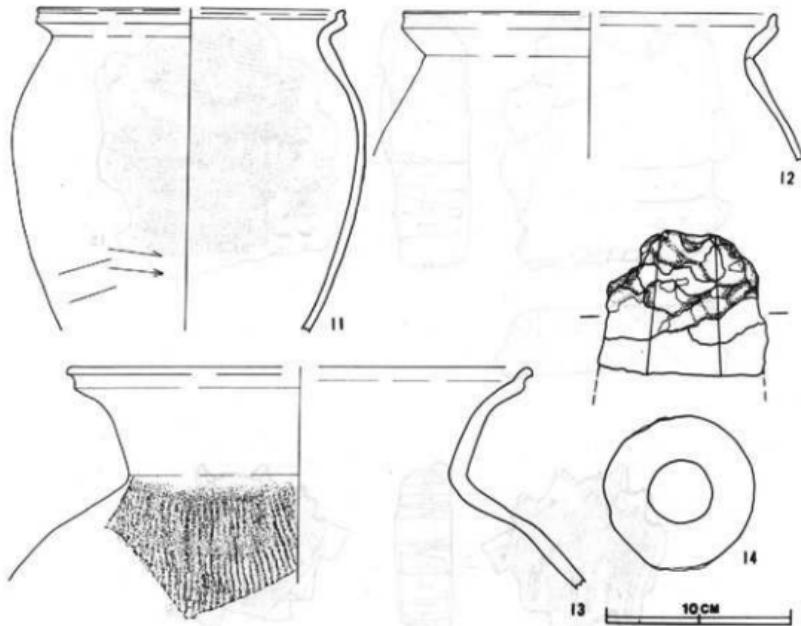
遺物は、土師器・須恵器・瓦・羽口・砥石・鐵滓が焼土層と、P1内から出土している。



第296図 157・158号竪穴住居跡実測図



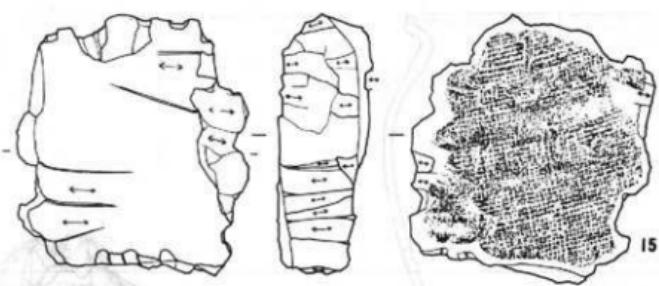
第297圖 157號竪穴住居跡出土遺物實測圖(1)



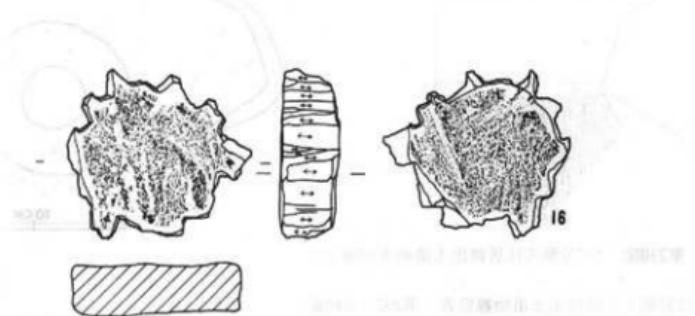
第298図 157号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)

157号竪穴住居跡出土遺物観察表(第297~300図)

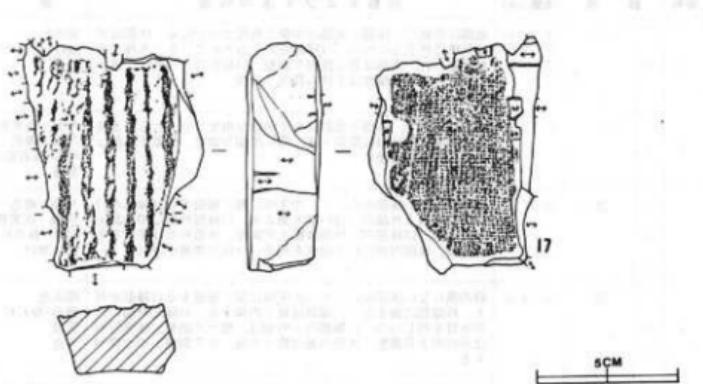
番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	壺	A(12.5) B 4.0 C 6.1	底部は平底で、体部と底部は明瞭な角度で分かれる。体部は外輪気味に外方にのび、口縁部を丸くおさめている。水挽き成形と思われる。底部は静止窓削り調整。口縁部内・外面は、横ナナ子調整。体部下端部は手持ち窓削り調整。	褐色 細砂・長石粒・雲母普通
2 S	壺	C 6.3	底部は平底で、体部と底部はやや明瞭な角度で分かれる。水挽き成形で底部は回転直切り後、静止窓削り調整。体部下端部は手持ち窓削り調整。	外側一灰黄色 内面一橙色 細砂・長石粒・雲母普通
3 S	甕	A(27.7)	胴の張らない体部から、「く」の字状に軽く屈曲する口縁部が付く。口縁部・外端部に浅い溝を残す。口縁部外面に叩き目を残しつつ、口縁部内・外面は横ナナ子調整。体部外面は平行叩き目調整。体部内面に粘土組織を残す。全体に摩滅が進行。	外側一橙色 内面一灰黄色 細砂・長石粒多・雲母多なま焼け
4 S	甕	A(34.9)	胴の張らない体部から、「く」の字状に強く屈曲する口縁部が付く。外端部に面をなし、端部は鋸ぐ内傾する。口縁部外面に、叩き目を残しつつ、口縁部内・外面は、横ナナ子調整。体部外面は平行叩き目調整。体部内面は窓削り後、ナナ子調整。やや摩滅する。	褐色 細砂・長石粒・長石微粒・雲母不良
5 S	甕		あまり胴の張らない体部から。口縁部はかるく外反し、端部を丸くおさめている。体部外面は、平行叩き目調整。体部内面は、ナナ子調整か。摩滅が進行。	暗赤褐色 細砂・長石粒



15



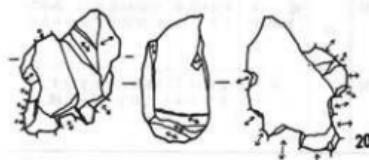
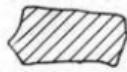
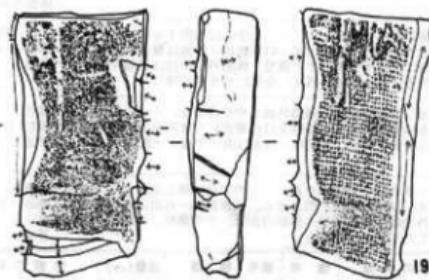
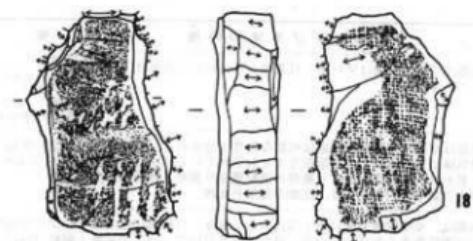
16



17

5CM

第299図 157号竪穴住居跡出土遺物実測図(3)



5CM

第300図 157号竪穴住居跡出土遺物実測図(4)

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴				備考		
6	S (軽用砥)		体部の一部。外面は平行叩き目調整と思われる。内面は、硯としての使用痕か。				灰色 砂鉄・長石粒・長石微粒・鉄分 普通 内面に墨付有		
7	H	A(15.2) B 4.4 C 7.2	底部は平底で、体部と底部は明瞭な角度で分かれている。体部は内骨氣味に外上方にのび、端部を丸くおさめている。水洗き成形と思われ、底部は右ロクロ使用の回転磨削面調整。外面全体は横ナナ調整。内面全体は、磨き面後黒色処理。				に近い褐色 細砂・長石粒・長石微粒・ 雲母 普通		
8	H 高台付皿	A 14.3 B 2.5 D 7.3	体部は、やや内骨氣味に外上方に大きく開き、口縁部は水平にのびる部を丸くおさめている。高台は貼り付けで「ハ」の字状に、外下方にのびる。水洗き成形で、底盤は右ロクロ使用の回転磨削面調整。全体に、横ナナ調整。				に近い赤褐色 細砂・長石粒・雲母 普通		
9	H	A(21.2) B 34.0 C 7.4 F 23.7	やや小形の平底で、体部は内側しつつ立ち上がり、「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、口縁外端部にやや凹んだ面をなす。口縁部内・外面は、横ナナ調整。体部内・外面は、範ナナ調整。体部内面に粘土紐痕を残す。				に近い褐色 砂鉄・長石粒・雲母・ スコリア 普通 底部外面に木葉痕		
10	H	A(21.5)	丸く脇の張った体部から、やや「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、端部を強く外側に突き出す。口縁部内・外面は、横ナナ調整。体部内・外面は範ナナ後ナナ調整。				に近い褐色 砂鉄・長石粒・雲母 普通 体部外面に煤付有		
11	H	A(16.4) F 18.9	丸く脇の張った体部から、「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、端部を外上方につまみ出す。口縁部内・外面は横ナナ調整。体部内面は、範ナナ後ナナ調整。体部外側下位は磨削面調整。底部内面に粘土紐痕を残す。全体にやや薄手作り。				に近い褐色 砂鉄・長石粒・石英・雲母 普通		
12	H	A(20.0)	脇の張った体部から、底部外面をやや凹ませ、「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、端部をほぼ直角につまみ出す。口縁部内・外面は横ナナ調整。底部内面は、範ナナ後ナナ調整。				灰色 砂鉄・長石粒・雲母 普通		
13	H	A(24.7)	大きく脇の張った体部から、「く」の字状に強く屈曲する口縁部が付き、口縁外端部を凹ませる。口縁部内・外面は横ナナ調整。体部外側は叩き目調整。体部内面は、ナナ調整。埴装部の底を模倣したものと思われる。				褐色 砂鉄・長石粒・雲母・石英・スコリア 普通		
番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
14	瓦 口	全長(7.8) 外径 8.1 孔径 3.0	大形瓦口。先端部は欠損。基部は直ナナ調整。	滑溜部 部分を認める。	18	砥石 (軽用砥)	7.7×4.3 2.3	台形状を呈し、各側面に幅0.7~1.5cmの使用痕が認められる。	瓦 製
15	砥 石 (軽用砥)	8.9×8.1 2.3	ほぼ長方形を呈するが、各側面には幅1cmの溝状に使用痕が認められ、凸凹状を呈している。	瓦 製	19	砥石 (軽用砥)	9.1×4.3 1.8	長方形状を呈し、各側面に使用痕が認められる。	瓦 製
16	砥 石 (軽用砥)	6.6×5.2 2.0	側面に幅0.5~1cmの溝状に使用痕が認められる。齒車状を呈している。	瓦 製	20	砥石 (軽用砥)	4.0×3.4 2.2	不定形を呈し、各側面に使用痕が認められる。	瓦 製
17	砥 石 (軽用砥)	7.7×5.7 2.3	台形状を呈し、各側面に使用痕が認められる。	瓦 製	21	刃	全長(7.7) 大きさ 0.6	底部は方形を呈す。 下部の一部を欠損。	

158号竪穴住居跡（第296・301・302図）

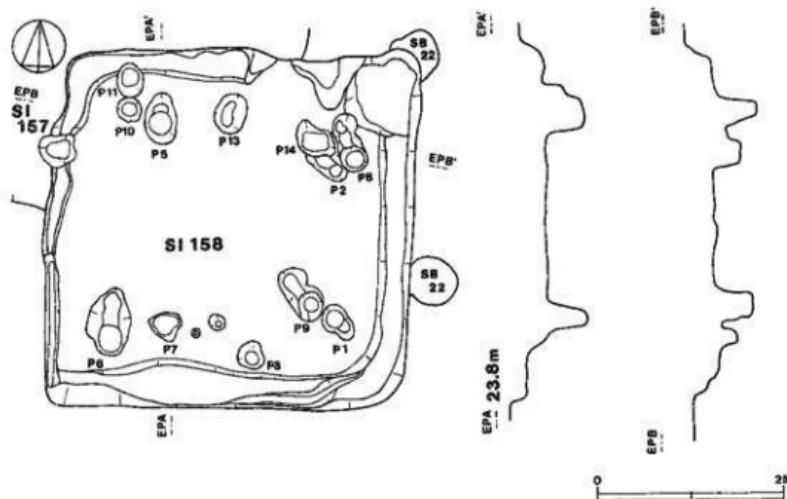
調査区C3 i区を中心に確認され、北西部で157号竪穴住居跡と重複し、当跡が新しい。規模は、東西3.92m・南北3.92mを測り、主軸方向N-1°Wを指し隅丸方形を呈している。

覆土は、褐色土を主体とするが、中・下層にはロームブロック・焼土を含み、人為的な堆積と

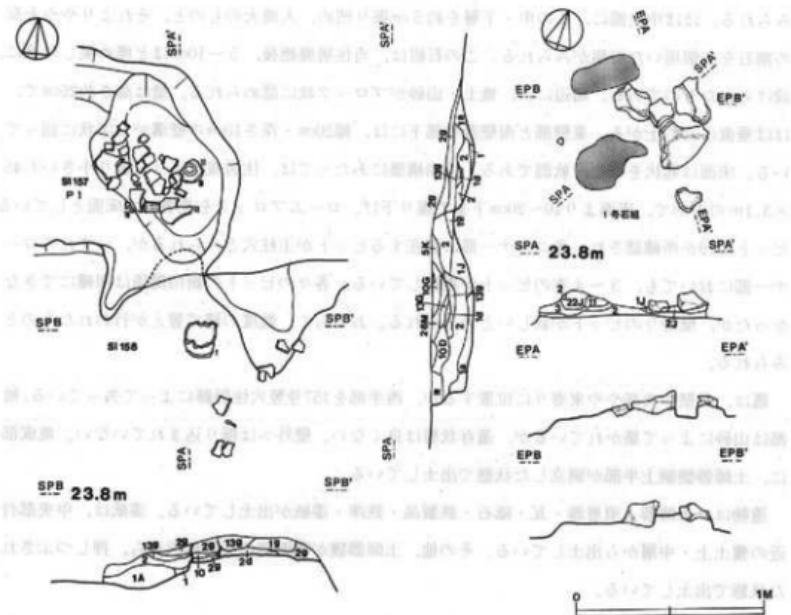
みられる。ほぼ中央部に、この中・下層を約5cm掘り凹め、人頭大のものと、それよりやや大形の割石を5個用いた石組がみられる。この石組は、当住居廃絶後、5~10cmほど埋め戻した後に、設けられたものである。周辺には、焼土・山砂がブロック状に認められる。壁は高さ約25cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。東整部と南壁西半部下には、幅20cm・深さ10cmの壁溝がL字状に回っている。床面は起伏を有し、軟弱である。床面構築にあたっては、住居規模より一回り小さい3.45×3.1mの方形で、床面より10~20cm下まで掘り下げ、ロームブロックを充填して床面としている。ピットは19か所確認され、各コーナー部に存在するピットが主柱穴とみられるが、いずれのコーナー部においても、3~4本のピットが重複している。各々のピットの新旧関係は明確にできなかったが、壁寄りのピットが新しいと考えられる。おそらく、数度の建て替えが行われたものとみられる。

窓は、北壁中央部やや東寄りに位置するが、西半部を157号竪穴住居跡によって失っている。袖部は山砂によって塗かれているが、遺存状態は良くない。壁外へは掘り込まれていない。焼成部に、土師器裏胴上半部が倒立した状態で出土している。

遺物は、土師器・須恵器・瓦・砥石・鉄製品・鐵錐・漆紙が出土している。漆紙は、中央部付近の覆土上・中層から出土している。その他、土師器裏胴が窓西側の床面付近から、押しつぶされた状態で出土している。



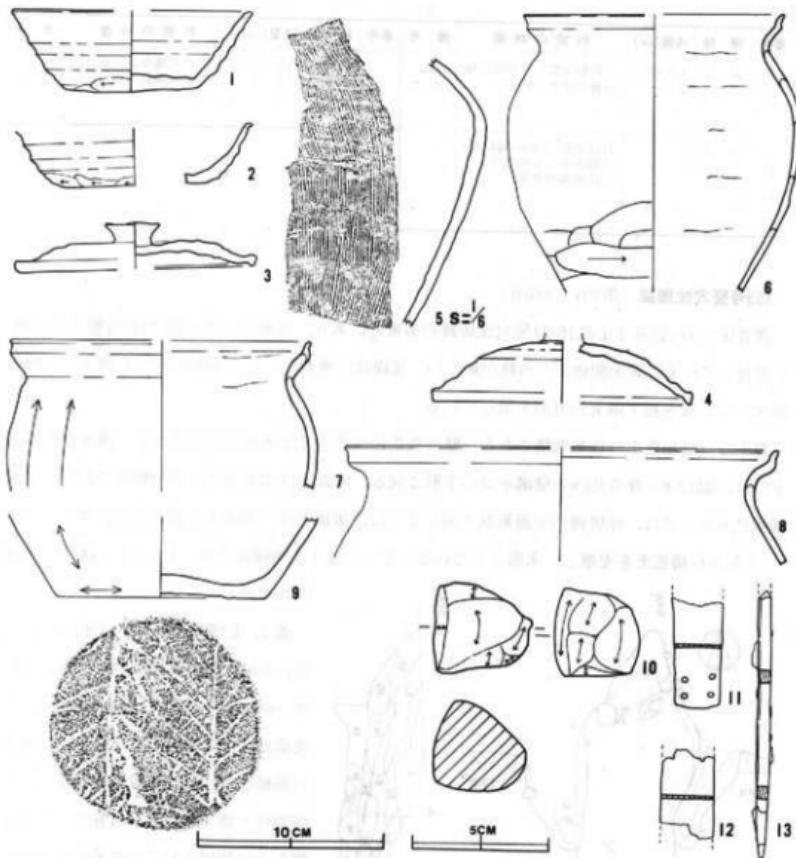
第301図 158号竪穴住居掘方実測図



第302図 158号竪穴住居跡竪・石組実測図

158号竪穴住居跡出土遺物観察表（第303図）

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	環	A(12.7) B 4.4 C 7.1	底部は平底で、体部と底部はやや明瞭な角度で分かれ。体部は外板気味に外上方にのびて、口縁部をやや尖り気味におさえている。水洗き成形で底部は回転鋸切り後、横ナナゲ調整。体部下端部は手持ち荒削り調整。	灰色 細砂・長石粒・長石 強粒・石英 普通
2 S	環	C 8.9	底部は平底で、体部と底部は明瞭な角度で分かれ。体部は内骨氣味に外上方にのびる。水洗き成形で底部外周部は静止丸ナナゲ調整。体部下端部は手持ち荒削り調整。体部内面は横ナナゲ溝整。	灰色 細砂・長石粒多・長石 微粒多 普通
3 S	蓋	A(12.4) B 2.6	天井部中央に扁平なつまみが付く、やや小形の蓋。天井部は凹み、天井部中位から反り気味に下落し、天井部と口縁部の境界に明瞭な棱を持つ。口縁部は、やや反り気味に外下方に屈曲する。水洗き成形で思われ天井部中位は、右ロクロ使用の回転鋸削り調整。口縁部内・外面は横ナナゲ調整。	灰色 細砂・長石粒・長石 強粒 普通
4 S	蓋	A(13.8)	天井部中央につまみが付くが欠損。天井部は丸く、天井部と口縁部の境界に、やや明瞭な棱を持つ。口縁部は、やや反り気味に外下方に屈曲する。水洗き成形で思われ天井部中位は、右ロクロ使用の回転鋸削り調整。口縁部内・外面は横ナナゲ調整。	灰色 細砂・長石粒・長石 強粒・鉄分 普通
5 S	蓋		肩が強く張る体部の一部。外面は平行叩き目調整。内面は横ナナゲとナナゲ調整。内面に粘土絆縫を残す。	緑灰色 細砂 良好



第303図 158号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
6	H	A(14.0) F 15.6	丸く脛の張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、端部を外上方につまみ出す。口頭部内・外面は、横ナナゲ調整。体部内・外面は荒ナナゲ調整か。体部外下面は箆削り調整。全体に薄手作り	にぶい赤褐色 砂粒・長石粒・石英粒・雲母 普通 外面全体に煤付着
7	H	A(16.1) F 16.6	方く脛の張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、端部を外上方につまみ出す。口頭部内・外面は、横ナナゲ調整。体部内・外面は、横ナナゲ調整か。体部外表面は継位の窓ナナゲ調整。口縁部外表面と、底部内面に粘土埴装を残す。	にぶい褐色 砂粒・長石粒・雲母 普通
8	H	A(22.2)	脛の張った体部から、丸く屈曲する口縁部が付き、端部は外上方につまみ出す。口頭部内・外面は、横ナナゲ調整。体部内・外面はナナゲ調整。摩減が進行。	橙色 砂粒・長石粒多・雲母 普通
9	H	C 11.1	平底の底部で、体部は内壁気味に外上方にのびる。体部内面は荒ナナゲ後ナナゲ調整。体部外表面は荒ナナゲ調整。底部内面はナナゲ調整。	橙色 砂粒・長石粒多・雲母・礫 普通 底部外表面に木葉痕

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
10	砾石	3.7×3.2 3.2	三角形を呈し、全面に使用痕が認められる。	砂岩 38.2kg	13	神鉄製品	全長9.8 太さ0.4	一方の先端部は尖るが、一方の先端部欠損。	
11	小札		11は全長(3.8m)幅1.8mで四か所に小孔有り。 12は両端部欠損。						
12									

159号竪穴住居跡（第304・305図）

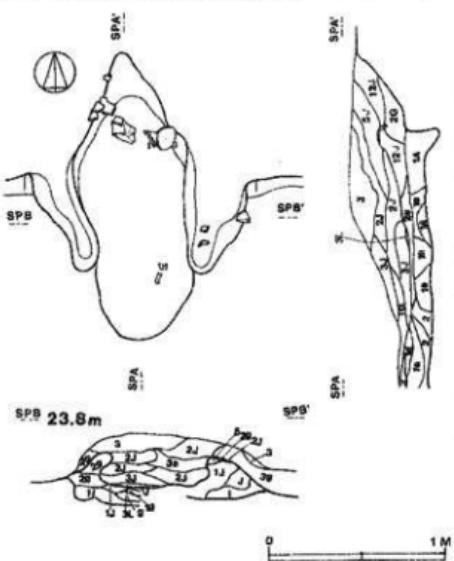
調査区C3ie区を中心に158号竪穴住居跡の南東方にあり、北東コーナー部で160号竪穴住居跡と重複している。新旧関係は、当跡が新しい。規模は、東西5.1m・南北4.27mを測り、主軸方向N-3°-Wを指す隅丸長方形を呈している。

覆土は、暗褐色土の自然堆積である。壁は高さ40cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。西半部の壁直下には、幅12cm・深さ10cmの壁溝がコの字形に回る。床面はほぼ平坦で、やや軟弱である。床面構築にあたっては、住居跡の平面形状と同じように、床面下25~30cmまで掘り下げ、ロームブロックを含む褐色土を充填し、床面としている。ピットは4か所確認され、P₂~P₄は深さ30cm内外を測る。

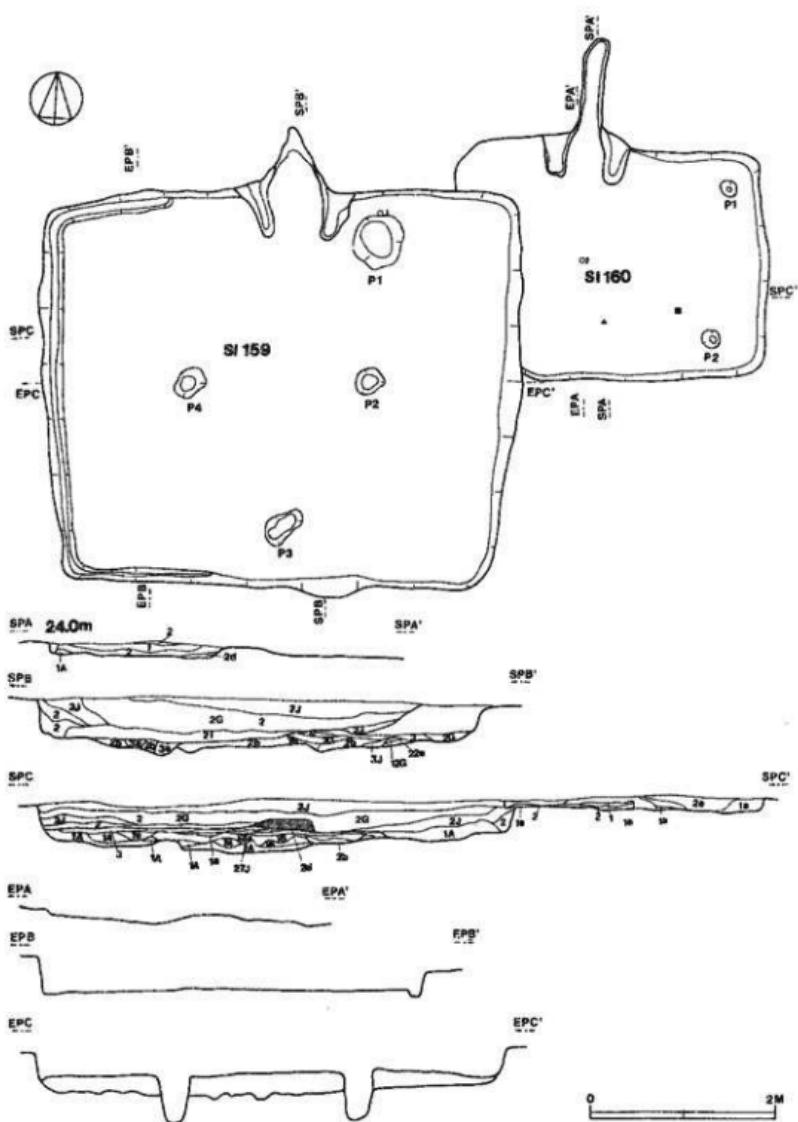
窓は、北壁中央部にあり、長さ1.2m

幅1.05m・焚口部幅0.5mを測り、壁外へ68cm掘り込んで構築されている。焼成部は、床面とはほぼ同じレベルで焼土の堆積が少ない。焼成部奥壁寄りに土器器環・甕・壺などが散在し、本來支脚などに使用されていたものとみられる。

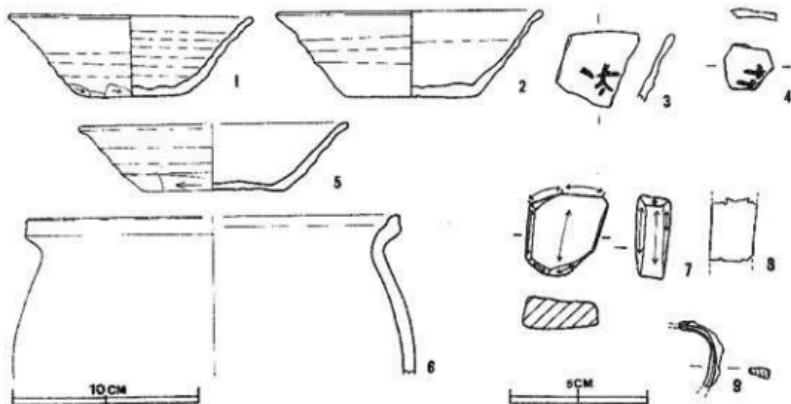
遺物は、土器器、須恵器、墨書き器、瓦、羽口・砥石・鉄製品、鐵滓が、東半部覆土および床面から出土している。



第304図 159号竪穴住居跡実測図



第305図 159・160号竪穴住居跡実測図



第306図 159号竪穴住居跡出土遺物実測図

159号竪穴住居跡出土遺物観察表（第306図）

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考	
				底	側
1 S	碗	A 12.9 B 4.6 C 6.1	底部はやや丸味を持った平底で、体部と底部は、ややあるいは角度で分かれる。体部は、内縁気味に外上方にのび、口縁部は僅かに外反する。右ロクロ水挽き成形で、底部は回転足切り技多方向の防止装置あり。体部下端部は手持ち鋸削り調整。	灰色 細砂・長石粒・長石微 粒多 良好	
2 S	盆	A 14.1 B 4.7 C 7.1	底部は平底で体部と底部は、やや明瞭な角度で分かれる。体部は、やや内縁気味に外上方にのび、口縁部は膨張して丸くおさめている。右ロクロ水挽き成形で底部は回転足切り技、軽いナナ調整。内面全体と口縁部外側及び体部下端部は、横ナナ調整。	オリーブ灰色 細砂・長石粒・長石微 粒 普通	
3 S	盆		口縁部から、体部の一部。	褐色 細砂・長石微粒・雲母多 なま焼 体部外側に墨書き	
4 S	蓋		天井部の一部か。	灰白色 細砂・長石微粒・雲母 普通 外面に墨書き	
5 H	碗	A(14.3) B 3.6 C 7.5	底部は平底で、体部と底部は、やや明瞭な角度で分かれる。体部はやや内縁気味に外上方にのび、口縁部は僅かに外反して端部を丸くおさめている。水挽き成形で底部は回転足切りで無調整、底部内面はナナ調整。体部下端部は手持ち鋸削り調整。	にぶい黄橙色 砂粒・長石粒・雲母 普通	
6 H	甕	A(19.8) F 21.5	丸く張った体部から、「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、端部を外上方につまみ出す。口縁部内・外側は、横ナナ調整。体部内面は範ナナ調整。体部外側はナナ調整。底部内面に粘土紐を残す。やや摩滅する。	褐色 砂粒・長石粒・雲母 普通	
番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号
7	砾石	2.9×2.7 1.1	全面に使用痕が認められる。	砂岩 1.3 g	9
8	小札	全长 2.2 幅 1.6	両端部欠損。		

160号竪穴住居跡（第305・307図）

調査区C4ji区を中心に確認され、西壁部を
159号竪穴住居跡によって失っている。規模は、東西3.35m・南北2.65mを測り、主軸方向N
-3°-Wを指す隅丸長方形を呈している。

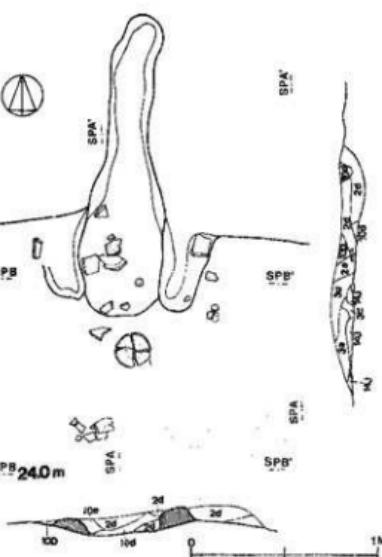
覆土は、暗褐色土を主体とし、ロームブロックを含む層もあり、人為的堆積とみられる。壁は高さ15cmと低いが、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は若干起伏を有し、竪焚口部前面が比較的踏み固められている。ピットは東側の各コーナー部に1か所ずつ確認され、柱穴は本来4本であったものとみられる。深さは、P₁が30cm、P₂が12cmを測る。

竪は、北壁やや西側寄りにあり、長さ1.6m・幅0.84m・焚口部幅3.9mで、壁外へ1.11m掘り込んで、構築されている。袖部は山砂で築かれているが、現状は低いものである。焼成部は床面より10cm低く、ゆるやかに煙道部へ続く。煙道部は幅20cmの溝状を呈し、0.9m程続いている。焼成部からは、土師器片および平瓦片が出土している。

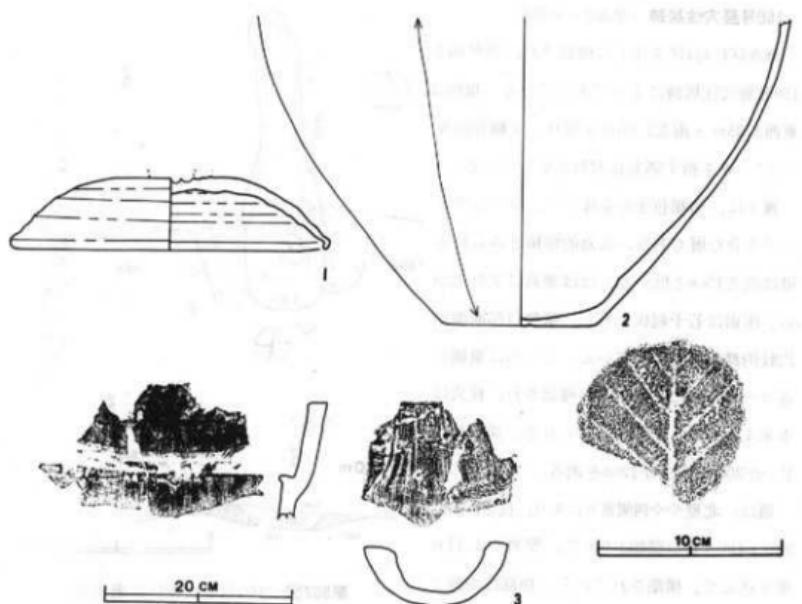
遺物は、土師器・須恵器・瓦・羽口・砥石・鉄滓等が全域にわたって床面付近から出土している。砥石は24点と多く、瓦・須恵器もみられる。

160号竪穴住居跡出土遺物観察表（第308・309図）

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	蓋	A 16.7	天井部中央につまみが付くが欠損。天井部は丸く天井部と口縁部の境界にあまい棱を持つ。口縁部は下方向に屈曲し、やや内傾する。左ロクロ本挽き成形で、天井部は右ロクロ使用の同軸窓削り調整。	灰黄色 細砂・長石粒・長石 磁化・鉄分多 良好
2 H	縁	C 8.4	平底の底部から、体部は内側しつつ立ち上がる。体部内面は窓ナテ後、ナテ調整。体部外側は複数の窓ナテ調整。底部内面に多量の瓦傷を見る。	にぶい灰色 細砂・長石粒・スコリア・空母 普通 底部外側に木葉痕
3	丸瓦	全長(12.2) 狭幅(4.4) 厚さ 1.6	玉縁付丸瓦。凸面は窓削り後ナテ調整。凹面は直目を残す。凹面は窓削り下端部の調整は不良。端面は、窓削り調整。	灰色 細砂・長石粒多・長石撒粒・漆塗 やや軟質

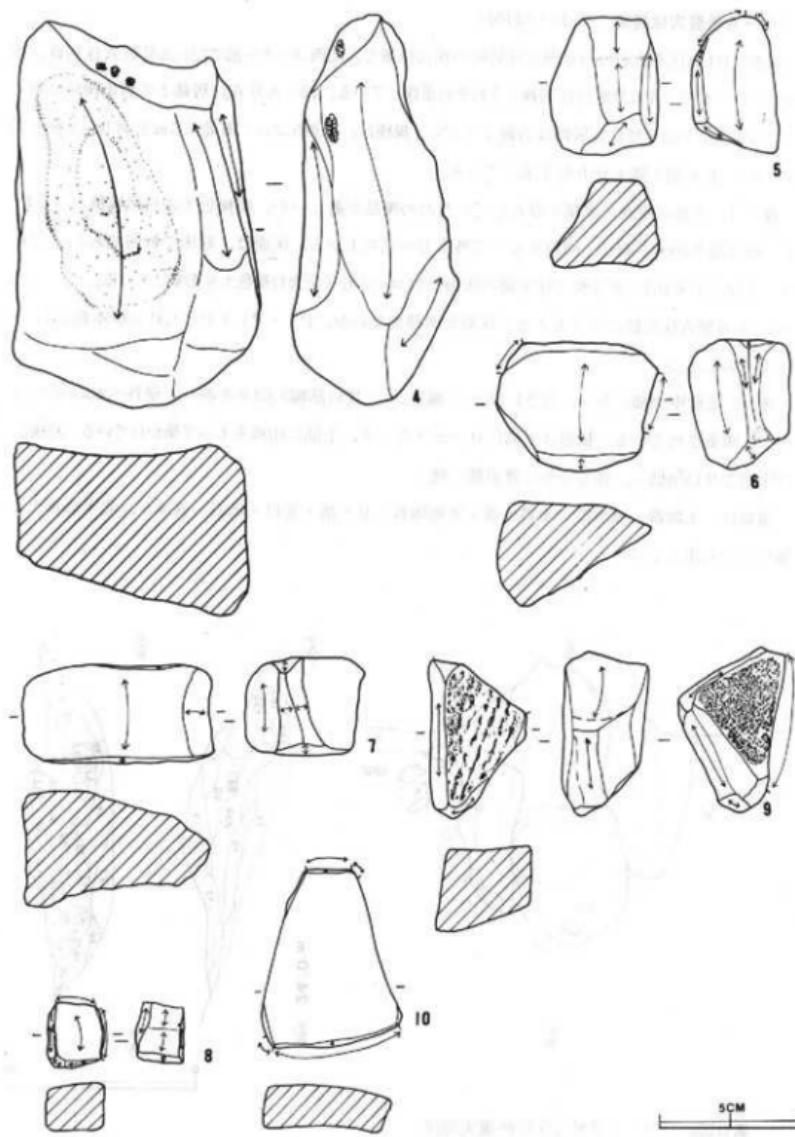


第307図 160号竪穴住居跡竪窓調査図



第308図 160号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1)

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
4	砥石	12.6×8.6 5.0	長方形を呈し、片面と一側面に使用痕が認められる。 欠損部分あり。	鉄分付 着 硬砂岩 839 g	8	砥石	2.3×2.1 1.7	方形を呈し、全面に使用痕が認められる。小形。	凝灰岩
5	砥石	4.8×3.8 3.0	二側面のみに、使用痕が認められる。	砂岩 61.3 g	9	砥石 (転用品)	5.5×3.4 2.9	片面を除く側面に使用痕が認められる。	瓦製
6	砥石	5.5×4.6 3.5	二側面を除いて使用痕が認められる。	砂岩 104.2 g	10	砥石 (転用品)	6.3×4.4 1.4	台形を呈す。二側面のみに使用痕が認められる。	須恵器 片利用
7	砥石	6.6×3.4 4.0	長方形を呈し、二側面を除いて使用痕が認められる。	流紋岩 170 g					



第309图 160号竖穴住居跡出土遺物実測図(2)

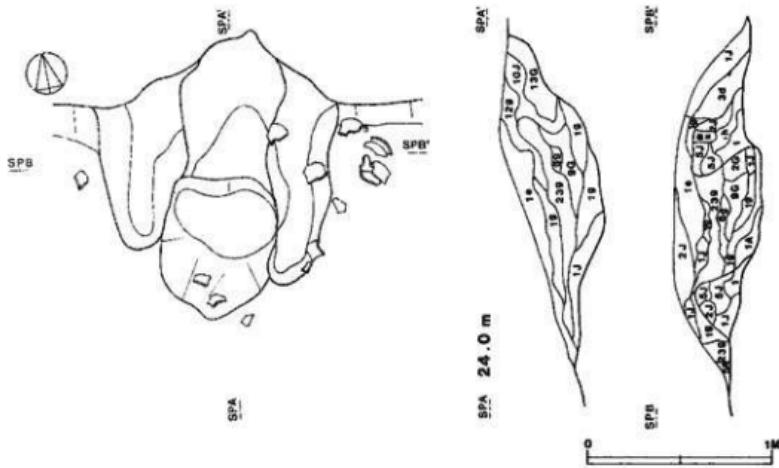
161-A号竪穴住居跡（第310・311図）

調査区D4az区を中心に71号竪穴住居跡の南に位置し、北西コーナー部で72-A号竪穴住居跡、南西コーナー付近で162号竪穴住居跡とそれぞれ重複している。72-A号穴住居跡との新旧関係は明らかでないが、162号竪穴住居跡は当跡より古い。規模は、東西5.2m・南北4.5mを測り、主軸方向N-6°-Eを指す隅丸長方形を呈している。

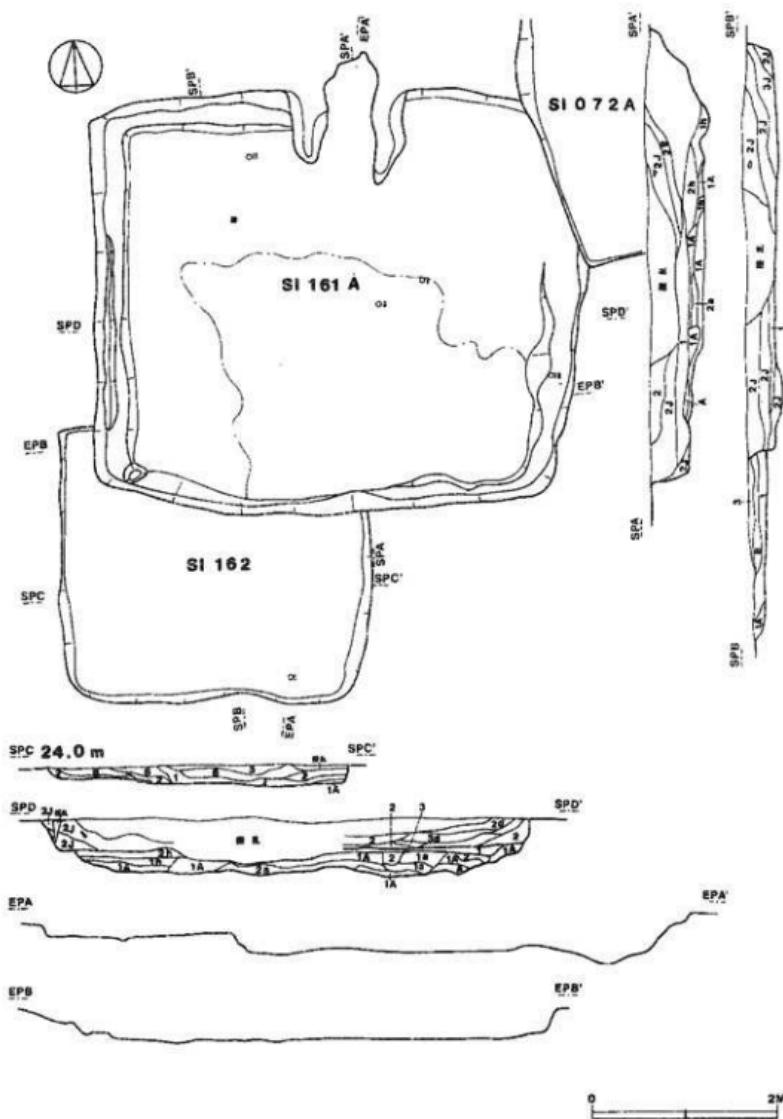
覆土は、上部に現在の家屋が存在していたため擾乱が著しいが、暗褐色土の自然堆積とみられる。壁は高さ30cmを測り、傾斜をもって外上方へ立ち上がる。床面は、貼床で軟弱である。貼床は、下位にある161-B号竪穴住居跡の床面上にローム粒子を含む褐色土を充填している。ピットは、161-B号竪穴住居跡に伴うものとの区別が明確でないが、P₁・P₃・P₇・P₁₂が本跡に伴う柱穴とみられる。

窓は、北壁中央部にあり、長さ1.58m・幅1.2m・焚口部幅0.62mを測り、壁外へ46cm掘り込んで、構築されている。袖部は下部にロームブロック、上部に山砂をもって築かれている。焼成部は床面より15cm低く、ゆるやかに煙道部へ続く。

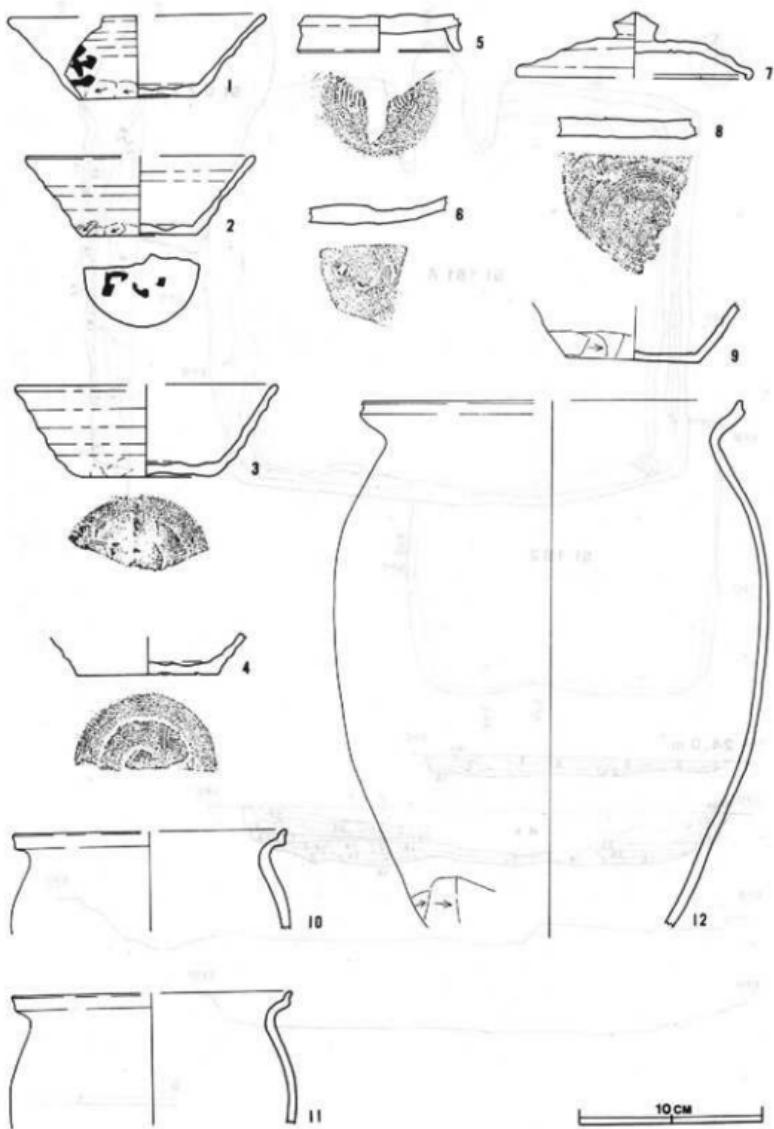
遺物は、上師器・須恵器・墨書き器・灰釉陶器・瓦・壇・羽口・砥石・鉄滓が、北半部覆土下層付近から出土している。



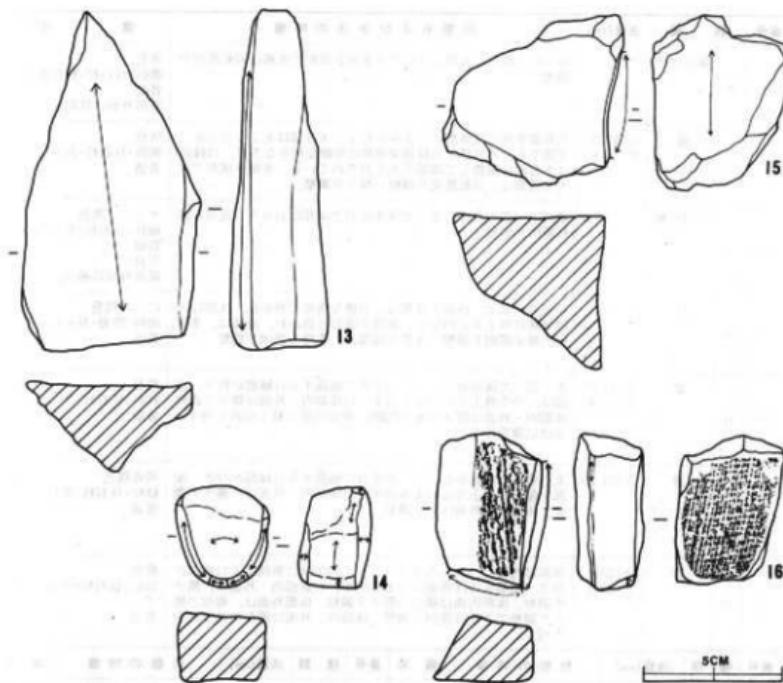
第310図 161-A号竪穴住居跡窓尖測図



第311図 161--A・162号竖穴住居跡実測図



第312図 161-A号竖穴住居跡出土遺物実測図 (1)



第313図 161-A号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)

161-A号竪穴住居跡出土遺物観察表(第312・313図)

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	环	A(13.7) B 4.5 C 6.4	底部は平底で、底部と体部は、明瞭な角度で分かれる。体部は、やや外反気味に外上方にのびて端部を丸くおさめている。水焼き成形で、底部はほぼ一方向の静止窓削り調整。体部内面と、口縁部内・外面は横ナデ調整。	黄灰色 細砂・長石粒多・長石微粒 普通 体部外面に墨書き
2 S	环	A(12.2) B 4.4 C 6.2	底部は平底で、底部と体部は、明瞭な角度で分かれる。体部は外反気味に外上方にのびて端部を丸くおさめている。水焼き成形で、底部は一方向の静止窓削り調整。口縁部内・外面は、横ナデ調整。体部下端部は、手持ち窓削り調整。	灰白色 細砂・長石粒・長石微粒・雲母多 普通 底部外面に墨書き
3 S	环	A(13.9) B 5.0 C 7.6	やや盛り上がった平底の底部で、体部と底部はややあまい角度で分かれている。体部は外反気味に外上方にのび、右クロロ水焼き成形で、底部は回転窓切りで調整。体部下端部は、手持ち窓削り調整。やや摩滅する。	灰白色 細砂・長石粒・長石微粒 底部外面に墨書き、一部ナデ消す。 体部内面に塗付着。
4 S	环	C 7.5	平底の底部で、体部は外上方にのびる。右クロロ水焼き成形で、底部は回転窓切りで調整。	灰色 細砂・長石粒・長石微粒 普通 底部外面に墨書き 底部内面に塗付着
5 S	高台付环	D (8.9)	貼り付け高台は外下方にのび「ハ」の字状をなす。水焼き成形で、底部は回転糸切り。高台内・外面は、横ナデ調整。	青灰色 細砂・長石粒・長石微粒 普通 SI168と接合

番号	種類	法量(cm)	形態および手法の特徴		備考				
6	S	高台付環	貼り付け高台は欠損。右ロクロ水洗き成形で底部は回転施削り調整。	灰色 細砂・長石粒・長石微粒 普通 底部外面に荒記号					
7	S	A(12.5) B 3.6	天井部中央に宝珠形のつまみが付く。天井部は丸くならかに下落する。天井部と口縁部の境界に明瞭な棱をなさず、口縁部は下方に向て傾曲して端部を丸くおさめている。水洗き成形で、天井頂部は、回転施削り後軽い横ナナ調整。	灰色 細砂・長石粒・長石微粒 普通					
8	S	台付 環	底部の一部と思われる。水洗き成形で底部は右ロクロ使用の回転施削り調整。	オリーブ色 細砂・長石粒・長石微粒・雲母 不良 底部外面に線刻					
9	H	C 7.2	平底の底部で、体部と底部は、明瞭な角度で分かれ、体部は外側気味に外上方にのびる。水洗き成形と思われる。底部は、多方角の滑止削り調整。体部下端部は、手持ち施削り調整。	にじみ色 細砂・雲母・長石粒 普通					
10	H	A(14.9) F 15.4	丸く張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、端部は、やや外上方につまみ出す。口縁部内・外側は、横ナナ調整。体部内・外側は施削り調整。底部内面に粘土紐痕を残す。全体に磨手あり。	褐色 砂粒・長石粒・雲母 普通					
11	H	A(11.3)	丸く張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、端部は僅かに外上方につまみ出す。口縁部内・外側は、横ナナ調整。体部内・外側はナナ調整。	明赤褐色 砂粒・長石粒・雲母 普通					
12	H	A(20.6) F 23.4	体部は内壁しつ立ち上がり、「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、端部はほぼ垂直につまみ出す。口縁部内・外側は、横ナナ調整。体部内面は横位の施ナナ調整。体部外側は、縱位の施ナナ調整で下位は施削り調整。体部内・外側に僅かに粘土紐痕を残す。	褐色 砂粒・長石粒・雲母・スコリア 普通					
番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
13	砥石	12.0×6.2 3.0	三角形を呈し、一部欠損。 片面のみに使用痕が認められる。	波紋凹 230.1g	15	砥石 (使用版)	5.8×5.6 4.5	一面面のみに使用痕が認められる。	塊製
14	砥石	3.6×3.3 2.3	全面に使用痕が認められる。	砂岩 35.8g	16	砥石 (使用版)	5.3×3.6 2.2	二側面に使用痕が認められる。	瓦製

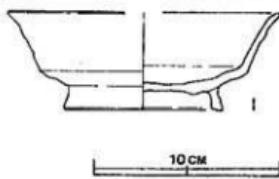
161-B号堅穴住居跡（第315図）

161-A号堅穴住居跡の下位にあり、A号より一回り小さく、4.2×4.2mの方形を呈している。

覆土は、A号の床面を形成している褐色土で、当跡から

A号への建て替えとみられる。

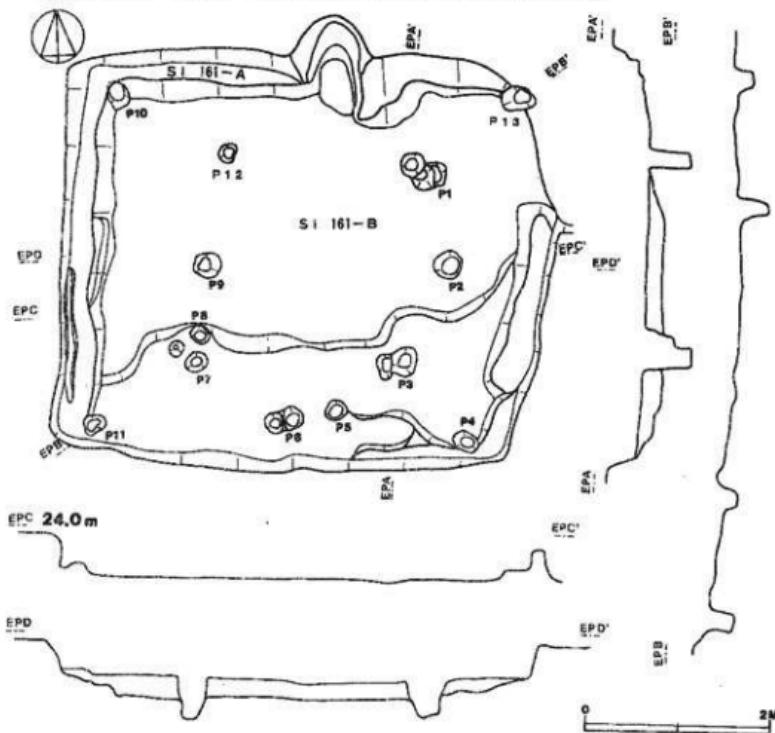
壁は、高さ10cmまで確認されたが、本来の壁高は40cmほどであったと思われる。床面は貼床で、軟弱である。床面構築にあたっては、南壁寄りに深さ40cm、その他は深さ60cmの掘方の上に、ロームブロックを多量に含む褐色土を約20cm充填し、床面としている。ピットは、A号に伴う



第314図 161-B号堅穴住居跡
出土遺物実測図

かどうか判断できないものもあるが、中央部東西に位置するP₉・P₂と各隅に位置するP₄・P₁₀・P₁₁・P₁₃が主柱穴とみられる。P₄・P₁₀・P₁₁・P₁₃は深さ30~40cmを測り、外下方へ向けて穿たれている。窓は不明である。

遺物は、土師器・須恵器・瓦が少量北壁寄りの床面から出土している。



第315図 161-B号竪穴住居跡実測図

161-B号竪穴住居跡出土遺物観察表（第314図）

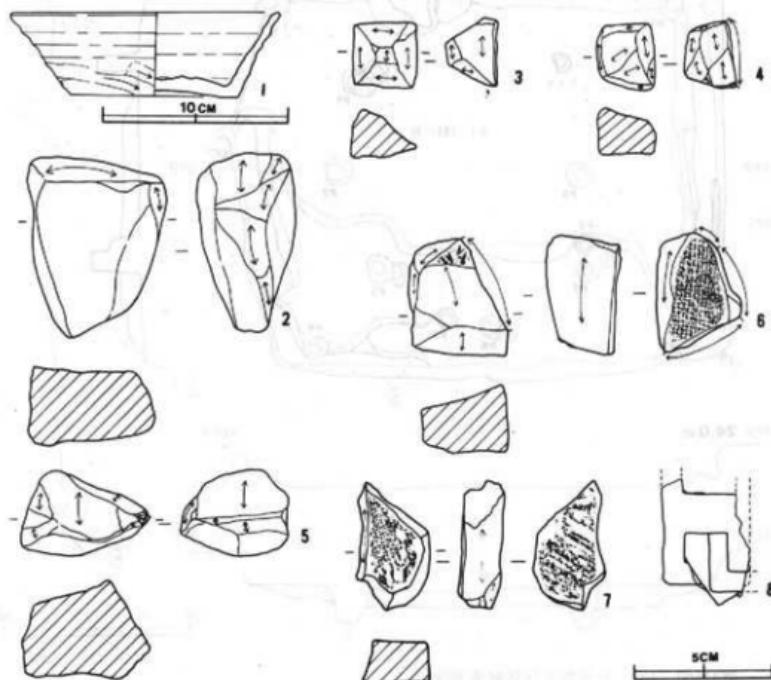
番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S	A(14.5) B 5.3 C 8.3	底部と体部の境界に明瞭な縦を持つ。体部は外反気味に外上方にのび、口縫部は強く外反し、端部はやや尖る。高台は貼り付けで下方向にのび、端部に面をなす。水焼き成形で、底部は右クロ用の回転鋤削り調整。他全体に横ナデ調整。	緑灰色 細鈎・長石粒・長石微粒 多 良好

162号竪穴住居跡（第311図）

調査区D4b₁区を中心に確認され、北壁部は161-A号竪穴住居跡によって失われている。規模は、東西3.3m・南北2.97mを測り、主軸方向N-6°-Eを指す隅丸方形を呈している。

覆土は、暗褐色土を主体とする自然堆積とみられる。壁は高さ10-20cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は、やや起伏を有し軟弱である。ピット・竈は確認されなかった。

遺物は、土師器・須恵器・羽口・砥石・鐵製品・鉄滓が、床面付近から出土している。



第311図 162号竪穴住居跡出土遺物実測図

162号竪穴住居跡出土遺物観察表（第316図）

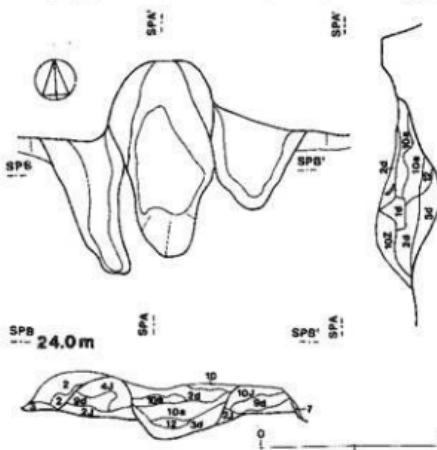
番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	坪	A 14.3 B 4.6 D 9.0	底部は平底で、体部と底部は明瞭な角度で分かれる。体部は外輪気味に外上方にのび、口縁端部をやや丸くおさめている。右ロクロ水抜き成形で、底部は回転施切り後多方向の静止距離調整。体部下端部は手持ち距削り調整。	明オリーブ灰色 繊砂・長石大粒・長 石微粒・雲母 不食 底部内面に塗付着

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
2	砥石	6.4×4.6 2.5	三角形を呈し、二面に使用痕が認められる。	砂岩 119 g	6	砥石 (私用器)	4.0×3.0 2.1	右目面のみを除いて使用 痕が認められる。	X. 製
3	砥石	2.2×2.2 1.7	方形を呈し、片面を除いて使用痕が認められる。 小形。	凝灰岩 10 g	7	砥石 (私用器)	4.6×2.5 1.4	一面面のみに使用痕が認められる。	Y. 製
4	砥石	2.3×2.0 1.6	台形を呈し、全面に使用痕が認められる。小形。	砂岩 7 g	8	不明 鉄製品	全長(3.6) 幅(3.1)	厚さ1mmで1.5×1.0mmの 透しのある鐵板が組み合 わせてある。	
5	砥石	4.4×3.1 2.9	一側面のみを除いて、使用痕が認められる。	砂岩 51 g					

163号堅穴住居跡（第317・318・319図）

発達区D4b3区を中心に161-A号堅穴住居跡の東に位置し、北東コーナー部を164号堅穴住居跡によって失われている。規模は、東西5.2m・南北4.04mを測り、主軸方向N-2°-Wを指す隅丸長方形を呈している。

覆土は、暗褐色土を主体とし、下層にロームブロックを含むが、自然堆積とみられる。壁は高さ23cmを測り、わずかに傾斜をもって外上方へ立ち上がる。南壁中央部を除く壁直下には、幅15cm・深さ5cmの壁溝が回っている。床面は部分貼床で、ほぼ平坦である。床面構築にあたっては、東・西壁に沿った部分と、竈下および南壁寄りの4か所に土壤状の掘り込みを行い、ロームブロックを充填して床面としている。ピットは14か所確認され、P₂・P₅・P₇・P₁₁が主柱穴とみられ

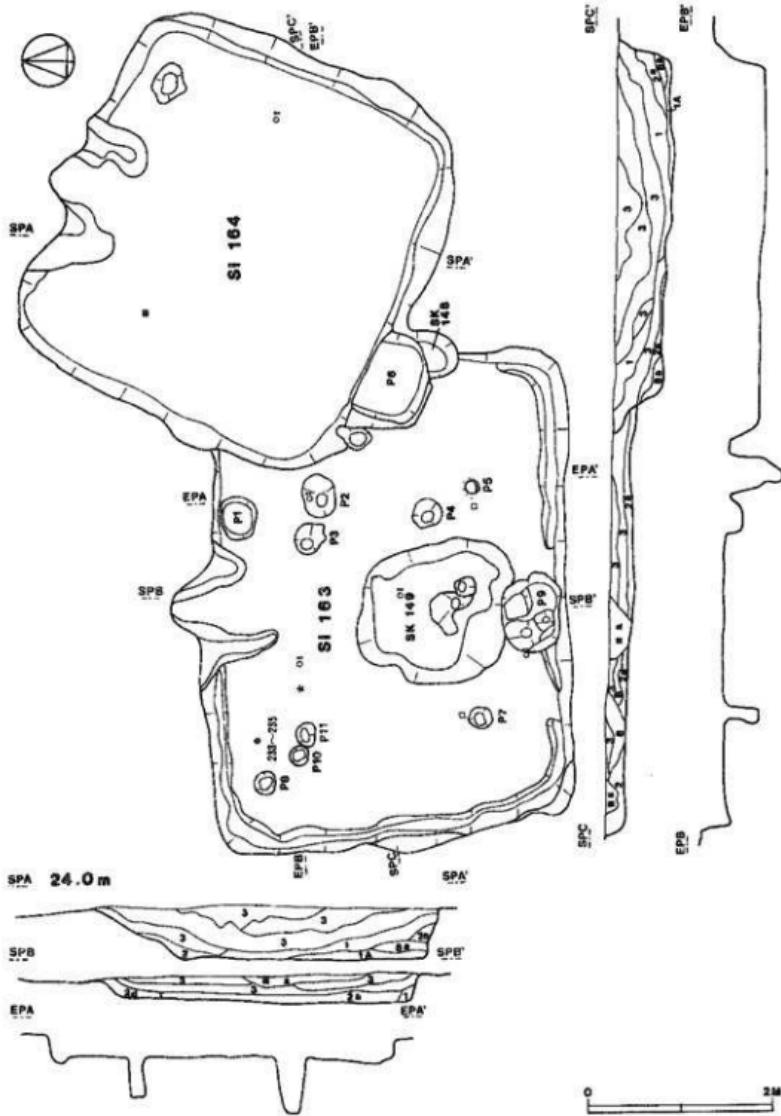


第317図 163号堅穴住居跡竈実測図

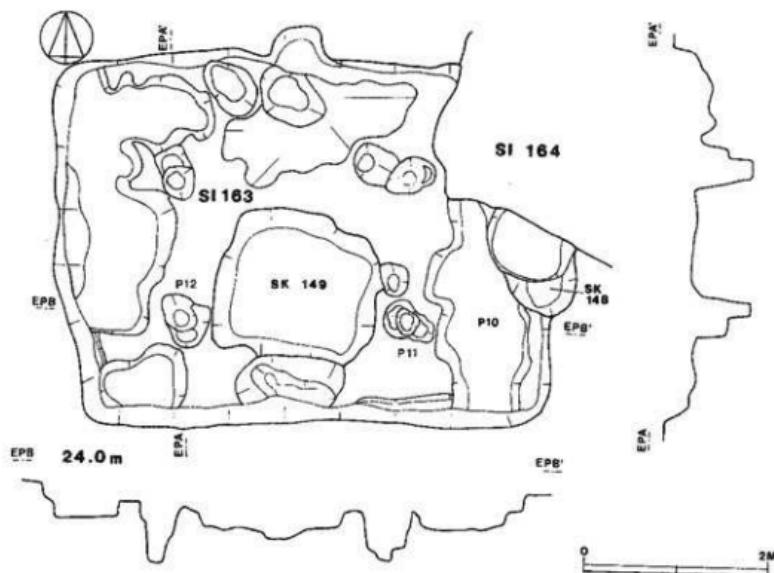
る。P₂・P₅・P₇・P₁₁は深さ40~60cmで、各々2~3本のピットが重複し、建て替えが行われたものと考えられる。

竈は、北壁中央部にあり、長さ1.05m・袖幅1.25m・焚口部幅0.5mを測る。壁外へ46cm掘り込んで構築されている。袖部は山砂で築かれている。焼成部は床面より13cm低く、ゆるやかに煙道部へ続く。

遺物は、上部器・須恵器・墨書き土器・瓦・羽口・砥石・鉄製品・鉄滓・漆紙・漆しづり料が出土している。漆紙は、竈西側の覆土下層から出土している。



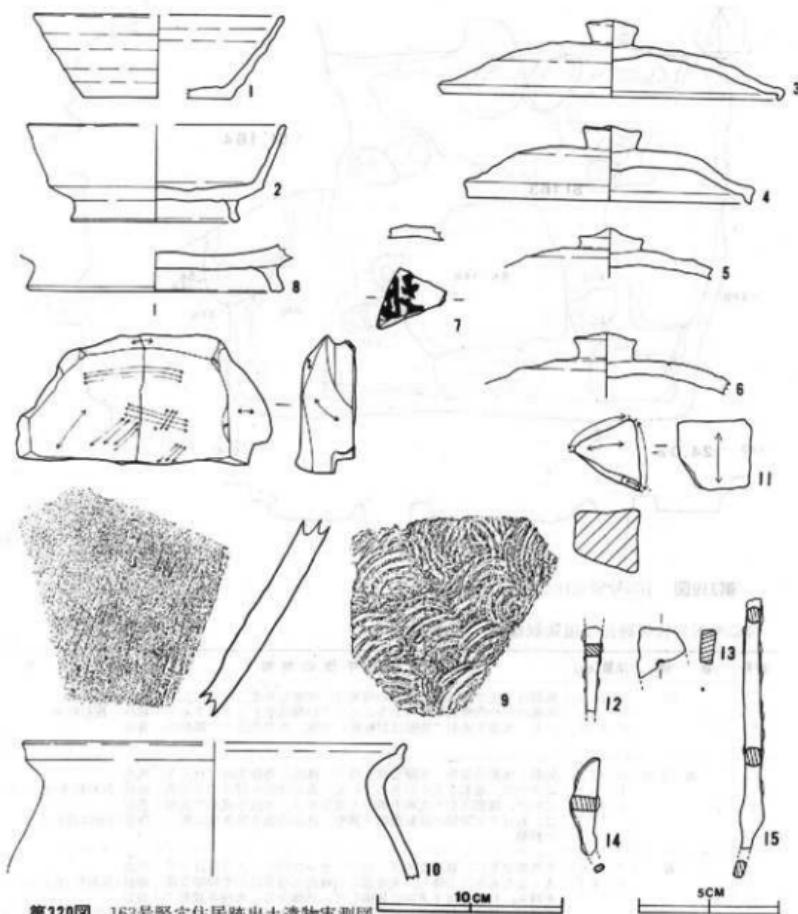
第318図 163・164号縦穴柱跡実測図



第319図 163号竖穴住居掘方実測図

163号竖穴住居跡出土遺物観察表（第320図）

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	环	A (13.1) B 4.3 C (8.0)	底部は平底で、底部と体部の境界は、明瞭な角度で分かれる。 体部はやや内傾気味に外上方にのびて口縁部を丸くおさめている。水抜き成形で底部は回転荒切り後、外周部はナナ調整か。	灰色 細砂・長石粒多 普通
2 S	高台付环	A (13.8) B 5.3 D (8.9)	底部と体部の境界に明瞭な棱を持つ。体部は外傾気味に外上方にのびて、端部を丸くおさめている。高台は粘り付けで下方に向にのび、端部はやや丸味を帯びた曲をなす。水抜き成形で底部は、右ロクロ使用の回転荒削り調整。底部内面を除き他は機ナテ調整。	灰色 細砂・長石粒多・長石微粒 良好 体部内面に塗付着
3 S	盖	A (18.0) B 4.1	天井部中央に、扁平なボタン状のつまみが付く。天井部はやや丸くならかに下傾し、天井部と口縁部の境界にやや明瞭な棱を持ち、口縁部は下方に向に屈曲して、内傾する。水抜き成形で、天井部中位は、右ロクロ使用の回転荒削り調整後機ナテ調整。	灰色 細砂・長石粒・長石微粒 良好 天井部内部に黄白色の自然釉。追き重ね焼き
4 S	盖	A 15.1 B 4.0	天井部中央に、扁平な宝珠形のつまみが付く。天井部はやや扁平で天井部と口縁部の境界にやや明瞭な棱を持ち、口縁部は下方に向に屈曲する。右ロクロ水抜き成形で、天井頂部は回転荒削り調整。他は全体に機ナテ調整。	灰色 細砂・長石粒多 良好 追き重ね焼き
5 S	盖		天井部中央に扁平な宝珠形のつまみが付く。水抜き成形で天井頂部は右ロクロ使用の回転荒削り調整。つまみは機ナテ調整。	暗青灰色 細砂・長石粒・長石微粒、 我分 良好
6 S	盖		天井部中央にボタン状のつまみが付く。天井部は丸味を帯びると思われる。水抜き成形で天井部は右ロクロ使用の回転荒削り調整。つまみは機ナテ調整。	灰色 砂粒・長石粒・長石微粒、 我分 普通



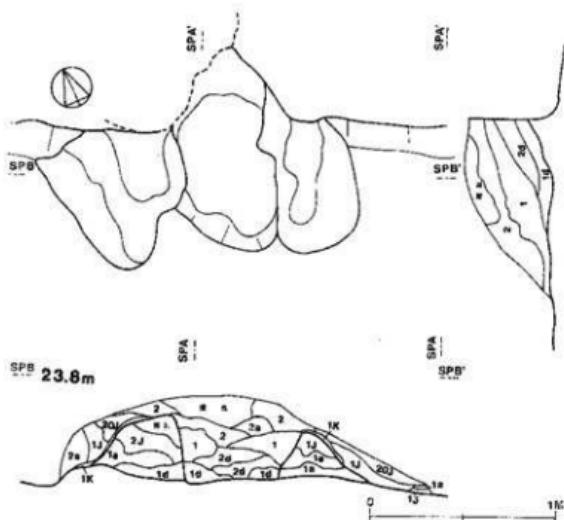
第320図 163号竪穴住居出土遺物実測図

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
7	S		蓋 天井部の一部。	灰白色 細紗・長石粒 普通 天井部内面に墨書
8	S	D-13.8 台付盤 (転用板・転用砥)	貼り付け高台は、外下方にのび「ハ」の字形をなす。水洗き成形で、底部は右ロクロ使用の回転荒削り調整。高台内・外面は精ナメ調整。底部は両面三か所に砥石としての使用痕。	青灰色 細紗・長石粒・長石微粒 普通 底部内外面に墨付着

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
9	S		体部の一部。外面は平行叩き目調整。内面には同心円文が残る。 外面は摩滅が進行。	灰色 細砂・長石粒 良好
10	H	A(20.5)	弱の強った体部から丸く屈曲する口縁部が付き。複数部は外上方につまみ出る。	褐色 砂粒・長石 普通
番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
11	砥石	2.6×2.3 2.0	片面を除いて使用痕が認められる。 小形。	泥岩 14.8 g
				13 15
12	鉢	全長(3.0) 直径0.55~ 0.4	基部か。 周縁部欠損。	

164号竪穴住居跡（第318・321図）

調査区D4a4区を中心に確認され、南西コーナー部で163号竪穴住居跡と重複している。新旧関係は、当跡が新しい。規模は、東西4.3m・南北4.0mを測り、主軸方向N-27°-Eを指す隅丸方形を呈している。



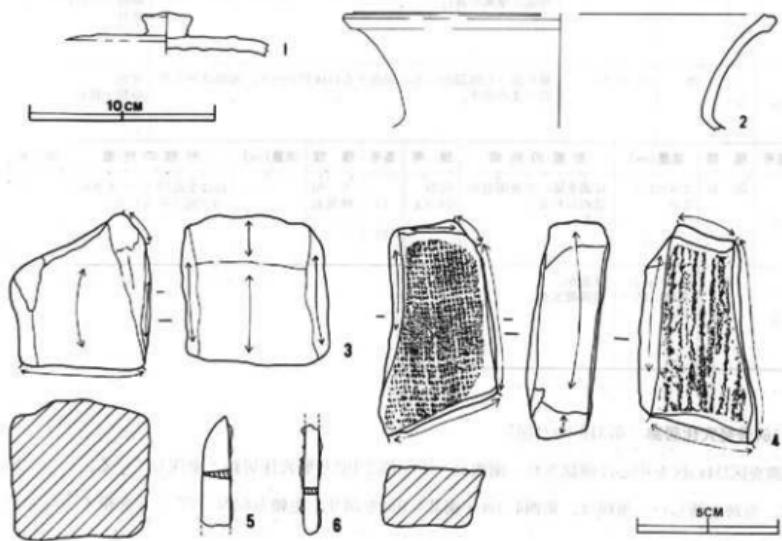
第321図 164号竪穴住居跡竪穴実測図

覆土は、褐色・暗褐色土の自然地盤である。壁は高さ55cmで、75度内外の傾斜をもって立ち上がる。床面はほぼ平坦で、比較的踏み固められている。ピットは、北東コーナー部に1か所だけ確認されている。

竪穴は、北壁や西寄りに構築され、長さ1.1m・袖幅1.5m・焚口部幅0.57mを測り、壁外へ23cmほど掘り込まれている。袖部は、少量のロームブロ

ツクを含む山砂をもって構築されている。

遺物は、土師器・須恵器・瓦・羽口・砥石・鐵滓が、覆土中から少量出土している。



第322図 164号竪穴住居跡出土遺物実測図

164号竪穴住居跡出土遺物観察表（第322図）

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	S 甕		天井部中央に扁平なボタン状のつまみが付く。つまみと天井部の接合部に浅い溝を巡らす。天井部は平坦に作る。右ロクロ水挽き成形と思われ、天井部頭は回転荒削り調整。つまみは横ナギ調整。	灰白色 細砂・長石粒・長石 微粒 普通
2	H 甕	A(23.1)	口縁部は外反しながら外上方に大きく開き、口縁内端部に浅い溝を巡らす。内・外端は横ナギ調整。内・外端に粘土被底を残す。	にじみ色 細砂・長石粒・雲母 ・スコリア 普通
番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
3	砥石 (和用砥)	5.5×5.1 4.8	台形を呈し、二側面を除いて使用痕が認められる	流紋岩 180.5g
4	砥石 (和用砥)	7.0×3.5 2.0	丸面を除いて全側面に使用痕が認められる。	瓦 製
5	刀子	全長(3.9) 刃幅 1.0	切先部、下部欠損。	
6	不明 鐵製品	全長(3.8) 大きさ 0.55 0.2	両端部欠損。	

165号竪穴住居跡（第323・324図）

調査区 D3as区を中心に156号竪穴住居跡の南に位置し、東西4.62m・南北3.7mを測り、主軸方向N-0°を指す長方形を呈している。

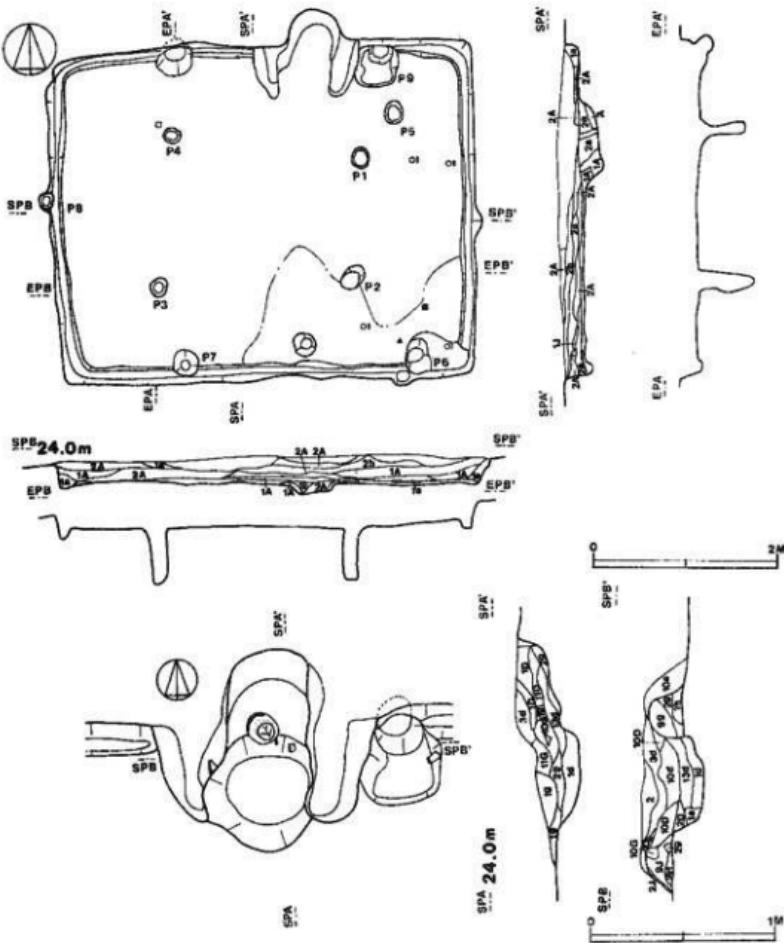
覆土は、上部で擾乱を受けているが、褐色・暗褐色土を主体とし、部分的に人为的堆積とみられる層がある。壁は高さ25cmを測り、75度内外の傾斜をもって立ち上がる。壁直下には、幅15cm・深さ8cmの壁溝が周囲している。床面は平坦で、南東コーナー部と竪周辺が良好踏み固められている。床面の構築にあたっては、各コーナー部と、中央部やや南寄りに不整形の土壤を掘り、ロームブロックを含む褐色土を充填して床面としている。ビットは12か所確認され、P₁～P₄が主柱穴とみられ、深さは60cmを測る。それ以外に、南壁下と北壁直下にそれぞれ2本ずつ、75度の傾斜をもって外下方に穿たれたビットがある。深さは35～50cmを測る。

竪は、北壁やや東寄りにあり、長さ1.1m・幅1.1m・焚口部幅0.53mを測り、壁外へ39cm掘り込まれている。袖部は、下部が山砂とロームブロックで、上部が山砂で塗かれている。焼成部は床面より15cm低く、ゆるやかに煙道部へ続く。焼土は袖部寄りに堆積し、中央部は灰が堆積している。焼成部やや奥壁寄りに、土師器小形甕が倒立して置かれ、支脚としている。

遺物は、土師器・須恵器・瓦・羽口・砥石・鉄製品・鉄滓・漆紙が、竪周辺と東寄りの床面付近から出土している。土師器平鉢と須恵器壺蓋は、東寄りの床面から出土している。漆紙は2点で、いずれも北東コーナー部の貼床内から出土している。

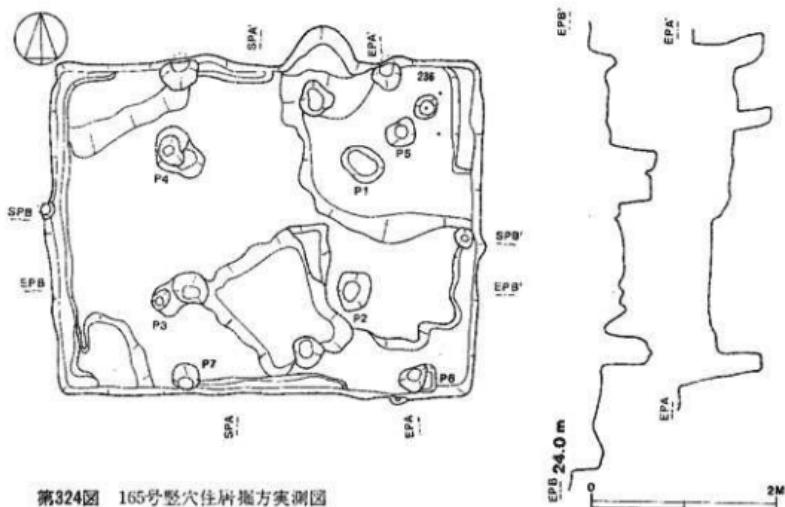
165号竪穴住居跡出土遺物観察表（第325・326図）

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	参考
1 S	壺	A(14.2) B 5.4 C 9.2	底部は丸味を帯びた半球で、体部と底部は、やや明瞭な角度で分かれる。体部はやや内輪気味に外上方にのび、口縁部はかるく外反して端部を丸くおさめている。水焼き成形で、底部は、右ロクロ使用の回転削り調整。口縁部内・外側と体部内・外側は横ナナゲ調整。	青灰色 細緻・長石粒・長石微粒 普通 体部内面全体に漆付有
2 S	高台付杯	D (6.9)	底部と体部はやや明瞭な接縫を残す。体部は外輪気味に外上方にのびる。高台は貼り付けで、ふんばり気味に下方向にのび、端部に面をなす。水焼き成形で底部は右ロクロ使用の回転削り調整。内面全体に横ナナゲ調整。	灰色 細緻・長石粒・長石微粒 鉄分多 普通 底部外面に漆付有
3 S	蓋	A 15.7 B 3.7	天井部中央に、中心が高く周囲が四むつまみが付く。天井部はややえぐく、天井部と口縁部の境界にやや明瞭な接縫を持つ。水焼き成形で、天井部中央から、天井部中位にかけ右ロクロ使用の回転削り調整。他は横ナナゲ調整。	オリーブ灰色 砂粒・長石粒・長石微粒 青緑 普通 泥さ重ね焼き
4 S	加須表	F 26.9	肩が大きく張った体部から、外輪気味にのびる口縁部が付く。粘土接縫・上打成形で、体部内面に粘土接縫を残す。頭部内・外側は横ナナゲ調整。体部外側は平行叩き目調整後横ナナゲ調整。体部外曲肩附近に平行叩き目を傷かに残す。	灰色 砂粒・長石粒多・長石微粒 多 良好



第323図 165号竪穴住居跡・竜実湖図

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
5 S	古賀頭骨	F 19.1	体部は内側しつつ立ち上がる。貼り付け高台は「へ」の字状をなすと思われるが欠損。底部内面はナリ調整。体部内外は横ナリ調整。体部外面下位は、回転削削調整。	灰色 細砂・長石粒・長石繊維 良好 体部外側と体部内面の一部及び底面外側にビードリット自然地 体部内面に接着着

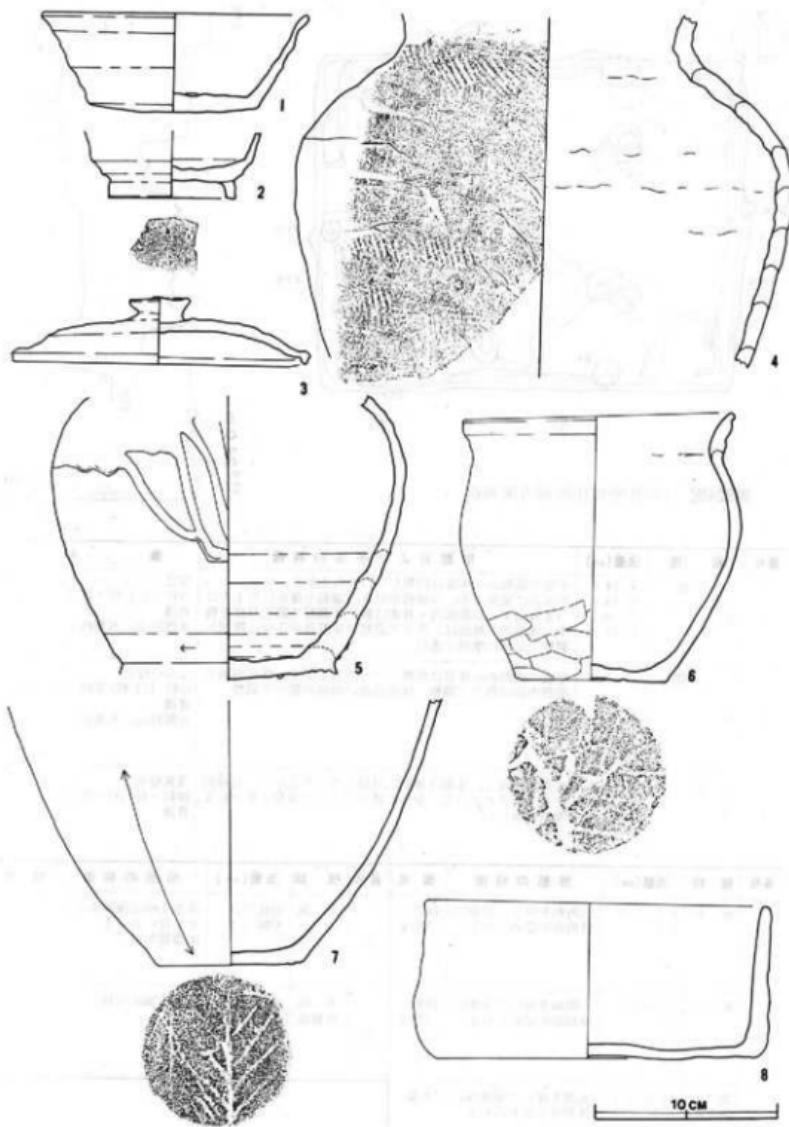


第324図 165号豊穴住居掘方実測図

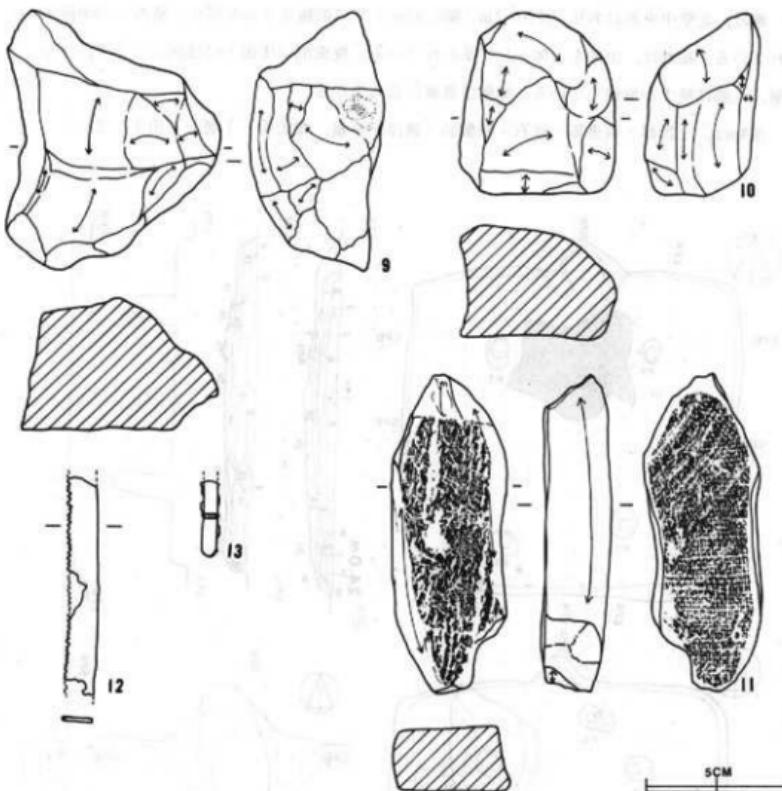
番号	種類	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
6	II 窓	A 14.0 B 14.6 C 8.1 F 15.3	平底の底部から体部は内側しつつ立ち上がり。かるく「く」の字状に屈曲する。口縁部が付き、端部を僅かに外上方につまみ出す。口頭部内・外面は横ナナ子調整で刷毛目抜を残す。体部内・外面は、窓ナナ子調整で体部外面下位は磨削り調整。全体に摩滅が進行。	橙色 砂粒・長石粒・雲母 普通 底部外面に木葉紋。
7	II 窓	C 7.8	平底の底部から体部は内側しつつ立ち上がる。体部内面と底部内面は窓ナナ子調整。体部外面は窓位の窓ナナ子調整。	にぶい暗色 砂粒・長石粒・雲母・石英 普通 底部外面に木葉紋。

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
8	H 平 体	A 18.7 B 8.5 C 17.3	底部は平底で、体部は僅かに外傾して立ち上がり、口縁部を丸くおさめている。全体に窓ナナ子ナナ子調整と思われる。摩滅が激しい。	浅黄褐色 砂粒・長石粒・雲母 普通					

9	砂 岩	8.7×7.0 4.4	三角形を呈し、片面に使用痕が認められる。	砂岩 310g	12	金 刀	全長(7.1) 刃幅 1.1	深さ 1mm前後の小さな刃が付いている。 両端部欠損。	
10	硫 石	6.5×5.5 3.8	一箇所を除いて全面に使用痕が認められる。	砂岩 174g	13	不 明 鉄製品	全長(2.7) 幅 0.5 厚さ 0.15	一方の端部欠損。	
11	硫 石 (鉄製品)	11.4×4.1 2.2	瓦面を除いて全面に使用痕が認められる。						



第325図 165号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)



第326図 165号竪穴住居跡出土遺物実測図 (2)

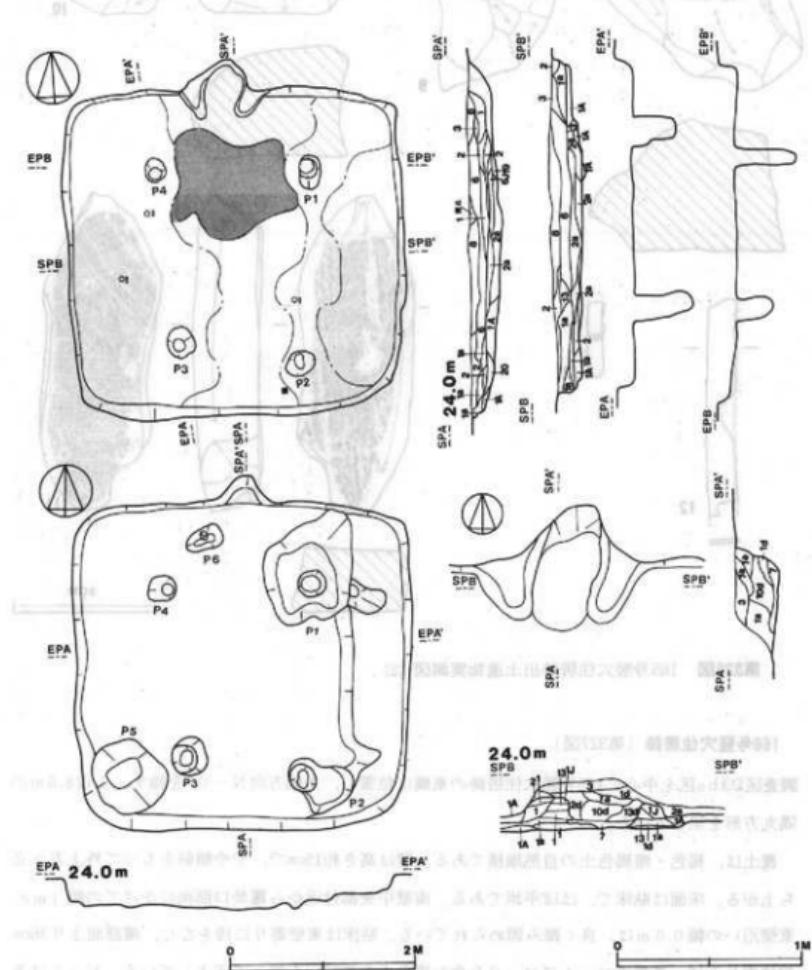
166号竪穴住居跡（第327図）

調査区D3b₀区を中心とし165号竪穴住居跡の東側に位置し、主軸方向N-0°を指す、1辺3.5mの隅丸方形を呈している。

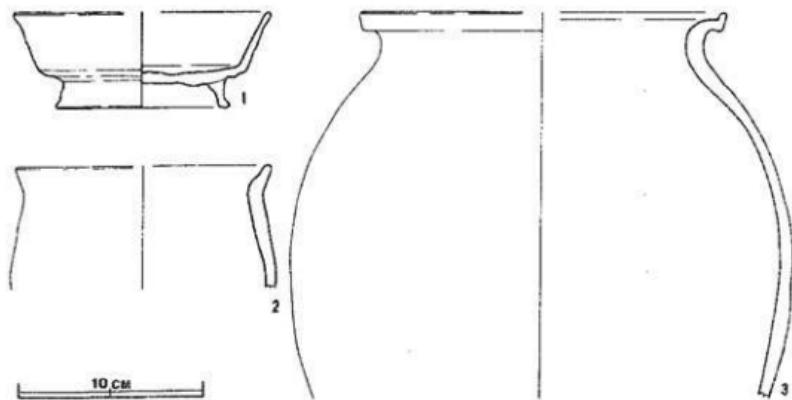
覆土は、褐色・暗褐色土の自然堆積である。壁は高さ約15cmで、やや傾斜をもって外上方へ立ち上がる。床面は貼床で、ほぼ平坦である。南壁中央部付近から竈焚口部前にかけての幅1mと、東壁沿いの幅0.6mは、良く踏み固められている。貼床は東壁寄りに段をなし、確認面より36cm前後掘り下げ、多量のロームブロックを含む褐色土を約15cm充填して床としている。ピットは各コーナー付近に4か所確認され、深さは40~68cmを測る。

竈は、北壁中央部にあり、長さ0.7m・幅0.85m・焚口部幅0.3mを測り、壁外へ33cm掘り込まれている。袖部は、山砂を主体として築かれている。焼成部は床面とほぼ同レベルで、下層が灰層、上部に焼土が堆積している。奥壁は急激に立ち上がる。

遺物は、土師器・須恵器・砥石・鐵製品・鐵滓が少量、覆土中・下層から出土している。



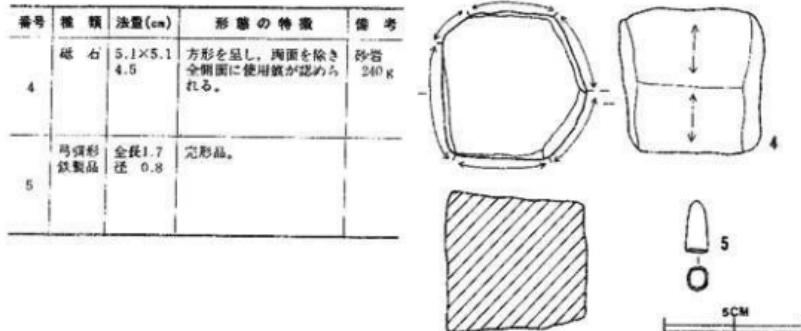
第327図 166号竖穴住居跡・竈・掘方実測図



第328図 166号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)

166号竪穴住居跡出土遺物観察表(第328・329図)

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	高台付壺	A(13.7) B 5.2 D 9.1	底部と体部の境界にやや明瞭な棱を持つ。体部は、外傾気味に外上方にのび、縁部を丸くおきめている。高台は貼り付けで下方に向かう。縁部に面をなす。右ロクロ水洗き成形で底部は回転尻削り調整。底部内・外表面を除き磨ナナ子調整。	灰色 細砂・長石粒・長石微粒 普通 体部内面に塗付着
2 H	壺	A(13.8) F 14.1	肩の張った体部からかるく外反する口縁部が付き、口縁部内面は僅かに凹む。口縁部内面は磨ナナ子調整。体部内面はナナ子調整。外表面全体に摩滅が強く調整不明。	にじい褐色 砂粒・長石粒・石英粒、 雲母・スコリア 普通
3 H	壺	A(20.0) F 27.1	球形に張った体部から、丸く屈曲する口縁部が付き外端部に面をなす。口縁部内・外表面は、磨ナナ子調整。体部内面は磨ナナ子調整。体部外表面は磨ナナ子後ナナ子調整か。摩滅が進行。	にじい褐色 砂粒・長石粒・雲母 普通



第329図 166号竪穴住居跡出土
遺物実測図(2)

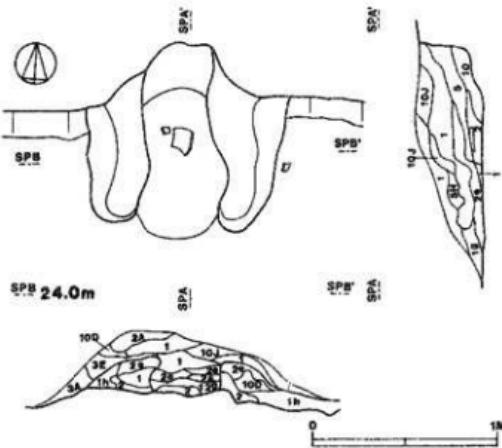
167号竪穴住居跡（第330・331・332図）

調査区 D4e1 区を中心に166号竪穴住居跡の南東に接するように位置し、168号竪穴住居跡の西半部を破壊して構築されている。規模は、東西4.1m・南北4.2mを測り、主軸方向 N=0°を指す隅丸方形を呈している。

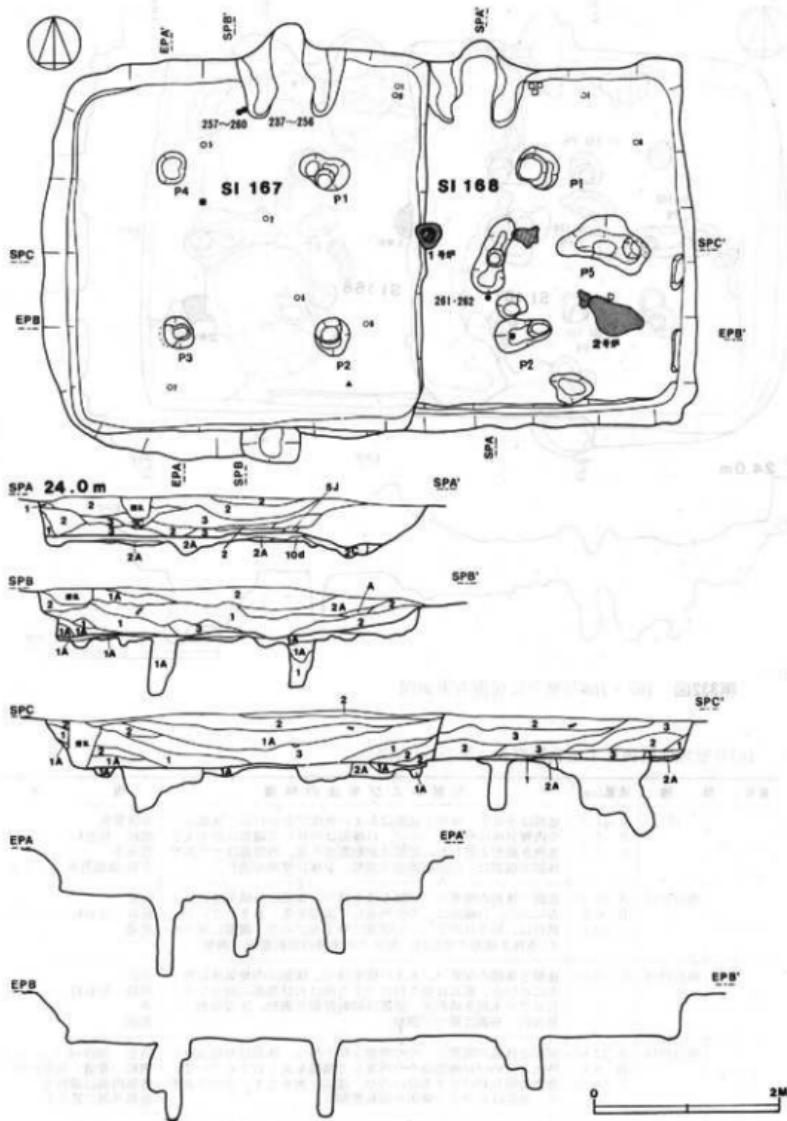
覆土は、褐色・暗褐色土で人为的堆積とみられる層もあるが、ほんんど自然堆積である。壁は高さ50cmを測り、75度の傾斜で直線的に立ち上がる。床面は南から北へ若干低くなるほかは平坦で、全体的に踏み固められている。床の構造は、168号竪穴住居跡は貼床であるが、当跡が貼床であるのかは判然としない。ピットは5か所確認され、P₁～P₄が主柱穴とみられる。径約35cm、深さはP₄が60cmである他は80cmを測り、各々2～3本の重複がみられ、建て替えが行われたものと堆削される。

竈は、北壁やや東側寄りにあり、長さ1.07m・幅1.03m・焚口部幅0.44mを測り、壁外へ34cm掘り込まれている。袖部は、山砂を主体として焼かれている。焼成部は床面と同レベルで、焼土と灰が堆積している。奥壁部は急激に立ち上がる。焼成部中央から平瓦片が1点出土している。

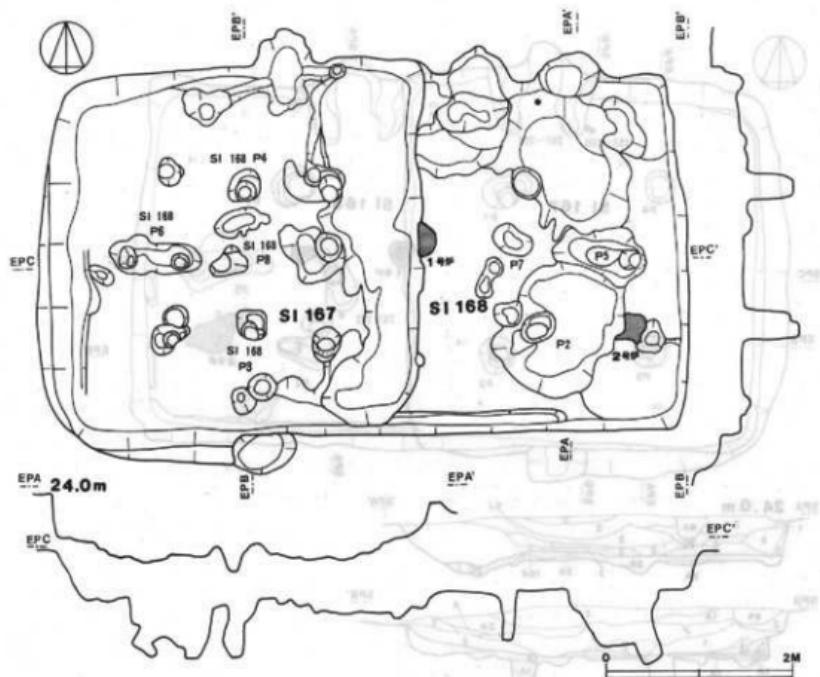
遺物は豊富で、土師器・須恵器・人面墨書き土器・瓦・羽口・砥石・鐵製品・鉄鋤・漆紙が全面にわたって出土している。漆紙は、竈西側の覆土中層から出土している。



第330図 167号竪穴住居跡竈実測図



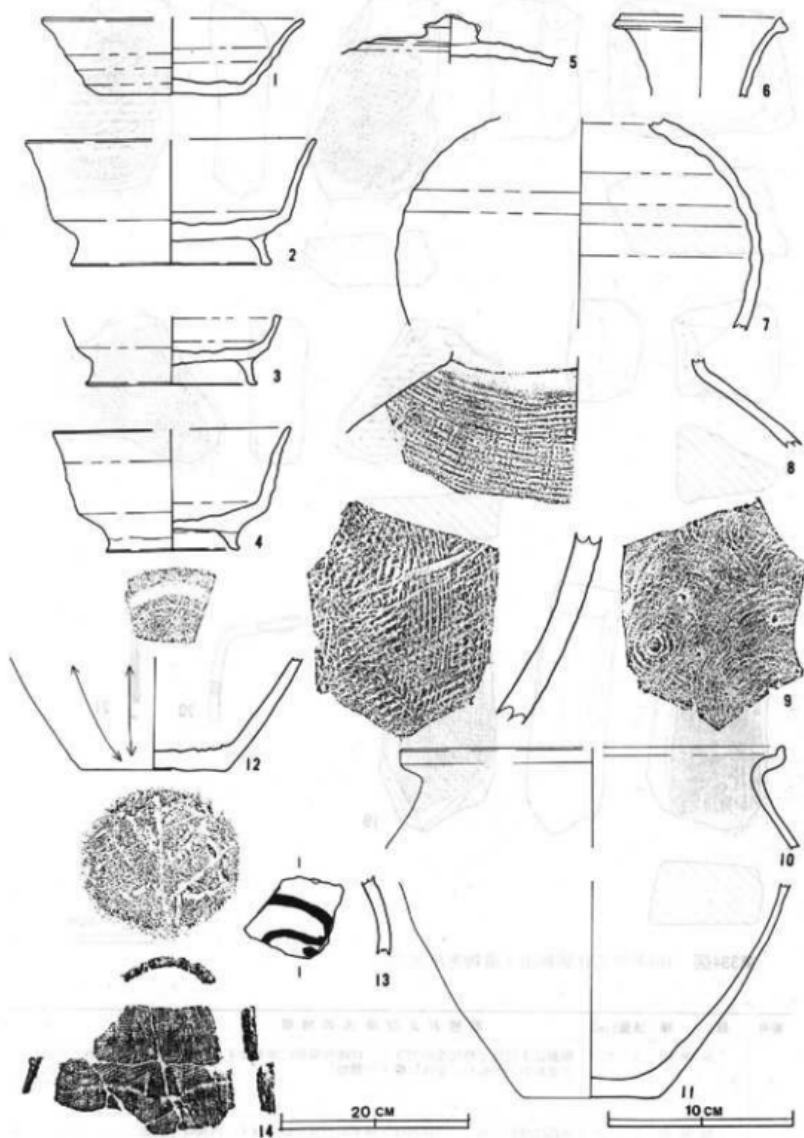
第331図 167・168号竖穴住跡実測図



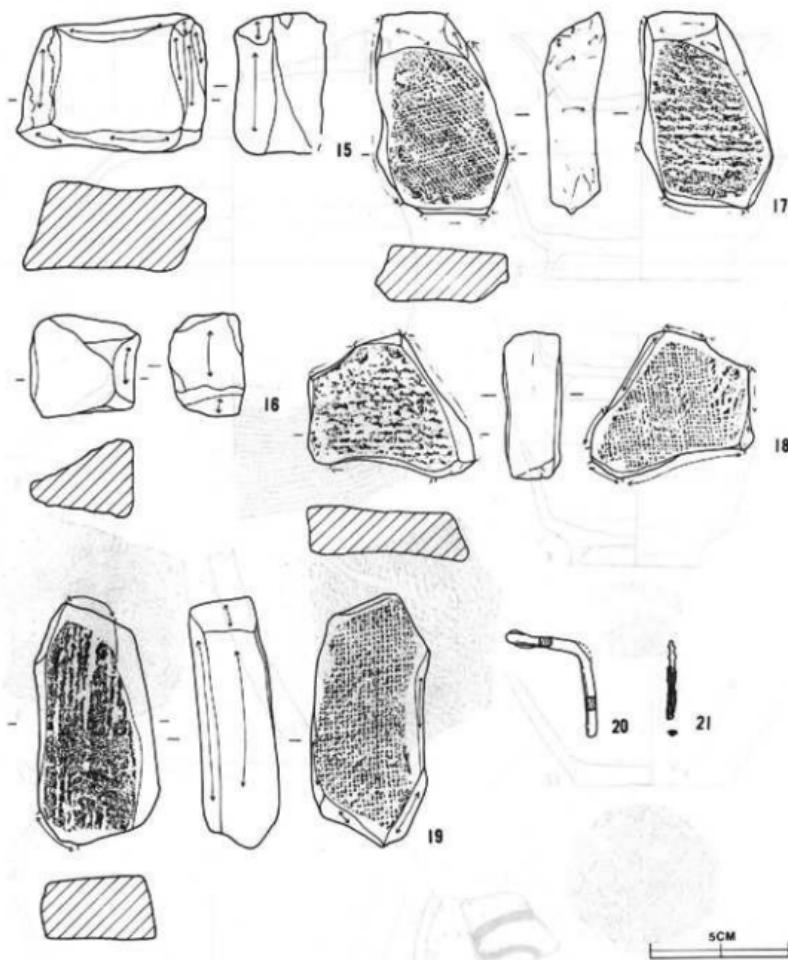
第332図 167・168号竪穴住居方実測図

167号竪穴住居跡出土遺物観察表（第333-334図）

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	壺	A(14.0) B 4.1 C 7.7	底部は平底で、体部と底部はあまい角度で分かれる。体部はやや内傾気味に外上方にのび、口縁部は外反して端部はやや尖る。水洗き成形と思われる。底部は回転荒削り後、外周部はナデ調整。体部下端部は一部回転荒削り調整。全体に磨減が進行。	暗灰黄色 細砂・長石粒・長石微粒・ 雲母多 不良 体部外面に逐付着
2 S	高台付壺	A(15.4) B 6.8 D(10.6)	底部と体部の境界に、明瞭な棱を持つ。体部は外傾気味に外上方にのび、口縁部は、やや外反して端部を丸くおさめている。高台は、貼り付けで「ノ」の字状に外下方にのび、縁部に面をなす。水洗き成形で底部は、左クロクロ使用の回転荒削り調整。	灰色 細砂・長石粒・長石微粒 普通
3 S	高台付壺	D (9.2)	底部と体部の境界に、あまい棱を持つ。体部は内傾気味に外上方にのびる。高台は貼り付けで下方向にのび縁部に面をなす。右クロクロ水洗き成形で、底部は右クロクロ使用の回転荒削り調整。体部外面と、高台内・外面は横ナデ調整。	灰色 細砂・長石粒・長石微粒 多 普通
4 S	高台付壺	A(12.6) B 6.6 D (7.2)	底部と体部の境界に、やや明瞭な棱を持つ。体部は外傾気味に外上方にのび口縁部はやや外反して端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで下方に向いて、縁部に面をなす。水洗き成形で、底部は右クロクロ使用の回転荒削り。	灰色 細砂・長石粒・長石微粒 普通 底部内面と 体部内面に塗付着 底部外面に荒記号
5 S	蓋		天井部中央に簡単な宝珠形つまみが付く。僅かに欠損する。天井部はやや平坦。右クロクロ水洗き成形で、天井部中位は回転荒削り調整。つまみと天井顶部は横ナデ調整。	灰色 細砂・長石粒・長石微粒 普通



第333図 167号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)



第334図 167号堅穴住居跡出土遺物実測図(2)

5CM

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
6	S	A (8.7)	頸部は上位ほど外反度が大きく、口縁外端部に面をなす。水焼き成形かと思われ。全体に横ナデ調整。	褐色・細砂・長石粒・長石微粒・鉄分 良好 口縁部内・外面に黄白色の自然釉
7	S	F 19.8	体部は球形に張る。口縁部は欠損するが接合痕を残す。内面は横ナデ調整。	灰色 細砂・長石粒・長石微粒・鉄分 良好 体部外面に浅黄色の自然釉

番号	種類	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
8	S	度	体部の一部。外面は平行叩き目調整。内面はナテ調整。	褐色 細砂・長石粒・雲母 不良
9	S	度	体部の一部。外面は平行叩き目調整で、箇傷を残す。内面には同心円文を残す。	灰色 細砂・長石粒 普通
10	H	A(20.8)	胸の張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、端部には垂直につまり出す。口沿部内・外面は横ナテ調整。体部内・外面は、逆ナテ後ナテ調整。	にじむ褐色 砂粒・長石粒・雲母 普通
11	H	C 7.2	底部は平底で体部は内厚しつ立ち上がる。体部外面は板位の尾ナテ調整。体部内面は尾ナテとナテ調整。底部内面はナテ調整。全体にやや堅敏する。	暗褐色 砂粒・長石粒・雲母 普通 底部外面に木葉痕
12	H	C 7.9	底部は平底で体部は外上方にのげる。体部外面は板位の尾ナテ調整。体部内面は、尾ナテ調整か。	にじむ褐色 砂粒・長石粒・雲母 普通 底部外面に木葉痕
13	H	度	小形姿の体部。外面は横ナテ調整。内面はナテ調整。	にじむ褐色 砂粒・長石粒・長石微粒・雲母 普通 体部外面に墨青 S1368と接合
14	丸瓦	全長(12.0) 床端(9.6) 厚さ 1.2	五線付丸瓦。凸面は荒削りと尾ナテ調整で、玉縁はナテ調整。 床端は布目を残す。側面は荒削り調査。端面は荒削り調整で、 端面に布目を残す。	灰褐色 細砂・長石粒・雲母少 軽質

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
15	砥石	5.6×4.6 3.8	長方形を呈し、内面を除き、全表面に使用痕が認められる。	砂岩 163.2g	砥石 (粘用板)	5.7×4.7 1.4	瓦面を除き全側面に使用痕が認められる。	瓦製	
16	砥石	4.8×3.7 2.7	方形を呈し、一側面のみに使用痕が認められる。欠損部分あり。	磁灰岩 40.3 g	砥石 (粘用板)	8.4×4.0 2.2	一側面を除いたすべての面に使用痕が認められる。	瓦製	
17	砥石 (粘用板)	7.6×4.7 1.9	瓦面を除き全側面に使用痕が認められる。	瓦製	20 不透明 鉄製品 21		20はL字状に屈曲している。 21は全長2.8 cm、幅2.2 cm	21には 本質が 残存して いる	

168号竪穴住居跡 (第331・332・335図)

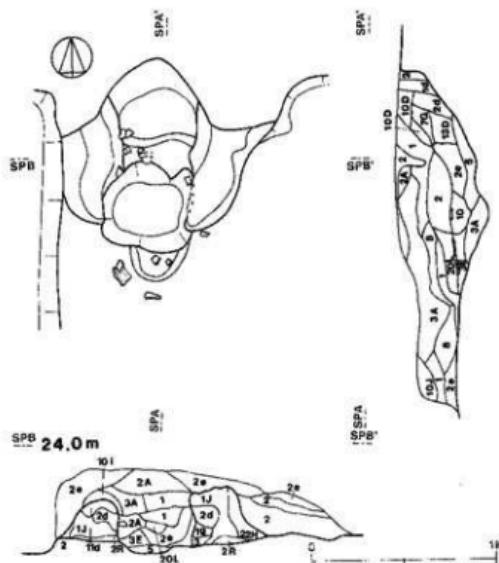
調査区 D4c 区を中心に確認され、西半部を167号竪穴住居跡によって失っている。規模は南北3.83m、東西は柱穴の位置から7.02mと推定され、主軸方向N=0°を指す長方形を呈していたとみられる。

覆土は、褐色・暗褐色土の自然堆積とみられる。壁は高さ30~40cmを測り、75度内外の傾斜をもって立ち上がる。南壁下に幅15cm、深さ8cmの壁溝が存在する。床面は貼床で、ほぼ平坦に比較的踏み固められている。貼床は、掘方の上に10cm前後のロームブロックを充填して床としている。

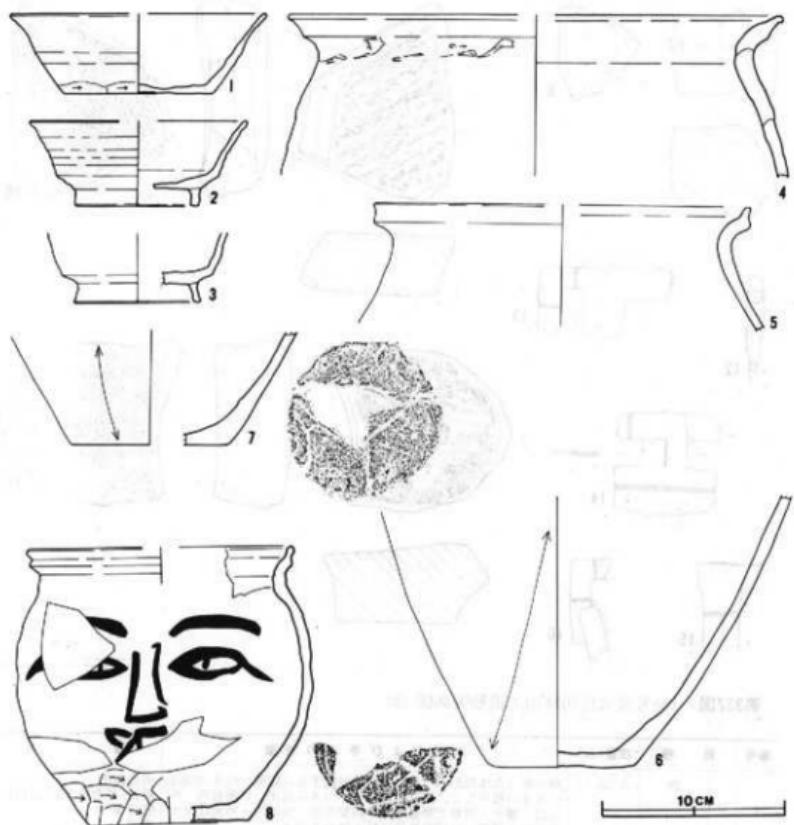
る。ピットは、167号堅穴住居跡の床下から確認されたものを含めて11か所ある。主柱穴は、P₁～P₆の6か所とみられる。P₁～P₄は径33cm・深さ60～80cmを測り、P₁を除いて2本が重複している。P₅・P₆は1×0.4mの長楕円形を呈し、中央部側は垂直に、壁側は75度の傾きをもって外下方に向て穿たれ、深さ70cmを測る。これは棟持ち柱になる柱穴で、傾きをもつピットは、棟持ち柱を斜めから支える柱のピットとみられる。さらに、P₅・P₆の内側のP₅・P₆を結ぶ線上に、深さ55cmのP₇・P₈がある。なお、中央部と南東コーナー付近の2か所に炉跡が認められている。1号炉跡はほぼ中央部にあり、西半部を167号堅穴住居跡によって失われている。径30cmのほぼ円形を呈し、床面を約4cm皿状に掘り凹めている。山砂等は認められず、厚さ3cmの焼土がレンズ状に堆積している。2号炉跡は南東コーナー部にあり、径30cmの不整形を呈している。約3cm皿状に掘り凹め、約2cmの焼土が堆積している。

竈は、北壁東部にあり、長さ1.0m・幅0.95m・焚口部幅0.4mを測り、壁外へ30cm掘り込まれている。袖部は、山砂をもって蒸かれている。焼成部は床面より17cm低く、ゆるやかに標準部へ続く。焼土は、約5cm堆積している。なお、住居跡の形態から、竈が2基存在したことも考えられるが、確証は得られなかった。

遺物は、土師器・須恵器・人面墨書き器・瓦・羽口・砥石・鉄製品・鉄鋤・漆紙・漆が、全体的に少量出土している。漆紙は、1号炉と2号炉の間のP₂・P₁₀の上部・床面と同レベル付近から2点、北東コーナー付近の床面から1点、竈右側の貼床内から1点それぞれ出土している。



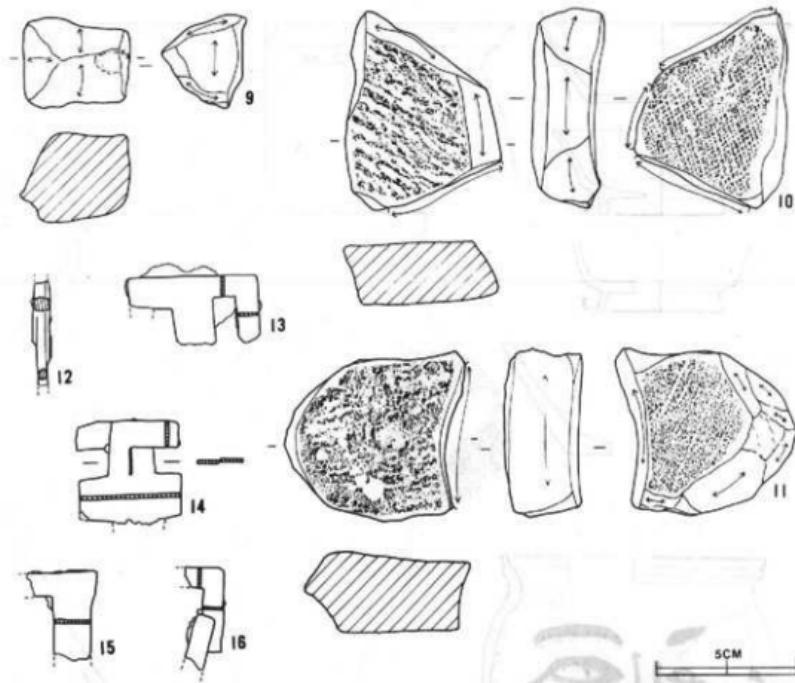
第335図 168号堅穴住居跡竈実測図



第336図 168号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)

168号竪穴住居跡出土遺物観察表(第336・337図)

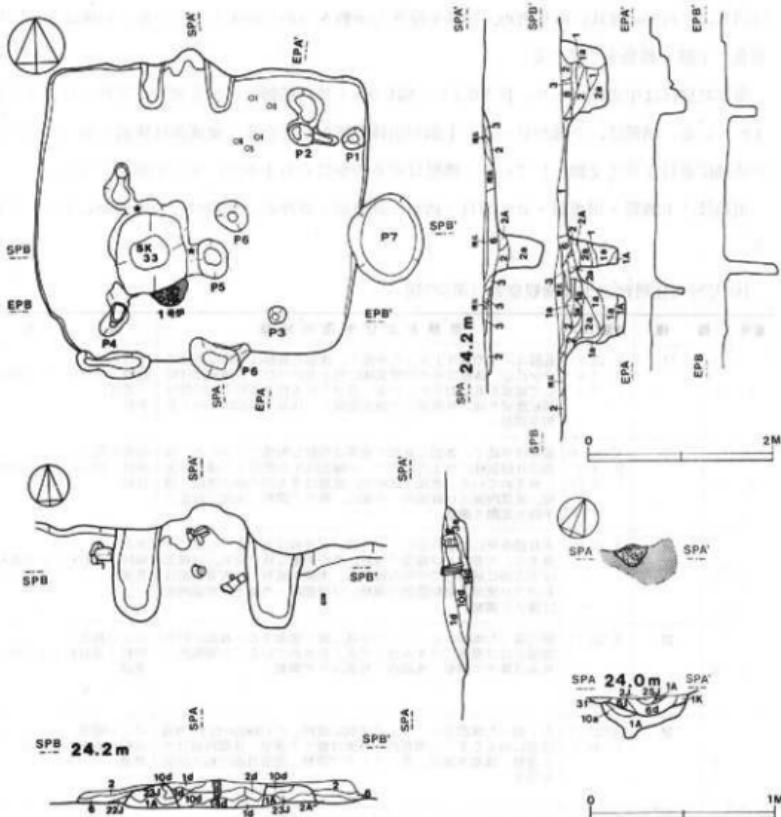
番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	壺	A(13.6) B 4.3 C 8.0	底部は平底で、体部と底部は明瞭な角度で分かれる。体部はやや内壁気味に外上方にのび、口縁部は僅かに外反し。壠部を丸くおさめている。水抜き成形で、底部は二方向の静止范削り調整。体部下端部は手持ち面削り調整。	灰色 細砂・長石粒多 良好 体部内面に漆付着
2 S	高台付壺	A(11.6) B 4.6 D (6.8) -	底部と体部の境界に明瞭な棱を持ち、体部は外反気味に外上方にのびる。壠部はやや尖る。高台は貼り付けで下方向にのび、壠部に面をなす。水抜き成形で底部は回転范削り後、横ナテ調整。体部外表面を除いて全体に横ナテ調整。	灰色 細砂・長石粒・長石微粒・ 鉄分普通
3 S	高台付壺	D (6.8)	小形の壺。底部と体部の境界に明瞭な棱を持ち、体部はやや内壁気味に外上方にのびる。高台は貼り付けで「ハ」の字状に外下方にのび、端部にやや丸みを帯びた面を有する。水抜き成形と思われ、全体に横ナテ調整。	灰色 砂粒・長石粒・長石微粒 普通



第337図 168号竪穴住居跡出土物実測図 (2)

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
4	H 底	A(26.7) B(20.0)	胴の張った体部から、「匁」字状に屈曲する口縁部が付き、外端部にあまい棱をなし、端部を外反してつまみ出す。口縁部内・外面は、横ナテ調整で頂部外縁は調整不良。体部内・外面は範ナテ・ナテ調整。口縁部外面に粘土絆痕を残す。	明赤褐色 砂粒・長石粒多・長石微粒・雲母多 普通
5	H 底	A(20.4)	胴の張った体部から、やや丸く屈曲する口縁部が付き、端部をほぼ垂直につまみ出す。口縁部内・外面は横ナテ調整。体部内・外面は範ナテ後ナテ調整。やや摩滅が進行。	橙色 砂粒・長石粒・石英粒・雲母 普通
6	H 底	C(7.8)	底部は平底で、体部は内輪気味に外上方にのびる。体部外面は斜位の範ナテ調整。内面全体は範ナテ調整。	にぶい橙色 砂粒・長石粒・雲母 良好 体部内面に漆付着 底部外面に木葉痕
7	H 底	C(8.6)	底部は平底で、体部はやや内輪気味に外上方にのびる。体部外面は範位の範ナテ調整。体部内面はナテ調整。	外面一灰褐色 内面一にぶい橙色 砂粒・長石粒・雲母 普通 底部外面に木葉痕
8	H 底	A(14.1) B 15.2 C 8.6	底部は平底で、体部は内輪しつつ立ち上がり、頸部内面に棱を残して口縁部は外反し、内・外端部は凹ませている。口須部内・外面は横ナテ調整。底部内面と体部内面はナテ調整。体部外面はナテ調整で下位は範削り調整。	褐色 細砂・長石粒・長石微粒 普通 底部外面に木葉痕 体部外面に墨書き

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
9	砥石	3.8×3.2 3.0	長方形を呈し、片面を除いて全面に使用痕が認められる。	砂岩 38.6 g	12	鉄	全長(3.7 刃幅 0.6 茎径 0.3	基部。 両端部欠損。	
10	砥石(軸用砥)	7.0×5.5 2.1	瓦面と一側面を除いて使用痕が認められる。	瓦製	13 - 16	不明 鉄製品		同一個体とみられる。 F字状・L字状・H字状の金具である。	
11	砥石(軸用砥)	5.8×5.7 2.7	二側面のみに使用痕が認められる。	瓦製					



第338図 169号竪穴住居跡・窯跡実測図

169号竪穴住居跡（第338図）

調査区D3d区を中心に169号竪穴住居跡の南に位置し、東西3.52m・南北3.24mを測り、主軸方向N-5°-Eを指す隅丸方形を呈している。中央部西寄りに、当跡より新しい33号土塙が重複している。

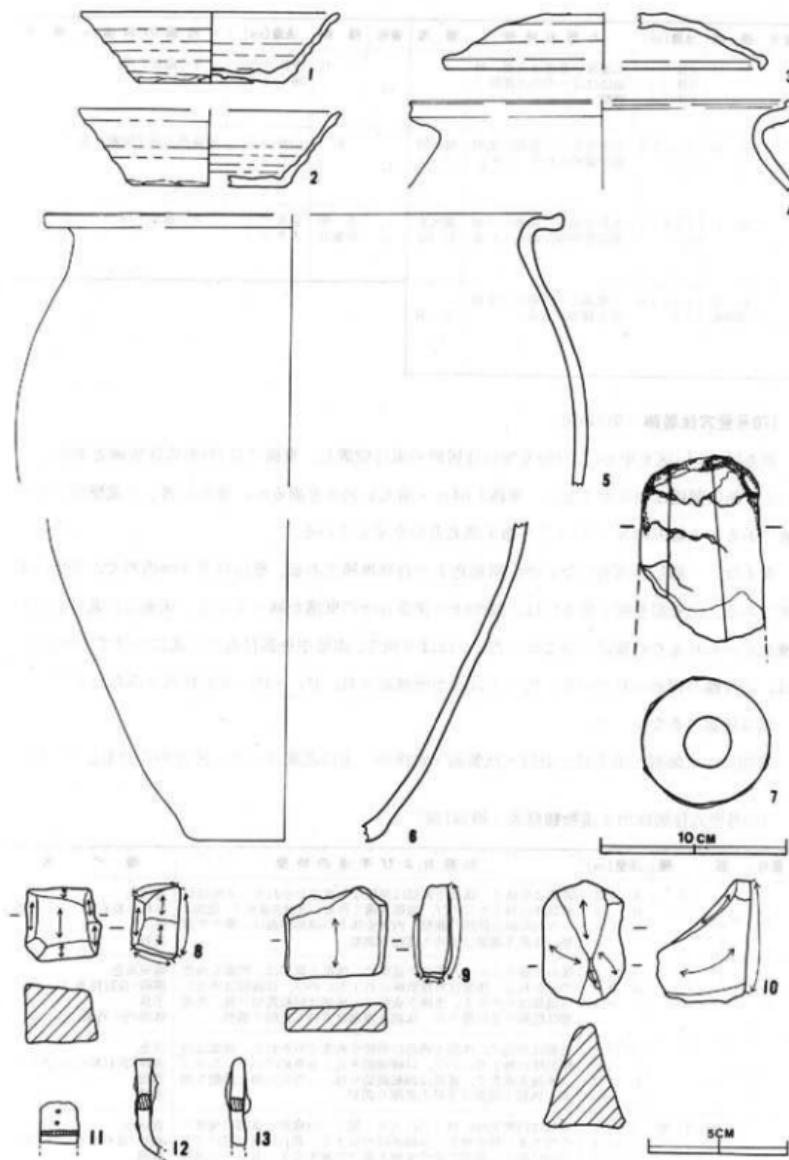
覆土は、褐色土の自然堆積であるが薄い。壁は高い所で4cmあるが、南壁は確認できない。床面は、南から北にかけて若干低くなる。ピットは7か所確認され、P₁~P₄は主柱穴とみられる。深さは24~58cmを測る。P₇は東壁外へ張り出し、97×80cmの横円形を呈している。深さは55cmを測る。南壁寄りに炉跡が認められるが、北半部を33号土塙によって失われている。径40cmのほぼ円形、約10cm皿状に掘り凹め、山砂を厚さ5cm敷きつめて炉床としている。炉床は表面が灰褐色、下部が橙色をしている。

窓は北壁ほぼ中央部にあり、長さ0.7m・幅1.0m・窓口部幅0.55mを測り、壁外へ16cm掘り込まれている。袖部は、下部がローム、上部が山砂で築かれている。焼成部は床面と同じレベルで、中央部に窓口を立てて支脚としている。奥壁はゆるやかに立ち上がり、瓦片が出土している。

遺物は、土師器・須恵器・瓦・窓口・砥石・鉄製品・鉄滓が、東側付近の床面から出土している。

169号竪穴住居跡出土遺物観察表（第339図）

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	环	A 13.7	底部は、やや盛り上がった平底で、体部と底部は明瞭な角度で分かれる。体部はやや内側気球形に外上方にのび、口縁部は外反して端部を丸くおさめている。右クロコ波浪き成形で、底部は回転型切り。外周部だけ静止塑削り。体部下端部は手持ち窓開き調整。	灰白色 細緻・長石粒・長石微粒 ・青母 不良
		B 8.8		
		C 7.7		
2 S	环	A (13.8)	底部は平底で、体部と底部の境界は明瞭な角度で分かれる。体部は外側氣球形に外上方にのび、口縁部はやや肥厚して端部を丸くおさめている。水挽き成形で、底部は多方向の静止塑削り調整。底部内面と口縁部内外面は、横ナナ調整。体部下端部は手持ち窓開き調整。	暗青灰色 細緻・長石粒・長石微粒 良好
		B 4.1		
		C (8.0)		
3 S	蓋	A (17.0)	天井部中央に突起みが付くが欠損。天井部は丸くながらかに下降する。天井部と口縁部の境界にやや明瞭な棱を持ち、口縁部は下方に向曲してやや内傾する。水挽き成形で、天井部内面は右クロコ使用の回転型削り調整。口縁部内・外側と天井部内面は横ナナ調整。	灰色 細緻・長石粒・長石微粒 普通
4 H	窓	A (20.7)	窓の受けた体部から、「く」の字状に窓曲する口縁部が付き、外側端部には直角に突出して丸くおさめている。口縁部内・外側は横ナナ調整。体部内・外側はナナ調整。	に青い褐色 砂粒・長石粒・青母 普通
5 H	窓	A (27.7)		
		F 30.5	丸く張った体部から、「く」の字状に窓曲する口縁部が付き、外側端部に直角に突出する。口縁部内・外側は横ナナ調整。体部内面はナナ調整。体部外側は、瓦ナナとナナ調整。頂部外側に粘土被膜を残す。	に青い褐色 砂粒・長石粒・青母 普通
6 H	窓	C (10.5)	底部は平底と思われるが欠損。体部は内凹しつつ立ち上がる。体部内・外側は横ナナ調整。	に青い赤褐色 砂粒・長石粒・青母 普通



第339圖 169號竪穴住居跡出土遺物實測圖

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
7	羽口	全長(10.0) 外径 5.1 孔径 2.2	先端部と基部は欠損。外面はほぼ一方の鋸削り調整。		11	小札	全長(1.5) 幅 1.4	一方の端部欠損。	
8	砥石	2.6×2.5 1.9	方形を呈し、全面に使用痕が認められる。小形。	墨灰岩 33.6 g	12	針	全長(3.7) 太さ 0.5	先端部欠損で屈曲する。	
9	砥石	3.6×3.2 0.9	方形を呈し、前面と一個面に使用痕が認められる。	墨灰岩 15.3 g	13	不規則鉄製品	全長(3.1) 太さ 0.5	一方の端部欠損。	
10	砥石(転用器)	4.4×3.0 1.5	一個面のみを除いて使用痕が認められる。	瓦製					

170号堅穴住居跡（第340図）

調査区D3d区を中心に、169号堅穴住居跡の東に位置し、東側で171号堅穴住居跡と重複している。新旧関係は明らかでない。東西3.64m・南北3.16mを測るが、擾乱が著しく北壁部は不明瞭である。主軸方向N-9°-Eを指す隅丸方形を呈している。

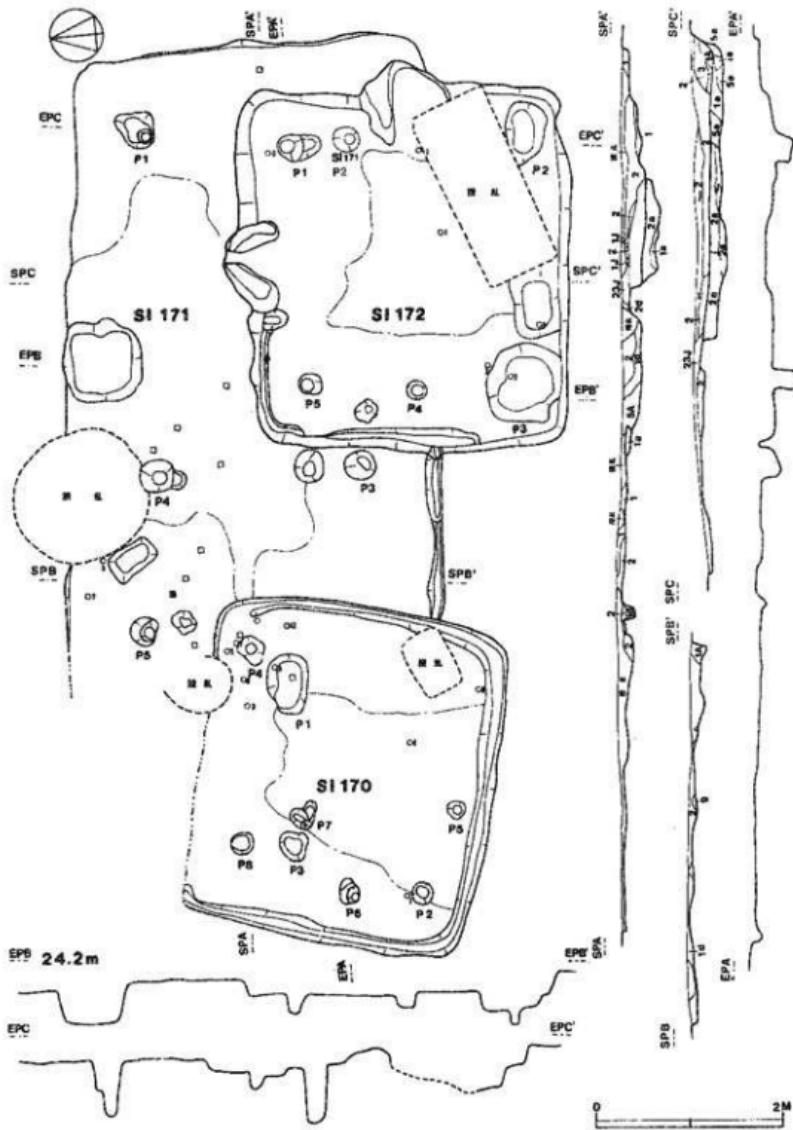
覆土は、一部しか残存しないが、暗褐色上の自然堆積である。壁は高さ5cm内外で、北壁は不明である。北壁部を除く壁下には、幅20cm・深さ10cmの壁溝が回っている。床面は、北壁付近が擾乱がみられるため確認できなかったが、ほぼ平坦で、南壁中央部付近から北にかけての幅1.6mは、十分踏み固められている。ピットは8か所確認され、P₄・P₈は主柱穴とみられる。

甕は確認できなかった。

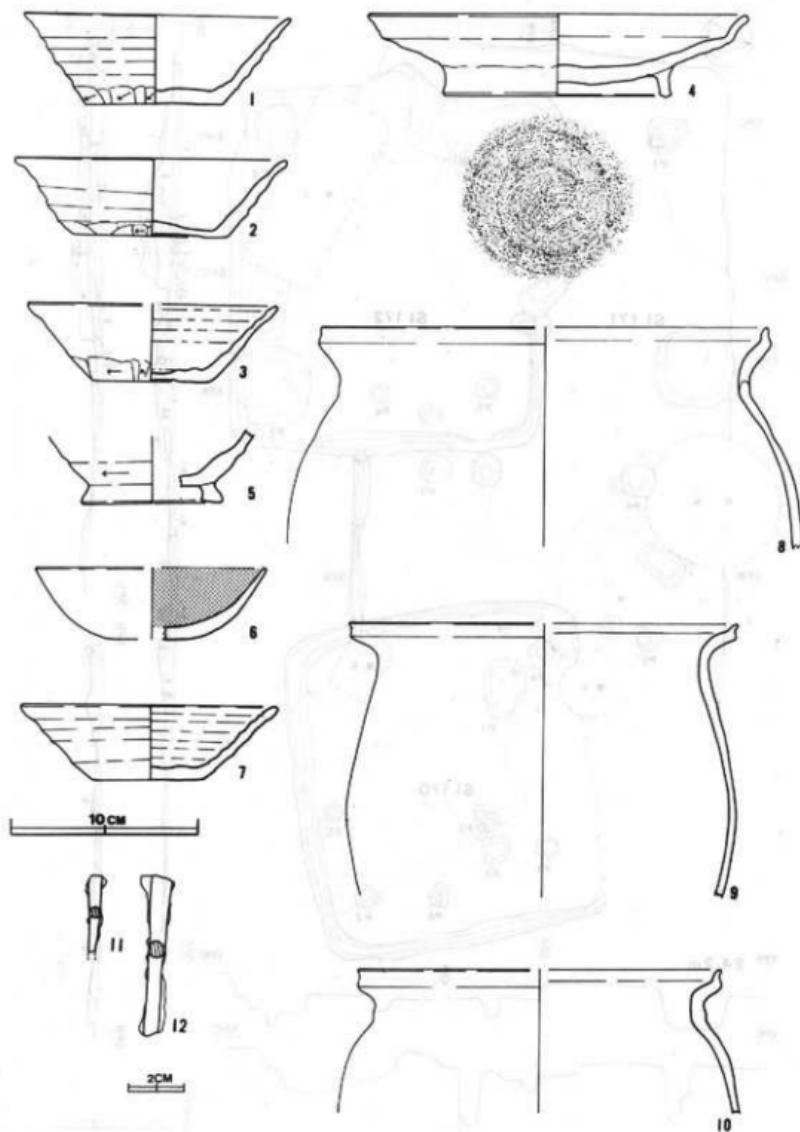
遺物は、土師器・須恵器・羽口・鉄製品・鉄滓が、主に北東コーナー付近から出土している。

170号堅穴住居跡出土遺物観察表（第341図）

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	环	A 14.2 B 4.9 C 7.3	底部は平底で、体部と底部は明瞭な角度で分かれる。体部は外傾気味に外上方にのび、端部を薄く作る。水洗き成形で、底面は一方の静止範囲り調整、内面全体と口縁部外面は、横ナナ寸調整。体部下端部は手持ち鋸削り調整。	青灰色 砂粒・長石粒多・長石微粒 良好
2 S	环	A 14.1 B 4.3 C 8.3	側面に盛り上がった平底の底部で、体部と底部は明瞭な角度で分かれる。体部は外傾気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおきめている。右ロクロ水洗き成形で、底面は回転鋸切り後、外周部は瓦崩り及び瓦ナナ。体部下端部は手持ち鋸削り調整。	暗灰黄色 細砂・長石粒多・長石微粒 不良 体部内・外面上漆付着
3 S	环	A(13.2) B 4.2 C 6.2	底部は平底で、体部と底部は明瞭な角度で分かれる。体部は外傾気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおきめている。右ロクロ水洗き成形で、底面は回転鋸切り後、一方の静止範囲り調整。体部下端部は手持ち鋸削り調整。	灰色 細砂・長石粒・長石微粒・ 空母普通
4 S	合付盤	A 20.1 B 4.4 D 12.3	体部は内傾気味に外上方に大きく膨く。口縁部と体部の境界にややあまい縁を持ち、口縁部は外反する。高台は貼り付けで下方にのび、端部にやや丸味を帯びた面をなす。右ロクロ水洗き成形で、底部は回転系切り後外側は回転鋸削り調整。他全体に横ナナ寸調整。	青灰色 細砂・反石粒多・長石微粒 普通



第340図 170・171・172号墳穴住居跡測図



第341図 170号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
5 S	臼付壺	D(7.6)	体部は内壁しつつ立ち上がりるとと思われる。高台は貼り付けで太く下方向にのび、端部に面をなす。内面全体と高台内・外側は、横ナナ子調整。体部外面は回転旋削り調整。	灰色 細厚・長石微粒 良好・颈部内面に黄色 色のビードロ状自然形
6 H	壺	A(12.4) B 3.9 C 4.5	底部と体部は境線をなさない。体部は内壁気味に外上方にのび、端部を丸くおさめている。水抜き成形かと思われる。外側全体は、横ナナ子調整で体部下端部に僅かな回転旋削り痕を残す。内面全体は擦磨き後黒色処理。	にふい褐色 長石微粒、雲母 普通
7 H	壺	A 13.6 B 4.1 C 6.9	底部は平底で、体部と蓋部はやや明瞭な角度で分かれる。体部は外側で外上方にのび、端部を丸くおさめている。水抜き成形で、底部は、回転旋切り後、一方の尋止旋削り調整で一部ナナ子を見る。口縁部外側と体部外面は横ナナ子、体部下端部は回転旋削りと手持ち直削り調整。	暗赤褐色 砂粒・長石粒・云母多 良好。
8 H	甕	A(24.1) F 27.6	胸の張った体部から、やや丸く屈曲する口縁部が付き、端部をほほ筋窓につまみ出し、丸くおさめている。口縁部内・外側は横ナナ子調整。体部内・外側は見ナナ子調整。口縁部内・外側に粘土絆痕を残す。全体に摩滅が進行。	淡橙色 砂粒・長石粒多・雲母 普通
9 H	甕	A(20.8) F 21.0	胸の張った体部から丸く屈曲する口縁部が付き、端部を外反気味につまみ出す。口縁部内・外側は横ナナ子調整。体部内・外側は見ナナ子調整。	にふい褐色 砂粒・長石粒・石英斑、 云母多 普通
10 H	甕	A(15.6)	やや歪みを持った体部から、頸部が短く立ち上がり、口縁部は強く外反して、端部を外反気味につまみ出す。口縁部内・外側は、横ナナ子調整。体部内面は見ナナ子調整。体部外面は見ナナ子後ナナ子調整。	にふい褐色 砂粒・長石粒・石英斑、 云母多 普通
番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
11 紋 か		全長(2.8) 太さ 0.4	先端部欠損。	12 不 明 鉄製品
				全長 5.8 太さ 0.6 断面は円形を呈している。

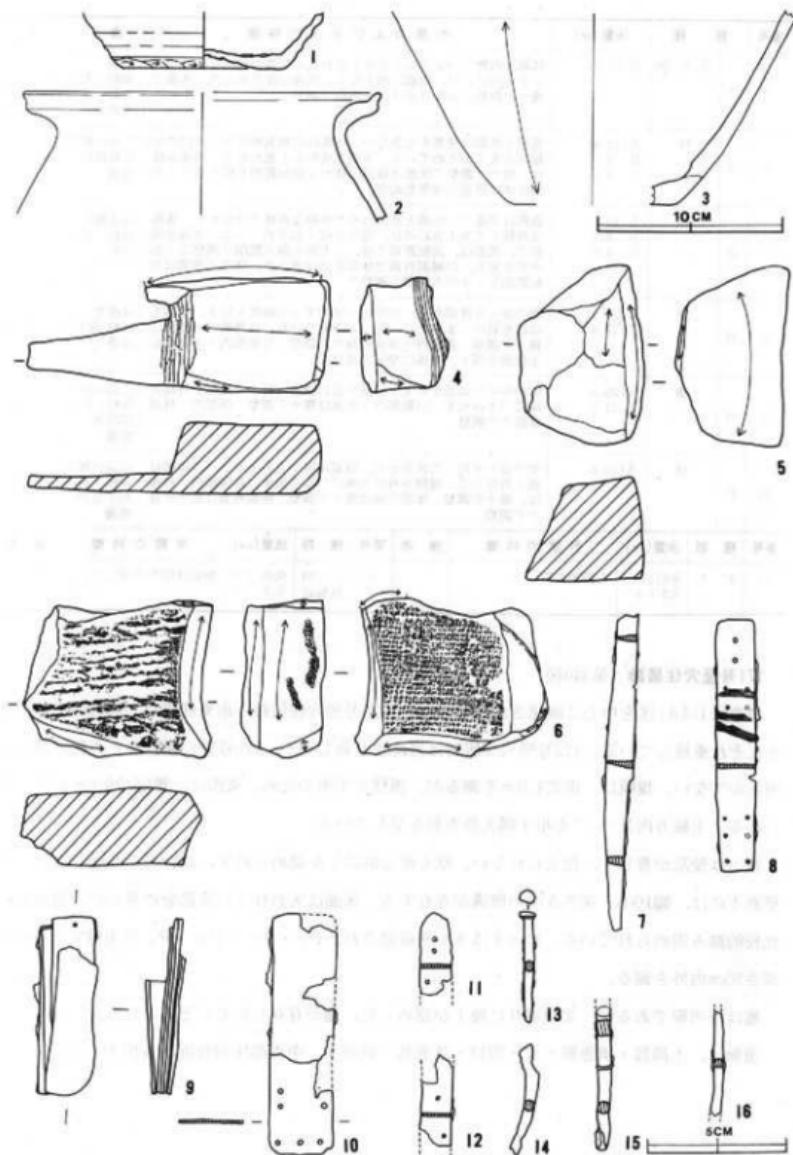
171号竪穴住居跡（第340図）

調査区 D4d1 区を中心に確認され、西壁付近で170号竪穴住居跡、南東部で172号竪穴住居跡と、それぞれ重複している。172号竪穴住居跡は当跡より新しいが、170号竪穴住居跡との新旧関係は明らかでない。規模は、南北4.0mを測るが、西壁が不明のため、東西は、推定で6.0m前後とみられる。主軸方向N=0°を指す隅丸長方形を呈している。

覆土は擾乱が著しく、捉えられない。壁も部分的にしか認められず、高い所で6cmである。南壁直下には、幅16cm・深さ5cmの壁溝が存在する。床面は失われている部分が多いが、竪前面は比較的踏み固められている。ピットは8か所確認され、P₁・P₂・P₃・P₄が主柱穴とみられ、深さ70cm内外を測る。

竪は不明瞭であるが、北壁寄りに焼土が認められ、竪が存在したものとみられる。

遺物は、土師器・須恵器・瓦・羽口・鉄製品・鉄滓が、中央部床面付近から出土している。



第342図 171号竪穴住居跡出土遺物実測図

171号竪穴住居跡出土遺物観察表（第342図）

番号	種類	法量(cm)	形態および手法の特徴		備考				
1	S	环 C 8.6	薄く盛り上がった平底の底部で、体部と底部は明瞭な角度で分かれる。体部はやや内側気味に外上方にのびる。水焼き成形で底部は回転施り後、多方向の削正削り調整。体部内面は崩ナダ調整。体部下端部は、手持ち荒削り調整。		灰色 細砂・長石粒・長石微粒 普通				
2	H	環 A(19.0)	胴の張った体部から「く」の字状に膨らむ口縁部が付き、縫部を外上方に突み出して丸くおさめている。口縁部内・外面は崩ナダ調整。体部内面はナダ調整。体部外縁は荒ナダ調整、やや摩滅する。		褐色 砂粒・長石粒・石英粒・雲母 普通				
3	H	環 C(9.0)	底部は平底で体部は内側気味に外上方にのびる。内面全体は崩ナダ調整。体部外縁は継続の崩ナダ調整。		にじみ褐色 砂粒・長石粒・雲母 普通 底部外縁に木葉折				
番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
4	磁石	10.7×3.7 2.5	片面と一側面を除いて使用痕が認められる。 欠損部分あり。	粘板岩 122.5g	8 9 12	小札		8は充形品で長さ9cm、 幅1.4cm。 9は5枚か6枚になっている。 10は光形品で長さ8.6cm、 幅2.3cm。	8は木質付着。
5	磁石	6.4×4.5 3.5	片面の一端と一側面のみに使用痕が認められる。	泥岩 143g	13 14	釘		13は全長1.0cm・太さ0.3cmで丸釘か。 14は釘か。	
6	磁石 (瓦用)	6.5×5.1 2.6	側面のみに使用痕が認められる。	瓦製	15	錐か	全長(5.2) 太さ0.35	錐の一種か。中央にリングがはめられる。 上部欠損。	
7	刀子	全長(11.3) 刃幅0.9 茎長5.4	切先部欠損。		16	不明 鉄製品	全長(3.7) 太さ0.3	一方の端部は溝状を呈している。 向端部欠損。	

172号竪穴住居跡（第340・343図）

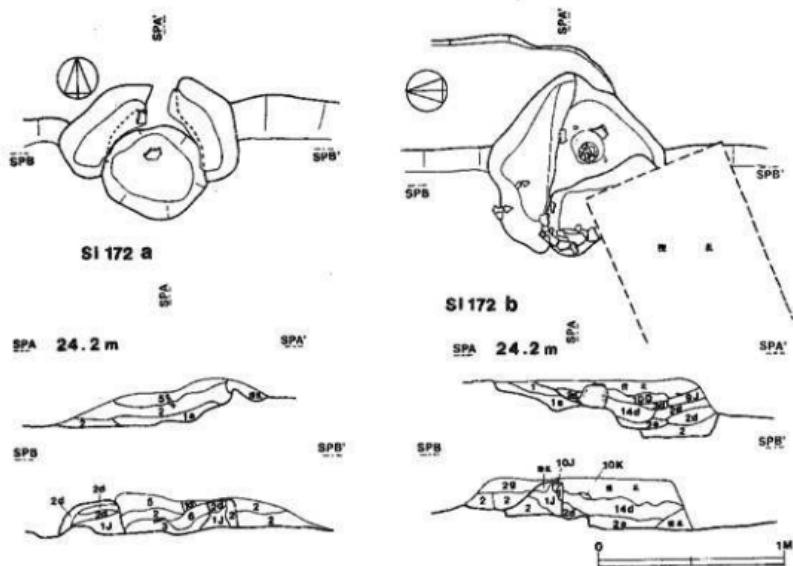
調査区 D4 b 1区を中心に確認され、北半部は171号竪穴住居跡と重複し、当跡が新しい。規模は東西3.97m・南北3.57mを測り、主軸方向N-0°を指す隅丸方形を呈している。

覆土は、暗褐色土の自然堆積とみられる。壁は高さ25cmを測り、わずかに傾斜をもって立ち上がる。北壁竪窓側と西壁下だけ、幅15cm・深さ5cmの壁溝が存在する。床面は貼床で、南から北へ向けてわずかに低くなる外は、南壁下から中央部付近までの幅1.8mが、十分踏み固められている。北西コーナー部床面には、焼土が認められる。貼床は、各コーナー部と中央部に土壤状掘り込みを設け、5~10cmの厚さでロームブロックを充填している。ピットは7か所確認され、P₁・P₃・P₅は主柱穴とみられる。深さは17~39cmを測る。

窓は、北壁中央部にあるa号窓と、東壁中央部にあるb号窓の2基を有している。a号窓は、長さ0.76m・幅0.93m・焚口部幅0.52mで、壁外へ11cm掘り込まれている。袖部は、山砂に若干のロームを混ぜて塗かれている。焼成部は床面と同レベルで、焼土の堆積は少ない。

b号竪穴は、右袖部を失っているが、主軸方向N-99°-Eを指し、長さ0.98mを測る。袖部は、山砂で築かれている。焼成部は床面より12cm低く、少量の焼土と多量の灰が堆積している。ほぼ中央部に土師器窓が押しつぶされた状態で、やや奥壁寄りに、土師器小形窓を倒立させ、さらにその上に削下半分を欠いた土師器窓が逆さまに被せられた状態で出土している。

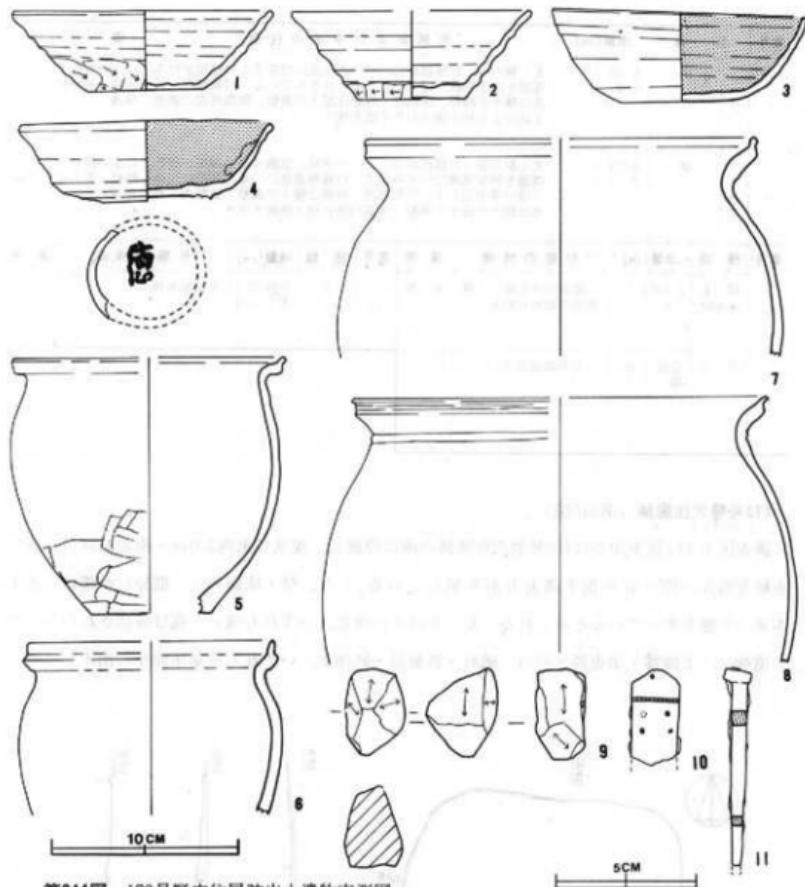
遺物は、土師器・須恵器・瓦・羽口・鉄製品・鉄錠・漆紙が、全体的に少量出土している。なお、漆紙は、竪穴側の覆土中層からの出土である。



第343図 172号竪穴住居出土物観察表（第344図）

172号竪穴住居出土物観察表（第344図）

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	环	A 13.8 B 4.4 C 6.1	底部は平底で、体部と底部は明瞭な角度で分かれ、体部は内壁気味に外上方にのび、端部を丸くおさめている。水焼き成形で、底部は一方向の静止範削り調整。一部折痕伴止めをみると内面全体と口縁部外面は横ナナゲ調整。体部下端部は手持ち範削り調整。	灰青褐色 細砂・長石粒・長石微粒・表面不良
2	环	A(12.7) B 4.8 C 5.7	底部は平底で、体部と底部は锐く円錐形の角度で分かれ、体部は外壁気味に外上方にのび、端部を丸くおさめている。水焼き成形で、底部は一方向の静止範削り調整。一部折痕伴止めをみると内面全体と口縁部外面は横ナナゲ調整。体部下端部は手持ち範削り調整。	銀灰色 細砂・やや粗良 普通 底部外面にわずかに窓記号を認める
3	环	A 13.4 B 5.2 C 5.8	底部は平底で、体部と底部はあまり角度で分かれ。体部は内壁しつづれ上方にのび、端部を丸くおさめている。底部と体部下端部は右ロクロ使用の回転範削り調整。口縁部外面と体部外面は横ナナゲ調整。内面全体は荒焼き後、黒色処理。	橙色 砂粒・長石粒・貴母青通



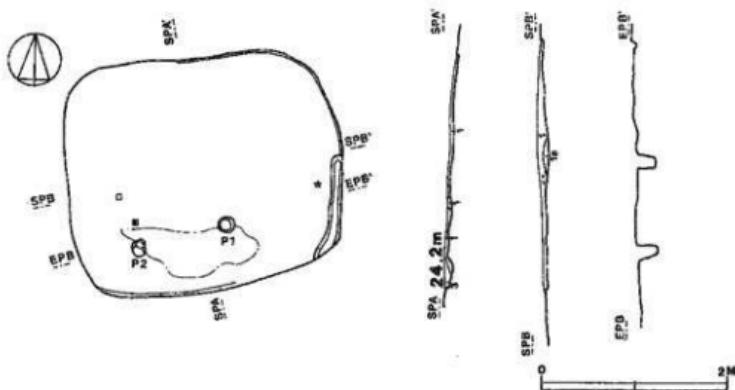
第344図 172号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
4 H	高台付壺	A 13.3	体部は内脣気味に外上方にのび、端部を丸くおさめている。貼り付け高台は欠損。水後き成形と思われ、底部は右クロクロ使用の回転削り調整。底部内面に笠状工具使用による底のコネ痕を見る。内面は荒磨き後黒色処理。	にふい橙色 砂粒 普通 内面全体と体部外面に漆が厚く付着 底部外面に漆剥離
5 H	廣	A(14.5) B 14.9 C 6.5 F 14.3	小形罐。平底の底部で体部は内脣しつつ立ち上がり、「く」の字状に屈曲し、僅かに段をなす口縁部が付く。口縁前面は外上方につまみ出して丸くおさめている。口縁内部・外面は櫛ナデ調整。体部内・外面は櫛ナデ調整で下には施削り調整。口縁部内面に粘土結晶を残す。	明赤褐色 砂粒・長石粒 良好 底部外面に木葉痕か
6 H	狭	A(12.5) F 14.0	小形罐。丸く削った体部から、「く」の字状に屈曲し、外縁面に明瞭な腰を作り、縁部を外上方につまみ出す。口縁部内・外面は櫛ナデ調整。体部内・外面は櫛ナデ後、ナデ調整。縁部外面に、粘土結晶を残す。	棕色 砂粒・長石粒、雲母 普通

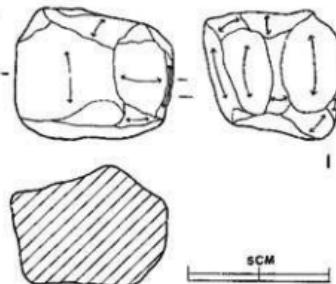
番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
7 H	甕	A(20.3) F 23.9	丸く脛の張った体部から、「く」の字形に屈曲する口縁部が付き、端部を(出)て底面につまみ出し、丸くおさめている。口縁部内・外側は横ナガ調査。体部内・外側は対ナガ調査。底部外側に粗粒工具による粘土被のおさえ鉢を残す。	にふい褐色 砂粒・長石粒・雲母普通
8 H	甕	A(21.0) F 25.3	丸く脛の張った体部から、「く」の字形に屈曲する口縁部が付き、端部を外反乳突につまみ出す。口縁外端部に一筋、頂部に二条の深い溝を残す。口縁部内・外側は横ナガ調査。体部内・外側は対ナガ調査。体部内面に粘土被を残す。	にふい褐色 砂粒・長石粒・雲母普通
番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
9	砥石 (板端底)	3.1×2.1 2.8	一面面のみを除いて使用痕が認められる。	瓦製
10	小札	全長(3.5) 幅 1.7	一方の端部は丸い。	
番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
11	釘	全長(7.0) 大きさ 0.6	先端部欠損。	

173号竪穴住居跡（第345図）

調査区 D3fs 区を中心に 169号竪穴住居跡の南に位置し、現状で東西3.0m・南北2.54mを測り、主軸方向 N-10°-W を指す隅丸方形を呈している。ただ、壁・床面共に一部分しか確認できず、本来の形態を失っているとみられる。ピットは 2か所で、いずれも浅い。窓は確認されなかった。遺物は、土師器・須恵器・羽口・磁石・鉄製品・鉄錠が、いずれも少量床面から出土している。



第345図 173号竪穴住居跡実測図



第173図 173号竪穴住居跡出土
遺物実測図

173号竪穴住居跡出土遺物観察表（第346図）

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
1	砥石	5.6×1.6 4.2	長方形を呈し、片面と一 概面を除いて使用痕が認 められる。	砂岩 171.5g

174号竪穴住居跡（第347・348図）

調査区 D4 区を中心に173号竪穴住居跡の東に位置し、東西4.88m・南北4.23mを測り、主軸方向N-0°を指す長方形を呈している。

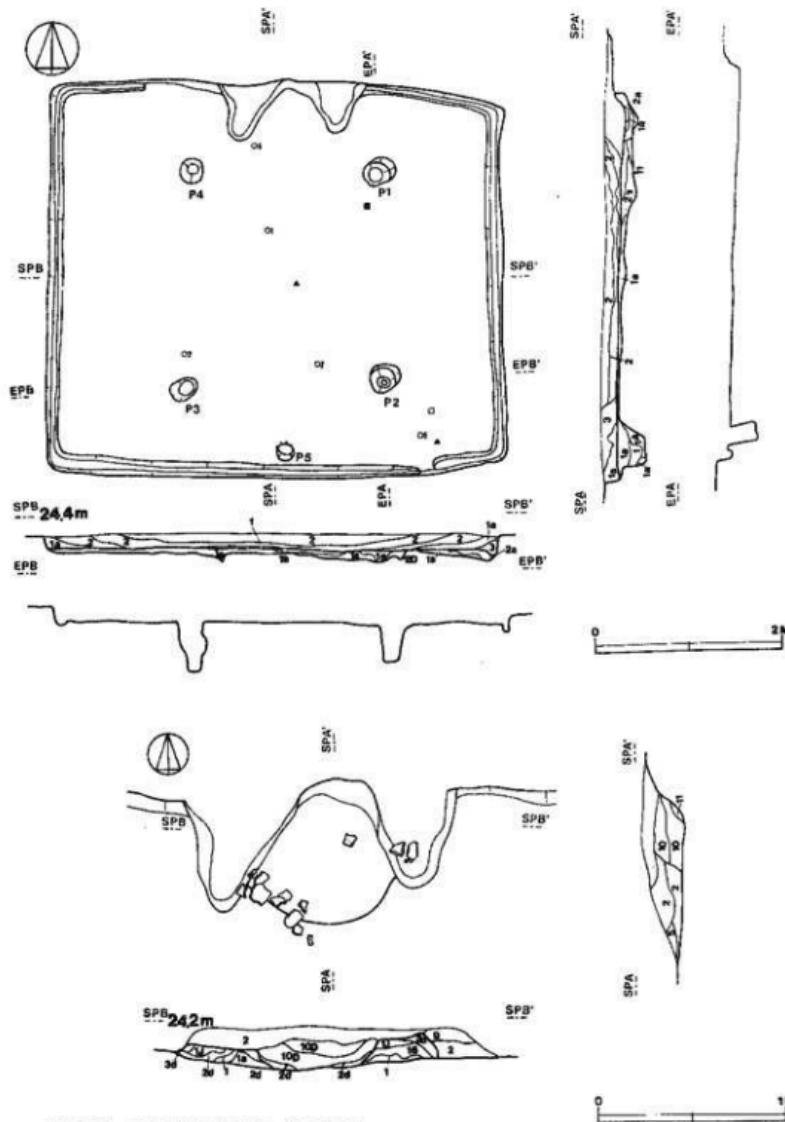
覆土は、暗褐色土の自然堆積である。壁は高さ約20cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。壁下には、幅15cm・深さ10cmの壁溝が回っている。床面は、貼床で南から北に向けて若干低くなる外は平坦で全体的に踏み固められている。貼床には、南壁と東壁に沿って幅60cmの溝状土壤を、また、北西隅の窓付近から南にかけて土壤を掘り、それぞれ5~30cmの厚さで、ロームブロックを充填している。ピットは5か所確認され、P₁~P₄が主柱穴とみられる。径26cm・深さ40~55cmを測る。

窓は、北壁は中央にあり、長さ0.8m・幅1.35m。焚口部幅0.8mを測り、壁外へは掘り込まれていない。袖部は、山砂をもって築かれている。焼成部は床面より6cm低く、焼土と灰が10cm程堆積している。

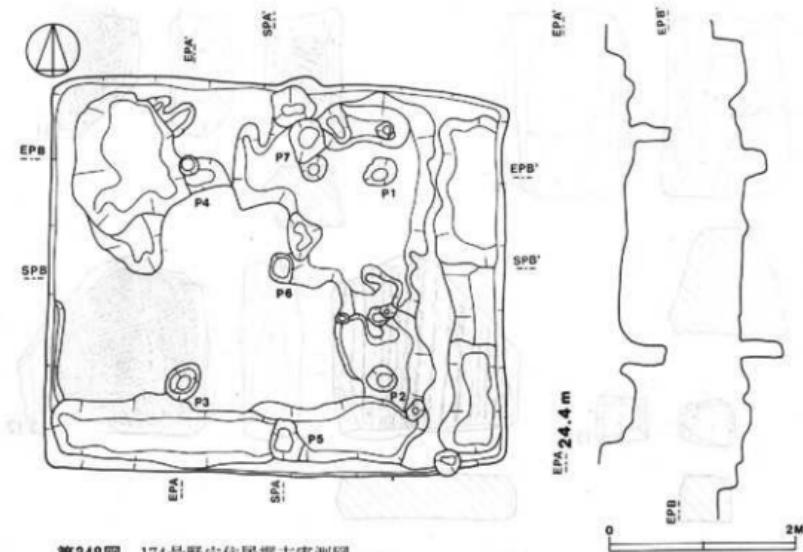
遺物は、土師器・須恵器・人面墨書き器・瓦・羽口・砥石・鉄製品・鉄滓が、ほぼ全域にわたって出土している。

174号竪穴住居跡出土遺物観察表（第349・350図）

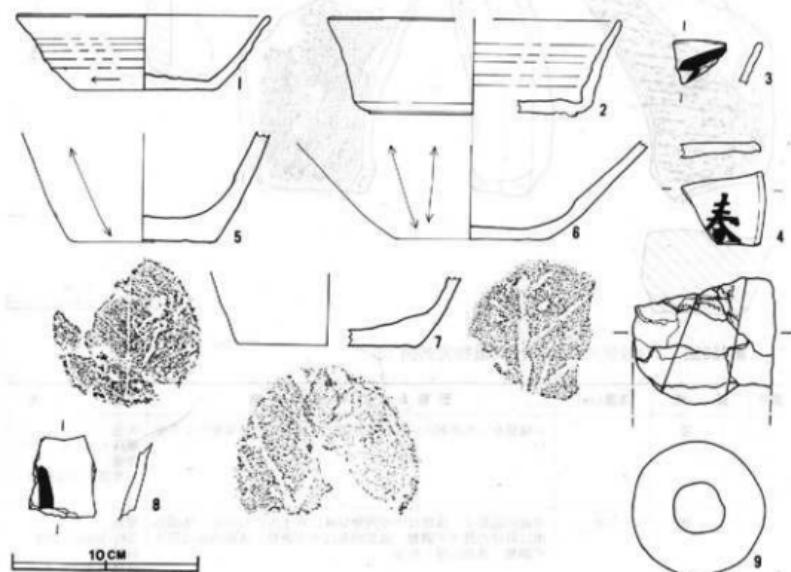
番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1	手斧	A 13.5 B 4.1 C 7.8	底部は平底で、体部と底部はやや明確な角度で分かれ。体部はやや内斜面に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。右ロクロ水洗き成形で、底部は、回転削削り調整。体部内面と口縁部内・外側は横ナガ調整。体部下端部は回転削削り調整。	灰色 細砂・長石粒・長石 微粒・雲母 普通
2	高台付环	A(15.6)	底部と体部の境界は、やや明確な棱を持つ。体部は外反気味に外上方にのび、底部を丸くおさめている。貼り付け高台は欠損。水洗き成形で底部は右ロクロ使用の回転削削り調整。底部内面と口縁部内・外側及び体部外側は横ナガ調整。やや厚減する。	青灰色 砂粒・長石粒・長石微粒 ・石英 普通
3	手斧		口縁部の一部。水洗き成形と思われる。	灰色 細砂・長石微粒 普通 体部外側に墨着



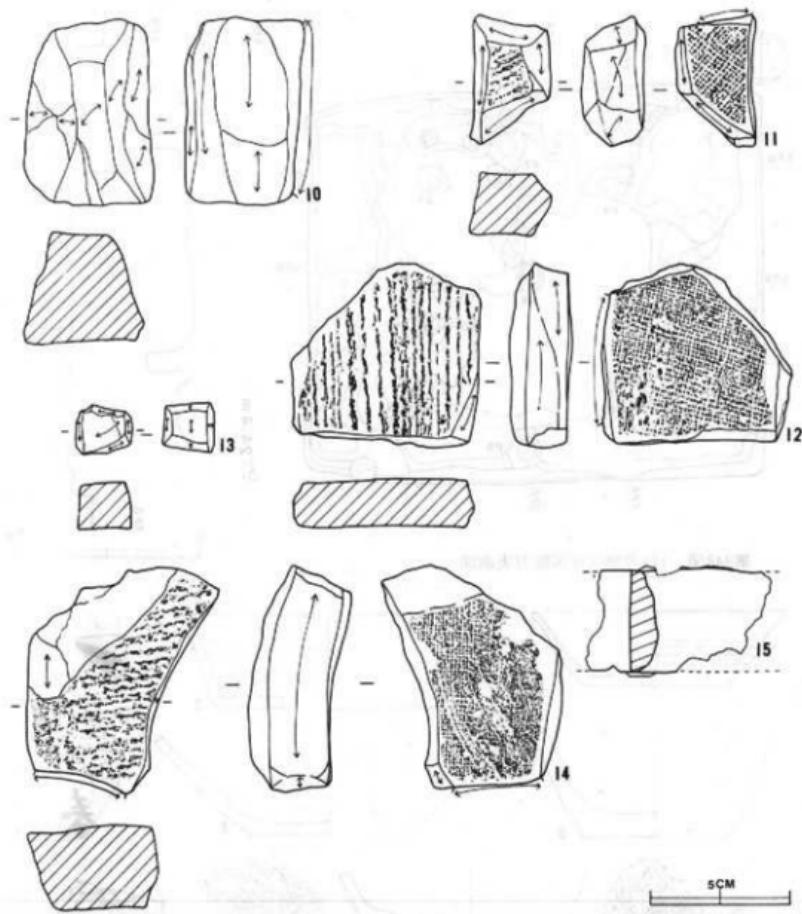
第347図 174号竪穴住居跡・竪穴測図



第348図 174号竪穴住居掘方実測図



第349図 174号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)



第350図 174号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
4	S		口縁部から天井部の一部。天井部と口縁部は殆ど境界をなさない。	灰色 細砂・長石粒・雲母 普通 天井部内面に墨書き
5	H	C 7.8	平底の底部で、体部はやや内側気味に外上方にのびる。体部外 面は斜位の泥ナナ調整。底部内面はナナ調整。体部内面は泥ナ ナ調整。底部は厚く作る。	褐色 砂粒・長石粒・雲母 良好 底部外面に木葉痕

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考				
6	甕	C 8.2	平底の底部で、体部は外上方に大きく開く。体部外面は縦位の窪ナデ調整。内面全体は窪ナデ調整。体部内面に粘土絹張を残す。	にぶい橙色 砂粒・長石粒・雲母 普通 底部外面に木葉痕				
7	甕	C 9.6	平底の底部で、体部は内寄り方に外上方にのびる。体部外面は窪ナデ調整。内面全体は窪ナデとナデ調整。	外側に褐色 内面ににぶい黄褐色 砂粒・長石粒・雲母 普通 底部外面に木葉痕 及び焼付痕				
8	甕		体部の一部。外面は縦位の窪ナデとナデ調整。内面はナデ調整。	にぶい赤褐色 砂粒・長石粒・長石微粒・ 雲母 普通 体部外面に墨書き				
番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考				
9	瓦口	全長(6.1) 外径 7.3 孔径 2.6	先端部と基部は欠損。外 面に幾何学的な凹凸が見ら れるが、小札痕。	先端部欠 損状態で 使用され 思われる。 変化する。	砥石 (軽用版)	2.0×1.6 1.7	全面に使用痕が認められ る。小形。	丸製
10	砥石	5.6×4.4 3.8	長方形を呈し、一部分を 除き全面に使用痕が認め られる。	砂岩 (軽用版)	19.3×4	7.8×4.7 3.0	二側面のみに使用痕が認 められる。	瓦製
11	砥石	4.4×2.9 (軽用版) 2.1	丸頭を吹き全面に使用 痕が認められる。	瓦製	不 明 鉄製品	全長(5.7) 幅 3.6	直刀の刃部か。 向端部欠損。	
12	砥石	6.6×6.4 (軽用版) 1.6	一側面のみに使用痕が認 められる。	瓦製				

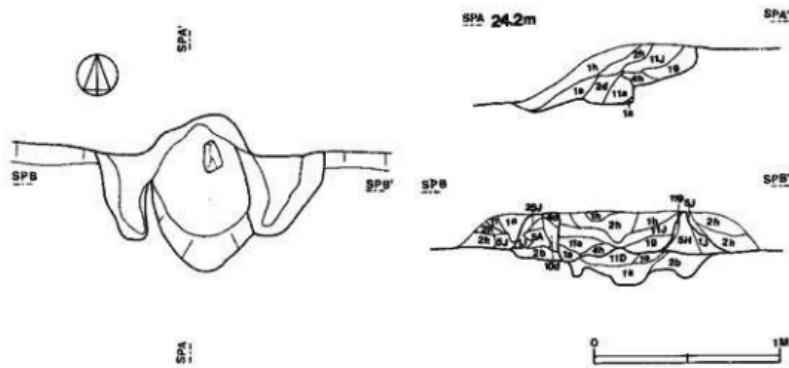
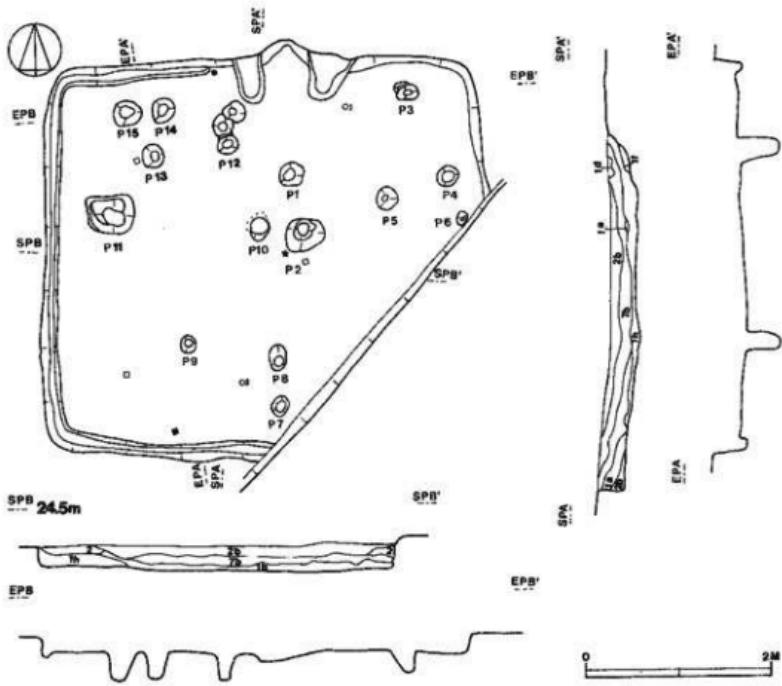
175号竪穴住居跡（第351図）

調査区D4fs|Xを中心にして174号竪穴住居跡の東に位置し、南東コーナー部は調査区域外に存在する。規模は、東西4.76m・南北4.3mを測り、主軸方向N-2°-Eを指す隅丸長方形を呈している。

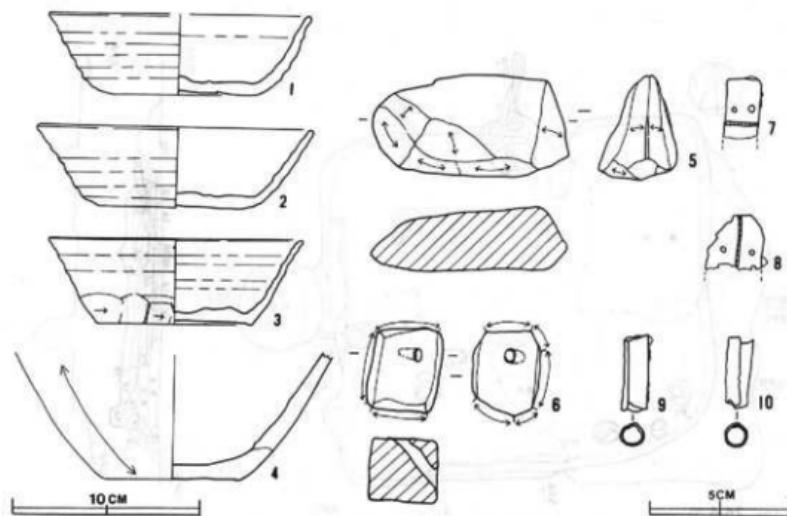
覆土は、暗褐色土の自然堆積である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さ25~30cmを測る。北壁裏西側から南壁にかけて、幅14cm・深さ8cmの壁溝が巡っている。床面は、中央部や西側で小さな段を有し、中央部が若干凹んでいる。また、外周部は踏み固められているが、中央部は軟弱である。ピットは17か所確認されP3・P9・P14が主柱穴とみられる。深さは50cm内外を測る。

竪は北壁やや東寄りにあり、長さ0.84m・幅1.15m・焚口部幅0.56mを測り、竪外へ21cm掘り込まれている。袖部は、山砂とロームを混ぜて築かれている。焼成部は床面と同じレベルで、20cm程掘り込み、ロームを埋めて火床としている。焼土は少ない。

遺物は、土師器・須恵器・瓦・羽口・砥石・鉄製品・鉄滓・漆紙が少量、中央部付近の覆土下層から床面にかけて出土している。漆紙は、竪西側の覆土下層上面からの出土である。



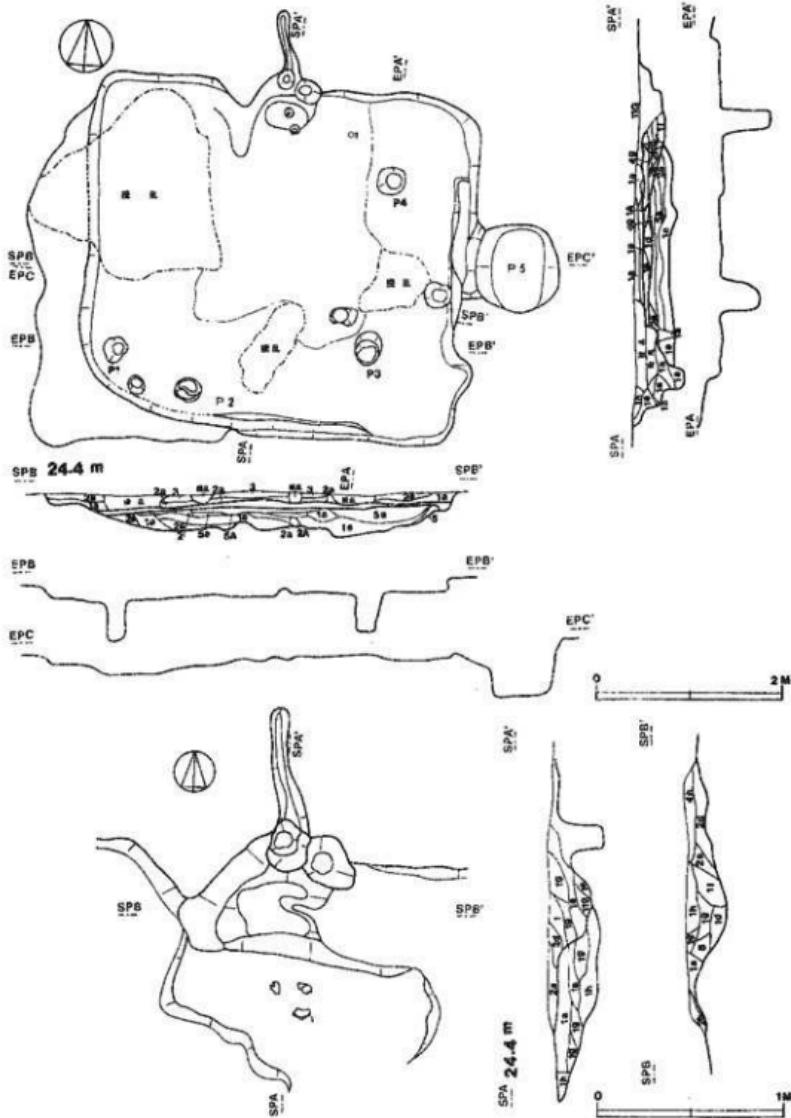
第351図 175号竪穴住居跡・竈実測図



第352図 175号竪穴住居跡出土遺物実測図

175号竪穴住居跡出土遺物観察表（第352回）

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	环	A(13.8) B 4.4 C 8.6	底部は平底で、体部と底部はあいまい角度で分かれる。体部は内骨気味に外上方にのび、端部は僅かに外反して、端部を丸くおさめている。右ロクロ水挽き成形で、底部は回転箇切り後一方向の静止鋸削り調整。体部下端部は手持ち鋸削り調整か。全体に摩滅が進行。	灰白色 細砂・長石粒 不良
2 S	环	A(14.6) B 4.4 C 8.3	底部は平底で、体部と底部はあいまい角度で分かれる。体部はやや内骨気味に外上方にのび、端部を丸くおさめている。右ロクロ水挽き成形で、底部は回転箇切り後、軽いナデ調整。口縁部内・外面は横ナデ調整。	緑灰色 細砂・長石粒・長石微粒 不良
3 S	环	A 13.5 B 4.6 C 8.2	底部は平底で、体部と底部は鋸削りによって、鋭く明瞭な角度で分かれる。体部は、やや内骨気味に外上方にのび、端部を丸くおさめている。右ロクロ水挽き成形で、底部は多方向の静止鋸削り調整。体部下端部は手持ち鋸削り調整。	灰色 細砂・長石粒・長石微粒 普通
4 H	窓	C 7.5	底部は平底で、体部は内骨気味に外上方にのびる。体部外面と底部内面は、鋸ナデ調整。体部内面は、ナデ調整。底部外面は木葉痕の上から鋸ナデ調整。	にほい橙色 砂粒・長石粒多・雲母普通
番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
5	砥石	6.5×3.6 2.0	長方形を呈し、二側面のみに使用痕が認められる。	砂岩 67.2 g 7 8
6	砥石 (錐砥)	3.4×2.5 2.2	方形を呈し、三側面に使用痕が認められる。斜行する貫通孔を1孔有す。	凝灰岩 23.5 g 9 10
				7は残存長2.2cm、幅1.2cmで一方の端部欠損。 8は残存長2.0cm。
				9・10共に全長2.7cm、径0.5cmで円形品。 鉄板を折り曲げている。



第353図 177-A号堅穴住居跡・竪穴調査団

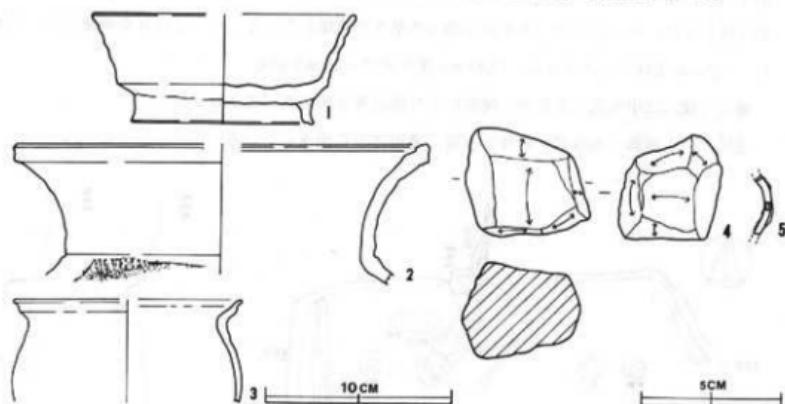
177-A号竪穴住居跡（第353図）

調査区D4g1区を中心に174号竪穴住居跡の南に位置し、下位に177-B号竪穴住居跡がある。規模は、北西部が擾乱を受けているものの、東西4.5m・南北3.73mを測り、主軸方向N-0°を指す隅九長方形を呈している。

覆土は、褐色・暗褐色土の自然堆積である。壁はゆるやかに立ち上がり、高さ15cmである。床面は部分的に擾乱を受けているが貼床で、竈焚口部前面から中央部にかけて十分踏み固められている。貼床は、下位の177-B号竪穴住居跡の床面上に、ロームを5~10cmの厚さで充填している。ピットは9か所確認され、P₁・P₃・P₄・P₁₀が主柱穴とみられる。径30cm・深さ40~50cmを測る。P₅は東壁外にあり、1.0×0.8cmの楕円形を呈し、深さは48cmを測る。

竈は北壁中央部にあるが、上部は擾乱を受け、袖部等が確認できなかった。

遺物は、土師器・須恵器・瓦・羽口・砥石・鐵滓が少量、床面付近から出土している。



第354図 177-A号竪穴住居跡出土遺物実測図

177-A号竪穴住居跡出土遺物観察表（第354図）

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	高台付环	A(14.1) B 5.9 D 9.9	底部と体部の境界は明確な棱を持つ。体部は外輪気味に外上方のび、端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで外下方にのび、端部に面をなす。水焼き成形で、底部は右ロクロ使用の回転荒削り調整。他は全体に横ナデ調整。高台外面に接合部を残す。	外面-青灰色 内面-灰赤色 細砂・長石粒多・長石微粒・雲母 普通
2 S	甕	A(22.0)	口縁部は上位ほど外反度が強く、外縁部に面をなす。頸部内面は、荒削り後横ナデ調整。体部外面に叩き目調整を見る。他全体に横ナデ調整。	灰色 砂粒・長石粒多・長石微粒多・雲母 普通
3 H	甕	A(12.1) F 12.2	小形甕。丸く胴の張った体部から、「く」の字状に屈曲する口縁部が付き端部を外上方につまみ出して丸くおさめている。口縁部内・外側は、横ナデ調整。体部内・外側は、跳ねた後、ナデ調整。全体に薄手作り。	橙色 砂粒・長石粒・雲母 普通

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
4	砥石	4.2×3.8 3.2	扁形を呈し、片面と一側面を磨いて使用痕が認められる。	砂岩 73.5 g	5	リングか	全長2.2 厚さ0.25	断面は四角で弓状を呈している。 両端部欠損。	

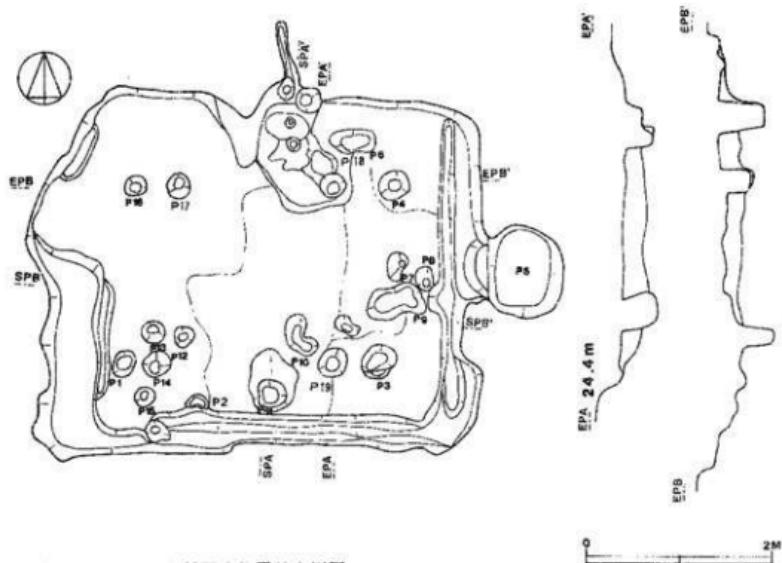
177-B号堅穴住居跡（第355図）

177-A号堅穴住居跡の下位にあり、A号より一回り小さい。規模は、東西3.7m・南北3.57mを測る隅丸方形を呈している。

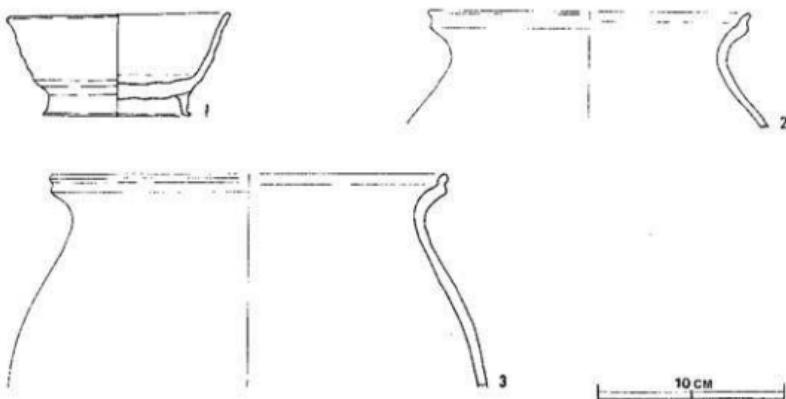
覆土は、A号の貼床を構成する層である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さ20cmを測る。北壁部を除く壁下には、幅20cm・深さ10cmの壁溝が存在する。床面は貼床で、やや起伏を有している。南壁部から竈焚口部にかけては、十分踏み固められている。貼床は平面プランと同じ形態で35~45cm掘り下げ、ロームブロックを20~25cmの厚さで充填している。ピットは9か所確認され、P₁₇~P₁₉が主柱穴とみられる。径30cm・深さは35~50cmを測る。

竈は北壁ほぼ中央部にあるが、擾乱により構造等を明らかにできなかった。

遺物は、土師器・須恵器・鉄津が少量、竈周辺から出土している。



第355図 177-B号堅穴住居跡実測図



第356図 177-B号竪穴住居跡出土遺物実測図

177-B号竪穴住居跡出土遺物観察表（第356図）

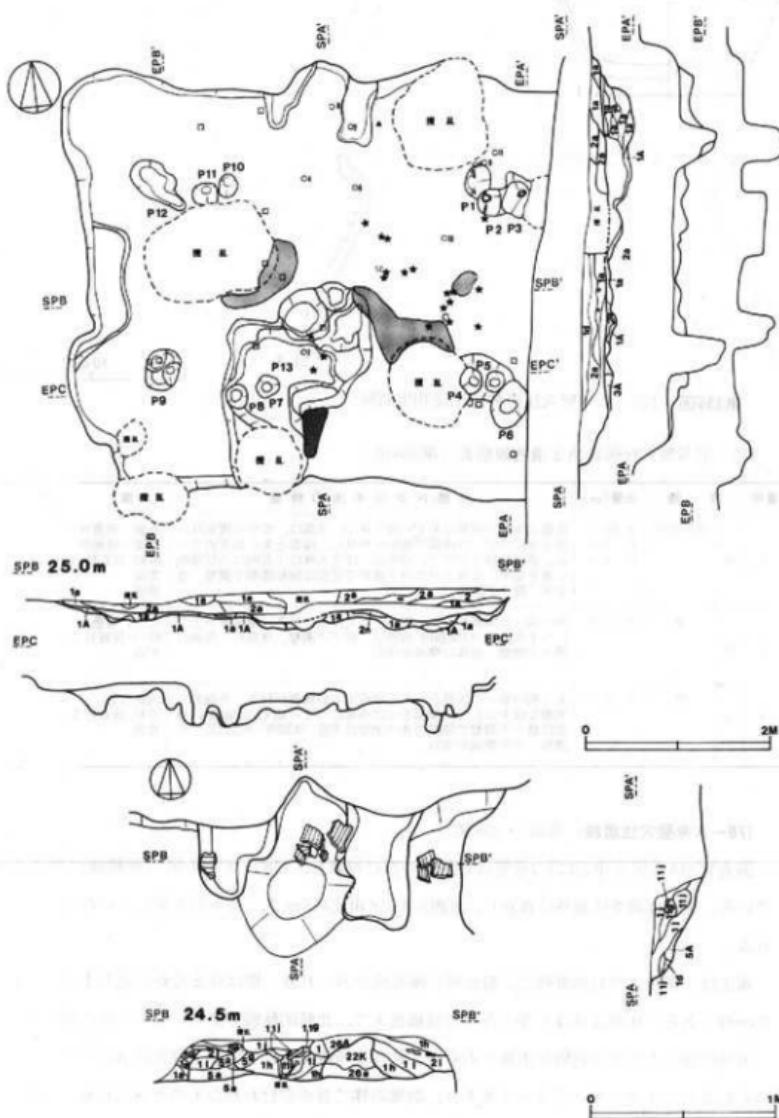
番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	高台付环	A 11.7 B 5.6 D 8.0	底部と体部の境はまろい棱を有す。体部は、やや内側傾斜して上方にのび、口縁部で僅かに外反し、端部を丸くおさめている。高台は貼り付けた、ややふんばり気味に下方に向かって曲がる。右口付側は水浸き成形で底部は回転型削り調整。他全体に横ナテ調整。	外面一明奇灰色 内面一灰褐色 砂粒・長石粒・長石微粒・ 滑母 普通
2 H	窓	A(17.2)	側の強った体部から丸く屈曲する口縁部が付き、端部を外上方につまみ出す。口縁部内外面は、横ナテ調整。体部内外面は横ナテ調整。全体に厚感が進行。	にぶい褐色 砂粒・長石粒多 不良
3 H	窓	A(20.6)	丸く側の張った体部から丸く屈曲する口縁部が付き、外端部に明顯な棱をなし、つづ端部には垂直につまみ出す。口縁部内外面は横ナテ調整で頭部外側の調整は不良。体部内外面は横ナテ調整。やや厚感が進行。	浅黄褐色 砂粒・長石粒多・石英粒 普通

178-A号竪穴住居跡（第357・358図）

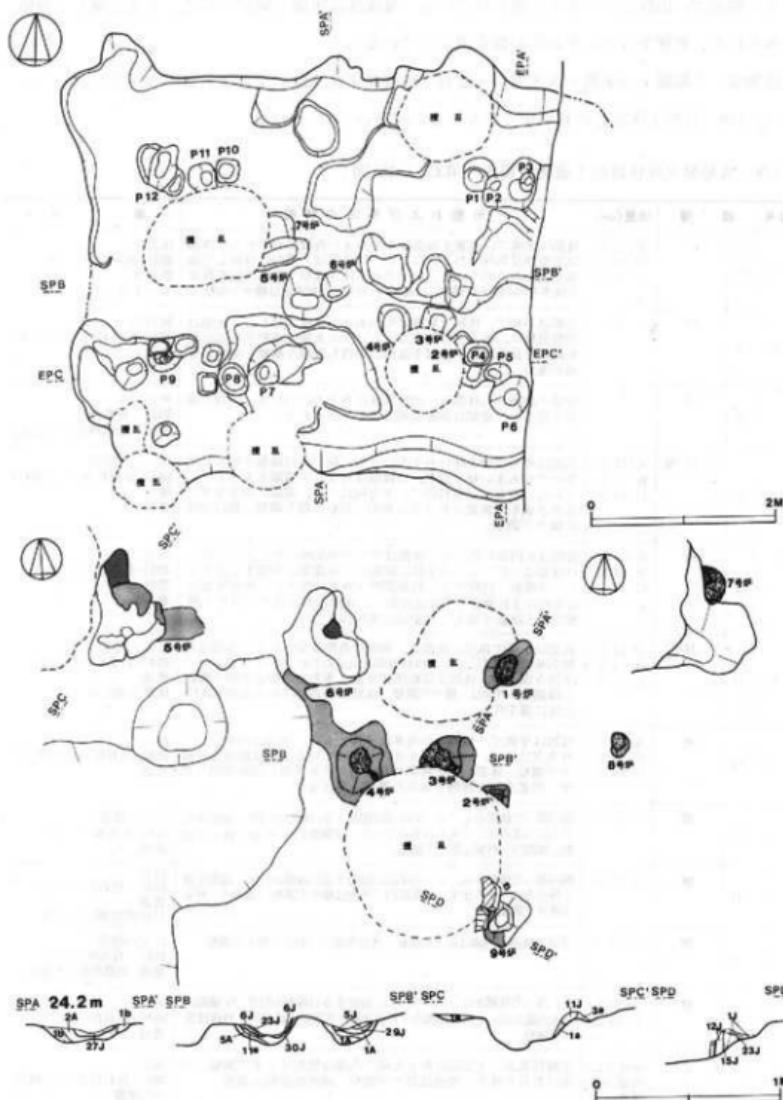
調査区D310区を中心に177号竪穴住居跡の南に位置し、178-B号工房の廃絶後に構築されている。東側は調査区域外に存在し、東西5.8m・南北4.3mで、長方形を呈していたものとみられる。

裏上は、褐色土の自然堆積で、数か所に擾乱坑がみられる。壁はゆるやかに立ち上がり、高さ30cm程度である。床面は鐵率を多く含んだ暗褐色土で、比較的軟弱である。ピットは、擾乱や178-B号に作られたものとの判別が困難であるが、約20か所確認されている。柱穴は各コーナー付近にみられるが、1コマナーで3~4本あり、数度の建て替えが行われたものとみられる。壁寄りのピットが新しいものとみられる。深さは35~60cmである。

窓は北壁中央部にあり、長さ0.98m・幅1.13m・焚口部幅0.55mで、壁外へ25cm掘り込まれて



第357図 178号—A号竪穴住居跡・竈, 178-B号工房跡実測図



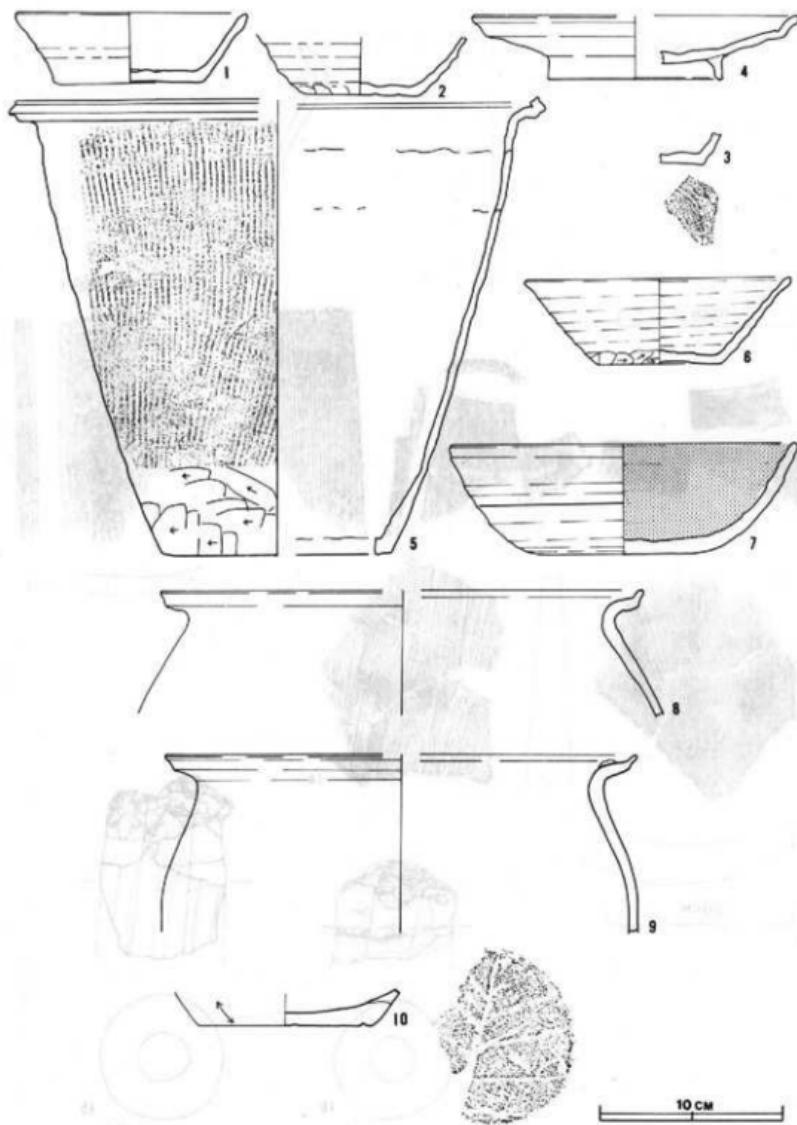
第358图 178—A号竖穴住居掘方, 178—B号工房掘方·1~8号炉跡実測図

いる。袖部は、山砂とコームとで築かれている。焼成部は床面と同レベルで、上部に焼上の堆積がみられる。奥壁寄りから半瓦片が数点出土している。

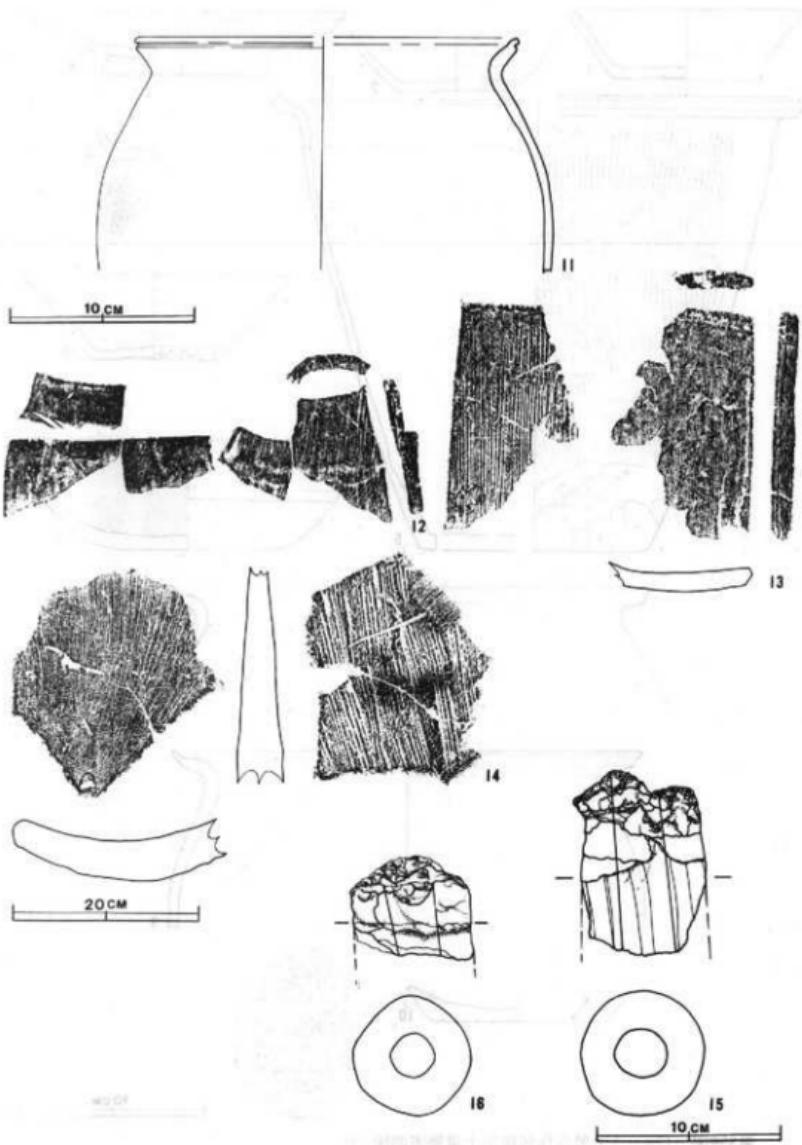
遺物は、土師器・須恵器・瓦・羽口・砥石・鉄製品・鉄斧が、全域にわたって出土している。ただ、178-B号工房跡との判別ができないものが多い。

178-A号竪穴住居跡出土遺物観察表（第359～361図）

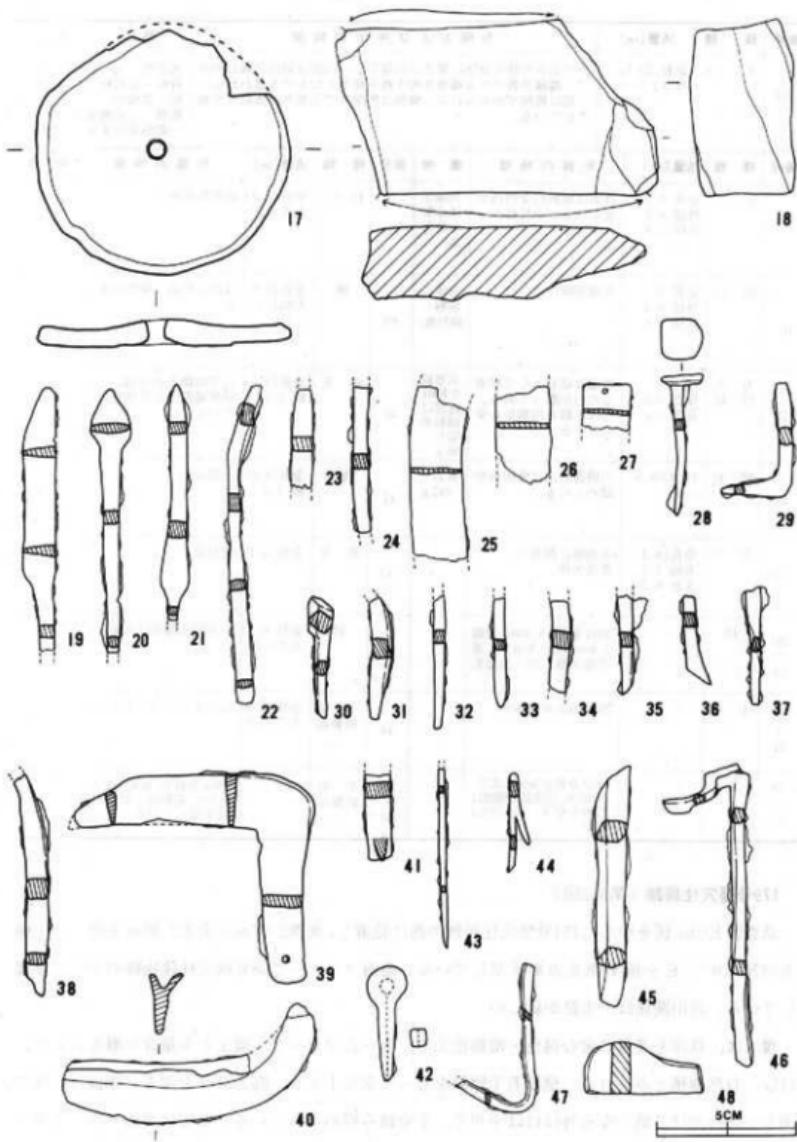
番号	器種	法則(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	环	A 12.2 B 29.5 C 8.3	底部は平底で、体部と底部はややあまい角度で分かれれる。体部はやや外気味に外上方にのび、口縁部は、僅かに外傾して端部を丸くおさめている。右クロロ水焼き成形で底部は回転切り後多方向の底ナテ調整。口縁部内・外側は底部内面に横ナテ調整。	灰白色 細砂・長石粒・長石微粒・ 雲母多 やや不良
2 S	环	C 6.6	底部は平底で、体部と底部はややあまい角度で分かれれる。体部は内骨氣味で、外上方にのびる。右クロロ水焼き成形で底部は回転切り後無調整。体部下端部は手持ち鋸削り調整。全体に摩滅が進行。	灰白色 細砂・長石粒・長石微粒多・ 雲母 不良
3 S	环		手底の底部から体部は、内骨氣味に外上方にのびる。水焼き成形と思われ、底部は回転切削り調査と思われる。	灰色 細砂・長石粒 普通 底部外側に黒記号
4 S	合付盤	A(17.3) B 3.5 D(9.6)	体部はやや内骨氣味に外上方に大きく開く。口縁部と体部の境界はややあまい後を持ち、口縁部は外反して端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで、下方に向いて、端部に面をなす。水焼き成形で底部は右クロロ使用の回転切削り調査。先は全体に横ナテ調整。	オリーブ灰色 細砂・長石粒多・長石微粒・ 雲母 普通
5 S	鉢	A(28.1) B 24.6 C(12.3)	底部は正円状に抜ける。体部はやや内骨氣味に外上方にのび、口縁部は一旦「く」の字状に屈曲し、外端部に外傾する面をなし。再度内傾する。口縁部内・外側は雲母ナテ。体部外側は平行円柱調整で下部は雲母ナテ。体部内面は底ナテ後ナテ調整で粘土紙張を残す。他全体に磨手作り。	灰色 細砂・長石粒・長石微粒・ 雲母 普通
6 H	环	A 14.5 B 4.7 C 6.7	底部は平底で体部と底界は明顯で分かれれる。体部は外骨氣味に外上方にのび、口縁部を丸くおさめている。右クロロ水焼き成形で、底部は回転切り後、多方向の静止鋸削り調査。口縁部内・外側は、雲母ナテ調整。体部下端部は手持ち鋸削り調査。全体に磨手作り。	にぼい橙色 砂粒・右英粒・雲母・礫 普通 体部外側に焼付着
7 H	端	A 19.0 B 6.0 C 8.4	底部は平底で、体部との境界は明瞭でない。体部は内窓しつつ外上方にのび、口縁部を丸くおさめている。右クロロ水焼き成形で、底部は回転切削り後、多方向の静止鋸削り調査。内窓全体は荒廃き後黑色處理。埋立作り。	棕色 砂粒・長石粒・雲母・礫 普通
8 H	袋	A(25.9)	腰の張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部付き、端部を外上方につまみ出して丸くおさめている。口縁部内・外側は横ナテ調整。体部内・外側は横ナテ調整。	にぼい褐色 砂粒・長石粒・石英粒 普通
9 H	袋	A(25.5)	腰の張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部付き、端部を外上方につまみ出す。「腰部内・外側は横ナテ溝底。体部内・外側は横ナテ調整。	褐色 砂粒・長石粒・雲母 普通 口縁部内面に打孔有
10 H	袋	C 9.3	平底の底部。内面は底ナテ調整。体部外側は、斜位の底ナテ調整。	にぼい褐色 砂粒・長石粒・雲母 普通 底部外側に木炭痕
11 H	袋	A(20.6) F 24.6	丸く張った体部から「く」の字状に屈曲する口縁部付き、外端部に一束の溝を這らす。口縁部内・外側は横ナテ調整。体部内・外側は横ナテ調整。	灰褐色 砂粒・長石粒・雲母 普通
12	丸瓦	全長(14.0) 直径(8.6) 厚さ 1.6	玉縁付丸瓦。丸瓦部は部分欠損。凸面は先削りとナテ調整。凹面は布目を残す。側面は底ナテ調整。端面は跳削り調査。	灰色 細砂・長石粒少・やや粗良 やや硬質
13	平瓦	全長(24.5) 直径(8.5) 厚さ 2.0	凸面には複数の端目叩きがみられ。凹面は布目を残す。側面は分割截面のままと思われる。上端部に面取りが施されている。端面は底ナテ調整。やや薄手作り。	にぼい褐色 砂粒・長石粒・長石微粒多・ 雲母少 やや硬質 二次燒成を受ける



第359图 178—A号竖穴住居跡出土遺物実測図(1)



第360図 178—A号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)



第361図 178—A号竪穴住居跡出土遺物実測図 (3)

番号	種類	法量(cm)	形態および手法の特徴			備考
14	平瓦	全長(23.5) 厚さ2.0~5.0	やや凸みを持ち全体に厚さが均等でない。凸面は斜位の端目叩きで、端縫突着のある織巻き叩き板を使用したものと思われる。一部に荒削りが見られる。側面は荒削りで上端部に面取りが施されている。			灰白色 砂粒・長石粒・長石微粒・雲母少 軟質 二次焼成を受け、一部釉化する。
番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類
15	羽口	全長 7.7 外径 6.1 孔径 2.6	外面は規則的な凹凸が見られるが小孔無し。	先端部は溶解し鉢付有。	38	起か
16	羽口	全長 3.7 外径 6.4 孔径 2.6	先端部破片。	全体に溶解し、熱付有。	39	鍵
17	有孔板	径 9.0 厚さ 0.8 孔径 0.6	外周は砥石として利用したのか削ってある。孔は土器の内側から穿っている。	須恵器 片側用 底部は刃状 切り 66 g	40	鍵先
18	磁石	10.3×5.9 2.6	二面面のみに使用痕が認められる。	貞皆 242 g	41	鍵
19	刀子	全長(9.4) 刃幅 1.1 刃長 6.7	刀部側に開有り。 基部欠損。		42	鍵金
20 1 24	鍔		20は全長(9.4cm)、刃幅 1.4cm、厚さ0.5cmで、基 下部欠損。22~24は基		43	針
25 1 27	小札		25・26は未堅品か。		44	不明 鉄製品
28 1 37	釘		28は全長4.9cm、太さ 0.35cm。完成品で頭部は 方形を呈す。30~37は半 釘か。		45 1 48	不明 鉄製品
						46は全長10.8cm、太さ 0.5cm、完成品。47は半 釘を呈している。

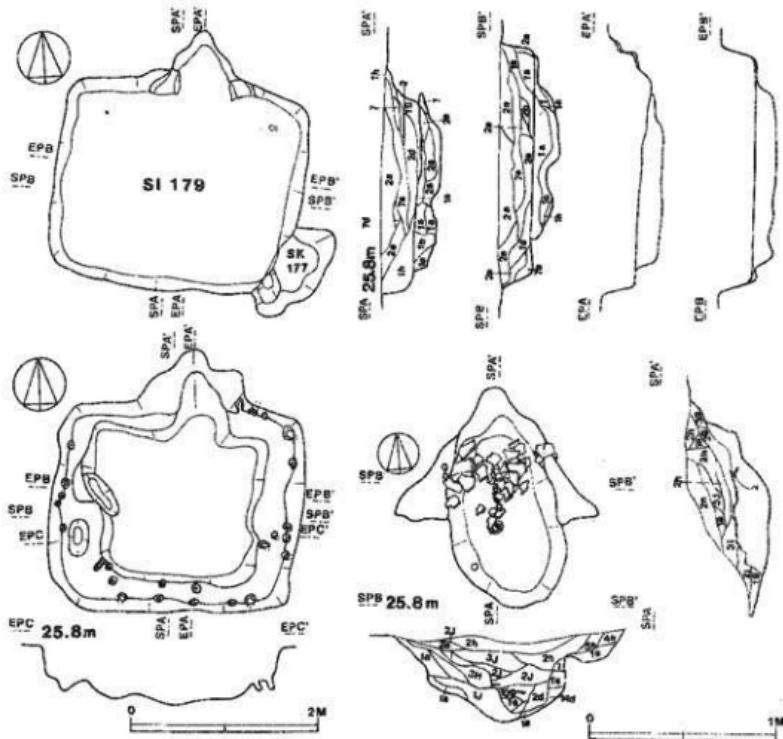
179号竪穴住居跡（第362図）

調査区 E.0hu 区を中心に151号竪穴住居跡の西に位置し、東西2.67m・南北2.35mを測り、主軸方向N~9°~Eを指す隅丸方形を呈している。南西コーナーで28号掘立柱建物跡のP₇と重複している。新旧関係は、当跡が新しい。

覆土は、鉄滓を多量に含む褐色・暗褐色土で、ロームブロック・焼土を少量含む屑もあるが、ほぼ、自然堆積とみられる。壁は若干傾斜をもって立ち上がり、高さ35cmを測る。床面は貼床で、南から北へ向けて低くなる外はほぼ平坦で、十分踏み固められている。貼床は平面プランより一回り小さい2.0×1.6mで、0.62m掘り凹め、ロームブロックを20cmほどの厚さで充填している。ピットは確認されていない。

竈は、北壁中央部にあり。長さ1.19m・幅1.09m・焚口部幅0.45mで、壁外へ55cm掘り込まれている。袖はなく、三角状に壁外へ掘り込まれた側面に、山砂を貼り付けている。焼成部は床面より10cm低く、ゆるやかに奥壁部へ立ち上がる。中央部には、土師器环三個体・表二個体分が押しつぶされた状態で出土している。

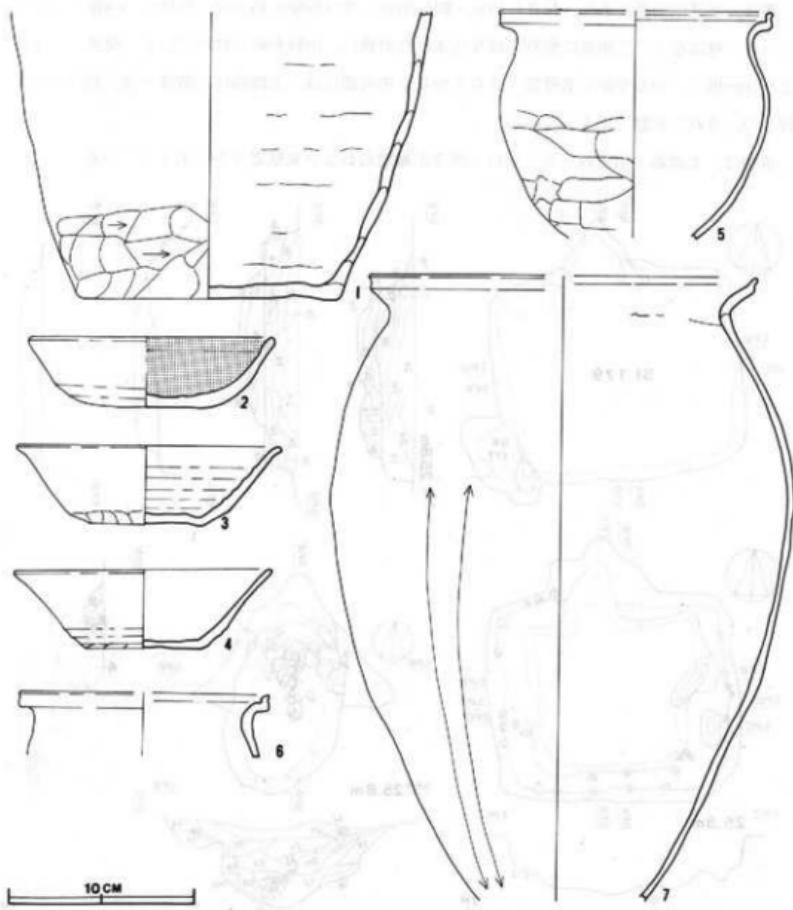
遺物は、土師器・須恵器・瓦・羽口・鉄滓が竈周辺および東壁寄りから出土している。



第362図 179号竪穴住居跡・竈・掘方実測図

179号竪穴住居跡出土遺物観察表（第363図）

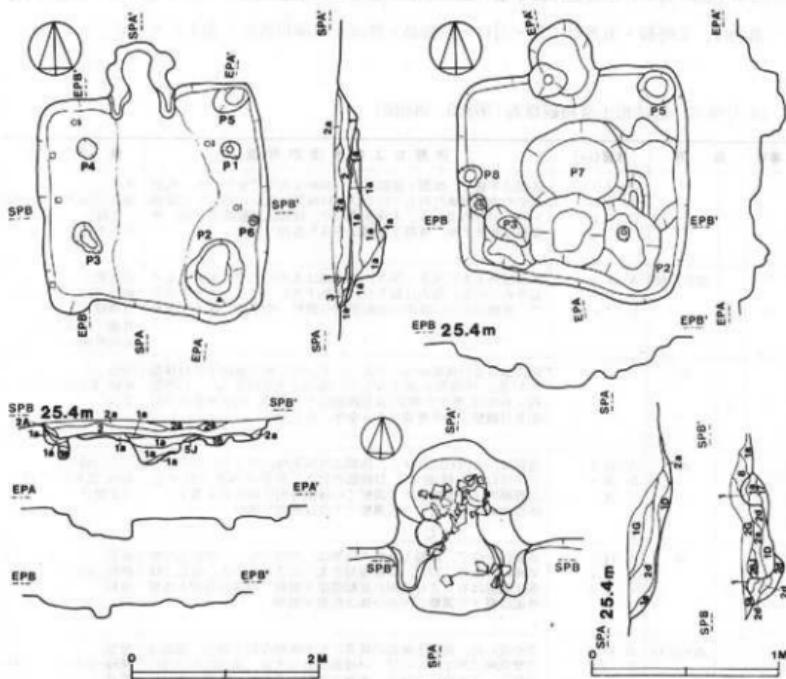
番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
1 S	瓶	C 14.0	底部は平底で、体部は内側気球に立ち上がる。粘土紐横み上に形成で、体部内面に7本の粘土紐を見る。底部内面はナデ調整。体部内面はナデ及び指輪押圧調整。体部外は、平行切り目調整で下位は窓削り調整。	黄褐色 砂粒・長石粒・石英粒・ 雲母 なま塗け 底部外は粗粒状底
2 H	平	A 12.9 B 3.9 C 7.2	底部は平底で、体部と底部はあい角度で分かれ。体部は内側気球に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。底部と体部下端部は右クロロ使用の回転鋸削り調整。体部外は横ナデ調整。内面全体は施磨き後黒色処理。	にふり・橙色 細砂・長石粒・石英粒・ 雲母 普通



第363図 179号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
3	H	A 14.0 B 4.2 C 6.5	底部は平底で、体部と底部は、やや明瞭な角度で分かれる。体部は内壁気味に外上方にのび、口縁部は外反して端部を丸くおさめている。水挽き成形で、底部は回転窓切り後罫ナデ。体部下端部は手持ち窓削り調整。全体にやや商手作り。	にぶい橙色 砂粒・長石粒・雲母多・ スコリア 普通 体部外面に塗付着
4	H	A 13.2 B 4.2 C 6.1	底部は平底で、体部と底部はややあまい角度で分かれる。体部はやや内壁気味に外上方にのび、口縁部は外反して端部を丸くおさめている。水挽き成形で、底部は回転窓切り後一方向の静止窓削り調整。体部下端部は手持ち窓削り調整。全体に薄手作り。	にぶい橙色 細砂・長石・石英粒・雲母多 普通

番号	器種	法量(cm)	形態および手法の特徴	備考
5 H	甕	A 14.5 F 14.5	小形甕。体部は内側につつ立ち上がり。丸く屈曲する口縁部が付き、端部をほぼ垂直につまみ出で丸くおさめている。口縁部内・外面は横ナナド調整。体部内面と体部外面上位は昆ナナ後ナナド調整。体部外面上中位は鉛削り調整。全体に磨手作り。	褐色 細砂・長石粒 普通
6 H	甕	A (13.4)	刷の張った体部から、やや「く」の字状に屈曲し、僅かに段をなす口縁部が付き、端部は面をなす。口縁部内・外面は横ナナド調整。原部内・外面と体部内・外面は、昆ナナド調整。	褐色 細砂・長石粒・雲母 普通
7 H	甕	A (20.8) F 25.0	体部は内側につつ立に上がり「く」の字状に屈曲する口縁部が付き、端部を外上方につまみ出し、丸くおさめている。口縁部内・外面は横ナナド調整。体部内・外面は昆ナナド調整。頭部内面に粘土被膜を残す。	にぶい褐色 砂粒・長石 普通



第364図 180号竪穴住居跡・甕・掘方実測図

180号竪穴住居跡（第364図）

調査区 F 2 b 区を中心に 2 号連房式竪穴造構の南に位置し、東西 2.46m・南北 2.55m を測り、主軸方向 N - 0° を指すほぼ隅丸方形を呈している。

覆土は、少量のロームブロックを含む暗褐色土で、自然堆積とみられる。壁は傾斜をもって立

ち上がり、高さ10cmを測る。床面は貼床で、若干起伏を有し、南壁中央部から竈焚口部にかけての幅80cmは、十分踏み固められている。貼床は、数か所の円形土壙を、最も深い部分で50cm掘り下げ、ロームブロックを10~30cmの厚さで充填している。ピットは6か所確認され、P₁~P₄が主柱穴とみられ、深さは15~25cmを測る。

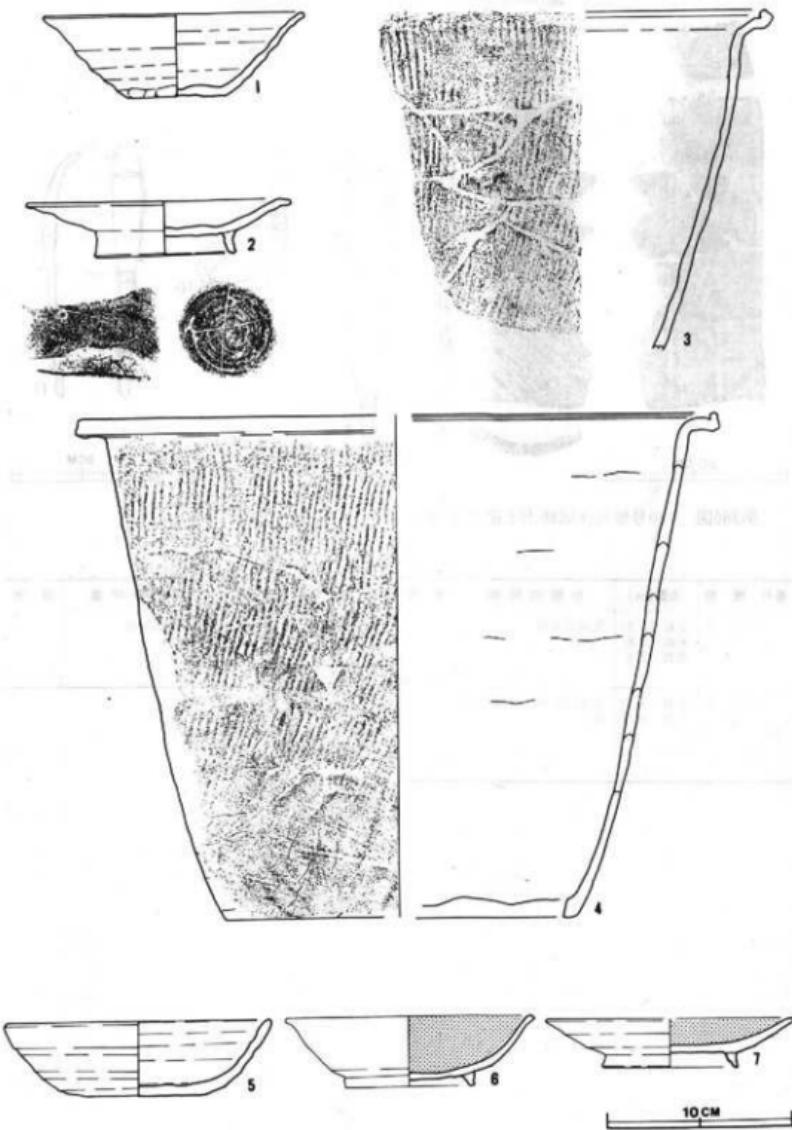
窓は、北壁中央部にあり、長さ0.95m・幅0.7m・窓口部幅0.42mで、壁外へ55cm掘り込まれていて。袖部は山砂にロームを加えて築かれているが、短いものである。左袖部上部には、黒曜石・瑪瑙・石英の少片を約20個並べ、須恵器皿が置かれている。焼成部は床面より若干低く、ゆるやかに奥壁部へ続く。中央部には少量の焼土と灰が堆積し、上部から土師器環が出土している。

遺物は、土師器・須恵器・瓦・羽口・鉄製品・鉄滓が床面付近から出土している。

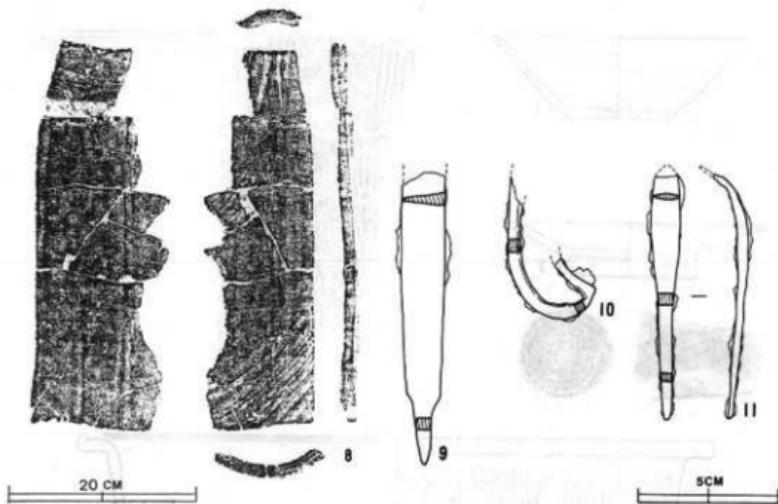
(川井正一)

180号竪穴住居跡出土遺物観察表(第365・366図)

番号	器種	法量(cm)	洗浄および手法の特徴	備考
1 S	环	A 12.9 B 4.5 C (5.2)	底部は平底で、体部と底部はやや明瞭な角度で分かれる。体部はやや内骨気味に外上方にのび、口縁部は僅かに外反して端部を丸くおさめている。水焼き成形で、底部は圓軸底部切り後、外周部は撚ナナカ。体部下端部は手持ち範削り調整。	灰色 細砂・長石粒・長右衛門 ・雲母 ・や不良
	高台付皿	A 14.1 B 3.1 D 7.6	体部は外上方に大きく開き、口縁部に水平にのびて端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで外下方にのびる。水焼き成形で、底部はロクロ使用の圓軸底部削り調整。全体に横ナナ調整。	緑灰色 細砂・長石大粒多・瓦 石撒粒 普通 体部外側と 底部外側に異質な
	皿		網の張らない体部から、かるく「く」の字状に削離する口縁部が行き、外端部に渠をなしつつ端部は再度内傾する。口縁部内・外側は横ナナ調整、体部内面はナナ調整。体部外側は平行叩き目調整、やや摩耗する。全体に薄子作り。	灰色 細砂・長石粒・雲母 不良
4 S	皿	A (33.7) B 26.9 C (18.7)	底部は、正円弧に接する。体部は外傾気味に外上方にのび、「く」の字状に強く屈曲する口縁部が付く。端部は再度内傾する。口縁部内・外側は横ナナ調整で口縁部外側に叩き目を残す。体部外側は、平行叩き目調整で下位は範削り調整。	にぼい褐色 細砂・長石粒・雲母 なまけ
	环	A 14.0 B 4.1 C 6.3	底部は平底で、体部と底部の境界は、明瞭でない。体部は内骨気味に外上方にのび、口縁部は丸くおさめている。底部と体部下端部は右ロクロ使用の圓軸底部削り調整。口縁部外側と体部外側は横ナナ調整。内面全体は差巻き後黒色処理。	赤色 砂粒・長石粒・雲母 良好
6 H	高台付环	A 13.0 B 3.7 D 6.9	やや浅いが、底部と体部の境界にやや明瞭な稜を持つ。体部は内骨気味に外上方にのび、口縁部は外反する。高台は貼り付けで近く、下方向にのびる。水焼き成形と思われる。底部は右ロクロ使用の圓軸底部削り、内面全体は差巻き後黒色処理。	褐色 細砂・長石粒・右美粒・ 雲母 普通
	H	A (13.3) B 2.1 D 7.3	体部は、やや内骨気味に外上方に大きく開き、口縁部は僅かに外反して端部はやや尖る。高台は貼り付けで「ハ」の字状に外下方にのび、内端部に浅い溝を造らす。水焼き成形で、底部は右ロクロ使用の圓軸底部削り調整。内面全体は差巻き後、不完全な黒色処理。	にぼい褐色 細砂・長石粒・雲母・ スコリア 普通
8	丸 瓢	全長 40.5 広端 (10.3) 狭端 (7.3) 厚さ 1.2	玉縁付丸。凸面は範削り調整。凹面は布目を残す。側面は分厚戻曲のままで; 底部は曲取りが施されている。端部は範削り調整。	灰褐色 砂粒・長石粒・長右衛 門多・塵 硬質



第365圖 180號竪穴住居跡出土遺物實測圖 (1)



第366図 180号竪穴住居跡出土遺物実測図

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考	番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	備考
9	刀子	全長(10.5) 刃幅 1.6 基長 2.4	先端部欠損。		11	槍頭か	全長(8.6) 刃幅 1.1	刃先端部欠損。	
10	釘か	全長(9.1) 太さ 0.5	全体に歪み、肉瘤部欠損。						

茨城県教育財団文化財調査報告第20集

常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書 5

鹿の子 C 遺跡
—遺構・遺物編上—

昭和58年 3月25日印刷

昭和58年 3月31日発行

発 行 財団法人 茨城県教育財団

水戸市南町3丁目4番57号

印 刷 株式会社 あけぼの印刷社

水戸市松が丘2丁目6番24号